八、一般

秘

天皇陛下のご訪中（共同国井記者の情報）

92.5.8

中国課

5月8日，共同の国井記者（院内担当）が木寺に述べた内容は次のとおり（聞きこみのまま）。

最近，宮沢総理は天皇陛下のご訪中を動かそうとしているとの情報がある。早ければ来週早々にも，竹下元総理，中曽根元総理に直接はたらきかけるとの情報がある。最終的な決定は本国会の終了（6月21日）まえに行うとの話になっている。後藤田元官房長官も，「ここまでくれば やるしかない」との立場である。金丸さんの態度は今ひとつはっきりと聞こえてはこないが，総理が動き出せばその方向で動くと考えられる。

他方，気になるのは財界である。財界の指導者の中には，

① 天皇陛下のご訪中が政治的に利用される。
② 米国との関係で問題が生じる。

等の意見がある。特に、慎重論がつよいのは、
速水優 経済同友会代表幹事（日商岩井会長）

ならびに石川六郎 日商会頭で、平岩外四 経
団連会長もオフ・レコで慎重論を述べている由

である。このような財界の慎重論は意外である。

（了）

伊藤英成衆院議員への手交ペーパー

5/18

（中国側長書きとろう）　ノンペーパー

天皇・皇后両陛下の御訪中（ノン・ペーパー）

92.5.25
中国課長

標記に関する全くの個人的な考え方をノン・ペーパー（別添）に纏めてみましたところ、関係者各位のご参考までに供覧に付します。

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官、大臣秘書官、
事務次官、政務次官、斎藤外審、官房長、総括審、総務課長、
儀典長、儀典官、外報官、広報参、報道課長、
アジア局長、竹中審議官

天皇・皇后両陛下の御訪中

１．本年秋の御訪中

（１）先般の渡辺外相訪中及び江沢民総書記来日の際に、中国側より、日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中して頂きたいとの招請があり、これに対し我が方は真剣な検討を約束した。

（２）昨年の東南アジア御訪問は大変な成功を収められたが、国交正常化２０周年に当たる本年の御訪中は、日中関係の歴史上正に画期的な出来事であり、日中両国の友好親善関係の増進のために極めて意義深いことと考える。

２．中国よりの強い要請

（１）中国側要人より、繰り返し熱心な招請が続いている。これらの招請は外交儀礼に適った心のこもったものである。李鵬総理は、１月の渡辺外相との会談において特に本件に言及し、「日本国民の心の中に占める両陛下の重要性は充分に理解している。両陛下は中国政府及び国民の熱烈な歓迎を受けることを保証する。我々は御訪問を心より歓迎する」と述べている。また、先般来日した江沢民総書記は大内民社党委員長に対し、「中国側に他意はない。友好を更に促進したいとの願望があるのみである。中国として難題を持ちかけようとの意図は全くない」とも述べている。

（２）両陛下が本年訪中されれば、上記の通り中国側はこれを大いに評価し、最大級の歓迎を行なうことは疑いない。このような状況下において両陛

下が御訪中になられることは、我々日本国民にとっても喜ばしいことではあるまいか。

3．御訪中の意義

（1）我が国は先の戦争において中国を侵略し、中国国民に筆舌に尽くし難い苦しみを与えた。これはいかなる言い訳も許されない厳粛な事実であり、このようなことが二度とあってはならないというのが我が国国民の決意である。他方、両陛下の御訪中をこの面でのみ論ずることは、御訪中の本質を見誤るものであり、日中両国民にとって益のないものとなろう。

（2）世界史の中で、日中両国のように２０００年もの長きに亘って友好関係を維持し続けてきた例を知らない。我が国にとって、中国との交流を抜きにして歴史を語ることは不可能である。このような極めて密接な両国関係の歴史において天皇陛下の御訪中は実に今回が初めてのことであり、正に日中関係において歴史的出来事である。両陛下の御訪中は、このような日中間の悠久の歴史認識の中で捉えられてこそ意義のあるものになると信ずる。すなわち、今回の御訪中は、日中両国民がこれまでの両国間の長期間に亘る友好関係を再認識し、また、将来に亘る友好を固く決意するまたとない機会であるべきである。幸い中国側も同じような大局的考え方に基づいて両陛下お迎えするとのことであるので、御訪中は必ずや成功するであろう。

4．「お言葉」問題

（1）御訪問が近づくにつれて「お言葉」問題がマスコミ等を中心に議論されることは避けられないだろう。しかしながら、この問題にのみ焦点を当てて御訪中を議論することは、上記に述べた通り、御訪中の意義をあまりに矮小化するものであり、大局を見失うことになる。

（2）御訪中は中国国民の心の傷を治すためにも重要であるとの見方を否定するものではないが、これは単なるお言葉の表現の問題とか謝罪云々といった次元の問題ではない。最も重要なことは、各国との友好親善を願われる両陛下の強いお気持と、誠実で率直なお人柄が中国国民にあって直接理解されることである。このことこそ、我が国国民の日中友好にかける強い熱意と決意を、中国国民に対し何よりも雄弁に物語るものとなろう。

（3）また、今次御訪問は、我が国の新しい皇室像を中国国民に十分に知ってもらうための良い機会ともなろう。

5．韓国との関係

（1）中国と並んで韓国御訪問も是非実現すべし。但し、本年は大統領選挙の年でもあり、現在の状況下においては御訪問の機が熟していない。[redacted]

（2）[redacted]効果もありえよう。

6．その他

（1）中国の人権状況から御訪中に疑問を呈する向きもあるようだが、この問題については、将来の発展をも十分に念頭においた大局的つき合いを行なっていくことが重要である。中国において人権問題が課題として残っていることは否定しないが、どこの国が過去において潔白であったと主張し得るのだろうか。要は、改善に向けての努力の姿勢であり、我々はこのような積極的努力を支援していくことも忘れるべきではない。

（2）中国のいわゆる「保守・革新対立」を理由として御訪中に慎重論を唱える向きもある。これはあまりにも誇張した見方と言わざるを得ない。中国が政治的にも経済的にもより開かれた社会を目指して生みの苦しみを体験していることは事実であるが、これをもって中国の内政に天皇陛下が巻き込まれるとの考え方は短絡的にすぎ、正確な中国情勢分析に基づくものとはとうてい言い難い。

（3）日中関係の過去に対する中国の厳しい態度をもって御訪中反対の根拠とする考え方もある。確かに、これまでの日中関係には種々の紆余曲折があったことは事実であり、時として我が国の国民感情を刺激したこともあった。しかしながら、我が国の軍事行動によって筆舌に尽し難い人的、物的被害を受けた中国国民の立場からすれば、やむを得ない面もあることを理解すべきであろうし、また、このような過去の深い傷跡が完全に癒えるには、なお長い時間が必要であることも率直に認めることが大切である。他方、同時に我々が見過すべきでないのは、日中両国が暗い過去を徐々に乗り越え、より未来に向けた新しい関係を構築しつつあるとの現在の大きな歴史的流れである。江沢民総書記は、先般の訪日の

際に、「中国は以前のことを忘れて未来に目を向けていく努力をする」との決意を表明したが、この言葉が上記の如き歴史的趨勢を雄弁に物語るものであろう。また、同総書記は、我が国の国際社会における政治的役割を是認するとの新しい考え方を明らかにしたが、これは日中関係がより成熟しつつある現状を端的に示すものと言えよう。

日中関係の現状は、以上のような大きな歴史の流れの中で理解されるべきものであり、これまでの中国による対日批判や過去に対する一定のわだかまりのみに目を奪われ続けていれば、日中関係の大局を見失い、我が国にとっても重大な不利益をもたらすこととなろう。

（4）更に、両陛下が御訪中されれば、我が国と米国、西欧諸国との関係に悪影響をもたらすとの議論がある。筆者は、これまで米国や西欧諸国が両陛下の御訪中に対して批判を行なったとの事実を承知していないが、万一かかる批判があった場合には、自信を持って我が国の考え方を説明すれば良い。すなわち、歴史的、地理的観点からのみ論じても、日中関係の我が国にとっての重みは、米・西欧諸国の対中関係の持つ意味合いとは自ずから異なり、更に、日中両国は過去の不幸な戦争の傷跡を背負っていることにおいて米・西欧諸国とは決定的に違っている。米国にしろ西欧諸国にしろかかる事実を十分に理解しているはずであるし、また理解しうるものと確信する。

（5）何れにせよ、日中関係をより成熟したものにしていくためには、絶えざる努力が必要であるとの視点が重要であり、また、いわれなき対中優越感は捨て去るべきものである。中国が理想の国であるなどとは考えてもいないし、種々の問題を抱えていることも事実であるが、日中関係を

一層安定したものにしていくことは、我が国にとってのみならず、世界、特にアジアの安定と繁栄にとって極めて重要であることは論を俟たない。そうであれば、あらゆる好機を促えて日中関係をより安定させていくとの努力こそ行なうべきである。流動化しつつある国際情勢の中にあってそのような努力を積み重ねていくことが、我が国外交に幅と深みを持たせ、国益を守っていく由縁ではあるまいか。なお、逆に本年の御訪中が実現しないこととなれば、日中関係の後退を余儀なくされる惧れがありうることも心に留めて置く必要があろう。

（6）何れにせよ、両陛下は今後広く世界各地を訪問あそばされるものと拝察するが、このような御外遊を通じて我が国と諸外国の友好関係が一段と促進されることは、広く世界の平和と安定にとっても大きな意義があることを否定する者はあるまい。

（了）

宮沢総理、小和田次官フリートーク

5/19

小林治官御机

事件は記録にありますが、
どう表示されたか、分かるよう
作成してみました。

大庄川河口の是非を含めて
ご指示願います。

小林課長
(2423)

2-1 file
2-2 指示文書

極秘
無期限
2部の内
1号
2(0一不可

天皇陛下の御訪中問題
（宮沢総理と小和田次官とのフリー・トーキング）

4．5．19
中　国　課

19日午前、小和田次官は宮沢総理と二人だけで本件問題につきフリー・トーキングを行なったところ、その模様次の通り。

1．小和田次官より方針決定のタイミングに触れ、遅くとも国会終了後の6月末までに決断する必要があり、7月の参議院選挙後では遅すぎると思う旨述べたところ、総理より自分もそう思う旨述べられた。次いで、次官より以下の通り発言。

（1）本件御訪中問題に関し手当てすべき対象としては、自民党、プレス及び有識者がある。自分としては、国民の多数は御訪中賛成であると見ており、この点特に問題はないと考える。（総理より、江沢民総書記訪日も済んだので、改めて[redacted]指示したいと考えている旨述べられた。）

（2）自分がプレスの編集委員と話した感じでは、それぞれ個人的には御訪中に反対しないとの感触であった。ただし、産経の清原氏は個人的には疑問を抱いているようだが、社全体として反対であるとの立場はとっていない。問題は、個人的には賛成していても、自民党が公開の場で議論するような状況の中では慎重に考える必要があるとの考え方が出てきていることであり、これに対する対策が問題であると思われる。有識者については、信念として御訪中反対を述べている傾向もあり、彼らを黙らせるということは困難であろう。自民党で鍵となるのは福田元総理、竹下元総理、中曽根元総理、金丸副総裁の四人であろう（と述べつつ、これまでの接触を通じて得られた判断を適宜紹介）。竹下元総理については、これ以上動いて頂くのは当面差し控えることが適当と見ている。中曽根元総理については、最近態度変更を行なったと承知しているが、同元総理に依頼することは却ってマイナス面になりうることもあろう。要するに、福田元総理と金丸副総裁の二人が極めて重要である。金丸副

総裁は御訪中に前向きであり、福田元総理は慎重ではあるが反対とは言っていない。いずれにせよ、この二人をどう動かすかが重要であり、総理から直接ご自分の考え方を述べて頂き、お二人の協力を要請して頂きたいと考えている。

2．以上に対し、宮沢総理は異存ないとの感触を示された。次いで、福田元総理と中国との関わり合いにつき総理より種々の質問が出され、次官より同元副総理が反中国論者では決してなく、この点は中国側も承知している云々と応答した。

3．総理より、金丸副総裁に対しては、とりあえず渡辺大臣より話してもらえないかとの話があり、これに対し小和田次官より、自分から大臣にはお願いしてみるが、総理が直接働きかけることが重要である旨述べた。総理より、それではとりあえず官房長官を通じて働きかけを行なってはどうかと考えており、この点小和田次官より官房長官に説明しておいてもらいたい旨述べられた。

4．橋本大使の一時帰朝のタイミングについては、総理は引き続き慎重な態度を示し、万里訪日前の現時点で橋本大使が帰朝すれば、沈静化している状態が破れる怖れもある旨述べられた。これに対し小和田次官より、このまま放っておけば沈静化した状態は続くものと思うが、同時に御訪中の芽も消える恐れがあり、そうなれば、外交上困ることになる。中国側は江沢民の訪日以来、日中間の懸案の沈静化に努力しており、静かな態度を維持している。我が方としても、できるだけ早い段階から根回しをしていく必要があり、たとえ橋本大使の帰朝が延期になったとしても、外務省として根回しを開始することは差し支えないかと述べた。これに対し総理より、静かに目立たない形であれば、結構である旨述べられた。

次いで橋本大使の帰朝のタイミングについて小和田次官より、6月中、下旬に帰朝してもらうこととなれば、総理のご決断と一体のものとして考える必要があると思うが、それにて差し支えなきやと述べたところ、総理よりそれは良い考えだと応答された。右に関し小和田次官より、橋本大使帰朝の対外説明としては、サミットの事前準備ということも考

えられる旨述べ置いた。

（了）

学識者の見解

（5/26作成）

取扱注意

天皇ご訪中問題に関する学識者の見解

92.5.26

中国課

4月23日開催の国際問題懇談会において示された、天皇ご訪中問題に関する学識者の見解は以下の通り。

1. 岡部達味都立大学教授 …… 賛成。

天皇陛下の訪中は国民の支持、祝福の中で当然行われるべき問題である。天皇陛下訪中の中国要人による招請は今回の江沢民訪日を含め7回を数え、かくも多くの招請を受けているにも拘わらず、日本政府がこれに応えなければ、将来必ず日中関係に禍根を残す結果となろう。また、中国国民の間に存在する対日感情を考慮すると天皇訪中についての公然たる議論はその結果如何に拘わらず、甚だ望ましくないことである。

「お言葉」についての中国側発言の真意は、自分は何も注文をつけないから日本側でよく考えて言え、ということではなかろうか。従って、かなり明確におっしゃるべきであろうと思う。それにより、以後二度と戦争責任の問題が二国間関係に影響を及ぼさないという状態にすべきであると考える。平成天皇は穏やかかつごく普通の方という印象があるので中国人の陛下に対する印象を変え、21世紀に向けた日中友好関係を維持する観点から陛下へは訪中して頂くべきである。

今は確信を持ってこうすべきとは言えない状況であるとの判断は他の出席者と同意見であるが、行かれるのであれば、今決めて行かれるほう

が良いと思う。何故ならば、公然たる議論はしない方が良いが、既に議論が起こってしまっている現下、今決めてしまう方がマイナスは少なくて済むと考えられるからである。あらゆるところで議論が行われてしまってからだと収拾が付けられなくなってしまうのは目に見えている。補足的に申し上げれば、昨年、上海で「日中友好関係を考える」会議に出席した際、個人的な意見として、中国が国内において反日宣伝を一切やめることが陛下訪中の前提条件であると述べた経緯はある。

2. 山崎正和大阪大学教授……反対。

陛下が仮に中国を訪問し、「お言葉」を述べられてもそれで今までの二国間関係のわだかまりにピリオドを打つことは絶対にあり得ない。何故ならば、韓国でもそうであったように中国政府が人民の対日感情を抑え切れずまた過去のわだかまりを蒸し返すからだ。

3. 神谷不二慶応大学名誉教授……反対。

中国の内政を仄聞する限り、改革派と保守派の対立が依然として続いている。何度か陛下の訪中を招請していても、それは一方の派からの声であり、反対派からは声なき声が同じ位あってもそれが表面に出てきていないだけかも知れない。従って、少なくとも中国の内政における対立に陛下の御訪中が利用される可能性がある限り、本件は慎重な態度で臨むべきであろう。まして、年内の御訪中は待ったをかける方が一般論からしても妥当である。

4. 佐藤誠三郎東京大学教授……反対。

天皇陛下の中国御訪問について岡部教授の言われた原則は賛成であるが、第1に陛下の問題についての公然たる議論はすべきではないし、何の利益も生じない。第2に国民の圧

倒的多数の賛成と祝福の下で行うべきである。従って、日本国民の間で既に陛下の御訪中に関し、世論が２つに分かれている現時点では行くべきではなかろう。また、米国大統領選挙中に御訪中するのも望ましくない。結論的には、慎重に検討しつつも行く、行かない、の結論を出さないことである。確かに今年は日中正常化２０周年であるが、中国4000年の歴史に比べれば問題にはならず、２０周年にこだわる必要はまったくない。

5. 小宮隆太郎青山学院大学教授……中立。

陛下の中国御訪問についてはどちらかと言う意見は無いが、「お言葉」については、相手にそれを言うだけで、それで終わりとするのであれば、東洋の基本的道徳に反するのではなかろうか。言った以上はそれに伴う何らかの行動を取るべきであると考える。

6. 芳賀徹東京大学教授……中立。

中国人民の恨み、つらみがあるからこそ陛下が中国を御訪問すべきであるとする意見とそれがある間は御訪問をさし控えるのを良しとする意見があるが、個人的にはどちらが良いのか決め兼ねている。

7. 細谷千博国際大学教授……賛成。

陛下の中国御訪問については状況の判断からして出来るならば御訪中していただきたいと思う。日中関係の将来のために短期的にも長期的にもプラスになると状況判断ができればよいが、非常に難しい問題である。

読売論説委員 谷野百五

5/29

極秘
無期限
極秘第 41 号

報告・供覧

コピー配布

○大臣
秘書官
~~政務次官~~
○事務次官
~~外務審議官~~
~~外務審議官~~
○官房長

主管
○アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

保存期間			
1類	2類	3類	4類
(永久)	(10年)	(5年)	(1年)

起案 平成 4 年 5 月 29 日
完結 平成 年 月 日
起案者 泉 電話番号 2626

回覧先
~~総括審議官~~
~~総務課長~~
○儀典長

報告をお願い。

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下の御訪中問題（読売論説委員の反応）

（別紙の要点等）

29日、谷野アジア局長が 読売 島論説委員長らと本件に関し、意見交換を実施。

読売の反応は、①訪中賛成、しかし、②本件は総理がまず党を明らかにすべきものとの主張、③総理のつっぱり利用は止まりにおかしまつ反発がよというもの。

回覧番号 856

92/05/29

（報告メモ）

天皇陛下のご訪中問題（読売論説委員の反応）

92.5.29

中国課

２９日、谷野アジア局長が、**島読売論説委員長以下３名の論説委員**と本件につき意見交換したところ、要点以下の通り。

１．冒頭、谷野局長より、外務省の本件に関する考え方及び外務省の理解する党内情勢を詳細に述べ、「本件について読売においても何とか風を起こせないものか」と述べた。

２．これに対し、先方は、「本件については渡辺社長以下考え方はきわめて明快である」として以下を述べた。

（１）本件は総理が早く決断すべきことであり、**読売としては陛下のご訪中はこれを支持する**というものである。他方、~~総理~~は本件に限らず、新聞に状況をつくらせて、それにのっかるだけとの対応がしばしば見られるので、読売内部に強い不満がある。従って、**総理の決断のない時点で、総理のために陛下のご訪中を支持する論説が掲載されることはない。**せっかくのご要望であるが、その様な訳でなかなか難しい。

（２）いずれにせよ、本件は、我々の見るところでも、自民党の一部を除いて殆ど反対はないと見ており、その意味では（訪中の実現につき）心配していな

い。また、総理もＰＫＯ法案を乗り切れば元気が出てこよう。（これに対し、同席の論説副主幹より、「**総理の性格からみて選挙前の決断は難しいのではないか**」と強く述べるところがあった。）

3．更に、同席者は一様に、本件に限らないが、**総理は~~今の指導ぶり~~余りにも新聞を利用しようとの姿勢が目立ちすぎる。**そのようなことは有っても良いが、こと**本件のような問題については総理が考え方をまず明らかにすることが順序**である。総理は新聞を利用する時はするくせに肝心の時は冷たい旨述べていた。

（了）

北村儀典官作成ペーパー

極秘
無期限
5部の内
4号

両陛下の外国御訪問
（準備段階点での留意点）

平成４年５月
儀典官（北村）

現在検討中の中国御訪問を念頭に置いて、昨年の東南アジア御訪問の際の準備作業の経験を踏まえ、今後の準備に当っての留意点を次のとおり取り纏めてみた。

１。準備期間

（１）昭和天皇の欧州・米国御訪問の場合は約６か月前に、昨年の場合は約４か月前にそれぞれ閣議決定を行った。種々の観点から、実質的な準備はどうしても閣議決定以降とならざるを得ない。昨年のケースの準備の進捗具合は次のとおり。

５月３１日	御訪問についての閣議決定。
６月１９日～７月５日	第１次先遣隊（儀典官、地域課長等）
８月１４日	現地駐在３大使の合同御進講
８月２７日	御日程についての閣議報告
８月２７日～９月８日	第２次先遣隊（儀典長、式部官長等）
９月３日	随員についての閣議決定
９月６日	予備費についての閣議決定
９月１６日	御日程についての対外発表
９月２６日	御出発

（イ）閣議決定後に在外公館より、御訪問国との協議を踏まえた御日程案を提出せしめた。御日程案の主要点は御訪問先（特に地方）および主要行事であったが、[redacted]

（ロ）第１次先遣隊が帰国した後、省内準備委員会への報告（７月１０日）、両陛下への結果報告（７月１２日）等の我が方としての所要の検討および決定プロセス、御訪問国政府との連絡・協議、行事プログラムの検討・選定を行い、８月１２日に現地駐在３大使が帰国し、両陛下に御進講（現地事情と主要行事について）。この時点で御日程案がほぼ固まる。閣議決定から約２か月半。

（ハ）その後、第２次先遣隊がほぼ固まった御日程案をベースに個々の検討・確認作業および打合せ・指導を行った。併せて８月下旬から９月下旬の約１か月をかけて行事プログラムの詰めおよび所要の出発準備を行った。

（２）昨年は即位の礼以降、陛下として最初の御訪問であり、また昭和天皇の御訪米より１５年以上も経過していることもあり、特に宮内庁においては個々の意思決定に時間を要した。他方、昭和天皇の時は答礼晩餐用の配膳まで船便で送付する等時間・労力を要しているが、新しい時代でもあり出来るだけ簡素にしようとの考え方は外務省・宮内庁とも共通していた。昨年の経験により新しい前例が出来た。また宮内庁の人的執務体制は変わっていない。

昨年の閣議決定後から御出発までの約４か月を顧みれば、御日程・主要行事の決定により長い時間を要している。欧州諸国の元首（特に王族）の外国公式訪問は相当長い時間をかけて準備をするのが通例である。昨年１０月下旬に国賓として訪日したベアトリックス・オランダ女王の場合は、約１年半前に日蘭間で訪日を実質決定し、オランダ側はすぐさま準備に着手した。世界的に有名なコンサルト・ヘボー交響楽団のガラ・コンサート（両陛下御臨席）、日本美術の与えた影響に焦点を当てたオランダ美術展等を開催したが、この種交響楽団等の文化行事は通常２年程前からの準備が不可欠となる（この点については後述）。昭和天皇の御訪欧・御訪米においても御訪問に併せて御物展を開催している。昨年もこの種の文化行事あるいは何等かの記念行事を検討したが、半年以下の短時間では準備が不可能なこと、東南アジアについてはむしろ相手の文化に入り込むスタイルが良かろうとの理由で、我が方にて長期間の準備を要する行事は行わないこととしたが、それでも御日程・行事が決まるまでに２か月半を要した。一つには御訪問国側の意思決定および作業に時間を要したが、[redacted]

（３）本年の中国について言えば、御訪問国数は昨年の３か国に較べ１か国であり、また中国の意思決定も右３か国よりは速いであろうし、更に外務省・宮内庁とも昨年の蓄積があるので、より少ない時間で準備できよう。但し、上述の[redacted]可能性あり）に加えて中国の場合は御訪問先・行事について本邦内で種々の意見が寄せられ、決定に手間取る可能性も念頭に置くべきかもしれない。

全体として見れば、少なくとも事務的には本年は昨年より短い準備期間で対応できる。なお、昨年は相互儀礼叙勲の作業に相当の時間と労力を費やしたが、この点も本年は異なる。

２。御訪問の意義づけ

（１）総理の場合は首脳会談を中心としたサブ自体が訪問の意義・性格を形づくるが、陛下の場合は当然ながらかかるサブはなく、御訪問日程・行事内容全体が御訪問の意義づけ・性格づけに係わってくる。昨年の第１回御訪問の際、我々事務方においても平成の新しい時代の中で新天皇の最初の御訪問でありそれに相応しいものとし、今後の良き先例を作ろうと意気込んだ。閣議決定は５月３１日となったが、３月頃から現地３大使には御訪問

の意義づけおよび右を念頭に置いた御日程・行事案作りを依頼した（それぞれ貴重な御意見をいただいた）。

閣議決定後の省内準備委員会（次官を長とする）においてアジア局より別添１。のポジション・ペーパーが提出され委員会の賛同が得られたが、その後の御日程・行事案作成の上での指針となるものであった。要点としては、陛下は「日本の新しい時代の新しい天皇である」、「開かれた、親しみのある御人柄」の２点に集約できよう。また、宮内庁よりは御日程作成の指針として別添２。のペーパーが寄せられたが、重要な点は「国民との接触の機会をできるだけ作ること」であった（小官は陛下御自身のお考えと理解している）。他方、上述の通り欧州の王室の国賓としての外国訪問においては、訪問を記念したコンサート、展覧会等の行事を行うが（それだけ長い準備期間を置くが）、我々の場合はめぼしいものは何もできないことが解り、視点を変えて日本の文化を持ち込むのではなく、先方の文化に入り込むとのキャッチ・フレーズとした。またその後の準備過程で[redacted]が何度となく示されたが、相手国に入り込むスタイルの方が両陛下の御意向にも従うものと小官は理解している。

種々の変遷はあったが、御日程案がほぼ固まった８月の段階で御日程・行事のポイントについて別添３。のペーパーを作成した。御訪問の意義づけ等から始まった議論・考え方を反映した御日程・行事になったと考えている。御訪問結果は周知の通りであり、側で仕えていた者としても御出発前に画いていたシナリオ・考えていたイメージにほぼ近い形で進行したと思っている。何といっても掛け値なしに両陛下の「開かれ」「親しみのある」イメージは強烈であり、御訪問国で接触した人を中心として新鮮な驚きを与えたと思っている。まさに新しい日本のイメージの体現者であり、最高の親善使節である（両陛下のタレント性におんぶにだっこという感もしないではないが）。

（２）中国御訪問については上記１。の通り、昨年より短い準備期間で良く、例えば閣議決定が７月下旬－８月初旬（つまり御出発の２か月半～３か月前）でも対応は可能である。但し、次の諸点を念頭に置く必要がある。

（イ）御日程・重要行事の枠組みが閣議決定のあと１か月以内に固まることが条件となる。前回は第１回で３か国という違いはあるが、両陛下をクリアーするまでには相当の準備と時間を要する。従って、第１回の先遣隊の派遣は閣議決定後速やかに出せるよう準備しておくことが必要となる。また、その準備を行うためには、御訪問の意義づけ、右を反映する御日程・主要行事について十分検討しておくことが不可欠で、またできるだけ具体的な形で素案を作っていくことが重要である。我が方としての御訪問内容の素案づくりにそろそろ着手する必要がある。

（ロ）宮中は８月は夏休みとなるが、閣議決定後の所要の作業を通常通り進める体制を確保する必要がある。

3。準備の詳細

御日程・行事案が固まった後に個々の準備が本格化する（各方面の個々の準備をできるだけ早期に同時平行的に行うのはもちろんであるが）。特別機から各行事の服装に至るまで多くの準備があるが、現在昨年の第１回の経験を踏まえて、どのような準備項目があるのかについてのチェック・リスト、およびどのように準備を進めていくのかについての準備プロセスに関するマニュアルを儀典官室にて作成している。個々の準備はいずれにしても先の話であり、少くとも５月中は上記２。（２）に述べた準備の段階と位置づけられよう。（了）

配布先：中村儀典長
橋本在中国大使
谷野アジア局長
樽井中国課長

別添2

極秘
無期限
部の内
号

天皇皇后両陛下の東南アジア御訪問について

3年6月12日
アジア局

今次天皇皇后両陛下の東南アジア御訪問については、以下の諸点に留意しつつ準備を取り進めていくこととする。

1．今次御訪問の狙いと意義

（1）アジアの一員としての日本の印象付け

両陛下の初の御訪問先として東南アジアを選んで頂いたこと自体が、我が国のアジア重視の姿勢を表すものであり、今次御訪問中の両陛下の御活動を通じ日本がアジアの一員であることを強く印象付ける。

（2）新しい日本ないし日本人のイメージの構築

今上陛下におかれては、（イ）戦後の民主主義日本の世代に属し、「新しい皇室」を体現される天皇陛下であり、また（ロ）やさしく、親しみやすい御人柄であり、さらに（ハ）生物学に対する御造詣を通じ自然に係る諸問題に強い御関心を有される方であるところ、訪問国国民と開かれた形で交流して頂き、また、訪問国の自然、環境、更には福祉、社会問題に対する積極的な関心を示して頂くことにより、民主主義日本下の開かれた天皇陛下像の増進と共に、従来の「軍国主義者」的あるいは「エコノミック・アニマル」的日本人像の是正、更には、アジア諸国民との心と心の触れ合いを大切にしたいとする新しい日本ないし日本人の姿乃至顔を印象付けて頂く。

（3）我が国における対東南アジア理解の増進

両陛下が訪問国の史的、伝統的文化に接し、その理解に努められることは、その御姿がマスコミを通して広く日本国民の目に映ることにより、国民の東南アジアに対する興味、関心を喚起し、その理解の増進につながることが期待される。

（4）在留邦人の激励

2．今次御訪問にかかる検討課題

（1）プロトコールの簡略化

両陛下が日本の古き良き歴史と伝統を体現する存在であることを示すことはもとより重要であるが、「新しい皇室」のイメージをアピールすることも重要であるので、御訪問の折りにどこまで国内での前例としきたりを踏襲するかについては検討の余地あり。

（2）陛下のお言葉（歴史認識）

今次訪問予定国の側では、中国・韓国ほどの強い関心はないものと思われるが、他方本件についての我が国プレスの関心が高いことは事実。右を踏まえ、最終的にどのように納めていくかが一つの課題。

（3）経済協力・文化協力等を利用することの是非

陛下の御訪問にあわせ事前または事後に、陛下が関心を示されたことにつき、何らかの形で協力を実施することの是非についての検討。（もとより訪問国側には、陛下により援助が実施されたと映らないことが重要）

（4）テレビの利用の是非

上記１．（2）の天皇陛下の御人柄は、テレビ・インタヴュー等により広く訪問国国民にアピールして頂くことは極めて効果的とも思われるが、右の是非についての検討。

（御訪問先においてインタビューを受けられた前例はない。ただし、ご訪米の際、ご出発前に、国内においてインタビューを受けられたとのこと。）

（5）紀宮皇女の同行

今次御訪問のイメージを家庭的な温かいものとし、若い世代にアジアを積極的に学ばせたいとの姿勢を示す良い機会でもあるので同皇女の御同行の是非についての検討。

（6）同行プレス対策

同行プレスの中には、女性週刊誌の記者も含まれるところ、右記者の海外における取材経験不足等のために、その扱いに困難が生じることが十分予想されるので、予め注意を要する。

別添2

東南アジア御訪問日程作成にあたっての基本指針

平成3.6.6

1．当該国における国賓受入れの行事は、原則として、すべてとり行う方向で対応する。

2．当該国のすすめるその他の行事は、できるだけとり行う方向で対応する。

3．可能ならば、当該国の首都以外の一つの地方都市又は地方御訪問を日程に組み入れる。

4．なるべく当該国の国民との御接触の機会を設ける。

5．お返し晩餐会を催されるか否かは、当該国の慣例による。

別添3.

両陛下東南アジア御訪問
（行事日程案の特色）

平成３年８月
外　務　省

１．日程の枠組

両陛下の御訪問はタイ４泊、マレイシア及びインドネシア各３泊であるところ現在の行事日程案は各国とも首都での行事が１日半、地方での行事がタイ１日半、マレイシア・インドネシアがそれぞれ１日。

２．行事内容

（１）現在の行事内容案の各国毎の特色点。

タイ：①歴史と文化

スコータイでの歴史公園（遺跡）及びライトアンドサウンド（舞踊）

②緊密な王室間の間柄

王室プロジェクト視察（プロジェクト自体は社会事業的な意義は大きい）

マレイシア：①王室間の関係

イスカンダリア王宮（クアラカンサー）訪問

インドネシア：①歴史と文化

ラマヤナ舞踊

ボロブドゥール寺院

以上は、訪問国がそれぞれ大事にし、誇りに思っているものに触れるという意味で、重要（歴史・文化については我が国国民への啓発効果も大きいと思われる）。

（２）以上に加えて、今次御訪問の基本方針として考えている「開かれた」・「親しみのある」・「新しい」等のイメージ作りに資する行事。

タイ：社会教育文化センター訪問

日タイ交流展とともに青少年等との交流を図る行事

マレイシア：マラヤ大学及びマレー・カレッジ訪問

「マ」大学及びマレー・カレッジにおいて交流を旨としてアレンジ中。

はぜ養殖場

学者天皇としてのイメージを出す上で有意義

（同養殖場ではＪＩＣＡ専門家が養殖を指導している）。

インドネシア：プルサダ大学訪問

元日本留学生の手作りの大学であり、ユニークな特色を持った訪問となる。

タマン・ミニ訪問

子供たちとの触れあいの場も作れれば「親しみのある」内容となる。

（３）また福祉・環境関連。

①福祉関連

インドネシアは「イ」側の推薦待ち、マレイシアについては別プログラムとして要検討。

タイについては「王室プロジェクト手工芸職業訓練所」（社会事業的意義が大きい）。

②環境関連

インドネシアの「種苗研究センター」は森林再植林に関るプロジェクトであり、環境関連の行事。

（4）その他、在留邦人及び元留学生等日本関連者との御引見また青年協力隊の活躍する場所への訪問（マレイシアのマレー・カレッジの日本語教師２名等）。

（了）

日仏当局者協議

6/4

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は調整班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡あ[illegible]たい。

限定配布

極秘

電信写

		－

大臣 政務次官 外務大臣 外事審議官 儀典長 官房長

北大使 経大使 環大使 アジア大使 査察審議官 総括審議官 外務報道官 研修所長

総合外交政策局 対人地雷担当大使 文化交流審議官 厚生労働審議官 情報通信政策局長 国際情報統括官 警察庁長官 史料館長

外報官	参報際内外
文長	審一二
移長	参政保対旅外
長	審地中東二 参北東西一
北米長	審一二保地
中南長	参一二
欧州長	審西ロ洋一 西東二
近アジア長	参一二アア一二
経済局長	次総経途一二 参経漁国一一 経エ国安ネ二
	参海 審準
経協長	審政国開無 審調技有理
条約局長	審条協規
国連局長	審政経人 審軍社
科学審議官	科原
情報調査局長	参情析調 企安

総番号 R115650

主管

月 5日 [redacted] フランス 発

平成 4年 6月 6日 本省 着 アジア局長

外務大臣殿 木内大使

中国問題に関する日仏当局者協議（てん皇へい下御訪中）

第２８４４号 極秘 至急（ゆう先処理）

（限定配布）

往電第２８４３号に関し、

４日、当地出張中のタルイ中国課長が、仏外務省ルヴィット・アジア局長と中国問題について意見交換を行つた際のてん皇へい下御訪中に関する部分の概要以下の通り。

１．タルイ課長より、日中関係には常に過去の問題が横たわつており、言わばガラス細工のようなもろさをあわせ持つている、従つて、日中双方とも友好関係の促進には細心の注意を払つてきている。本件御訪中は、過去と一線を画す意味からも重要であり、現在真けんに検討中である旨しようかいした。

２．これに対し、ルヴィット局長は、日中関係が複雑な歴史故極めてしん重なハンドリングを要することはわれわれ仏の対独関係にかんがみても良く理解できる、貴官等の本件に関する努力が成功することをいのりたい旨述べた。

中国に転電した。（了）

小和田次官指示（ニューズブリーフ時）

6/19

コピーズミ
アジア局長
中国課長
首席事務官

既決済み。6/19.

秘
無期限

（報告メモ）

天皇陛下御訪中に関する経済界への根回し

'92.6.19
中国課

19日のニュース・ブリーフの席上、小和田次官より今井土地政局長に対し、天皇陛下の御訪中に関する経済界への根回しの必要性に関し、以下の指摘あり。

1. 今朝の平岩外四経団連会長の発言であるが、財界人に対し、日中間の本件に関するこれまでの対応等、然るべくバック・グラウンド・ブリーフィングを行う必要があろう。

2. 平岩会長には自分（渡）より行なうべきかと考えよ（「斗いはアジア局長が」と言いつつ、「やはり自分より行こう」とした）が、アジア局でも他の財界人について考えて欲しい。経済人を集めて会合を開くのも一案である。

3. アジア局長も忙しいと思うが、該アジア局で対応して欲しい。

（3）

鹿取国際交流基金理事長（原稿）6/22

3593-2528

中国課長
首席事務官

Ecopy

ファクシミリ送付状

宛先： 中国課
首席　木寺　様

件名： 鹿取執筆原稿

発信：国際交流基金 秘書室

〒102 東京都千代田区紀尾井町3－6（パーク・ビル内）
TEL　03-3263-4555
　　03-3263-4577
FAX　03-3239-4921

担当： 大内

枚数： 送付状のほか　4　枚

日付： 平成4年6月19日

備考： 顧問の鹿取より。
別紙をお送り申し上げます。
よろしくお願い致します。

MEMO 研長 殿

6月19日　AM / PM 4:00

○○様 交流基金

鹿取研事長 様 ㊞

（内線）

〔伝言〕 1．お電話下さい。
（a大至急　b至急　cついでの折に）
2．また電話します。
3．電話があったことを伝えて下さい。
④ 次の用件を伝えて下さい。

原稿が先生にので 原稿をFAXで
送りますので 休みの間に見ていただ
いて 22日(月)の午前中までに連絡
ください。

（　　言伝 受）

日中友好協会は昭和三十四年を発足する多彩な行事が準々備で熱心に準備されている。人々は日中交流に自由に参加しうる時代になったことを心から喜び合い、日中友好の象徴として両陛下の御訪中の成功を祈念している。

政府はこの国民大多数の願望を素直に受けとめ御訪中を決定こそすれ、御訪中に関しては論争する筋合はなりかたく、反対論は根強いと聞くので、御訪中に際しての諸条件については適当ではないと思われる点を簡単に述べ、読者の参考に供したい。

---

(1) 中国側の招請は外交儀礼に適った人のこもったものと聞く。このような外国の好意には善意をもって対応するのが国際社会の常識であろう。人と人との関係と国際関係で先ず善意は善意を呼び、疑心は疑心を招く。

(2) 中国側は熱烈に歓迎する旨再三述べており。最近とみに柔軟性を増し抑制されている。中国の対外姿勢に照らし、また筆者の体験においても全く心からの中国側が両陛下に難題を持ち出すようなことは全くありえない

と考える。

(3) 筆者は陛下の皇太子時代にサウジアラビア、スリランカの御訪問に随行し、各国民が両陛下にじかに感動している姿を目撃した。御訪中されれば友好親善を願われる両陛下の強いお気持と誠実で暖いお人柄は中国国民に深い感銘を与えずにはおかないであろう。

(4) 中国は前述わが国の全済、技術だけでなく日本文化にも深い関心を示し、二千年の歴史において互の相互交流が始まりつつある。まさしくこの秋、日本文化の象徴である天皇陛下初めての御訪中が実現すれば日中両国の相互理解と信頼は一段と増進することは間違いなかろう。

(5) 両陛下の御訪中を契機に日米両国の相互信頼が深まれば日中関係は一段と安定したものになる筈。

最期的な安定こそ国保を築くこと、これこそ日中首脳が共にくりかえし声明してきたところである。

(6) 中国の「人権状況」から御訪中に疑問

コクヨ ケ-10 20×20

を望まれる向きもあるようだが、この問題については特条を見とおした大局的な態度をとるべきであろう。性急な批判より、近代化に向けてのすべての努力を支援する行き方が望ましい。

(7) 両陛下の御訪中は双方未話国との国係んな形容なものとの論があるが、私案である。英国女王、米国大統領をはじめすべての国は元首の中国訪問を待っている。天安門事件以後も日ソ諸国などをはじめ多くの元首が訪中している。

また日中国係のわが国にとっての重みは双方諸国の対中国係の比ではない。激動する世界情勢の当面し双方諸国は中国の安定に努力するわが国の特別の努力に対し評価を高めている。

(8) 中国の「保守、革新対立」を理由に憲論を唱える向きもあるが、余りに政治的な見解と思う。勝大な人口をかかえ改革開放に苦闘する中国においていろいろな議論があるのは当然であるが、これを誇張して中国内政に天皇陛下が巻きこまれるとする考え方は

短絡的である。

(9) 日中国交の急に対する中国の厳しい態度を挙げて御訪中に異議を唱える向きもある。確かにこれまでの日中国交に曲折があったことは事実であり、時として物が国民感情が刺激されることもあった。しかし日本の革新勢力によって基本的な人的物的被害を受けた中国国民の立場からすればやむを得ない面もあることを理解すべきであろう。(なお二のような過去の深い傷跡が完全に癒えるにはなお長い時日が必要であろう。)

(10) 最近訪日した江総書記は「中国は以前のことを忘れて未来に目を向けて行く努力をする」との決意を表明した。中国側が天皇御訪中をこのように遠大な歴史認識の中で考えていることは明らかである。(かかる)天皇御訪中を日中国交の悠久の歴史における画期的な御壮挙として心から祝福申上げたいと思う。

コクヨ ケ-10 20×20

改訂版

ファクシミリ送付状

宛先： 外務省 中国課

木寺 首席事務官 殿 様

件名： 鹿取顧問の原稿

発信：国際交流基金 秘書室

〒102 東京都千代田区紀尾井町3－6（パーク・ビル内）
TEL 03-3263-4555
03-3263-4577
FAX 03-3239-4921

担当： 国本

枚数： 送付状のほか 4 枚

日付： 平成 4 年 6 月 22 日

備考：

92-06-22 12:02 ﾌｧｸｼﾐﾘ送信 P.1

日中国交正常化二十周年を慶祝する各種な行事が全国各地で熱心に準備されている。人々は日中交流に自由に参加しうる時代になったことを心から喜び合い、日中友好の気運として両陛下御訪中の成功を祈念している。この国民大多数の願いを、政府は素直になけとめ御訪中を決定してほしい。

以下御訪中に際し成する理由を述べ、御考慮に供したい。

(1) 中国の招請は外交儀礼に適った心のこもったものと聞く。それのみならず国内外国民の好意に基づくものであろう。人と人との関係同様国と国との間でも善意は善意を呼び疑心は疑心を招く。

(2) 筆者は中国で日本政府首脳に行う歓迎(何度か)を全く経験したが、両陛下は更に心のこもった歓迎を受けられるものと思う。中国のおもてなしが前述とみに積極になり協調性を増していることもあり、両陛下に難題を持ち出すようなことは全く考えられない。

(3) 筆者は陛下の皇太子時代にスリランカ

サウジアラビア御訪問に随行し、各国民が
両陛下の御姿と御言葉につかう感動している
姿を目撃した。御訪中されれば友好親善を深め
われる両陛下の強いお気持と暖かい誠実なお
人柄は中国国民に深い感銘を与えずには置か
ないであろう。

(4) 日中交流史上初めてのことと思うが、
中国は最近日本文化に強い関心を示している。
両陛下の時機に適した御訪中は中国の人々
に日本の歴史と伝統を知る機会を与え、両国
民の内の文化交流と心の触れ合いを一層促進する
ことになろう。

(5) 両陛下の御訪中を契機に両国民の相互
理解と信頼が深まれば、日中関係は一段と安
定したものになろう。中国との安定した関係
を維持することは、我が国の安全とアジアの
平和のために極めて重要であると思う。

(6) 中国の「人権状況」から御訪中に疑問
を呈する向きもあるようだが、この問題につ
いては将来を見とおした大局的な対処が得策で

あろう。 性急な批判よりも近代化に向けてのさまざまな努力を支援して行く姿勢が望ましい。

(7) 両陛下の御訪中は政米諸国との関係に悪影響を及すとの論もあるが、杞憂であろう。英国女王、米国大統領ほかほとんどすべての国が元首の訪中を終えている。天安門事件後もアジア諸国など多くの元首の訪中が続いている。中国との関係のアジア諸国話に日本にとっての意味合いは下史的、地理的に見ても政米諸国とは同じでない。他方不安定要因の多い世界情勢の中で政米諸国は中国の安定に資する日本の積極的な努力に対し評価を高めている。

(8) 中国の「保守、革新対立」を理由とする慎重論は情勢を誤認して見ているようである。膨大な人口をかかえ改革、開放に苦闘する中国においていろいろな論争があるのは当然であろうが、これをもって、御訪中の陛下は中国内政に巻きこまれようと推論するのは短絡的にすぎると思う。

(7) 、日中関係の過去における中国の厳しい態度を挙げて御訪中に要議を唱える向きもある。確かにこれまでの日中関係に曲折があったことは事実であり、時としてわが国の国民感情が刺戟されたこともあった。しかし日本の軍事行動によって甚大な人的、物的被害を受けた中国国民の立場からすればやむを得ない面もあることを理解すべきであろう。

(8) 最近訪日した江総書記は「中国は以前のことを忘れて未来に目を向けて行く努力をするしとの決意を表明した。中国側が天皇御訪中をこのような遠大な歴史認識の中で考えていることは明らかである。われわれも天皇御訪中を悠久の歴史における重要な御壮挙として心から祝福申上げたいと思う。

2. 口述関係（準備スケジュール等）

天皇陛下御訪中準備スケジュール（A案・B案）等

ボツ

極秘
無期限
部内の号

決　裁　書

大臣	主管	保存期間
秘書官	アジア局長	1類（永久） 2類（10年） 3類（5年） 4類（1年）
政務次官	~~審議官~~	起案 平成 4 年 5 月 1 日
事務次官	中国課長	決裁 平成 年 月 日
外務審議官	首席事務官	起案者 泉 電話番号 2426
外務審議官		
~~官房長~~		

協議先

儀典長

儀典官

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件名

天皇陛下御訪中スケジュール（案）

GA－1（昭和63. 4. 1改正）　外務省　回覧番号

天皇陛下御訪中スケジュール（案）

92.5.1

中国課

標記に関する今後の作業日程案を別紙の通り、Ａ案、Ｂ案の二案作成したところ、総理官邸に対しては、まずＡ案を提示し、その後の進捗状況を見つつ、日程の後方修正が必要な場合にＢ案を提示することと致したい。

Ａ案：６月後半の今国会でＰＫＯ法案が可決され、中国の反応も抑制されたものであり、それを踏まえて決断する場合。

Ｂ案：７月の参議院選挙で政権基盤が固まり、それを踏まえて決断する場合。

（了）

極秘
無期限
4部の内
1号

A案

天皇陛下御訪中準備スケジュール（案）

92.5.1

中国課

（５月）

（5月25日~6月1日 万里全人代常務委員長訪日）

（６月）　（6月3日~14日 UNCED開催）

橋本大使帰国

世論対策

（6月21日 国会会期終了-PKO法案成立?）

対中見通し説明（特使）

ロジ準備開始

☆ 方針決定

（6月30日~7月2日 総理訪米）

（７月）　（7月6日~8日 ミュンヘン・サミット）

（7月7日 蘆溝橋事件記念日）

（7月8日頃 参議院選挙公示）

対米・対韓非公式通報

御訪中閣議決定一公表

陛下御訪中時期等につき対中通報

（7月26日 参議院選挙）

（８月）

第一次先遣隊派遣

（8月15日　終戦記念日~靖国参拝の動き）

（９月）[redacted]

（9月18日　柳条湖事件記念日）

第二次先遣隊派遣

（9月29日　日中国交正常化20周年記念日）

（１０月）　　（10月1日　中国国慶節）

随員についての閣議決定

予備費についての閣議決定

（10月10日　台湾双十節）

（時期不明　第14回党大会）

天皇・皇后両陛下御訪中

（注）1．ロジ準備のうち一定の時間の必要なもの（例えば特別機のアレンジ）については、極く非公式に開始することをも念頭に置くこととする。

2．首席随員の人選（例えば、福田元総理）。

極秘
無期限
4部の内
1号

B案

天皇陛下御訪中準備スケジュール（案）

92.5.1

中国課

（５月）

（5月25日~6月1日 万里全人代常務委員長訪日）

（６月）　（6月3日~14日 UNCED開催）

（6月21日 国会会期終了-PKO法案成立?）

（6月30日~7月2日 総理訪米）

（７月）橋本大使帰国

世論対策

対中見通し説明（特使）

（7月6日~8日 ミュンヘン・サミット）

（7月7日 蘆溝橋事件記念日）

（7月8日頃 参議院選挙公示）

ロジ準備開始

（7月26日 参議院選挙）

☆ 方針決定

（８月）

対米・対韓非公式通報

（8月15日　終戦記念日~靖国参拝の動き）

御訪中閣議決定一公表

陛下御訪中時期等につき対中通報

第一次先遣隊派遣

（９月）

[redacted]

（9月18日　柳条湖事件記念日）

第二次先遣隊派遣

（9月29日　日中国交正常化20周年記念日）

（１０月）　　（10月1日　中国国慶節）

随員についての閣議決定

予備費についての閣議決定

（10月10日　台湾双十節）

（時期不明　第14回党大会）

天皇・皇后両陛下御訪中

（注）1．ロジ準備のうち一定の時間の必要なもの（例えば特別機のアレンジ）については、極く非公式に開始することをも念頭に置くこととする。

2．首席随員の人選（例えば、福田元総理）。

（5/8 5次室会議にて使用）

5-1 7枚
5-3 5枚
（5-2、4、5 ないが）

7-2 2部(7-1、3-7は除く)

極秘
無期限
部の内
号

天皇陛下御訪中準備スケジュール（案）

改訂版

92.5.8

中国課

（５月）

橋本大使帰国

世論対策

方針決定①

（5月25日~6月1日 万里全人代常務委員長訪日）

（６月）　（6月3日~14日 UNCED開催－李鵬首相出席予定）

（6月21日 国会会期終了-PKO法案成立?）

対中通報（特使?）

方針決定②

（6月30日~7月2日 総理訪米）

（７月）　（7月6日~8日 ミュンヘン・サミット）

（7月7日 蘆溝橋事件記念日）

（7月8日頃 参議院選挙公示）

（7月26日 参議院選挙）

対米・対韓非公式通報

御訪中閣議決定－公表

（８月）

第一次先遣隊派遣

（8月15日　終戦記念日~靖国参拝の動き）

（９月）[redacted]

（9月18日　柳条湖事件記念日）

（9月29日　日中国交正常化20周年記念日）

（１０月）　　（10月1日　中国国慶節）

第二次先遣隊派遣

随員についての閣議決定

予備費についての閣議決定

（10月10日　台湾双十節）

（時期不明　第14回党大会）

天皇・皇后両陛下御訪中

（注）1．ロジ準備のうち一定の時間の必要なもの（例えば特別機のアレンジ）については、極く非公式に開始することをも念頭に置くこととする。

2．首席随員の人選（例えば、福田元総理）。

午後8時以降受付往電案

極秘
無期限
部の内号

部内連絡

※総第 048405号001公館宛
平成 ※平成 4年 5月 12日 21時 40分 23秒受付

電信案

電信課長

大臣 / 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 (○) アジア局長 ~~審議官~~ 中国課長 首席事務官	※発電係 1 2 起案 平成 4年 5月 12日 起案者 泉 電話番号 2426

※印欄内は電信課記入)

協議先
総務課
(発電後 コピー 鳥竹)
(別電七6)

在 中国 大使 / 総領事 あて 外務大臣 発

件名 (部内連絡)

主管・文書記号	※電番	大至急 / 普通 至急(優先処理)	パターン・コード
アジア局長			

転電
転送 在
転報

※転電番号

大使・総領事あて

大至急 至急
普通 (優先処理)

(八〇字)

~~橋本大使へ~~ 谷野アジア局長より、

※

04840548 優先 TYUUGOKU 部内 自暗

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(昭和六三・六・三十改正)

GB-1 外務省

回覧番号

１．天皇陛下の御訪中準備スケジュール（案）を別電します。本１２日、本案をもとに大臣室で協議を行ない、大臣の御了承を得ています。今週中に小和田次官より、宮沢総理、加藤官房長官に対し、ブリーフィングを行ない、了承を求める予定です。

２．日程（案）中、「方針決定」が二度出てきますが、これは両方の考え方があるということで、総理にはそのまま提示します。（大使は最終六月の決定が終わったらというのが大臣の考えです。PKO法案を通す）

３．いずれにせよ、本件段取りの具体的進め方等については、貴使の御帰国を待って改めて相談したいと思います。

（了）

午後8時以降受付往電案

極秘
無期限
部の内
号

部内連絡

※総第048407号001公館宛

平成 ※平成4 21 年5 41 月12 58 日 秒受付

電信案

電信課長

大臣 / 秘書官	主管	※発電係 1 2
政務次官	アジア局長	起案
事務次官	審議官	平成4年5月12日
外務審議官	中国課長	
外務審議官	首席事務官	起案者 泉 電話番号 2426
官房長		

協議先

（※印欄内は電信課記入）

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 （部内連絡）

主管・文書記号	※電番	大至急 至急 普通 （優先処理）	パターン・コード
アジア局			

転電
転送 在
転報
※転電番号
大使・総領事あて
大至急 至急 普通 （優先処理）

（八〇字）

往電アジア局長宛部内連絡乞別電。

※

04840774 優先 TYUUGOKU 部内 自暗

GB-1 外務省 回覧番号

（昭和六三・六・三十改正）

天皇陛下御訪中準備スケジュール（案）

（５月）

橋本大使帰国

世論対策

方針決定①

（5月25日~6月1日 万里全人代常務委員長訪日）

（６月）　（6月3日~14日 UNCED開催－李鵬首相出席予定）

（6月21日 国会会期終了-PKO法案成立?）

対中通報（特使?）　クエスチョン・マーク

方針決定②　クエスチョン・マーク

（6月30日~7月2日 総理訪米）

（７月）　（7月6日~8日 ミュンヘン・サミット）

（7月7日 蘆溝橋事件記念日）

（7月8日頃 参議院選挙公示）

（7月26日 参議院選挙）

対米・対韓非公式通報

御訪中閣議決定－公表

（８月）

第一次先遣隊派遣

（8月15日 終戦記念日~靖国参拝の動き）

（９月）[redacted]

（9月18日 柳条湖事件記念日）

（9月29日 日中国交正常化20周年記念日）

（１０月）　（10月1日 中国国慶節）

第二次先遣隊派遣

随員についての閣議決定

予備費についての閣議決定

（10月10日　台湾双十節）

（時期不明　第14回党大会）

<u>天皇・皇后両陛下御訪中</u>

（注）１．ロジ準備のうち一定の時間の必要なもの（例えば特別機のアレンジ）については、極く非公式に開始することをも念頭に置くこととする。

２．首席随員の人選（例えば、福田元総理）。

（了）

5/12 次官室会議用資料

ﾍﾟｰ1 }
ﾍﾟｰ2 } ミレニアム
ﾍﾟｰ3 谷野局
ﾍﾟｰ4 榛葉

極秘
無期限
部の内
号

original

（局長手持ち用資料）

天皇陛下御訪中日程（方針決定のタイミング）

92.5.11
中国課

1．一つの考え方

橋本大使帰国→対総理説明（政界、世論等への根回し開始の指示。これは一種の決定）（５月）→最終方針決定（６月の国会終了後）→対中通報、対米・韓非公式説明、本格的根回し→閣議決定（７月末の総選挙後）。

※５月は「最終決定」にこだわらず、６月の決定に向けての道筋を明らかにする（これも一種の方針決定と考える）ことに主眼を置くとの考え方。

2．方針決定のタイミングを５月とすることについてのメリット・デメリットは以下の通り。

【メリット】

○　陛下の外国御訪問のロジ作業は相当長時間を要すのが通例であるところ、方針決定→閣議決定のタイミングが早ければ早いほど、余裕をもって関係ロジ作業に当ることが出来る。

○　万里全人代常務委員長訪日のタイミングで中国側に我が方決定内容を伝達できれば、対中関係上より好ましい。（あるいは、ＵＮＣＥＤで李鵬総理に伝えることとしてもそれに準ずる効果有り。）

○　政府内で決定し「錦の御旗」ができれば、陛下御訪中に対する反対論に対し正面から各種の反論を行なうことが出来る。早ければ早いほど余裕をもった世論工作が可能。（但し、これは対立をあおる恐れもあり。）

○　決定を遅らせれば遅らせるほど反対論が勢いを増し、御訪中は無理との世論が定着するおそれ有り。決定は早い方が良い。

【デメリット】

○　自民党内に選挙を前にして異論が生じ、党内紛争に至る可能性有り。右翼が騒げば、注目を浴び、党内も抑えきれない宮沢政権との悪いイメージが定着してしまいかねない。（せめてＰＫＯ法案を成立させた余勢を駆って決めるほうが危険性は少ない。）

○　宮沢総理に時間的余裕を与え、不退転の決意を行なって頂く。これは宮沢スタイル。無理押しをすれば混乱を増長する。

○　方針決定と公表の期間が離れていればいるほど、思わぬ形でのリークの危険性が有る。

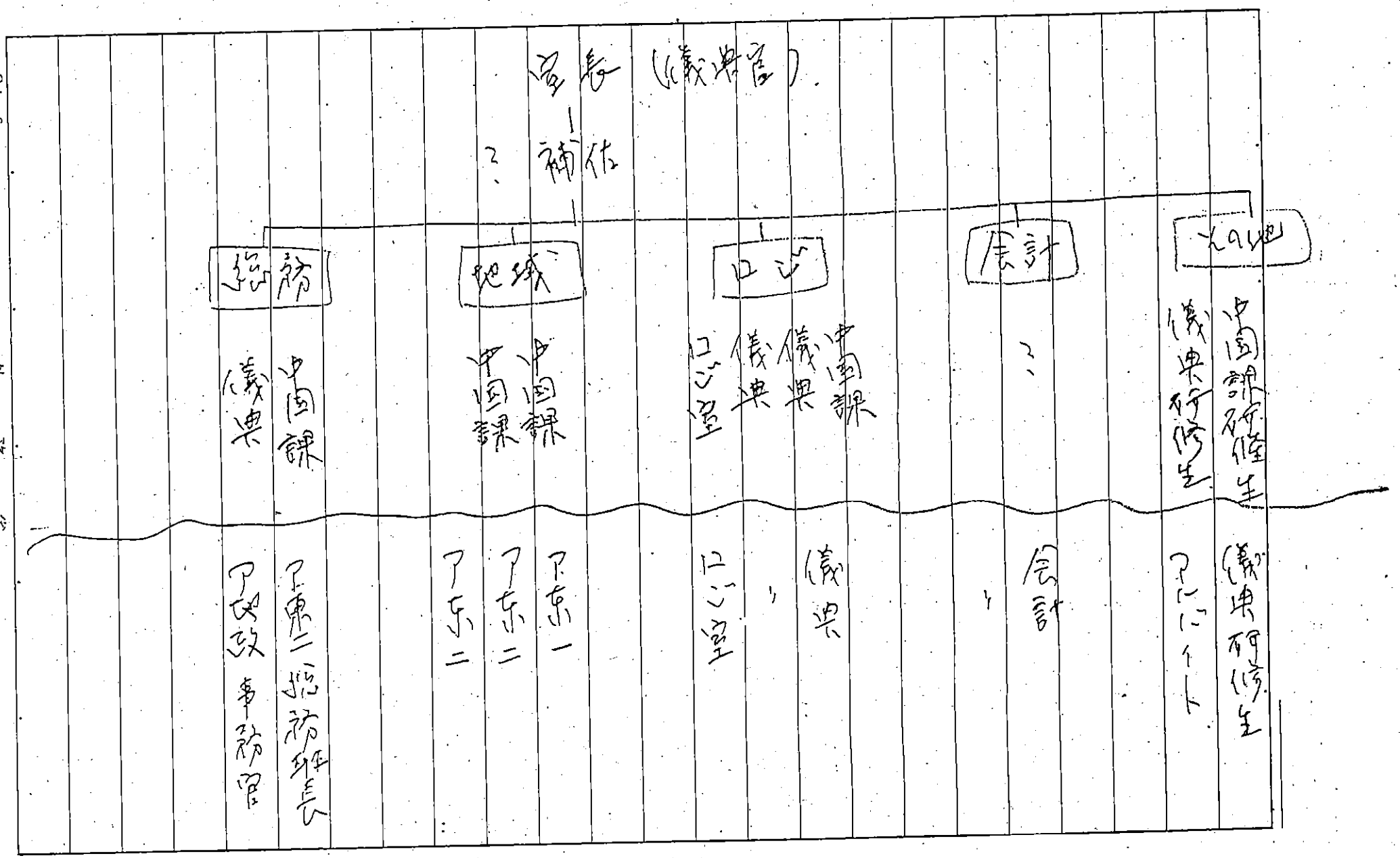
○　党内、世論の流れを静かな形で変え、その後に決定する方が無難。５月では政・財・マスコミ各界への根回しが不十分。後日、論議を尽くさず決定したとの不満が必ず噴出する。

（了）

儀典官室における会議

6/12

(注) 婦人は仮名使用.


GA-6
外務省
大臣
官房
総務
会計
儀典
在外
中国課研修生
儀典研修生
アルバイト
会計
儀典
中国課
儀典
ロシア室
ロシア室
地域
中国課
中国課
アジア一
アジア二
アジア二
官房
儀典
中国課
アジア二局参事官
アジア大洋州審議官
アジア大洋州参事官

極秘
無期限
2部の内
4号

日程作成上の指針

1．総論

（1）「新しい日本を代表する両陛下」及び「開かれ親しみのあるお人柄」
－「日本国の象徴」たる陛下を通して中国人の対日イメージの改善

（2）対応は自然体にて
－素直に友好親善訪問として日中双方に受け取られる内容
－二十周年記念行事的なものは避ける
－御訪問に合わせた日本側企画行事の開催等日本から持ち込むスタイルは避ける。

2．各論

（1）二千年の日中友好の姿が反映されるもの
－日中間の往来を代表する都市の訪問
－中国の歴史、文化に触れ、日本との交流をしのばせるもの

（2）日中友好の将来を展望するもの
－青少年との交流
（日本の留学生、日本人学校生徒も加える）

（3）環境、福祉問題等
－環境・福祉問題等への関心を示されるのも有意義（援助との関連づけは避ける）

（4）国民との接触
－公園訪問等。また各行事において可能な範囲で接触の機会を設ける
－家庭訪問

極秘
無期限
2部の内
2号

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目	第6日目
午前	(10:00頃) 東京御発	(09:30) 青少年との交流 (於日中青年交流センター	福祉施設訪問	西安市内視察	(10:00頃) 上海御着	浦東開発区視察 (?)
昼		(11:30) 在留邦人、日本関連中国人招請レセプション (大使主催)				在留邦人、日本関連中国人招請レセプション (総領事主催)
午後	(13:00頃) 北京御着 歓迎行事 故宮・北海公園訪問	万里の長城 十三陵	(13:00頃) 御発 (15:00頃) 西安御着	(13:00頃) 御発 (15:00頃) 杭州御着	大学訪問 上海市内視察	(14:00頃) 上海御発 (19:00頃) 東京御着
夕	晩餐会	内輪の夕食 (於大使公邸)	晩餐会	内輪の夕食	晩餐会	
泊	北京	北京	西安	杭州	上海	

ＦＡＸ信

総 番 号　Ｒ１０４３００　　主　管

月　２２日　[redacted]　中　国　発　亜　中

平成　４年　５月　２２日　[redacted]　本　省　着

外　務　大　臣　殿　　橋　本　大　使

事務連絡

ＦＡＸ信　至急（ゆう先処理）　[redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＰＫ９８６５－０１）

'92年 5月22日 11:10 中国大使館A PK9605JA-01/04

	レーガン大統領訪中 (1984.4.26～5.1)	(参考)ブッシュ大統領訪中(当時、副大統領)		エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
		(1982.5.5～5.9)	(1985.10.13～10.20)	
(第1日目)	午後　北京着 15:00 李先念主席主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 李先念主席夫妻との会見 (於　人民大会堂) 夜　李先念主席主催歓迎宴 (於　釣魚台国賓館)	夜　杭州着	午後　北京着 万里副総理主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 万里副総理との会見 (於　人民大会堂) 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴 (於　人民大会堂)	午後　北京着 天安門広場経由釣魚台国賓館へ
(第2日目)	午前　趙紫陽総理との第1回会談 (於　人民大会堂) 午後　趙紫陽総理との第2回会談 (於　人民大会堂) 講演会 (於　人民大会堂3階小講堂) 胡耀邦党総書記との会見 (於　人民大会堂) 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴 (於　人民大会堂)	杭州滞在	午前　趙紫陽総理との会談 (於　人民大会堂) 昼　呉学謙外交部長主催昼食会 (於　前門北京ダック店) 午後　胡耀邦総書記との会見 (於　中南海) 李鵬副総理との会談 夜　答礼宴 (於　長城飯店)	午前　李先念主席主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 儀礼的会見 (於　人民大会堂河北の間) カクテルパーティ (随行記者招待) (於　釣魚台国賓館) 午後　故宮参観 夜　李先念国家主席主催歓迎宴(於　人民大会堂) 文化部主催歌舞戯曲公演鑑賞(於　人民大会堂3階小講堂)

外務省アジア局 PK9605JA

	レーガン大統領訪中 (1984.4.26～5.1)	ブッシュ大統領訪中(当時、副大統領) (1982.5.5～5.9)	ブッシュ大統領訪中(当時、副大統領) (1985.10.13～10.20)	エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
(第3日目)	午前　鄧小平党顧問委主任との会見・会談 (於　人民大会堂) 昼　鄧小平主任主催昼食会 午後　中央テレビ局のインタビュー 万里の長城を参観 夜　答礼宴 (於　長城飯店)	午前　北京着 午後　万里副総理主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 万里副総理との会見 (於　人民大会堂) 黄華国務委員兼外交部長との会談 (於　人民大会堂) 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴 (於　人民大会堂)	午前　李鵬副総理とのテニス試合 (於　北京国際クラブ) 鄧小平中共中央顧問委主任との会見 (於　人民大会堂) 彭真全人代委員長との会見 (於　人民大会堂) 午後　北京ジープ社参観 記者会見 夜　李先念主席夫妻主催招宴 (於　釣魚台国賓館)	午前　胡耀邦総書記との会見 (於　中南海) 中南海迎薫亭で休憩、美景を鑑賞。 鄧小平中共中央顧問委主任との会見 (於　釣魚台国賓館養源斎) 昼　鄧小平主任主催歓迎午餐会(同上) 午後　頤和園、国家経済委の幹部訓練センター、「六一」幼稚園参観。 万里の長城、長陵・定陵を参観。 夜　趙紫陽総理との会見 (於　釣魚台国賓館)
(第4日目)	午前　? 午後　西安へ 秦始皇兵馬俑博物館、西安東郊臨潼県の市場を参観。 北京へ	午前　鄧小平副主席との会見 (於　人民大会堂) 昼　鄧小平副主席主催昼食会 午後　趙紫陽総理との会見 (於　中南海紫光閣) 夜　答礼宴 (於　人民大会堂)	午前　万里副総理によるお別れの挨拶 成都へ 昼　顧金池四川省副省長主催昼食会 午後　成都駐在米国総領事館開館式出席 (於　錦江賓館) 講演会 (於　四川大学) 桂林着	午前　北京発上海へ 昼　江沢民市長主催午餐会 (於　西郊賓館) 午後　豫園遊覧 中英合弁上海耀華ビルキントンガラス成昌倉庫完成式典出席 夜　答礼宴及びレセプション室 (於　上海に停泊中の英王室ヨット「ブリタニア号」)

'92年 5月22日 11:10 中曽根康弘 FAX 03-3502-0054

PA9865 3

	レーガン大統領訪中 (1884.4.26～5.1)	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領）		エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
		(1982.5.5～5.9)	(1985.10.13～10.20)	
(第5日目)	午前　趙紫陽総理との間で「中国政府と米国政府との間の所得に対する二重課税回避及び脱税防止に関する協定」、「中国政府と米国政府との文化協定1984年・1985年執行計画」、「工業科学技術協力議定書」、「科学技術協力議定書」、「中米原子力平和利用協力協定」に仮調印。 李先念主席、趙紫陽総理兼務、呉学謙国務委員兼外交部長、王丙乾国務委員兼財政部長が送別（於　人民大会堂） 午後　上海着 中米合弁の上海＝フォクスボロ有限公司を参観。 講演会（於　復旦大学） 夜　汪道涵上海市長主催招宴	午前　黄華外交部長が送別 正午　内外記者会見（於　空港内） 北京発帰国	午後　漓江を遊覧。 広州着 夜　葉選平広東省長主催招宴	午前　上海発西安へ 正午　西安着 午後　秦兵馬俑博物館を参観 昆明着

PK9865 3

	レーガン大統領訪中 (1884.4.26～5.1)	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） (1982.5.5～5.9)	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） (1985.10.13～10.20)	エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
（第6日目）	午前　趙紫陽総理より長距離電話 虹橋郷を参観、農家を訪問 上海発帰国へ		午前　広州交易会を参観 深圳で記者会見 午後　列車で深圳経由香港へ	午前　西山風致区を遊覧 午後　昆明雲南民族学院を参観 夜　和志強雲南省長主催歓迎宴
（第7日目）				正午　広州着 葉選平広東省長主催歓迎宴（於　白天鵝賓館） 午後　西苑、少年宮を参観 呉学謙外交部長、葉省長主催歓送式典（於　黄埔新港埠頭） 夜　「ブリタニア号」で広州黄埔新港を離れる。

官邸会議用資料

6/23

極秘
無期限
部内
号

決　裁　書

大臣 秘書官 政務次官 (○) 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 6 月 23 日 決裁 平成 年 月 日 起案者 泉 電話番号 2426

協議先

橋本大使御了承　○儀典長

○北村儀典官

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件名

天皇陛下御訪中準備の経取り（案）

GA－1 （昭和63．4．1改正）　外務省　回覧番号

極秘
無期限
1部の内
1号

天皇陛下ご訪中準備の段取り（案）

92.6.23

外務省

遅くとも７月中旬までに方針決定→天皇陛下へ政府の意向をご説明

→対中非公式通報

↓

天皇陛下ご訪中ロジ作業を内々に開始

↓

８月４日または７日の閣議で正式決定

→対外公表

→対中正式通報

→天皇陛下ご訪中省内準備委員会及び準備ロジ室開設・公表

↓

８月１０日の週に第一次先遣隊派遣

↓

９月下旬に第二次先遣隊派遣

↓

１０月上旬に随員・予備費の閣議決定

↓

１０月下旬、天皇・皇后両陛下ご訪中

極秘
無期限
1部の内
1号

天皇陛下の御訪中について

（今後の段取り）

４．６．２３

外　務　省

１．先ず、総理より次の自民党幹部に対して決意を直接伝達して頂く。

（１）福田、中曽根、金丸、竹下、海部、三塚の各議員

（２）党四役

２．これを受けて、官房長官、渡辺大臣、外務省幹部より次の根回しを行なう。

（１）上記１．（１）の各議員

（２）衆・参外務委員会（委員長及び理事）

（３）外交部会幹部

（４）日中議員連盟幹部

（５）総務会、政調会幹部

（６）その他

３．上記と並行して、以下の根回しを外務省を中心に行なう。

（１）プレス（特に問題ないが、読売、産経、共同対策が必要。）

（２）財界首脳（官房長官を中心に。）

（３）有識者

４．上記の情勢を見極めつつ、早期に対中非公式通報を行ない、具体的準備に着手する。（首席接伴員の決定を含む―福田元総理？）

５．以上を受けて、閣議決定及び公表は８月初旬を目途とする。

（了）

天皇陛下御訪中の決定のタイミングについて（6/22作成）

陛下御訪中の決定のタイム・リミットについて

H.4.6.22
中国課

1. 実質決定と閣議決定の二つのタイミングあり。

1. 実質決定

(1) 宮内庁としてはできる限り6月中の決定を希望。

[redacted]

(2) 儀典としては、できるだけ早い決定を希望するも、現時点では サミット外遊予の決定を求めるのは困難。サミット後帰国してから週末明け 7月15日までに決定。

(3) 中国との関係では 御訪中前3ヶ月以前に決定を内々通報の要有。 7月上旬中の決定通報が望ましいが、サミットがあることを考慮して7月15日までに決定通報の要有。

2. 閣議決定

8月4日乃至7日に 閣議決定を行い、先遣隊とその次の週に伝達することが是非とも必要。

FAX

午後8時以降受付往電案

※総第2801号001公館宛　GM6476-02　P2

平成 ※4 6年 5月 17日 22時 18分 日 秒受付

電信案

4-4

電信課長	主管	※発電係 1 2	（※印欄内は電信課記入）
大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	アジア局長 審議官 参事官 中国課長 首席事務官	起案 平成4年6月17日 起案者 岡島 電話番号 2425	
協議先			

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 天皇陛下御訪中（官房長官記者会見）

主管・文書記号	※電番	大至急 普通 至急（優先処理）	パターン・コード
亜中	第1682号		[redacted]

転電 転送 在 転報　※転電番号　大使・総領事あて　大至急 至急 普通（優先処理）

（八〇字）

6月17日午後の加藤官房長官記者会見その概要も以下の通り。（河野秘書官よりの電話連絡 ~~未着受~~）

両総理は今日の公演で是非（陛下に中国に）行って欲しいとのべた。

政府の受け止め方如何。

※

06280100 優先 TYUUGOKU F電

GB-1 外務省 回覧番号

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（昭和六三・六・三十改正）

（三八〇字）

答、（陛下の御訪中については）現在、政府部内で真剣に検討中である。総理の言った通りである。しかし、まだ党内にいろいろな意見があり、（陛下の御訪中は）国民の祝福を受け、日中関係の前進に役立つような形でやりたい。

問、一時期とくらべ、党側の反対論が弱まっていると見る向きもあるが。

答、冷却期間をおいているからだと思う。

問、冷却期間はどの位か。

答、いましばらくということだ。

問、20周年ということなので（御訪中は）年内か。

答、20周年を記念して御訪中を検討している。

問、PKOが影響しているのか。

答、この問題は日中でお互いをどこまで理解し合えるかという問題だ。

問・中国のPKOに対する反応如何。

答、おさえぎみと思う。

問、おさえぎみの背景には天皇訪中があるのか。

答、しらない。

（3）

航空機セジ（専中長ゆJAL）

4/30

事務次官
中国課長　アジア局長
首席事務官

（記録メモ）

極秘
無期限
／部の内
／号

コピー不可

天皇陛下御訪中（航空機ロジ）

92.4.30

中国課

日本航空（ＪＡＬ）においても天皇陛下御訪中のあり得べきを想定し、準備室を設置して独自に準備を進めているところ、今般、樽井中国課長より同準備室長に対し、「本件は全く決定しておらず、単に技術的観点からの照会にすぎない」旨を前置きの上、特別機の所要手続きについて、内々に照会したところ、先方反応以下の通り。

１．特別機の手配は通常一ヶ月前に連絡頂ければ対応可能であるが、陛下の御外遊の場合は、通常以上に念入りに準備する必要があるので、二ヶ月前に連絡頂く必要がある。

２．西安については、ＪＡＬ側でも陛下のご訪問先としてあり得べきとの観点から調べてきている。特に、別件でチャーター便のコマーシャル・フライトを飛ばすとの話があり、その名目で調べてきた。５月にもその件でＪＡＬより調査団を派遣する予定であり、自分としてもその機会を利用して、相手方に陛下の話を言うことなく、更に調査したいと考えている。西安についてはこのようにエクスキューズがあるので問題ない。

３．他方、杭州については、不完全ながらもＪＡＬの有する情報によれば、日本の航空機が同飛行場に離発着するのは技術的に困難（滑走路の長さ等

の為）との印象を有している。

（以上に関し、樽井中国課長より、「情報を多とする。なお、本件については呉々も内密に願いたい。このような話を非公式にであれ行っていることが漏れれば、ご承知の通りの事情で大変なことにもなりかねない。ついては、本件はここだけの話とし、上司にも報告しないようお願いしたい」旨述べたところ、先方は「その辺の事情はよく承知しているので、ご安心願いたい」旨回答した。）

（了）

3、小和田外務事務次官の対総理、官房長官ブリーフ

6-1 次定

6-2 subtree

6-3 木更

6-4
6-5 } 二じょうさ

6-6 file

小和田次官の対総理ブリーフ（5月15日）　6-6

極秘

3．天皇陛下の御訪中（件名外）

（次官）本日は時間も限られているので、天皇陛下の御訪中の作業日程についてお諮りしたい。橋本大使が現地で行っている活動については、別途御承知のことと存ずるので省略させていただきたいが、一言だけ申し上げれば、中国側は橋本大使の説明によく耳を傾け（総理：そうね。）、抑制的な対応を示している。江沢民来日の際もそうであったが、竹下元総理の訪中の際、揚尚昆国家主席以下の四首脳とも非常に抑えたものの言い方をしている。

（総理）そうなんだな。橋本君ががっちりやって回っている感じだ。電報で読んだ。

（次官）海部前総理の訪中の際の中国側の対応も同様であった。

総理がミッテランとの間で話されたことが新聞に出たが（総理：ああ。）、従来であれば、少なくとも新華社なりの、これはけしからぬというコメント位は出ていて不思議はないところである。

（総理）そうだよなあ。この話については、僕はプレスにブリーフする必要はないと思ったな。

（次官）いずれにせよ、中国側の対応はこれまでのところ極めて抑制されものであり、それだけに是非御訪中して戴きたいとの先方の気持ちには強いものが感じられる。仮に最終的に御訪中が実現しないこととなった場合に、先方がどのような対応に出て来るかは、我が方として念頭に置いておくべき点であろう。

（次官より、別紙の作業スケジュールを示しつつ、）天皇御訪中の方針決定については、二つのタイミングが考えられる。第一は、万里全人代常務委員長来日の直前に決定を行い、それをを万里に、場合によっては事前に伝えるという段取りである。第二は、６月末国会会期の終了後で、総理がサミット及び訪米に出発される前の１週間乃至１０日の間に方針を決定するという段取りである。

あと別紙には書いていないが、７月の参議院選挙後に方針を決定するという案もありえよう。しかし、これについては準備に要する期間等の点から現実には無理であろうというのが外務省事務レベルでの結論である。

（総理）御訪中の日程はどうだったかな。

（次官）１０月２２日から２７日である。もとよりこれで御訪問すると決まったわけではなく、仮に御訪中されるとすれば中国の党大会等との関係でこの時期になるのではないかという形で中国側に内々に伝達してあるという意味である。

本日お諮りしたいのは、橋本大使の帰国のタイミングである。橋本大使から聞いたところでは、総理との関係では中国における根回しが終了次第一時帰国して方針決定につなげるという了解であったとのことであり、しかりとすれば、自分は中国内においてなすべき根回しは行ったので帰国したいということであった。連休明けにも帰国したいという意向であったが、とりあえずそれは目立つということで抑えた経緯があり、万里来日の前の時点であれば自然な形で帰国できるのではないかとも考えている。

（総理）次官、こう考えましょうよ。見当をつけなきゃならない話だけれども、ともかく

自分としては（天皇に）是非行っていただいた方がいいと思っている。朝日は最近御訪中賛成といっていい社説を出した。読売の方は渡辺恒さんと話をしたところ、御訪中そのものに反対ではないということだった。前に反対とどられることがあったとすれば、それはお言葉の問題なんかがあるとすれば御訪中は良くないという趣旨だと言っていた。

自分からは、朝日も読売も共に反対ということになると、御訪中は実現しないことになるので、反対はしないようにしてほしいと言っておいた。これが５～６日前のことである。橋本さんなり、小和田さんなりに、念には念を入れて論説と話をしておいてもらう必要がある。党内もそうだ。

佐藤誠三郎と（「２１世紀のアジアと日本を考える懇談会」の席上で）会ったが、自分の方からはわざとこの話をきかずにおいた。そうしたら（佐藤の方から）、中曽根さんはまた賛成になった、しかし、竹下さんはいやがらせでも受けているらしい印象があり、静かになっていると言っていた。（佐藤によれば竹下元総理は）御訪中に反対ではないが、しかし、自分が音頭をとるのは困ると考えているもののようだということだった。

海部さんは、橋本君の根回しが効いているせいか、中国側は静かだったと言っていた。

タイミングをどうするか、小和田さんが一番いいと思うように考えてくれたらいい。どんなタイミングにするか自分との相談は不要である。ただ橋本君を呼び返すのが早いと、話が早く始まっちまうかもしれない。

万里来日の際の一時帰国はその点自然であるというのは分かるが。

（次官）最終的な方針決定のタイミングについては、ジャーナリズム及び党内の真に重要な人々、例えば福田、中曽根、竹下元総理等々と懇談を行い、事情を説明した上で、大局的な判断に立って行うべきものと考えている。

（総理）その際にみんなを一緒に集めたらだめだ。一人一人こちらからでかけて行って説明した方がいい。

（次官）その点はその通りだと思う。いずれにせよ、実際の方針決定は国会会期終了後とし、その間、我が方として動きうる余地を開いておくことが必要である。今現在は我が方として動くとかえって逆効果になるので、特段の動きはとっていない。

（総理）そうでしょう。

（次官）橋本大使に一時帰国して根回しをしてもらい、その工作が整った段階でそれにのった形で総理に形式的な詰めを行って戴くという段取りにするのが良いと思う。

（総理）そういうこと。

（次官）その上で、御訪中の閣議決定を行い、公表に持ち込みたい。

（総理）橋本君が帰国したら始まっちゃうね。始まっちゃったら一週間か１０日で話をつけなきゃならない。冷却期間がないと具合が悪いのじゃないか。

（次官）冷却期間が必要であることはその通りであろう。しかし、ただずるずると手をこまねいていれば、冷却期間の間に反対が勢いを増し、基本的に御訪中に賛成であるが国論の割れることが心配だという層の間に無用の懸念を醸成する危険がある。

（総理）それはあると思う。

（次官）その間てこ入れができないという状況は非常に困る。

（総理）冷却だけで再燃させずにやれればいい。橋本君が月末に帰ってくれば、根回しはできるが、全体として事は早まるぞ。冷却せぬうちに再燃しないか。本当は国会が終わって代議士がおらないときにやるに限るんだが、そういう時間がぞうあるわけじゃない。いつまで待てるって？

（次官）６月末、即ち別紙の方針決定②のタイミングが最も遅いタイミングであろう。７月の参議院選挙後となると、前述の通り準備が極めて難しくなるというのが、我が方事務当局及び現地側での判断である。

（総理）９月しかないってわけだなあ。

次官に一番いいと思うタイミングをお任せする。（橋本大使の一時帰国が）５月末だともう一辺話が始まってしまうという気がするが、どうかなあ。竹下さんはどんな感じか。

（次官）御訪中前にも、また御訪中後も御礼かたがた自分がお会いしたが、竹下元総理は二つの点を心配されていた。以下、自分の想像が混じるが、第一に、政府から頼まれたことはやるが、それ以上自分が中心になって動かすのは政府としての方針が明確になってからにしたい、それまでは自分の出番ではないとの感触がある。因みに竹下元総理は、自分のこれからの使命は一に中国であり、二に環境であると言っておられた。第二に総理が示唆されたいやがらせ云々の点があるように思った。

（ここで金丸副総理からの電話が入り数分間中断。）

（総理）あなたの都合でベストだというところを決めてもらいたい。

（次官）竹下元総理の話に戻れば、いろいろな背景もあり自分があまり目立たぬ方が良いとの判断があると見受けられた。他方、これは戦術的な判断であり、金輪際身を引くという御意向ではないと受け止めている。

アジア局長によれば、竹下元総理は、本件は政府がまず決めることであり、自分としては是非御訪中を実現したいが、当面慎重な行動が必要であると考えておられるという印象だったようである。先般、韓国のことで御無理をお願いしたばかりであり、その上更に中国との関係でいろいろとお願いするのは、御本人が飲んでということならともかく、難しい点がある。

（総理）そりゃそうだよなあ。なるほどね。

どうもこの時期をはずしてしまうと次にいい時期が考えられない。自分としては是非御訪中いただきたいと思う。中曽根さんも理由はどうあれそう言っているんならね。

（次官）福田元総理については、総理の御指示で先般自分がお会いした際には、御訪中実現に協力するということではなかったが、自分の説明のポイントはよく理解され、御訪中に反対はしないが慎重にとり進める必要があり、党の議論、間違っても総務会にかけたりしてはいけないとのアドバイスをいただいた。これは、本件訪中の実現は日本政府が決定すべきことであり、その際にはかくかくの点に気を付けるべきだという流れでアドバイスをいただいたものと受け止めている。

（総理）カネボウの伊藤淳二が福田さんと親しい。
（次官）伊藤氏はもともと御訪中に反対の論文をものしている。
（総理）それは承知している。（伊藤氏に）福田さんは反対じゃないのじゃないかと自分が言ったら、さあどうですかね、福田先生は今のままでは無理だなあと自分には言っていたと称している。これは４日位前の話だ。
（次官）自分が福田元総理にお会いしたのは少し前のことであり、最近の元総理のお気持ちはあるいはそういうことかもしれない。福田元総理の私邸に自分がうかがってお話している際も、伊藤氏が来訪して３０分位話が中断された経緯がある。
（総理）伊藤は反対だ。論文を書いているんだから。
（次官）自分は約一か月前、サイラス・ヴァンスと一緒に福田元総理のところにをうかがって１時間ほどお話する機会があったが、その際、江沢民来日の折にはＰＫＯ法案、尖閣諸島、民間賠償等の問題につき先方が非常に自制した対応を行っていたことを説明するとともに、大局論に立った日中関係のあり方を説明申し上げた。福田元総理は注意深く耳を傾け、自分もよく考えてみると言っておられた。
（総理）（天皇が御訪中されても）危険はないんだ、やってもらうべきだ、それで（福田さんが）いろいろ考えるところはあるが、政府が決めればいいというところまで持っていければいいんだ。
（次官）福田元総理がそこまでいかれる可能性は十分あると思う。
（総理）それならね。
（次官）いずれ総理に福田元総理にお会いいただく必要があると考えている。
（総理）そう思うよ。その前に橋本君なんかと論説やなんかの方をすましてもらって、あるときこういう風にしますというそのタイミングをどうしらいいか考えてほしい。５月２５日万里来日に合わせて橋本大使が帰国して３日でも４日でも（根回しを）やると話が動きだす。それは早いと思うな。次官の一番いいと思う判断にお任せするが、僕が長老に言う日をいつにしたらいいか、それから逆算してどうするか考えておいてほしい。

(6-1 総理　6-4 総理秘書
6-2 次官　6-5 次官秘書
6-3 外政審　6-6 総務課長)

極秘
無期限
部の内
号

original

決　裁　書

~~大臣~~ 秘書官 ~~政務次官~~ 事務次官 ~~外務審議官~~ 外務審議官 ~~官房長~~	主管 アジア局長 ~~審議官~~ 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 5 月 13 日 決裁 平成 年 月 日 起案者 泉 電話番号 2426

協議先

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件　名

天皇陛下御訪中（次官の総理・官房長官ブリーフ用資料）

GA－1 (昭和63. 4. 1改正)　外　務　省　回覧番号

極秘
無期限
部の内
号

（ブリーフィング用資料）

天皇陛下御訪中（橋本大使の対中工作）

92.5.13

中国課

1．橋本大使の中国側への発言の要点

（1）国内で慎重論・反対論が根強いとして次の3点を指摘。

（イ）一般(原則)論として、天皇陛下を政治的に利用すべきでない。

（ロ）尖閣諸島、民間賠償等が天皇訪中前又は訪中期間に提起され、天皇陛下が困難な立場に置かれることを憂慮。

（ハ）謝罪を目的とする訪中反対。

（2）天皇訪中を日中両国国民の幅広い理解と支持を得て実現する為に、以下につき中国側の理解と協力を得たい。

（イ）天皇陛下御訪中を「必ず成功させ、絶対に失敗させない」、「大事な客人を決して困らせない」との点の再確認。

（ロ）「軍国主義復活」等の批判を避けること。

（ハ）尖閣諸島で新たな措置をとらないことの確認。

（ニ）民間賠償、従軍慰安婦についての従来の立場の堅持。

（ホ）ＰＫＯ法案への反対乃至反対と受け取られるような表現は謹むこと。

（3）天皇陛下御訪中を成功裡に実現する為、日本側は最大限の努力を行なう。中国側も大局的見地に立って御訪中の前後数か月間上記諸点についての努力を行なわれたい。

２．中国側反応

橋本大使の働きかけた中国側関係者はいずれも日中間の個別問題（尖閣、民間賠償、従軍慰安婦、ＰＫＯ等）が阻害要因として顕在化することはないとの点で一致。（一様に中国側はこれらの問題を報道で大きく取り上げておらず、プレイ・アップしようとしているのは寧ろ日本側プレスである旨指摘。）また、いずれも関係上層部に報告したいとしていた。その他、夫々の発言中興味深い点以下の通り。

（１）徐敦信外交部副部長（４月１６日）

「中国側は天皇陛下御訪中を実現する為に最大限の努力をする。中国側から、問題を提起することは決してしない。双方とも雑音が出ないよう共に努力しよう。もし訪中が中止となれば、中国側は非常に困る。中国の党・政府の幹部は訪中が実現するものと期待しているので、訪中取り止めとなれば、はっきり言って、日中関係は挫折する。重ねて言うが、訪中実現の為中国側のやるべきことは最大限の努力をする。．．．この問題には江沢民総書記を初め推進論者の政治生命がかかっているので、なにとぞよろしくお願いしたい。」

（２）朱良党中央対外連絡部長（４月１７日）

「宮沢総理、渡辺副総理及び橋本大使が、天皇陛下御訪中実現の為に大きな努力をしておられることを評価する。江沢民総書記が訪日した際、自ら天皇陛下を招請したことは、中国人民の日本に対する友好的感情を表すものである。．．．中日双方が努力して良好な雰囲気を作るべきであるとの貴使の考えに同意する。」

（３）温家宝党中央弁公室主任（４月１８日）

「天皇・皇后両陛下の御訪中問題については、中日双方の間で話し合い合意したことである。国交正常化２０周年である本年、両国の最高レベルの往来は、今後の両国の関係を促進するものと考える。両陛下の御訪中の問題に関する中国側の態度については、江沢民総書記が訪日した際にも表明したとおり、不変である。．．．中日双方は、小異を残して大同につく精神に基づき、将来を見つめて共に努力することにより問題を解決できる。．．．日本側において問題の存在が両陛下御訪中の決断の消極的な要因になることも中国側としては目にしたくない。」

（４）張香山日中友好２１世紀委員会中国側座長（４月２２日）

「世界、アジアの情勢からみて、日中は緊密に協力すべきであると思う。今年は天皇陛下御訪中の絶好の時期である。自分は今の天皇陛下は戦争とは関係なく、戦争責任はないと考えている。天皇陛下御訪中が実現すれば、真の意味で日中間で最高要人の往来が実現することになる。」

（５）符浩全人代日中友好小組主席（５月４日）

「天皇陛下の御訪中問題については、日本にも異なる意見があるし、中国の一部にも異なる意見がある。．．．貴使の考えには、自分も基本的に同感であり、この問題につき日中双方が協力すべきであると考える。．．．中国の国内で影響力のある人で公に天皇陛下御訪中に反対するものはいない。反対があったとしてもその影響力は決して大きくはない。」

（了）

極秘
無期限
2部の内
2号

（参考メモ～小和田次官手持ち用）

橋本大使の対中工作（中国側の抑制的対応の具体例）

92.5.13

中国課

橋本在中国大使が、４月末に帰任し、天皇陛下御訪中に向けての対中工作を開始して以来、中国側は各種問題に関し、我が国国内世論を考慮しつつ、極めて抑制された反応を示してきているところ、右具体例、以下の通り。

１．竹下元総理訪中　→　４要人（楊尚昆、江沢民、李鵬、万里）との会見実現。但し、会談では、天皇訪中・ＰＫＯに触れず。主に竹下元総理の関心事項（地球環境）中心の話題。（海部元総理訪中についても同様。）

２．宮沢総理訪仏時の首脳会談で「鄧小平も人権問題の面では、（人権）尊重派ではない」と発言した旨の報道　→　鄧小平について、しかも、機微な人権問題についての発言報道であったにもかかわらず、中国側より反応はこれまでのところ一切見られず。かつての「鄧小平雲の上の人」発言時の中国側反応と比べ、著しく冷静。

３．４月２８日の参院国際平和協力特別委員会での木場健太郎議員（公明）の質問に対する宮沢総理答弁（「江沢民総書記がＰＫＯがどういうものか、どの程度ご存じの上で答えたのか明確でない」）　→　中国側よりの反応は見られず。

４．従軍慰安婦、民間賠償請求等に関するコメントが急速に影をひそめ、行なわ

れなくなった。

５．尖閣諸島周辺海域の中国漁船（しばしば我が国領海に不法入域し、我が方より抗議）が５月初旬以降姿を消している。

６．ＰＫＯ法案についてより慎重な（距離をおいた）発言となっている　→　例えば、４月２３日のＥＳＣＡＰ総会終了後の記者会見における「中国はＰＫＦとしてカンボディアには武装人員は派遣しない」との銭其琛外相発言（派遣目的が後方支援であれば、軍の派遣には成らないと解釈可能）。

（了）

極秘
無期限
部の内
号

天皇陛下御訪中準備スケジュール（案）

92.5.14

（５月）

橋本大使帰国

世論対策

方針決定①

（5月25日~6月1日 万里全人代常務委員長訪日）

（６月）　（6月3日~14日 UNCED開催－李鵬首相出席予定）

（6月21日 国会会期終了-PKO法案成立?）

対中通報（特使?）

方針決定②

（6月30日~7月2日 総理訪米）

（７月）　（7月6日~8日 ミュンヘン・サミット）

（7月7日 蘆溝橋事件記念日）

（7月8日頃 参議院選挙公示）

（7月26日 参議院選挙）

対米・対韓非公式通報

御訪中閣議決定→公表

（８月）

第一次先遣隊派遣

（8月15日　終戦記念日~靖国参拝の動き）

（９月）[redacted]

（9月18日　柳条湖事件記念日）

（9月29日　日中国交正常化20周年記念日）

（１０月）　　（10月1日　中国国慶節）

第二次先遣隊派遣

随員についての閣議決定

予備費についての閣議決定

（10月10日　台湾双十節）

（時期不明　第14回党大会）

天皇・皇后両陛下御訪中

（注）1．ロジ準備のうち一定の時間の必要なもの（例えば特別機のアレンジ）については、極く非公式に開始することをも念頭に置くこととする。

2．首席随員の人選（例えば、福田元総理）。

4. 国会議員の動き、対応

坂本元防衛庁長官と安斎副総理

4/30

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

天皇訪中

秘

電信写

[redacted] [redacted] 08－018

大臣	政務次官	事務次官	外審議官	外審議官	儀典長	官房長
北米大使	経済大使	環境大使	査察審議官	総括審議官	外務報道官	
総合外交政策局長	国際情報局長	研修所長				
警察庁長官	人権人道大使	在外公館警備対策室長	国際テロ緊急展開チーム調整官	史料館長		
外務報道官	参事官	報道課長	国際社会協力部長	内閣外政審議室長		
文化交流部長	審議官	一等書記官	二等書記官			
領事移住部長	参事官	政策企画室長	保健衛生対策室長	旅券課長	外務事務官	
北米局長	審議官	日米安保条約第二課長	日米地位協定室長			
中南米局長	参事官	一等書記官	二等書記官			
欧州局長	審議官	西欧第一課長	西欧第二課長	東欧課長	中東第一課長	中東第二課長
アジア大洋州局長	参事官	一等書記官	二等書記官	一等書記官	二等書記官	
経済局長	次長	総務参事官	経済協力課長	途上国経済協力課長		
	参事官	経済連携課長	国際エネルギー課長	安全保障政策課長		
	参事官	海洋政策室長	審議官	準備室長		
経済協力局長	審議官	政策課長	開発協力企画室長	無償資金協力課長		
	審議官	調査課長	技術協力課長	有償資金協力課長		
条約局長	審議官	条約課長	協定課長	規制改革推進室長		
国際法局長	審議官	政務経済人権課長	国際人権人道課長	軍縮不拡散・科学部長	国際安全保障課長	国際社会協力課長
科学審議官	科学技術政策担当大使	原子力課長				
情報調査局長	参事官	情報通信課長	情報保全室長	調査企画課長	安全保障課長	

総番号　R088480　　主管

平成　4年　4月　30日　[redacted]　中国発　亜中

4月　30日　[redacted]　本省着

外務大臣殿　　橋本大使

サカモト衆院議員のゴ・ガクケンとの会見

第１５８５号　秘　至急　[redacted]

貴電ア中合第７１３７号に関し、

３０日、当地訪問中のサカモト・ミソジ衆院議員とオオシマ・タダモリ衆院議員はゴ・ガクケン副総理と会見したところ、右やりとりの概要以下の通り（当館、サイトウ、イシズカ同席）。

（サカモト議員）官房長官在任中のヒューストン・サミットでは日本はあえてこ立も辞せず、当時テンアンモン事件後、人権問題で批難されていた中国を弁護し、中国の改革開放政策に対する各国の支持を訴えた。これは日本が子子そんそんまでの友好を望んでいる証拠である。１９７１年自分（サカモト議員）が訪中した時、シュウ・オンライ総理が語つた「過去の戦争で中国は人的物的にばく大な損害をこうむつたが、これは日本の軍部と一部政治家のためであつて、日本人民のせいではなく、てん文学的賠償を日本に課すつもりは全くない。」という言ばは一生わすれえず、中国もこのシュウ・オンライ精しんで日中関係をみてもらいたい。そうすれば領海法、ＰＫＯ、民間賠償の問題も道は自然と開ける。

（ゴ副総理）テンアンモン事件後、中国は国際的にく境におちいつたが、海部前総理のヒューストン・サミットでの発言は対中包囲もうの突破口となつた。中国政府は賠償請求権を放棄したが、一部の人民は確かに民間賠償の問題を提起し、全人代の議案としてこれを出したが、全人代はこれを適切にするはずで、中国政府は以前の方針を変えない。

（サカモト議員）てん皇訪中について、日本政府部内で真けんに検討しているところだが、世論調査では国民の６割はこれに賛成、２割が反対、２割がわからないとしている。しかし自民党の一部では、てん皇へい下が中国を訪問した時、中国内部の政治問題にまきこまれれば、この２０年間つみあげてきた日中関係はくずれていまうことを心配している。

秘

電信写

（ゴ副総理）即位のれいの時、自分が訪日した際も、へい下に直接招待を申し上げたし、コウ・タクミン総書記のときもかん迎の意を述べた。中国はてん皇へい下の御訪中を心からかん迎する。中国は言つたことは必ず守るので、心配することはない。この問題は一方的な問題ではなく、日本の方にも問題があるのではないか。

中国４公館に転電した。（了）

衆・参両院外務委員長・小槻書課長

5/13

極秘
無期限
部の内
秘

報告・供覧

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 御法川信 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 5 月 13 日 完結 平成 年 月 日 起案者 電話番号 樽井課長 2423 (高田扱 2428)

回 総務審議官

総務課長　儀典長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下のご訪中（衆参両院外務委員長→中国課長）

（別紙の要点等）

5/13．麻生（衆），大鷹（参）両院外務委員長が，他用で往訪した中国課長に述べた，本件に対するみずからの考え方。（もの。）

GA－7 （昭和63．4．1改正）　外務省　回覧番号

天皇陛下御訪中について（中国課長一衆参外務委員長）

4.5.13
中国課

13日、中国課長は他用にて麻生太郎衆議院外務委員長および大鷹淑子参議院外務委員長を往訪したところ、その際両委員長が天皇陛下の御訪中の問題につき述べたところ次の通り。

1．麻生委員長

今年がチャンスで行かれるべきである。行かれれば必ず歓迎される。但し率直に言って、自民党内には慎重論が多く、困ったものだ。御訪中が明年以降に伸びれば、韓国との順番の関係から極めてややこしい話になるだろう。本年陛下が御訪中になりこれが成功すれば、韓国に対する[redacted]もあろう。

お堀（宮内庁）の中では慎重論を唱える人もあると聞いているが、宮沢総理もこの点を気にしており、自分は内々調べるように頼まれている。（中国課長より上記のような宮内庁の動きは承知していない旨とりあえず述べ置いた）。

2．大鷹委員長

自分は本年が御訪中の好機であると考えており、ぜひ行かれるべきであると考えている。先般の中国における「李香蘭」の成功を見ても、中国側の誠意ある対応が感じられ、両陛下が訪中されれば必ずや成功するものと確信している。

（了）

金丸ル黄菊と海亀（中国側内話）

5/15

限定配布

極秘
無期限
部の内
号

※総第０５０３７６号００１公館宛

平成※ 平成 4 年 5 月 18 日
16 時 31 分 30 秒受付

電信案

電信課長

~~大臣~~ ~~秘書官~~ ~~政務次官~~ 事務次官 3 通訳 外務審議官 ~~外務審議官~~ 官房長 3 通訳	主管 アジア局長 審議官 ○中国課長 2 首席事務官 出張中	※発電係 起案 ○ 平成 4 年 5 月 15 日 起案者 電話番号 泉(檜山) 2426(2427)

協議先

儀典長

（※印欄内は電信課記入）

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 天皇陛下の御訪中（中国側内話）

主管：文書記号	※電番		パターン・コード
アジア局	第１３３９号	大至急 普通 至急（優先処理）	~~036~~

転電 転送 在 転報	※転電番号 大使・総領事あて	大至急 至急 普通 （優先処理）

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（八〇字）

[限定配布]

※

05037694 優先 TYUUGOKU 漢 自暗

GB-1 外務省

回覧番号 776

（昭和六三・六・三十改正）

（三八〇字）

15日の樽井（タルイ）中国課長と王殿参事官（オウチ）の非公式意見交換の席上、中国側より、天皇陛下の御訪中問題に関し、以下の内話があったところ、貴使参考まで。

1、先般、黄菊（コウギク）上海市長が金丸（カナマル）副総裁と会見した際、金丸副総裁~~より~~より、天皇陛下の御訪中問題を話題にとりあげ、以下の通り披露するところがあった。

「先日、自分（金丸副総裁）は、中曽根、竹下、田村と一緒に天皇陛下の御訪中問題について議論を行なった。中曽根はその際、『本年は、日中国交正常化20周年であり、鄧小平も、改革・開放の一層の推進を提唱しており、天皇陛下に御訪中頂いてもよいと考えている』旨述べていた。自分（金丸副総裁）も、『今年行かれるのが、いいと自分も考える』旨述べおいた。竹下は殆んど発言しなかった。田村のみ、若干、慎重な言い方だった。」

2、上記1、は、金丸副総裁の方から、進ん

(三八〇字)

で述べたもので、本件問題に関する自民党内の核心的雰囲気を反映しているものと思う。これまで全般的に陛下の御訪中については、反対・慎重論の声が大きかったが、他方、それをもって自民党内の大多数が、陛下の訪中に反対・慎重論をとなえているとはいえないということがわかった。

(以上に対し、当方より、「反対論は当初よりかなり少数であるが、慎重論が多いとの状況であり、現在まさに、かかる状況を変えるべく努力しているところである。情勢は決して予断を許さず、今が非常に機微な時機であることは中国側においても深く理解願いたい」旨述べおいた。)

(了)

谷野内玄一山梨ドリル解放委員長

福田元総理
中曽根元総理
の感激

5/24・5/25

極秘
無期限
8 部の内
1 号

報告・供覧

極秘第 36 号

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 8-2 正印 外務審議官 8-3 外務審議官 官房長 8-4 正印	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 5 月 25 日 完結 平成 年 月 日 起案者 泉 電話番号 2426

回覧先

総括審議官 8-5

総務課長 8-6 正印

儀典長 8-7

儀典官 8-8

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下御訪中問題 (NHK, 福田元総理、中曽根元総理)

(別紙の要点等)

26日, 谷野局長よりNHK小浜論説委員に協力方申入れ。

25日, 小浜氏より谷野局長に対し、福田元総理の感触(不定少)を伝達。

同じく, 25日, 福田経セイ会より, 中曽根元総理の感触を伝達

天皇陛下御訪中問題

92.5.25
中国課

Ⅰ．谷野アジア局長 ― 小浜ＮＨＫ解説委員長

２４日、ＮＨＫ小浜維人解説委員長に対し、谷野アジア局長より、本件に関する外務省の考え方及び国内状況、特に自民党の状況を説明の上、ＮＨＫにおいても是非本件の積極的意義を認識し、実現の方向で風を起こして貰えまいかと要請しおいた。

これに対し、小浜編集委員長は、自分も概ねアジア局長の考え方を共有する旨述べた。

Ⅱ．福田元総理の反応（小浜解説委員長 ― 谷野アジア局長）

２５日、小浜解説委員長より、谷野アジア局長に対し、以下の電話連絡があった。

１．２５日午前、福田元総理に会う機会があったので、陛下の御訪中の意義を自分なりに説明し、福田元総理の考え方を聴取したところ、次のような反応があった。

（１）福田元総理は、①「陛下の御訪中を強行すれば、国論が沸騰するのは明らかで、そのような中での御訪中は良くない」、②（「自民党の一部の反対というが理由は何か」と照会したのに対し）「そこが実は良くわからない。いずれにせ

よ理屈を超えた感情論である」、③「党内には、２０周年という記念すべき年だからこそ、この年に訪中することが却って政治的意味をもつと主張する向きもある」旨述べ、④「いずれにせよ触らぬ神に祟りなしだ」と述べた。

（2）従って、本件については、ＮＨＫもそのように対応したら良いというのが福田元総理の意見であった。」

2．小浜解説委員長より、福田元総理に対し、重ねて「竹下元総理は積極論者と承知している」旨述べたところ、福田元総理はニヤリと笑って「そうかい」とのみ述べ、極めてそれを否定するかのような口ぶりであった。

Ⅲ．中曽根元総理の反応（福田駐マレイシア大使 ― 谷野アジア局長）

２５日、福田駐マレイシア大使より、谷野アジア局長に対し、中曽根元総理に会い、本件を話題にした際の反応につき、以下の通り連絡越した。

中曽根元総理は、①「本件は全て総理が何時までもグズグズして決めないところに問題がある」、②「そのような状況下、先般、竹下、渡辺（大臣）に会った際、『総理がこんな中、火中の栗を拾うのは止めておくように』と強く、特に渡辺（大臣）に言っておいた経緯がある」、③（ニヤニヤ笑いながら）「外務省も最近言って来ないから、諦めたのかな」と述べていた。

（了）

佐藤田正晴議員山谷野局長

6/6

4－1：次官

－2：官房長

－3：橋本大使

極秘
無期限
4部の内
4号

報告・供覧

極秘第40号

大臣 秘書官 ~~政務次官~~ ○事務次官 ○~~外務審議官~~ ~~外務審議官~~ ○官房長	主管 ①アジア局長 審議官 地域課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4年 6月 5日 完結 平成 年 月 日 起案者 電話番号 磯俣 2425

(回覧先については局長より指示のあったところのみ)

回覧先

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下の御訪中問題
(後藤田正晴議員より谷野アジア局長へ)

(別紙の要点等)

1

GA－7 (昭和63. 4. 1改正)　外務省

回覧番号

５日午前、谷野アジア局長が他用にて後藤田正晴議員を往訪した際、天皇陛下御訪中問題につき、同議員より以下の旨述べるところがあった。

１．本件については、皆逃げ腰であって責任を負わないのが問題だ。野党もおっかなびっくりの体たらくである。本件は、ひとえに総理の決断にかかっている。１月に渡辺副総理が訪中したとき、「真剣に検討する」とのラインで踏み込んだ判断を示した。江沢民総書記が訪日した時もこのラインを繰り返した。その意味は重大である。ここまで来た以上、やめたら日中関係に極めて大きな悪影響を及ぼすこととなろう。ここでやめるのは、最早ソロバンが合わない。

２．自分は、中曽根にも、かつて同氏が最高顧問会議で反対したのはおかしいと言った。そもそも、陛下の韓国・中国御訪問の問題は、中曽根内閣の時にこれを推進していたものである。中曽根は、宗旨変えでも何でもないと言い、ただ宮沢総理は根回しが全くダメであると言っていた。

３．自分は、宏池会事務局長の林義郎にも、行くべきであると言っており、ただタイミングは考えなければならないと言っている。今年は日中国交正常化２０周年ということで話を進めているわけであり、時間には限りがある。タイミングについては、自分は万里訪日の時に伝えるのは無理かと思っていたので、楊振亜駐日中国大使と会食した機会にも、万里訪日の時には陛下御訪中の問題には触れないでくれと述べたことがある。本件は参議院選挙までは決まらないであろう。

４．本件が実現することになれば国内治安が混乱すると言っている者がいるようだが、自分は、治安情勢が取り止めの理由に使われるのには気をつけなければいけないと思っている。ただ、右翼等の動きはあるにしても、国内治安を理由に訪中取り止めというのは、多勢を占める意見にはならないであろう。本件は、向こうから来るというのではなく、こちらから行くという話であり、国内治安の混乱というのは説得的ではない。ただ、[redacted]の[redacted]（行動右翼）が動いているようなので、これには気をつけなければいけないと思っている。

（了）

藤尾議員に提出した資料

6/18 作成

平

決　裁　書

大　臣 秘書官 ~~政務次官~~ ○事務次官 ~~外務審議官~~ ~~外務審議官~~ 官房長	主管 アジア局長 審議官 参事官 中国課長 ~~地域調整官~~ 首席事務官	保存期間 1類・2類・3類・4類 （永久）（10年）（5年）（1年） 起案　平成 4 年 6 月 18 日 決裁　平成　年　月　日 起案者　泉　電話番号 2426

協議先

総括審議官

総務課長

儀典長

儀典官

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件　名

天皇陛下御訪中をめぐる最近の日中間のやりとり

（藤尾正行議員の資料要求）

GA－1（昭和63. 4. 1改正）　外務省　回覧番号

18日、藤尾議員より、次官秘書官に対し、本件を巡る最近の日中間のやりとりについての資料を頂いた上で、小和田次官と話したい旨の申し入れ、本日朝は、藤尾議員に手交することを前提に作成したもの。

天皇陛下御訪中をめぐる最近の日中間のやりとり

９２．６．１８

宮澤内閣成立以来の標記やりとりをとりまとめれば以下の通り。

１．（９１．１１．１３）ソウルで開催された第３回ＡＰＥＣ閣僚会議に際しての日中外相会談の席上、**銭其琛外相**より「天皇陛下の御訪中につき新内閣でも検討を願いたい」旨言及。

これに対し、**渡辺大臣**より、「天皇陛下の御訪中については検討中である」旨応答。

２．（９１．１２．３）訪日中の**田紀雲副総理**より、宮澤総理に対し、「天皇・皇后両陛下が明年の日中国交正常化２０周年に訪中されることを期待する」旨、また、「右が実現されれば、必ずや中国政府・人民の熱烈な歓迎を受けることとなろう。この点宮澤総理におかれても訪中の実現を促進願いたい」旨発言があった。

これに対し、**宮澤総理**より「かかるねんごろな招待を心より感謝する」旨述べ、「本件については、色々な事情を踏まえ、よく検討したい」旨発言した。

３．（９２．１．５）訪中した渡辺大臣に対し、**銭其琛外相**より、「国交

正常化２０周年の本年秋に両陛下の中国御訪問を歓迎する」旨丁重な招請があった。

これに対し、**渡辺大臣**より、中国側の累次に亘る招請を多としつつこれを踏まえ「更に政府部内で真剣に検討していく所存である」旨回答した。

４．（９２．４．６）訪日中の**江沢民中国共産党総書記**より、宮澤総理に対し、天皇陛下の御訪中に関し、改めて本年の訪中招請があり、「中国政府・国民として心から歓迎する」旨述べた。

これに対し、**宮澤総理**より、「引続き真剣に検討する」旨応答。

藤尾正行議員より和田事務次官

6/19

スピー

木庭事務官8-1　2ピー
斉藤外務8-2
後藤氏8-3
宮崎氏8-4(正)

アジア局長 8-5
審議官 8-6
参事官 8-7
中国課長
首席事務官

8/8

秘
無期限

小和田事務次官に対する藤尾議員よりの電話
(陛下の御訪中問題)

平成4年6月19日
中国課(木庭)

6月19日朝、藤尾正行議員より小和田次官に電話があったところ、その やりとりの概要次の通り。

1. 藤尾議員より次の三点を述べた。

(1) ~~陛下の御訪中について~~ 外務省は、今年が国交正常化二十周年であり、更に日中関係を発展させるために陛下の御訪中が重要と考えているようであるが、日中関係強化拡大のために陛下を利用することは憲法にも反し、許し難い。

(2) 次官の立場は知らないが、本件について外務省事務当局が突出して進めようとしているのは許し難い。

(3) 陛下の御訪中について経緯を示す資料を求めたら、キでハナをくくるような二枚紙が届いた。これは自分(藤尾)をゴジョウするものである。

(4) なお、このことは重大と考え、昨日福田元総理とも話したが、今、政府がやろうとしていることはとんでもないことだということで意見が一致した。

2. 小和田次官より次の通り述べた。

(1) お届けした文書については、担当課に一任してあるので藤尾議員が要請されたものと違っているのであれば誤解があったということであり、

もう一度御相談させてお届けすることとしたい。

(2) この機会に誤解があると思うので申しあげておきたい。陛下を政治的に利用する云々については、藤尾議員は外務省の考え方を正しく

理解しておられない。我々は、今後の東アジアの安定を考えていく場合、中国がこれを妨げることがないようにする必要がある。

国交正常化以降、我々は中国との良い関係を維持してきた。自分(次官)は福田外務大臣の秘書官として、日中国交正常化を

あまりに無原則、せっかちに、とにかく正常化に突走ることには慎重でなければならないということで福田大臣のお手伝いをした。

御承知の通り、福田内閣当時自分(次官)は総理の秘書官であったが、日中平和友好条約は我々の原則が貫かれる形でやるべきであると考え、

そのような形で結着をみた。このことからしても、自分(次官)が陛下を政治的に利用して日中関係拡大をはかる考えなど毛頭ない。

父々が言っているのは、日中国交正常化後二十年が経ち、節目であるので、そこでこれからの新らしい日中関係の転換にあたって陛下が中国を親善訪問されるということは、陛下が東南アジア、ヨーロッパ、アメリカを親善訪問されるのと基本的に同じ性格のものである。国民が祝福して訪中して頂くことは良いことと考える。

(3) 外務省の事務当局が突出してキャンペーンをやっているというのはとんでもない話である。外務大臣はもとより、総理をはじめ関係方面と充分協議連絡して進めているので誤解のないようにお願いしたい。

(4) 最後に念のために申し上げるが、自分(次官)は本件について福田元総理と二-三回おめにかかっており、意見の疎通はしっかりやっている。

(3)

自民党総務会（6/19）の模様

4-1 大臣秘書官
-2 斉藤外審
-3 儀典長
-4 アジア局長
-5 橋本大使

秘
無期限

報告・供覧

大臣	主管	保存期間
秘書官 スミ	アジア局長 コピー スミ	1類 2類 3類 4類
政務次官 スミ	審議官 スミ	(永久) (10年) (5年) (1年)
事務次官 スミ	中国課長	起案 平成 4 年 6 月 19 日
外務審議官 コピー スミ	首席事務官	完結 平成 年 月 日
~~外務審議官~~		起案者 泉 電話番号 2426
官房長 スミ		

回覧先

総括審議官 スミ

儀典長 コピー スミ

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下御訪中（6月19日の党総務会の模様）

（別紙の要点等）

19日、橋本中国課長が自民党関係者より同日の総務会の模様につき聴取した内容。

GA－7 （昭和63. 4. 1改正） 外務省

回覧番号

（報告メモ）

天皇陛下御訪中（党総務会の模様）

92.6.19

亜　中

１９日、樽井中国課長が戸塚自民党調査役より、同日の自民党総務会における天皇陛下御訪中問題についてのやりとりに関し聴取したところ、要点以下の通り。

１．藤尾議員は、「前から言ってあるのに、総理はあのようなことを言った」として、長々と反対論を述べていた。中尾議員は、更に強い調子で反対論を展開。浜田（幸）議員は、昔話をしつつ、「はっきり、絶対に反対だと言っておく」との対応。板垣（征）議員は、「早く（行かないということで）結論をつけるべし」と述べていた。佐藤（孝）総務会長は、「良くわかった。ご意見は来週早々総理に申し入れ、４役で処理したい」旨述べ、会合を終えた。なお、会合は、反対論一色であり、賛成論など出よう雰囲気ではなかった。後藤田議員も出席していたが、発言はなかった。

２．来週月曜日の[redacted]スケジュールは、8:30に経済４団体と[redacted]朝食会、10:30より党４役[redacted]会合、12:00に政府・与党連絡会、15:00に記者会見となっている。なお、火曜日に予算の関係で総務会が開催される可能性があり、その場で、佐藤会長より報告がある可能性がある。

（了）

三塚元大臣ル公時局委

6/18

極秘
無期限
6 部の内 6 号

極秘第 42 号

報告・供覧

大臣	主管	保存期間
秘書官 6-1	○アジア局長	1類 2類 3類 4類
~~政務次官~~	6-審議官	(永久) (10年) (5年) (1年)
事務次官 御護明済.	~~参事官~~	起案 平成 4 年 6 月 18 日
~~外務審議官~~	中国課長	完結 平成 年 月 日
~~外務審議官~~	~~地域調整官~~	起案者 電話番号
官房長 6-2	首席事務官	泉 2426

回覧先
総括審議官 6-3

儀典長 6-5

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下ご訪中（三塚元大臣→谷野アジア局長）

（別紙の要点等）

18日の自民党清和会総会における藤尾議員の発言につき連絡あり。（三塚元大臣としても陛下の訪中は無理との判断。）

天皇陛下ご訪中（三塚元大臣 → 谷野アジア局長）

92.6.18

亜　中

１８日、三塚元大臣より谷野アジア局長に対し、１８日に行われた自民党清和会総会の模様につき電話連絡越したところ、要点以下の通り。

１．１８日の清和会総会で、藤尾正行議員が天皇陛下のご訪中問題で大演説を行った。その内容は、「国交正常化２０周年での陛下のご訪中は、陛下の政治利用に他ならず、最早看過できない。紛れもない憲法違反である。また、訪中されれば、必ず問題が出てこよう。本件に関する自分の気持ちは総務会で伝えており、ほぼ了承されたと考えているが、昨日の宮沢総理の発言は政府与党内の根回しも行っておらず、このようなことが唐突にプレスに出るのは手続的にも問題である。自分は身を挺しても本件は必ず潰す。」というものであった。これに対し、若手（衛藤議員ら）が呼応していた。

２．本件は谷野局長からの依頼もあって党内の働き掛けを行ってきたが、難しい。自分（三塚）は訪中はもうダメだと思う。まず総理が訪中し、過去の問題をきれいにし、その後で陛下が訪中されるのが良いのではないか。それにしても、総理はＰＫＯ協力法が成立して、舞い上がっていて、良くない。

（以上に対し、谷野局長より、傍らに外部の人がいたこともあり、「ご連絡を多とする」とのみ述べおいた。）

（了）

自九月 外交部会用作成 手持ち資料 一部修正

（天皇陛下御訪中関連想定問答集）

取扱注意

天皇陛下の御訪中（想定問答）

4.6.19

中国課

１．指摘すべきポイント

（１）天皇訪中は日中関係の長期に亘る安定的発展の重要な基礎となること。

（日中関係は趨勢的に質的変化を遂げつつある。すなわち、より冷静かつ客観的に相手を認め合う関係に発展しつつある。これを端的に示したのが、我が国の国際社会における政治的役割を初めて公けに認め、支持を表明した先般の江沢民発言であり、また、ＰＫＯ法案の採択時に於ける中国の極めて抑制された反応である。我が国は、この機を捉えて、更に日中関係の安定的発展のために一層努力すべし。）

（２）我が国の国際社会における将来のあり方にとって極めて重要。

（アジアの大国たる中国との安定的な関係の維持・発展なしに、我が国の国際的発言権を更に拡大し、積極的役割を担うことは困難。）

（３）陛下御訪中は日中の悠久の歴史の中で大局的観点から位置づけるべきもので、「お言葉」といった問題に拘泥して矮小化してはならないこと。

（４）中国は真摯な態度で招請していること。

中国側は以下の３点を確約。

①　陛下の御訪中を必ず成功させること。

②　御訪中は両国の友好親善を促進するためのもの。

③　日本側を困らせることは決してしないこと。

（５）国交正常化２０周年は日中関係の大きな歴史的節目であり、御訪中の好機であること。

（６）中国側は御訪中のための環境作りに最大限努力していること。

（例えば、ＰＫＯ法案に対する反応、その他慰安婦、民間賠償といった問題についても抑制された態度を維持。）

２．想定問答

（１）政府の立場如何？

天皇・皇后両陛下の御訪中については中国側より累次にわたる丁重な招請があり、政府としては右を踏まえ現在真剣に検討しているところ。

日中両国の国民の祝福を得て、天皇・皇后両陛下が中国を御訪問されることは、日中両国及び国民の一層の友好関係の発展にとり、意義深いことと考える。

（２）中国側との間で陛下の御訪中時期等につき何らかの密約があるのではないか？

中国側に対しては、招請のある度に、真剣に検討する旨応答しており、密約などはない（別添資料参照）。

（３）国交正常化２０周年に陛下に御訪中いただくというのは明らかに天皇陛下の政治利用であり、憲法違反ではないか？

政府として天皇陛下を政治利用する積りは全くなく、また陛下の親善を目的とされたご外遊が憲法違反に当たることはありえない。

むしろ、本件ご訪問によって、中国国民は、新たな開かれた皇室の姿を強く認識するものと信ずる。

（４）陛下の「お言葉」をどうするのか？

現段階において「お言葉」等の具体的問題について云々するのは時期尚早と考える。何れにせよ陛下の御訪中は、日中両国間の長期にわたる安定的発展を主眼とした大局的観点から捉えられるべきもの。

（５）陛下に過去の戦争について謝罪の旅をさせることには反対である。

謝罪の旅をしていただく積りは全くない。中国側も、国を挙げて大歓迎するとしており、謝罪の旅を求めている訳ではない。先般来日した江沢民総書記は、①陛下の御訪中を必ず成功させること、②本件御訪中は両国民の友好親善を目的とするものであること、③日本側を困らせることは決してしないこと、の３点を明確に約束している。

（６）中国はミサイル拡散や人権で問題を有する国である。そのような国に陛下は行かれるべきではないと考えるがどうか？

中国は我が国と歴史的にも文化的にも強いつながりを有する隣国であり、又、御指摘の点についても、最近ＮＰＴ加入、ＭＴＣＲ遵守表明に加え、人権についても少しずつではあるが対話に応じる姿勢を示してきている。我が国としては、かかる中国の努力にたいしては相応の評価をすべきものと考える。

（7）我が国固有の領土である尖閣諸島に対する領有権を主張してゆずらない国に陛下が行かれることは好ましくないと考えるが、どうか？

尖閣諸島の領有権について、我が国と中国の立場は異なるが、尖閣諸島は現に我が国が実効支配を行っている。中国側も先の「領海法」制定により新たな措置を採ろうとしているものではない旨繰り返し言明しているところであり、本件をもってして陛下の御訪中問題と関連させて論ずるのは不適当と考える。

（8）中国の共産主義もいずれソ連のように崩壊する日が来るので、その時まで陛下の御訪中は待っても遅くはないのではないか？

日中両国は７２年の共同声明で「社会制度の相違」を乗り越えて平和友好関係を発展させることを誓っている。従って、中国がいわゆる社会主義国であるということ自体をもって陛下の御訪中を云々することは適当とは考えない。

なお、中国は、現在改革・開放政策を急ピッチで進めており、経済的にはすでに混合経済体制となっている。また政治改革も推進するとの方針を明らかにしており、このような中国を伝統的イデオロギーの枠組みの中で捉えることは、もはや非現実的である。

（9）中国はかつて口をきわめて我が国の皇室を罵った国であり、そのような国にいくべきではないと考えるがどうか？

国交正常化以前のことである。現在の中国は皇室に対し十分の敬意を払っている。

（１０）大喪の礼の際に各国は元首級を送ってきたにも拘らず、中国は銭其琛外相が来ただけであった。また、即位の礼の際も、中国は呉学謙副総理が来ただけであった。そのような礼を欠いた国には陛下は御訪中される必要はないと考えるがどうか？

政府として、銭外相が楊尚昆国家主席の名代として大喪の礼に出席されたこと、又、呉学謙副総理が即位の礼に出席されたことをもって、中国が我が国に対し、礼を失していたとは考えていない。

（１１）先般の宮沢総理発言は従来のラインより一歩踏み出したものか？

総理は、両国国民の祝福を受けて陛下が御訪中されることは意義深いとの考え方を繰返し明らかにしておられたところ、今次ご発言もこの趣旨に沿ったものと理解。

（１２）韓国ご訪問が先ではないか？

陛下に韓国を御訪問していただくことは意義深いことと考えるが、本年は大統領選挙の年でもあり、困難。

（１３）欧米各国から批判が出るのではないか？

これまでそのような批判を受けたことはなく、政府として特に懸念していない。

（了）

(原案)

天皇陛下御訪中関連想定問答集

92.4.27
中国課

問１．中国は現在、改革派と保守派の激しい権力闘争が真っ最中である。今回、改革派による天皇招請が実現すれば、それは必然、対立する一方の側に与することになり、御訪中が中国の内政問題に関与することになるのは明白であると考えるが、如何。

問２．中国側は、あくまで「過去」を出発点に日中関係を構築しようとする意図が明確であり、今回、陛下に日本側の「謝罪」のお言葉を求める言動が見られる。このような中国側の姿勢に、日本国民は逆に中国人への反感・憎悪を増幅させる結果となることは必須と考えるが、如何。

問３．中国は３月２０日より開会した全国人民代表大会（全人代＝国会）において、李鵬首相の「中日関係は既に正常化された」との政治活動報告を否定削除した。これは、中国人民が日中関係は未だ正常化されていないと判断している証左ではないのか。

問４．江沢民総書記来日の直前に中国側から出された、尖閣諸島領有については一時棚上げとなり、民間賠償問題は日本側から不問に付すなど、日中間の懸案の課題解決がいずれも回避されている。目前に山積している問題の解決の糸口も見出せず、却って日中間の認識の差が鮮明になっている状況下、天皇陛下の御訪中は時期尚早ではないか。

問５．政府、与野党関係者が幾度も、自衛隊のＰＫＯ参加に関する中国側の理解を取り付けようとしたが、江沢民総書記は「敏感な問題だ、慎重に対処して欲しい」と強い懸念を表明するばかりであり、また同時に災害救助への自衛隊派遣さえも明確に否定した。このような国への陛下の御訪中は時期尚早である。

問６．江沢民総書記は、４月８日の記念講演で「我々は覇権主義に直面している」と、我が国にとっては最も重要な同盟関係である米国を覇権主義国であると非難した。日中間のこのような認識の差は、陛下のご訪問に適した条件が整っていないことを示しているのではないか。

問７．中国は、世界の西側諸国が懸念している中国の人権問題については「内政干渉」と退け、軍備管理や武器輸出については「中小国も正当な権利が与えられることが重要だ」と正当化し、これらの問題に改善の方向を示していない。このような国への陛下のご訪問は時期尚早である。

問８．天皇陛下の御訪中をあえて積極的に実現しようとする外務省幹部のなかには、天皇陛下によって、過去の日中の歴史的なわだかまりを精算して頂きたいとする無責任な意向がうかがえる。これは、明らかな政府による天皇の政治利用ではないのか。

問９．日中は未だ友好関係を打ち立てているとは言えない。そのような国への陛下のご訪問はどう考えても時期尚早ではないか。

天皇陛下御訪中をめぐる最近の日中間のやりとり

９２．６．１８

宮澤内閣成立以来の標記やりとりをとりまとめれば以下の通り。

１．（９１．１１．１３）ソウルで開催された第３回ＡＰＥＣ閣僚会議に際しての日中外相会談の席上、**銭其琛外相**より「天皇陛下の御訪中につき新内閣でも検討を願いたい」旨言及。

これに対し、**渡辺大臣**より、「天皇陛下の御訪中については検討中である」旨応答。

２．（９１．１２．３）訪日中の**田紀雲副総理**より、宮澤総理に対し、「天皇・皇后両陛下が明年の日中国交正常化２０周年に訪中されることを期待する」旨、また、「右が実現されれば、必ずや中国政府・人民の熱烈な歓迎を受けることとなろう。この点宮澤総理におかれても訪中の実現を促進願いたい」旨発言があった。

これに対し、**宮澤総理**より「かかるねんごろな招待を心より感謝する」旨述べ、「本件については、色々な事情を踏まえ、よく検討したい」旨発言した。

３．（９２．１．５）訪中した渡辺大臣に対し、**銭其琛外相**より、「国交

正常化２０周年の本年秋に両陛下の中国御訪問を歓迎する」旨丁重な招請があった。

これに対し、**渡辺大臣**より、中国側の累次に亘る招請を多としつつこれを踏まえ「更に政府部内で真剣に検討していく所存である」旨回答した。

４．（９２．４．６）訪日中の**江沢民中国共産党総書記**より、宮澤総理に対し、天皇陛下の御訪中に関し、改めて本年の訪中招請があり、「中国政府・国民として心から歓迎する」旨述べた。

これに対し、**宮澤総理**より、「引続き真剣に検討する」旨応答。

自民党若手議員の宮本総理への質問状 6/19

取扱注意

報告・供覧

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 ~~外務審議官~~ 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 6 月 19 日 完結 平成 年 月 日 起案者 電話番号 泉 2426

回覧先

総括審議官

総務課長

儀典長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下ご訪中（自民党若手議員の宮澤総理への質問状）

（別紙の要点等）

6月19日、衛藤晟一議員ら7名（別紙）の自民党若手議員が官邸に宮澤総理を往訪し、手交した質問状。

自民党若手議員の宮沢総理への申し入れ
（天皇陛下の御訪中問題）

平成4年6月19日
中国課（不破）

1. 6月19日、12:50より約30分間、衛藤晟一議員ら7名の自民党若手議員が宮沢総理を往訪し、

天皇陛下の御訪中に反対であるとの申し入れを行った。具体的には別紙1.の宮沢総理に対する

質問に沿って総理の考え方を質した模様（衛藤議員等は、以前にも別紙2.の消極論を唱えていた）。

官邸詰めNHK記者等によれば、宮沢総理はこれに対し、1.「いろいろな考え方をよく聞いてからやりたい」と

述べた由。

2. 参加議員は次の通り。

衛藤晟一（三塚派）　今津寛（河本派）　長勢甚遠（三塚派）
宮路和明（三塚派）　鴻池祥肇（河本派）
松岡利勝（三塚派）　坂井隆憲（三塚派）

別紙1

天皇陛下御訪中発言について宮沢総理へ質問

昨日（１７日）、総理は天皇陛下の中国御訪問に積極的な姿勢を表明し、あくまで今秋に実現させる方向で検討を進めていることを強調された。ここにその発言に対して、宮沢総理に以下の質問を提出する。

（１）総理は、国民世論や自民党内の強い慎重論を背景に、今回の御訪中につき、
①政治的に利用されてはならないこと。
②国民の合意が必要なこと。
以上が御訪中実現の条件であることを、たびたび表明されている。しかし、今回総理は、この２つの条件がどれほど整ったと判断されているのか。

（２）今回総理は、御訪中問題で「冷却期間を置いてきた」と発言されたが、この間、慎重論の理由にある中国の人権問題、武器輸出問題、尖閣諸島領有問題等は、一歩でも改善の兆しを見せているとお考えなのか。

（３）今回自民、公明、民社三党の合意で成立したＰＫＯ協力法案の採決に際し、中国国営新華社通信及び北京放送は、「憲法の精神に反した戦後初めての“海外派兵”法案だ」と強い懸念を表明した。国連常任理事国である中国が、国連決議によりＰＫＯ派遣に日本の参加のみを拒否するのは筋違いであろう。

（４）天安門事件三周年の前日６月３日、天安門広場で取材をしていた日本人を含む欧米の報道陣が中国側の警察に暴行をうけ一時公安当局に連行された。また民主化を要求する一部の市民が連行される事態も生じている。これらの事件をどのように判断されるのか。

（５）この度政府は「中国の度重なる要請」と「日中国交正常化２０周年という時期」を理由に、御訪中を計画したと言われるが、大方の国民世論が慎重論で占められている現在、なお、あえて、御訪中が必要とされている、日本側の理由、中国側の理由、並びに御訪中の意義を、総理はあらためて国民に分かり易く説明を行っていただきたい。

(別紙2)

政府による天皇陛下のご訪問中計画に関する問題点

天皇陛下の中国ご訪問は、両国間に成熟した信頼関係が樹立されたことをもって実現すべきである。しかし、今回の江沢民中国共産党総書記の来日を始めとして、ご訪中はますます問題の多いことが明らかになったといえる。

1、中国は現在、改革派と保守派の激しい権力闘争が真っ最中である。今回、改革派による天皇招請が実現すれば、それは必然、対立する一方の側に与することになり、御訪中が中国の内政問題に関与することになるのは明白である。

2、中国側は、あくまで「過去」を出発点に日中関係を構築しようとする意図が明確であり、今回、陛下に日本側の「謝罪」のお言葉を求める言動が見られる。このような中国側の姿勢に、日本国民は逆に中国人への反感・憎悪を増幅させる結果となることは必須である。

3、中国は3月20日より開会した全国人民代表大会（全人代＝国会）において、李鵬首相の「中日関係はすでに正常化された」との政治活動報告を否定削除した。これは、中国人民が日中関係は未だ正常化されていないと判断している証左であろう。（政治報告は4月3日公表）

4、江総書記の来日において、目前に山積している問題の解決の糸口も見いだせず、かえって日中双方の認識の差が鮮明になるばかりであり、ご訪中実現には、両国間の真剣な討議と合意が必要であることが痛感させられた。たとえば一、

▼尖閣諸島や戦争賠償問題

総書記来日の直前に中国側から出された、尖閣諸島領有については一時棚上げとなり、民間賠償問題は日本側から不問に付すなど、懸案の課題解決がいずれも回避されている。

▼自衛隊のＰＫＯ参加問題

政府、与野党関係者が幾度も、自衛隊のＰＫＯ参加に関する中国側の理解を取り付けようとしたが、江総書記は「敏感な問題だ、慎重に対処してほしい」と強い懸念を表明するばかりであり、また同時に災害救助への自衛隊派遣さえも明確に否定した（4月8日記者会見にて）。

▼対米認識の差

江総書記は、４月８日の記念講演で「われわれは覇権主義に直面している」と、わが国にとっては最も重要な同盟関係である米国を覇権主義国であると非難した。

5、江総書記は来日に際し、世界の西側諸国が懸念している中国の人権問題については「内政干渉」と退け、軍備管理や武器輸出については「中小国も正当な権利が与えられることが重要だ」と正当化し、この問題に改善の方向性を示さなかった。

【参考】1992年度の中国の国家予算は約5000億円の赤字財政を組ながら、軍事費は8900億円と前年度より12%も増額されている。

6、日中の政治問題が未だ山積しているこの時期、あえて御訪中を積極的に実現しようとする外務省幹部のなかには、天皇陛下によって、過去の日中の歴史的なわだかまりを清算していただきたいとする無責任な意向がうかがえる。これは、明らかな政府による天皇の政治利用である。

【参考】御訪中に関する外務省幹部の発言

「この機を逸すれば、過去の歴史に一定の区切りをつける時期がまた遠のく」（日本経済新聞、4月9日）

「両国はまだ本当の信頼関係を築いたとは言えない。双方に過去へのわだかまりがあるためで、陛下の訪中で区切りをつけ、新しい日中関係をスタートできれば」（朝日新聞、4月9日）

7、今回の江総書記の来日の成果について、マスコミは一応に友好関係の樹立には時期尚早という見解を示している。

【参考】読売新聞「日中『成熟』関係には時間」
朝日新聞「課題残った江総書記訪日」
日経新聞「日中の思惑にズレ一友好一辺倒に転機」
産経新聞「認識の差が鮮明に」

8、今回宮沢総理は、以上のような国民感情を背景にされてか、御訪中は、
①政治利用されてはならないこと、
②国民の総意が必要なこと、
を事実上の課題として上げられた(4月13日の記者会見)。そうであるならば、どう考えても今秋における天皇陛下の御訪中は、時期尚早と断ぜざるを得ない。

5. 竹下元総理中国訪問

以下、お手元の次官会議（4/27、4/28）

決定

谷野局長よりの連絡　14:05

樺井課長より次の点を次官に伝えて欲しい。

竹下訪中について

竹内総理秘書官と相談し、総理にもあげた結果次の通り（総理の意向）。

① この向 外務省に対して タイムスケジュールを作成せよとの指示を出していることを竹下元総理にも伝えよ。

陛下の御訪中について

② 今回の竹下元総理の訪中で何かお願いすることはしない。　官邸より

③ もし、竹下元総理の判断で陛下御訪中の環境造りに役立つことをされるというのであれば 竹下元総理の判断に委ねる。

4/27　　[極秘・未23号]

（次官室での会議で配布）

配布先：

- 1号 ―
- 2号 ―
- 3号 ―
- 4号 ―
- 5号 ―

} シュレッダー処理済

- 6号 ― 予算課長
- 7号 ― ~~予算課長~~ シュレッダー処理済

未決民（課内配り）

極秘
無期限
1部の内
2号

（記録用メモ）

天皇陛下御訪中（２８日、次官室会議）

92.4.28
中国課

２８日午前、竹下元総理の訪中を控え、事務次官室にて標記に関する会議が開かれたところ、右模様以下の通り（樽井課長のデ・ブリーフ）。

１．竹下元総理訪中に関する中国課作成発言要領（案）を踏まえ、斉藤外審より、「総理が決断する前に、外務省があまり走り過ぎるとの印象を与えないようにすべき」旨指摘。会議の全体的雰囲気としては、今回の訪中で竹下元総理に本件で荷を負わせるのはどうかというものであった。（竹下元総理は、昨２７日、松永元大使と話した趣きであり、その際竹下元総理は「今回はあっさりと訪中してきたい」とさかんに言っていた由。）

２．次官より、「竹下元総理への発言要領はもっとマイルドなラインを上げるべし。中国側に対し、最初から値切るようなラインよりはその方がよい」旨指摘。次官によれば、最近、宮沢総理は、金丸副総裁に「はっきり決断せよ」とネジを巻かれた節があるとのこと。いずれにせよ竹下元総理は訪中賛成論者であり、党内の空気を見つつ対応しているのであろうとの見方。

（了）

(中一稿)

極秘
無期限
部の内
号

original

竹下元総理の江総書記との会談における発言要領

（天皇・皇后両陛下の御訪中）

平成４年４月２７日

外務省中国課

１．天皇・皇后両陛下の御訪中は日中両国の友好親善関係の促進のために極めて大きな意義を有する。自分は本件に対する中国政府の熱意を正しく理解している積りであり、是非とも御訪中実現に向けて努力したい所存である。

２．他方、既に御承知と思うが、誠に遺憾ながら我が国の一部に御訪中に対する慎重論が見られることも事実である。このような慎重論は、尖閣諸島問題、我が国のＰＫＯ法案問題、民間賠償問題などによって不幸にも増幅される傾向にあり、我が方としてはその対策に苦慮しているのが現状である。

３．自分としては、両陛下の御訪中が政治的に利用されることがあってはならず、また日中両国の国民に祝福を受ける形で行なわれることが是非とも必要であると考えている。仮りに、そのような前提条件が満たされないのであれば、御訪中はかえって日中双方にとって不利益をもたらす惧れすらあろう。そこで、既に橋本大使より貴方に十分説明済みであると承知しているが、改めて自分からも強調しておきたい点は、両陛下の御訪中の前後の時期が極めて重要であり、この間に間違っても日中間で波風が立ってはならないという事である。勿論このためには日中双方の努力が必要であるが、これとの関連で自分から一、二点この機会に申し上げておきたい。

４．我が国においてはＰＫＯ法案の取扱いをめぐって真剣な討議が重ねられており、日本国民の重大関心事となっている。本件問題に対する日本政府、自民党及び多くの国民の立場は御承知の通りであり、ＰＫＯに対する協力は国際紛争を武力で解決するいわゆる「海外派兵」ではありえず、国連の平和維持努力に対する人的貢献と位置づけるものであるというもの。現に貴国は既に、カンボディアＵＮＴＡＣに対し約４００人を上回る工兵を派遣されたが、これをもって中国の「海外派兵」と捉える者は一人もいない。我々は、自衛隊の「海外派兵」は断固行わない決意であり、この点についていささかの懸念も必要はない。我々が現在目指しているのは、貴国が既に実施したと同じような形での国連に対する積極的な人的貢献に外ならない。

貴国が自衛隊の「海外派兵」に対し、懸念を有していることは理解するが、率直に申し上げて我が国の国連に対する人的貢献についてまた云々されることになれば、多数の国民の間に心理的なわだかまりが生ずることになる。現に天皇陛下御訪中に消極的な政治家、論者等は、ＰＫＯ法案に対する中国側の態度をもって陛下御訪中反対の論拠とする傾向にあり、またこのことが多くの日本国民の対中不信感を煽っている。

自分としては、このような状態を放置しておくことは日中双方にとって不幸なことと感じており、何とか打開の糸口をつかみたいと考えている。そこで、例えば、中国側より、「自衛隊の『海外派兵』は敏感な問題であり、慎重に対処願いたい。但し、ＰＫＯ法案は日本の問題であり、中国は内政干渉をする積りはない。」といった発言が出来ないものか。そうすれば事態は大きく改善の方向に向かうものと思う。この点につき中国側に異存なければ、本件会議の後に日本側プレスに対し発表したいと考えるが如

何。

5．また、天皇陛下御訪中に消極的なものは、貴国における「保・革対立」がもたらす中国内政の不安定性を論拠の一つとする傾向がある。自分は、このような中国内政の見方に与するものではなく、全くの誤りであると信じており、むしろ中国内政は安定化の方向に向かっていると見ている。それだけに、上記の如き誤ったイメージは誠に遺憾であり、自分としてはその是正のため努力したいと思っている。そこで、この点についても貴方の御意見を是非とも伺い、我が方のプレスにも紹介したいと考える。

6．本日の会談の対外発表ぶりとしては、「双方とも天皇・皇后両陛下の本年の御訪中の意義を認識し、これとの関連で次の諸点を確認した。

（1）御訪問は政治的に利用されることがあってはならず、両国の友好親善の促進の観点から検討されるべきこと。

（2）御訪問は日中両国の国民の祝福を受けて行われるべきこと。

（3）中国政府及び国民は御訪問を心から歓迎し、日本側を困らせることはしない」といったラインとしたい。

また、ＰＫＯ法案及び中国内政については、既に申し上げたラインで対処することとしたい。

8-4 file
8-6 持帰記。
その他ファイル

4/28 公式会談の
(元旦。以下すべて
いれた。

極秘
無期限
部の内
4号

極秘第 24号

竹下元総理の江総書記との会談における発言要領

（天皇・皇后両陛下の御訪中）

平成４年４月２７日

外務省中国課

１．天皇・皇后両陛下の御訪中は日中両国の友好親善関係の促進のために極めて大きな意義を有する。自分は本件に対する中国政府の熱意を正しく理解している積りであり、是非とも御訪中実現に向けて努力したい所存である。

２．他方、既に御承知と思うが、誠に遺憾ながら我が国の一部に御訪中に対する慎重論が見られることも事実である。このような慎重論は、尖閣諸島問題、我が国のＰＫＯ法案問題、民間賠償問題などによって不幸にも増幅される傾向にあり、我が方としてはその対策に苦慮しているのが現状である。

３．自分としては、両陛下の御訪中が政治的に利用されることがあってはならず、また日中両国の国民に祝福を受ける形で行なわれることが是非とも必要であると考えている。仮りに、そのような前提条件が満たされないのであれば、御訪中はかえって日中双方にとって不利益をもたらす惧れすらあろう。そこで、既に橋本大使より貴方に十分説明済みであると承知しているが、改めて自分からも強調しておきたい点は、両陛下の御訪中の前後の時期が極めて重要であり、この間に間違っても日中間で波風が立ってはならないという事である。勿論このためには日中双方の努力が必要であるが、これとの関連で自分から一、二点この機会に申し上げておきたい。

４．我が国においてはＰＫＯ法案の取扱いをめぐって真剣な討議が重ねられており、日本国民の重大関心事となっている。本件問題に対する日本政府、自民党及び多くの国民の立場は御承知の通りであり、ＰＫＯに対する協力は国際紛争を武力で解決するいわゆる「海外派兵」ではありえず、国連の平和維持努力に対する人的貢献と位置づけるものであるというもの。現に貴国は既にカンボディアＵＮＴＡＣに対し約４００人を上回る工兵を派遣されたが、これをもって中国の「海外派兵」と捉える者は一人もいない。我々は、自衛隊の「海外派兵」は断固行わない決意であり、この点についていささかの懸念も必要はない。我々が現在目指しているのは、貴国が既に実施したと同じような形での国連に対する積極的な人的貢献に外ならない。

貴国が自衛隊の「海外派兵」に対し懸念を有していることは理解するが、率直に申し上げて我が国の国連に対する人的貢献についてまで云々されることになれば、多数の国民の間に心理的なわだかまりが生ずることになる。現に天皇陛下御訪中に消極的な政治家、学者等は、ＰＫＯ法案に対する中国側の態度をもって陛下御訪中反対の論拠とする傾向にあり、またこのことが多くの日本国民の対中不信感を煽っている。

自分としては、このような状態を放置しておくことは日中双方にとって不幸なことと感じており、何とか打開の糸口をつかみたいと考えている。そこで、例えば、中国側より、「自衛隊の『海外派兵』は敏感な問題であり、慎重に対処願いたい。但し、ＰＫＯ法案は日本の問題であり、中国は内政干渉をする積りはない。」といった発言が出来ないものか。そうすれば事態は大きく改善の方向に向かうものと思う。この点につき中国側に異存なければ、本件会議の後に日本側プレスに対し発表したいと考えるが如

何。

5．また、天皇陛下御訪中に消極的な者は、貴国における「保・革対立」がもたらす中国内政の不安定性を論拠の一つとする傾向がある。自分は、このような中国内政の見方に与するものではなく、全くの誤りであると信じており、むしろ中国内政は安定化の方向に向かっていると見ている。それだけに、上記の如き誤ったイメージは誠に遺憾であり、自分としてはその是正のため努力したいと思っている。そこで、この点についても貴方の御意見を是非とも伺い、我が方のプレスにも紹介したいと考える。

6．本日の会談の対外発表ぶりとしては、

（第一案）「双方は天皇・皇后両陛下の本年の御訪中の問題につき意見交換を行ったが、この過程で、（1）御訪問は政治的に利用されることがあってはならず、両国の友好親善の促進の観点から検討されるべきこと。（2）御訪問は日中両国の国民の祝福を受けて行われるべきこと。（3）中国政府及び国民は御訪問を心から歓迎し、日本側を困らせることはしないこと。といった諸点につき意見の一致をみた。竹下元総理は、これらのことを宮沢総理に報告したい旨述べた。」とのラインとしたい。

（第二案）「若干のやりとりはあったが、特に申し上げることはない」とのラインとしたい。

また、ＰＫＯ法案及び中国内政については、既に申し上げたラインで対処することとしたい。

竹下元総理訪中と官邸の意向

4/28

極秘
無期限
部の内
号

報告・供覧

大臣 / 秘書官 / ~~政務次官~~ / 事務次官(連絡スミ) / 斎藤外務審議官 / ~~外務審議官~~ / 官房長	主管 アジア局長 / 審議官 / 中国課長 / 首席事務官	保存期間 1類(永久) 2類(10年) 3類(5年) 4類(1年)
		起案 平成 4 年 4 月 28 日
		完結 平成 年 月 日
		起案者 電話番号 柿首席 (北・泉 ex2426)

回覧先

儀典長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下御訪中(竹下元総理訪中と宮邸の意向)

(別紙の要点等)

(略)

GA－7 (昭和63. 4. 1改正) 外務省 回覧番号

天皇陛下御訪中（竹下元総理訪中と官邸の意向）

92.4.28

中国課

２８日、竹下元総理訪中について、竹内総理秘書官と相談し、総理にも上げた結果（総理の意向）であるとして、谷野局長より以下の連絡あり。

１．この間、外務省に対してタイム・スケジュールを作成せよとの指示を出していることを竹下元総理にも伝えよ。

２．今回の竹下元総理の訪中で、陛下の御訪中について、官邸より何かお願いすることはしない。

３．もし、竹下元総理の判断で陛下御訪中の環境造りに役立つことをされるというのであれば、竹下元総理の判断に委ねる。

（了）

竹下元総理へのブリーフィング

4/30

限定配布

極秘
無期限
部の内
号

※総第０４４８０９号００１公館宛

平成※平成 4 年 4 月 30 日
19 時 34 分 10 秒受付

電信案

電信課長

大臣
秘書官
政務次官
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長

主管
○アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

※発電係 1 2

起案
平成 4 年 4 月 30 日

起案者 泉 電話番号 2426

（※印欄内は電信課記入）

協議先

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名
天皇陛下御訪中（竹下元総理へのブリーフ）

主管・文書記号	※電番		パターン・コード
アジア局長	第１１８３号	大至急 普通 至急（優先処理）	

転電 転送 在 転報	※転電番号	大至急 至急 普通 （優先処理）
	大使・総領事あて	

（八〇字）

［限定配布］

※

04480911 優先 TYUUGOKU 漢 自暗

GB-1 外務省 回覧番号

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（昭和六三・六・三十改正）

３０日、訪中を控えた竹下元総理に対し、別電発言要領案を提示しつつ、天皇陛下の御訪中問題等について内々の相談を行ったところ、右模様以下の通り。（先方、波多野秘書同席。当方、小和田次官、谷野アジア局長、樽井中国課長出席。）

１．次官より、今回訪中されるに当たり、何か特別にお願いする状況にはないと考えるが、折角の機会でもあるので、雰囲気作りの面で少しでも前に進めるとの観点から、発言要領を準備させて頂いた旨説明した。

これに対し、竹下元総理より、今回の訪中については、自分も同様に思う。本件は、現在政府で一所懸命に考えているとの認識であり、今のタイミングで目立った動きは差し控えることが適当である旨述べつつ、上記発言要領を了承されたが、ＰＫＯについては突っ込んだやり取りをすることについては躊躇を示していた。

２．また、竹下元総理より、天皇陛下の御訪中問題については、党内の現在の状況は反対論の声が高くなっているため、本来は御訪中されても良いと思っていた人たちまでが消極論に移り始めた状況にある。しかし、自分は今でも陛下には御訪中頂くべしと考えている旨の発言があった。

（了）

限定配布

極秘
無期限
部の内
号

※総第 044810号001公館宛

平成※平成 4 年 4 月 30 日
19 時 34 分 53 秒受付

電信案

電信課長

~~大臣~~ 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	※発電係 1 2 起案 平成 4 年 4 月 30 日 起案者 泉 電話番号 2426

協議先

(※印欄内は電信課記入)

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 天皇陛下御訪中（竹下元総理へのブリーフ）

主管・文書記号	※電番	大至急 至急（優先処理） 普通	パターン・コード
アジア局長	第1184号		

転電
転送 在
転報

※転電番号

大使・総領事あて

大至急 至急
普通 （優先処理）

（八〇字）

「限定配布」

在電アジア局長発1183号に関し、

※

04481002 優先 TYUUGOKU 漢 自暗

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

GB-1 外務省

回覧番号

（昭和六三・六・三十改正）

（三八〇字）

竹下元総理の江総書記との会談における発言要領

1．天皇・皇后陛下の御訪中

（1）天皇・皇后両陛下の御訪中は日中両国の友好親善関係の促進のために極めて大きな意義を有する。自分としては御訪中が実現することを願っている。

（2）他方、その前提として、両陛下の御訪中が政治的に利用されることがあってはならず、また日中両国の国民に祝福を受ける形で行なわれることが是非とも必要である。そうでないと、状況如何によっては、御訪中がかえって日中双方にとって不利益をもたらす惧れすらあろう。そこで、既に橋本大使より貴方に十分説明済みであると承知しているが、改めて自分からも強調しておきたい点は、両陛下の御訪中が実現するためには、御訪中までの準備期間及びその後の時期が極めて重要であり、この間に間違っても日中間で波風が立ってはならないという事である。

2．ＰＫＯ法案

（1）我が国においてはＰＫＯ法案の取扱いをめぐって真剣な討議が重ねられており、日本国民の重大関心事となっている。本件問題に対する日本政府、自民党及び多くの国民の立場は御承知の通りである。ＰＫＯに対する協力は、国際紛争を武力で解決するいわゆる「海外派兵」ではありえず、国連の平和維持努力に対する人的貢献以外の何ものでもない。現

（三）

に貴国も既にカンボディアＵＮＴＡＣに対し約４００人を上回る工兵を派遣されたが、これが中国の「海外派兵」ではないことはいうまでもない。我々は、自衛隊の「海外派兵」は断固行わない決意であり、この点についていささかの懸念も必要はない。我々が現在目指しているのは、貴国が既に実施したと同じような形での国連に対する積極的な人的貢献に外ならない。

（２）貴国が自衛隊の「海外派兵」に対し懸念を有していることは理解する。他方、率直に申し上げて我が国の国連に対する人的貢献についてまで云々されることになれば、多数の国民の間に心理的なわだかまりが生ずることになる。現に天皇陛下御訪中に消極的な政治家、学者等は、ＰＫＯ法案に対する中国側の態度をもって陛下御訪中反対の論拠とする傾向があり、またそういう動きが多くの日本国民の対中不信感を煽っている。

（３）自分としては、このような状態を放置しておくことは日中双方にとって不幸なことと感じており、何とか打開の糸口をつかみたいと考えている。例えば、中国側より、「自衛隊の『海外派兵』は敏感な問題であり、慎重に対処願いたい。但し、ＰＫＯ法案は日本の問題であり、中国は内政干渉をする積りはない。」といった発言が出来ないものか。この点につき中国側に異存なければ、本件会談の後に日本側プレスに対し発表したいと考えるが如何。

３．中国内政

我が国のプレスは、貴国における「保・革対立」によって中国内政が不

安定な状況にあると分析する向きが多い。そこで、この点についても貴方の御意見を伺っておきたい。

4．発表ぶり

（1）本日の会談の対外発表ぶりとしては、次のようなラインでは如何。

「天皇陛下の御訪中問題について若干のやりとりはあったが、特に申し上げることはない。」

（2）また、ＰＫＯ法案については、既に申し上げたラインで対処することとしたい。

（3）

6-1 竹下元総理

6-2 渡辺 直伸あり.

6-3 谷野さんアカル

6-4
6-5 } アサヒ

6-6 フジテレ

竹下元総理と江沢民総書記の会談関係資料 4/30

極秘
無期限
6部の内
6号

竹下元総理の江総書記との会談における発言要領

（天皇・皇后両陛下の御訪中、ＰＫＯ等）

平成４年４月３０日

外務省中国課

１．天皇・皇后陛下の御訪中

（１）天皇・皇后両陛下の御訪中は日中両国の友好親善関係の促進のために極めて大きな意義を有する。自分としては御訪中が実現することを願っている。

（２）他方、その前提として、両陛下の御訪中が政治的に利用されることがあってはならず、また日中両国の国民に祝福を受ける形で行なわれることが是非とも必要である。そうでないと、状況如何によっては、御訪中がかえって日中双方にとって不利益をもたらす惧れすらあろう。そこで、既に橋本大使より貴方に十分説明済みであると承知しているが、改めて自分からも強調しておきたい点は、両陛下の御訪中が実現するためには、御訪中までの準備期間及びその後の時期が極めて重要であり、この間に間違っても日中間で波風が立ってはならないという事である。

２．ＰＫＯ法案

（１）我が国においてはＰＫＯ法案の取扱いをめぐって真剣な討議が重ねられており、日本国民の重大関心事となっている。本件問題に対する日本政府、自民党及び多くの国民の立場は御承知の通りである。ＰＫＯに対する協力は、国際紛争を武力で解決するいわゆる「海外派兵」ではありえず、国連の平和維持努力に対する人的貢献以外の何ものでもない。現

に貴国も既にカンボディアＵＮＴＡＣに対し約４００人を上回る工兵を派遣されたが、これが中国の「海外派兵」ではないことはいうまでもない。我々は、自衛隊の「海外派兵」は断固行わない決意であり、この点についていささかの懸念も必要はない。我々が現在目指しているのは、貴国が既に実施したと同じような形での国連に対する積極的な人的貢献に外ならない。

（２）貴国が自衛隊の「海外派兵」に対し懸念を有していることは理解する。他方、率直に申し上げて我が国の国連に対する人的貢献についてまで云々されることになれば、多数の国民の間に心理的なわだかまりが生ずることになる。現に天皇陛下御訪中に消極的な政治家、学者等は、ＰＫＯ法案に対する中国側の態度をもって陛下御訪中反対の論拠とする傾向があり、またそういう動きが多くの日本国民の対中不信感を煽っている。

（３）自分としては、このような状態を放置しておくことは日中双方にとって不幸なことと感じており、何とか打開の糸口をつかみたいと考えている。例えば、中国側より、「自衛隊の『海外派兵』は敏感な問題であり、慎重に対処願いたい。但し、ＰＫＯ法案は日本の問題であり、中国は内政干渉をする積りはない。」といった発言が出来ないものか。この点につき中国側に異存なければ、本件会談の後に日本側プレスに対し発表したいと考えるが如何。

３．中国内政

我が国のプレスは、貴国における「保・革対立」によって中国内政が不安定な状況にあると分析する向きが多い。そこで、この点についても貴方の御意見を伺っておきたい。

4．発表ぶり

（1）本日の会談の対外発表ぶりとしては、次のようなラインでは如何。

（第一案）「天皇陛下の御訪中問題について若干のやりとりはあったが、特に申し上げることはない。」

（第二案）「天皇・皇后両陛下の本年の御訪中の問題につきやりとりがあった。その際、（イ）御訪問は政治的に利用されることがあってはならず、両国の友好親善の促進の観点から検討されるべきこと。（ロ）御訪問は日中両国の国民の祝福を受けて行われるべきこと。（ハ）中国政府及び国民は御訪問を心から歓迎し、日本側を困らせることはしないこと。といった諸点につき意見の一致をみた。竹下元総理は、これらのことを宮沢総理に報告したい旨述べた。」

（2）また、ＰＫＯ法案については、既に申し上げたラインで対処することとしたい。

アジア局政

事務次官 12
官房外政
官房

極秘
無期限
8部の内
8号

竹下元総理の江総書記との会談における発言要領

（天皇・皇后両陛下の御訪中）

極秘第　　号

平成4年4月27日

外務省中国課

1、天皇・皇后両陛下の御訪中

(1) 天皇・皇后両陛下の御訪中は日中両国の友好親善関係の促進のために極めて大きな意義を有する。自分は~~本件に対する中国政府の熱意を正しく理解している積りであり、是非とも~~御訪中実現に~~向けて努力したい所存である。~~

2、~~他方、既に御承知と思うが、誠に遺憾ながら我が国の一部に御訪中に対する慎重論が見られることも事実である。このような慎重論は、尖閣諸島問題、我が国のＰＫＯ法案問題、民間賠償問題などによって不幸にも増幅される傾向にあり、我が方としてはその対策に苦慮しているのが現状である。~~

(2) 3. ~~自分としては~~、両陛下の御訪中が政治的に利用されることがあってはならず、また日中両国の国民に祝福を受ける形で行なわれることが是非とも必要である~~と考えている。仮りに、そのような前提条件が満たされないのであれば~~、御訪中はかえって日中双方にとって不利益をもたらす惧れすらあろう。そこで、既に橋本大使より貴方に十分説明済みであると承知しているが、改めて自分からも強調しておきたい点は、両陛下の御訪中の前後の時期が極めて重要であり、この間に間違っても日中間で波風が立ってはならないという事である。~~勿論このために日中双方の努力が必要であるが、~~これとの関連で自分から~~三点~~の機会に申し上げておきたい。

2、PKOを念頭

(1) 我が国においてはＰＫＯ法案の取扱いをめぐって真剣な討議が重ねられており、日本国民の重大関心事となっている。本件問題に対する日本政府、自民党及び多くの国民の立場は御承知の通りであり、ＰＫＯに対する協力は国際紛争を武力で解決するいわゆる「海外派兵」ではありえず、国連の平和維持努力に対する人的貢献と位置づけるものであるというもの。現に貴国は既にカンボディアＵＮＴＡＣに対し約４００人を上回る工兵を派遣されたが、これをもって中国の「海外派兵」と捉える者は一人もいない。我々は、自衛隊の「海外派兵」は断固行わない決意であり、この点についていささかの懸念も必要はない。我々が現在目指しているのは、貴国が既に実施したと同じような形での国連に対する積極的な人的貢献に外ならない。

(2) 貴国が自衛隊の「海外派兵」に対し懸念を有していることは理解するが、率直に申し上げて我が国の国連に対する人的貢献についてまで云々されることになれば、多数の国民の間に心理的なわだかまりが生ずることになる。現に天皇陛下御訪中に消極的な政治家、学者等は、ＰＫＯ法案に対する中国側の態度をもって陛下御訪中反対の論拠とする傾向があり、またこのことが多くの日本国民の対中不信感を煽っている。

(3) 自分としては、このような状態を放置しておくことは日中双方にとって不幸なことと感じており、何とか打開の糸口をつかみたいと考えている。そこで、例えば、中国側より、「自衛隊の『海外派兵』は敏感な問題であり、慎重に対処願いたい。但し、ＰＫＯ法案は日本の問題であり、中国は内政干渉をする積りはない。」といった発言が出来ないものか。そうすれば事態は大きく改善の方向に向かうものと思う。この点につき中国側に異存なければ、本件会議の後に日本側プレスに対し発表したいと考えるが如

何。

3. 中国内政

6. また、天皇陛下御訪中に消極的な者は、貴国における「保・革対立」がもたらす中国内政の不安定性を論拠の一つとする傾向がある。自分は、そのような中国内政の見方に与するものではなく、全くの誤りであると信じており、むしろ中国内政は安定化の方向に向かっていると見ている。それだけに、上記の如き誤ったイメージは誠に遺憾であり、自分としてはその是正のため努力したいと思っている。そこで、この点についても貴方の御意見を是非とも伺い、我が方のプレスにも紹介したいと考える。

4. 発表ぶり

6. 本日の会談の対外発表ぶりとしては、

(第一案) 「双方は天皇・皇后両陛下の本年の御訪中の問題につき意見交換を行ったが、この過程で、(1) 御訪問は政治的に利用されることがあってはならず、両国の友好親善の促進の観点から検討されるべきこと。(2) 御訪問は日中両国の国民の祝福を受けて行われるべきこと。(3) 中国政府及び国民は御訪問を心から歓迎し、日本側を困らせることはしないこと。といった諸点につき意見の一致をみた。竹下元総理は、これらのことを宮沢総理に報告したい旨述べた。」とのラインとしたい。

(第二案) 「若干のやりとりはあったが、特に申し上げることはない」とのラインとしたい。

い) また、PKO法案及び中国内政については、既に申し上げたラインで対処することとしたい。

竹下元総理 小和田次官

極秘
無期限
部内の号

報告・供覧

~~大臣~~
~~秘書官~~
~~政務次官~~
事務次官 御説明済
~~外務審議官~~
~~外務審議官~~
官房長

主管
アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

保存期間			
1類	2類	3類	4類
(永久)	(10年)	(5年)	(1年)

起案 平成 4 年 5 月 13 日
完結 平成 年 月 日
起案者 電話番号
檜井課長 2423
(高田扱 2428)

回覧 総括審議官
総務課長
儀典長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

天皇陛下のご訪中(竹下元総理→小和田次官)

(別紙の要点等)

5/13、往訪した次官と竹下元総理との間の(他用で)本件に関するやりとり。

GA－7 (昭和63. 4. 1改正) 外務省

回覧番号

天皇陛下の御訪中について（竹下元総理→小和田次官）

4.5.13
中国課

13日、小和田次官は他用にて竹下元総理を往訪したところ、本件に関するやりとり次の通り（樽井中国課長同席）。

1．小和田次官より今後の段取りにつき当省の考え方を紹介したところ、竹下元総理は次の通り述べた。

（1）自分は年輩者であるということもあり、党内においては、そもそも陛下の御訪中問題を議論すること自体がおかしい、という言い方を繰返ししている。

（2）金丸副総裁は、訪中されるべきであるという立場であり、なぜ党内で反対するものがいるのかおかしいではないか、といった言い方をしている。

（3）反対論のみが声を上げている現状においては、天皇陛下御訪中に好意的な良識派も比較的慎重になってきているというのは事実である。加藤官房長官が自分に対しこのような分析を述べていたが、自分もこれは正鵠を得た見方だと思う。

（4）中曽根元総理はまた最近御訪中賛成に変わったようであるが、なぜそうなったのかよく分からない。平泉議員が昨日述べたところでは、同元総理が天皇陛下は御訪中されるべきであると述べていた由である。

2．以上に対し小和田次官より、本件問題については、帰国予定の橋本大使ともよく協議の上、官房長官および総理とも充分ご相談することとしている、いずれお力添え頂くことになると思うがその際はよろしくお願いしたいという旨、述べ伝えた。

（了）

竹下元総理訪中（重中長所感）

5/10

17-1 小和田次官→往呈懇安嬢にfile

17-2 斉藤外審

17-3 松浦外審

17-4 佐藤官房長

17-5 17内総理秘書官

17-6 河野官房長官秘書官

17-7 斉藤大臣秘書官

17-8 橋本大使

17-9 谷野アジア局長

17-10 中村儀典長

17-11 英外報官

17-12 総括室　　追1-1

~~17-13 総務課長代理~~　　有馬外政審室長

17-14 17中東課官

17-15 北村儀典官

17-16 椿井中国課長

17-17 file　(オリンピックは田中(17下)にfile)

極秘
無期限
17部の内
17号

極秘第 17 号
平成４年５月１０日
中　国　課　長

竹下元総理の中国訪問（同行所感）

竹下元総理夫妻は、５月５日より８日まで中国政府の招きにより訪中（北京、大連）したところ、右に同行した際の所感次の通り。

１．中国側の日中関係に対する配慮

（１）今次訪中において、中国側は天皇陛下御訪中の問題も含めて日中間の懸案を全く持ち出さなかった。この背景には、天皇陛下御訪中をめぐって極めてデリケートな段階にある日中関係に一切の波風を立たせまいとする中国側の強い配慮があったものと思われる。現に中国側は、４月末の橋本大使の対中働きかけ以降、日中間の懸案に対し完全に沈黙を守ってきており、今回の中国側の態度も右と軌を一にするものと言えよう。因みに、最近邦字紙で報じられた宮沢総理発言（「江沢民総書記はＰＫＯ法案を必ずしも理解していないのではないか」並びに「鄧小平は人権尊重派ではない」）に対しても、中国側は沈黙を続けているが、これは、かつての「鄧小平雲の上発言」をめぐる中国側の激しい対日批判と比べ、著しい違いを見せている。

（２）それだけに、かえって中国側の天皇陛下御訪中にかける極めて強い期待を感じさせられた。中国側は、国内の一部の苛立ちを抑えつつ、日本政府の出方を静かに見守るとの態度を当面維持していこうが、この背景には、宮沢総理と渡辺大臣に対する中国側の強い信頼感があるように感

じられた（武外交部日本処長の内話）。

（３）なお、中国側はＰＫＯ法案の採択を不可避とみており、この法案との関連で我が国の内政に巻き込まれることを極力避けたいとの気持ちが強いようである。武日本処長は小官に対し、仮えＰＫＯ法案が成立しても日本政府を困難に陥れることにはならないだろうとの見通しを述べていた。なお、今後最も注意すべき点は、慰安婦問題の処理ぶりである。中国側は本件問題が中国に波及することを強く懸念しており、[redacted]中国側の懸念は、慰安婦のような[redacted]問題」で日本政府が何らかの措置をとれば、[redacted]困難になるとの点にある。従って、我が方としては、日韓関係に対する考慮から何らかの措置をとらざるを得ないとしても、対中配慮を木目細かく行なっていくことが是非とも必要である（少なくとも天皇陛下御訪中前に対韓措置をとることは避ける必要がある等）。

２．中国側の竹下元総理に対する配慮

中国側は竹下元総理に対し最大限の歓迎ぶりを示した。その端的な現れが４名の最高指導者（楊尚昆、江沢民、李鵬、万里）との会見のアレンジであった。また、これらの会見においては、上記の如く日中間の懸案を一切持ち出さず、話題は専ら日中関係一般及び環境問題に絞り、同元総理を困難な立場に置かないとの配慮が強く感じられた。中国側としては、竹下元総理のこれまでの日中関係における功績を高く評価するとともに、日中関係の安定的発展を確保していく上で同元総理の影響力に強く期待していることが看取さ

れた。

３．李鵬総理の国連環境開発会議（ブラジル）出席

今次訪問中に外交部幹部が小官に内話したところによれば、李鵬総理は来たる６月の本件会議に出席する由（同時期にブラジルを訪問しているダライ・ラマと訪問期間が重ならないことを条件としているが、この点はブラジル政府と折り合いがつく見通しの由）。

よって、同会議に宮沢総理が出席されることになれば、中国側は必ずや首脳会談を希望して来るものと思われる。天皇陛下御訪中の問題に関する当面のフシ目としては、万里全人代委員長の訪日（５月２５日～６月１日）があるが、これに加えて上記首脳会談をも併せ念頭に置く必要があろう。

４．その他

（１）楊尚昆国家主席と竹下元総理の会談は、特に温かい雰囲気の下で行なわれた。同国家主席の発言の端々に、日中関係に対する熱意が感じ取れたが、これとともに竹下元総理のこれまでの対中配慮に対する率直な感謝の念が表れていた。鄧小平以後のナンバー・ワンと目されている同主席と竹下元総理が良好な信頼関係を維持していくことは、今後の日中関係にとって心強いことと思われた。

他方、李鵬総理は相変わらずつっけんどんなところが抜け切っておらず、楊尚昆と好対照をなしていた。その端的な現れが、竹下元総理の言及した「蓮の葉クイズ」（「１日に２倍に増える蓮の葉が３０日間で池の全面を覆うとした場合、池の半分を覆うのは何日目か」というもので、答えは２９日目であり、地球環境は現在２９日目に直面しているという

もの）に対する両首脳の対応ぶりに示されていた。楊尚昆はこれを率直に面白がり、また強い関心を示した。他方、李鵬の反応はこれと異なり、「科学的に見れば２９日目に池の半分を覆うというのは根拠がない」というものであり、座が一瞬白けてしまった。李鵬が中国国民の間に今一つ人気が出ないものこの辺に理由があると感じた。

（２）大連で劇団四季のミュージカル「李香蘭」の最終公演を鑑賞したが、中国人観衆は熱心に見入っており、公演は成功を収めたものと評価しうる。この関連で小官が気付いた点は、同公演が図らずしも中国人に対する「歴史教育」になったのではないかということである。我が国が如何なる状況の下に第二次大戦に突入し、また如何に多くの日本人が犠牲になったかいうことを殆どの中国人観衆は初めて知ったのではあるまいか。中国の教育では中国の被害者としての面のみを強調しているのが実状であり、この意味から中国人観衆は一種の新鮮なショックを受けたものと思われる。それにしても、このようなオペラの中国公演を認めた中国政府の決断はそれなりに評価されるべきであろう。

（以上）

竹下元総理訪中関連報道等

取扱注意

報告・供覧

大臣	主管	保存期間
秘書官	アジア局長	1類 2類 3類 4類
~~政務次官~~	審議官	(永久) (10年) (5年) (1年)
事務次官	参事官	起案 平成 4年 5月 11日
~~外務審議官~~	中国課長	完結 平成 年 月 日
~~外務審議官~~	首席事務官	起案者 電話番号
官房長		増田 2421

回覧先

総括審議官　国際連合局長　外務報道官

総務課長　報道課長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

竹下元総理訪中（内政 ~~社会~~ 懇談の模様）.

（別紙の要点等）

5～8日にかけ、訪中した竹下元総理と同行記者との内政懇談の模様。内容は、

1. 今次訪中について。
2. PKO法案
3. 参議院選挙
4. 政治改革
5. 景気対策

５～８日にかけ訪中した竹下元総理が、北京において同行記者と内政懇談を行った（同元総理に同行した当課渡辺が同席、メモ作成）。右会見の概要については、同元総理の意向もあり電報で報告はしませんでしたが、御参考までに報告・供覧致します。

6日行われた竹下元総理と同行プレスが懇談を行ったところ、概要以下の通り。

1．今次訪中について

（今次訪問期間中、今のところ中国側より、ＰＫＯ法案について提起してきていないようだが、今後の会談で持ち出して来る可能性はあるか。）

あと3人残っているので、分からない。恐らく持ち出して来ないのではないが。

（天皇陛下の訪中について、中国側は提起して来る可能性はあるか。また、本件に関する考え方如何。）

本件については、めったなことを口にしてはいけない。そもそも今回の訪中は、大連を訪問し、経済技術開発区及び「李香蘭」の公演を見ること及び北京において環境保全センターの起工式に出席することが目的。

陛下の訪中については、先般江沢民総書記が訪日した際に、宮沢総理におっしゃったことをもって理解すべきである。

（今回の訪中では、中国側は要人総出で会ってくれるが、期待が高いのではないか。）

期待というよりは、歓迎の表れだと受け取っている。

（今回の訪中に関しては、中国側へのお土産はあるのか。）

この度の訪中に合わせて、第三次エネルギーローンの供与を決定した。中国側からは、脱硫装置の供与につき要請があったが、今後の課題であろう。

第四次円借については、作業は来年度に入ってからと言うことになろう。本件については、従来の要請主義から対話主義への移行ということも検討されることとなろうが、下手をすると内政干渉となりかねない面もあり、慎重に取り扱う要あり。

（米中関係改善について、中国側から話は出たか。）

特にない。貿易問題についても、米からミッションが派遣されて双方で検討しているし、ＭＦＮについても取敢えず延長が決定された。

2．ＰＫＯ法案

（国内政治において最も注目される問題は、ＰＫＯ法案の成立であるが、見通し如何。）

本件については、指令塔は渡辺副総理兼外務大臣、現場処理が梶山国体委員長であり、そこに全てを任せてあるので、第三者がとやかく言うことは差し控えたい。

（ＰＫＯ法案の処理如何では、解散もありえるのか。）

解散は、国会審議がどうにもならない場合に国民に信を問うもの。これから審議に入

ろうとしている段階では考えられない。そもそも解散というのは、総理の専権であり、総理が常に念頭において国事を行うものであり、周りがとやかく言うものではない。

（金丸副総裁が、災害出動だけなら反対もないし切り離して法案を成立できるのではないかとも言っているが、そこら辺で決着するのか。）

それは知らんが、そもそも災害出動で想定している緊急援助隊法の改正とＰＫＯ法案の成立は別ものである。

（ＰＫＯ法案は、国際貢献の見地からも今国会において成立すべきと考えるか。）

それが、公約である。

（田辺委員長が、カンボディアに限って事限立法なら認められると語ったが、どう考えるか。また、右は、公明、民社の主張する事前承認との接点もあると考えられるか。）

内容をよく聞いていないから分からない。本人の意図を聞かずに論評出来ない。間違ったことを言うと影の内閣の首班に申し訳ない。

３．参議院選挙

（参議院選挙の勝敗ライン如何。）

原則から言えば、公認候補が全て当選することである。実際のところどれくらいかというのは別途プロの観点からはあるが、この場で申し上げるのは適当ではない。

（連合は、参議院選挙で勢力を伸ばすことが見込まれるか。）

そう見るのが妥当であろう。なぜなら、連合は、現時点では一人であるからである。

（参議院選挙後は、内閣改造はあるか。）

現時点では分からない。参議院選挙後は衆議院と違い少なくとも首班指名はない。

４．政治改革

（政治改革については、定数是正一つとっても自民党内でもまとまらないようだが、見通し如何。）

本件については、指令塔は宮沢総理・総裁、現場処理は梶山国体委員長であるので、指令塔に聞かないと分からない。本件は、定数是正により違憲状態を脱却することと、先般出された政治改革に関する大綱を実施するとの両面がある。

先ず、違憲状態の脱却がベースである。政治改革は、いろいろあるが、定数是正がどこまで政治改革かは明確な区別はない。

政治改革をどのように進めるかは、現在プロが考えているので、その結果を待ちたい。

本件は、最終的には指令塔の考えていることなので、議論がどう収斂していくかは今の段階では、だれも分からない。

（定数是正の見通し如何。）

定数についても、数字についての明確な根拠がある訳ではない。日本の定数は、米国よりは多いが、他の国と比べて必ずしも多いということはない。慣れと国民性の問題かな。あとは、一人一人の倫理の問題であろう。

定数是正の時期については、９５年の国勢調査を念頭に置くのか、２０００年の国勢調査を念頭に置くのかによっても、やり方は変わってくる。

仮に今国会で実施することとしても、施行日が問題となる。違憲状態のまま、総選挙となっても理論的には問題ないとは思うが、政治的に制約を受けるかは考えようであろう。

（野党との関係はどうか）

外には分からないように、個々にはなんぼでも出来る。尤も各党とやる時には知的水準も含めてカウンターパートを決めてかからんといかん。

５．景気対策

（参議院選挙では、景気対策が争点となることもあると思うが、党内には赤字国債という議論も出ているが、右に対する考え如何。）

赤字国債の中身が良く分からないので、コメントできない。一口に赤字国債と言っても、支出を増やすための建設国債、歳入を軽減するための国債、中間のゼロ国債といろいろあり、どれをどう使うかは、難しい問題。

5/9 中国モンゴル関係報道ぶり

竹下氏訪中

中国、実務関係を重視

5/9A ④

「天皇訪中」に言及せず

【北京8日＝佐藤和雄】中国を訪問した竹下登・元首相は八日、全日程を終えて帰国した。中国側は江沢民・共産党総書記ら四首脳が竹下氏と相次いで会談するなど、国家元首と並ぶ厚遇ぶりを示した。一連の会談では日中関係で注目されている天皇陛下の訪中問題について具体的な言及はなかったとされる。これは、改革・開放路線を加速し始めた中国側が、日本国内で議論の出ている微妙な問題を避け、竹下氏を通じて日中関係の実務的な進展を求めたことの表れともいえそうだ。

竹下氏は、三泊四日の短い日程にもかかわらず、中国指導部「四首脳」の江沢民総書記、万里・全国人民代表大会常務委員長、楊尚昆国家主席、李鵬首相と相次いで会談。特に、楊尚昆氏との会談は、訪中の前日になって急きょ決定したほど。

中国側は、国交正常化二十周年の今年中に、天皇陛下の訪中を実現させたいとの意欲をもっている。しかし、今回の会談では、楊国家主席が「日中両国の指導者が常に会い、意見交換することが重要だ」と抽象的な表現で指摘しただけで、四首脳はいずれもこの問題を具体的には取り上げなかったとされている。

これまで中国側は九一年十二月に田紀雲副首相、九二年一月に李鵬首相がそれぞれ竹下氏との会談で天皇陛下の訪中問題を取り上げた。それに比べ、今回の慎重な対応は際立っていると言える。これは中国側のこの問題への姿勢が変化したのではなく、自民党内で反対・慎重論が噴き出している状況を踏まえたうえで「この時期にあえて持ち出すよりも、竹下氏の今後の調整に期待したほうが良い」（中国側関係者）との判断があるためらしい。

天皇訪中問題などへの抑制のきいた対応の背景には、中国側が、米国との関係改善は大統領選が終了するまでは大幅に進展しないとみて、この間、経済協力などを通じて日中関係を実務的に強固にする必要があるとの判断をより強めていることがあるとみられる。

5/9A ⑪

中国の国有資産 4割が遊休状態

【上海8日＝共同】七日の上海紙、新聞報は中国の国有資産五千億元（十二兆二千五百億円）の約四〇％が遊休状態にある、と報じた。これは、社会主義経済の根幹である国営企業の経営効率が依然改善されていないことを意味する。

同紙によると、機械設備が全面的に活用されていない上に、企業の分業化と協力が遅れ、無駄が多いことが主な原因。上海では特に小規模な国営企業で土地や機械設備などの遊休状況が深刻化しているという。

5/9A ⑰

中国とモンゴルの首相会談

【北京支局8日】中国訪問中のモンゴルのビャムバスレン首相は8日、北京の人民大会堂で、中国の李鵬首相と会談した。モンゴルの首相が中国を公式訪問したのは30年ぶり。

モンゴルでカザフ人が活動

【ウランバートル支局8日】モンゴルの少数民族カザフ人が秘密組織を作り、反政府活動を展開している、とモンゴルの政府系新聞「人民権利報」が報道した。

中国・カザフ直通バス運行

【北京支局8日】新華社によると、中国新疆ウイグル自治区



イリ地方の清水河とカザフスタンのヤルカンドを結ぶ、国境をまたぐ直通バスが5日から運行開始になった。片道67㌔で、毎日、両地点から1本ずつ出発、当日往復する。

米国務次官、中国外相と会談

【北京支局8日】米国のアーノルド・カンター国務次官（政治担当）が8日、北京の釣魚国賓館で銭其琛外相と会談した。新華社によると、カンター氏は「米国は米中関係の改善に努力するが、中国側も、国際、地域問題で協力するよう希望する」と述べた。

5/9A ⑭

●李首相と「環境」で論議

【北京支局8日】中国を訪問中の竹下登・元首相は八日昼、北京市内で李鵬首相と約十五分間会談し、環境問題を中心に意見交換した。李鵬首相は中国政府の環境対策を説明。竹下氏は、中国の火力発電所の建設推進にともない大気汚染や酸性雨問題を防ぐ脱硫装置の導入の必要性について触れ、日本側がこの面で協力できることを伝えた。

●環境保全の施設起工式

【北京支局8日】日本が資金、技術協力する日中友好環境保全センターの起工式が八日、中国を訪問中の竹下登・元首相、呉学謙・中国副首相らを交えて北京市内で行われた。センターは、日中平和条約締結十周年の記念事業として八八年に建設が決まったもので、環境観測、データ処理の技術研究や人材育成を目的にしている。十一階建ての本棟などを建設。百二億余円を日本が無償供与する。

竹下氏、中国側も触れず 天皇陛下ご訪中 5/9 S3 日本の決断待ち

中国を訪問していた竹下元首相は八日夜、北京発の日航機で帰国した。北京滞在中、竹下氏は万里全人代常務委員長、江沢民総書記、楊尚昆国家主席、李鵬首相と相次いで会談したが、日本大使館筋によると双方から日中間の最大の懸案となっている天皇陛下ご訪中問題への直接的な言及はなかったという。背景には、この問題での調整役を期待された竹下氏ですら、「動きようがない」（周辺）のが実情とされており、訪中問題がきわめて微妙で、深刻化している現実を浮き彫りにしている。

竹下氏は中国側要人との一連の会談に先立ち、橋本駐中国大使などと打ち合わせをしたが、天皇陛下ご訪中については日本側からは触れないことを確認したという。自民党内で慎重論が高まっているうえ、政府が決断していない以上、竹下氏としても「言いようがない」（日中関係筋）と判断したためだ。

天皇陛下ご訪中をめぐって中国側は、平成元年に李鵬首相が訪日した際に招請したのをはじめ、先に来日した江沢民総書記が今秋の訪中に強い期待感を示すなど、再三要請している。それだけに政治的な影響力を持つ竹下氏への期待は強く、現役首相並みの扱いとされる四首脳との会談をセットした背景にもなっている。

中国側が領海法に尖閣諸島の領有を明記したり、自衛隊の国連平和維持活動（PKO）参加に慎重な対応を求めるなどしたことで自民党内が反発、竹下氏としても当面は党内の沈静化を見守ることにしたようだ。

中国側もこうした国内事情に配慮、「竹下氏を困らせるようなことは言及しない」（日中関係筋）ことにしたようで、八日、楊尚昆主席が要人交流をさらに促進する余地があると間接的な表現で訪中を暗に促した程度だった。とはいえ四首脳が直接言及しなかったことは裏返せば、「（天皇陛下ご訪中問題に対する）日本側の決断を待つだけだ」（同）という姿勢を無言の中で示したともいえなくはない。このため、日本側は早急な決断を迫られた格好にもなっている。

（中静敬一郎）

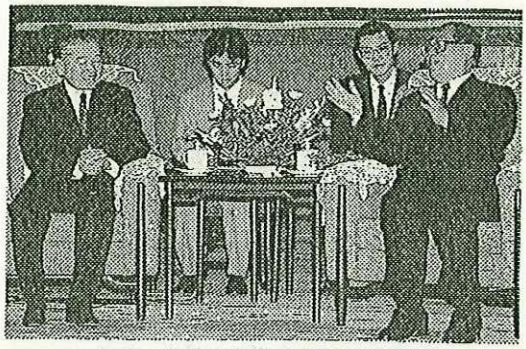
3 環境問題で S 意見を交換 5/9

【北京八日＝中静敬一郎】竹下元首相は八日昼（日本時間同日午後）、北京の迎賓館（釣魚台）で、李鵬首相と十五分間会談した。竹下氏はこの中で環境問題に関連、「（火力発電所が排出する硫黄酸化物に対する）脱硫装置の導入はどうするのか」と尋ねたのに対し、李首相は設計、建設、生産に関する三つの環境政策を説明するにとどめた。

NK 5/10－⑪

竹下氏訪中、中国側は天皇訪問問題に触れず

竹下元首相は五日から八日まで中国の北京、大連を訪問、日中国交正常化二十周年の節目にあたる時期に中国政府、共産党要人と会談をこなした。日中間の焦点になっている天皇陛下の中国訪問問題に関しては、中国側も自民党内の厳しい空気を察知したのか公式には直接言及せず、一連の会談では竹下氏が力を入れている地球環境問題を中心に意見を交換した。ただ竹下氏には楊尚昆国家主席、江沢民総書記、李鵬首相、万里全人代常務委員長の「現在の中国指導部四点セット」（同行筋）全員が会談を設けるなど現職首相並みの待遇で、中国側の竹下氏にかける期待の大きさを印象づけた。



6日、人民大会堂で江沢民総書記㊨と会談する竹下元首相（共同）

「日中関係は国際情勢の変化にもかかわらず大きな影響を受けずに発展してきた。並大抵のことではなく、竹下先生の努力に感謝する」（五日、呉学謙副首相）

「竹下元首相は中国の古い友人で中日両国人民の交流のため、両国の協力のため、たくさんの有益な仕事をしてきた。私は感服しており感謝している」（六日、万里全人代常務委員長）

「エネルギー借款、円借款と竹下元首相が努力されたことを承知している」（六日、江沢民総書記）

一連の会談の中で、中国側要人は、これまでの日中関係発展における竹下氏の役割を高く評価する発言を繰り返した。さらに江総書記、万里全人代常務委員長、李鵬首相の三首脳との会談に加え、四日になって楊尚昆氏との会談も急きょ決まった。楊氏は当初、大連出張中ということもあって会談は見送りとの方向だったが、五日に北京に戻ってくることになり竹下氏との会談に臨んだ。

ただ、一連の会談の主要テーマは日中間の経済・環境協力で、懸案の天皇訪中問題については、楊主席が両国指導者間の一層の交流側が自民党内の慎重論をにらんだものとみられる。

北京では今回の竹下氏訪中に際して、「日本側から天皇訪中問題に言及しなければ、中国側が話すことはないと思う。中国はお客を困らせるようなことはしない」という見方が強く、予想通りの展開となった。

自民党内の対中認識がかつての日中友好第一の時代とは明らかに変化したのは、第二に天安門事件で中国の人権政策への疑問が高まったこと。「やはり中国は体制の違う国」という見方がソ連崩壊という変化とあいまって強まった。

第二に中国が尖閣諸島を「領海法」で中国領と明記したことも、対中認識を悪化させた。中国が核不拡散条約（NPT）加盟に踏み切るなど冷戦後の新世界秩序に参画する動きを示す一方で、今年春の全国人民代表大会（国会に相当）で「軍の体質改善と中国の特色ある軍隊精鋭化の道」を打ち出し、軍の近代化と強化に乗り出していることも対中警戒感を強める結果につながっている。

さらに国連平和維持活動（PKO）協力法案など日本の政治的役割強化に中国が異論を唱えることもあって、「いったんは十月二十二日から二十七日までと決まりかけた陛下の訪中への慎重論となって表れた」（自民党筋）といえる。

竹下氏も同行記者団に「この問題はそれこそモノを言ってはいかんというのが僕の考え」と語り、ダンマリを決め込んでいる。

ただ、超党派の国会議員でつくる日中友好議員連盟（伊東正義会長）の最近の会合で天皇訪中を前向きに検討すべきだ、との意見も出たほか、政府部内でも「陛下の訪中見送りということになれば、日中関係の先行きに響く」（政府筋）と訪中見送りを懸念する声も根強い。中国側の竹下氏への厚遇は天皇訪中問題で同氏の言質を現段階で急いでとるよりも、日本国内の情勢を慎重に見極め、大詰めの段階で同氏に登場してもらいたい、という期待を示したものとも言えそうだ。

政治部　石川記者

日本の情勢見極め

″大詰め″での登場に期待

Ⓐ 合 5/10-②

中国側と交流正常化

連 労組代表団の来日合意

【北京9日＝岡崎哲也】日本労働組合総連合会（連合）の訪中団（山岸章団長）と、中国側の労働中央団体である中華全国総工会（倪志福主席）の第二回会談が九日、北京市内で開かれ、総工会の代表団が来日することが決まった。連合が問題視していた中国の人権、労働組合権の実情については認識が食い違ったものの、話し合いを続けることでは合意し、一九八九年の天安門事件以来、凍結されていた日中の労組間交流は事実上、正常化された。

会談では、連合側が、中国は結社の自由、団結権などを認めたILO条約を批准していないと指摘。中国側は「発展途上国ではまず生存権を尊重しなければならない。人権を口実に他国に干渉すべきでない」と従来の立場を主張しながらも、①中国の人権には不十分な点がある②国際労働機関（ILO）の労働基準を尊重する③欧米など各国の労組や国際自由労連（ICFTU）とも話し合いたい、などと柔軟な姿勢を示した。



9日、江沢民総書記㊧と会談する山岸連合会長＝中南海で（共同）

Ⓣ 5/10-②

天皇訪中 外相、前向きの意向示唆

渡辺副総理・外相は九日夕、自民党代議士が静岡県沼津市で開いた会合で講演し、日中関係に触れ「せっかく国交正常化二十周年を記念して、いろいろ仲良くしようとしているところなのだから、できるだけ中国の希望を聞いてあげることが大事だ」と述べ、中国政府が求めている今秋の天皇訪中をできれば実現させたいと考えていることを示唆した。

また「中国政府は尖閣諸島を実効支配しようとは考えていない。目くじらを立てて、けんかしたら、またおかしくなってしまう」「中国は五百億㌦の賠償金を払わなくていいといってくれた。払っていれば日本のこれほどの繁栄はなかっただろう。ちょっとした言葉じりでギスギスしてエスカレートすることは、しちゃいけない」などと述べた。

労働界交流 正常化を確認

連合会長と中国側

【北京9日清水美和】中国を訪問している連合の山岸章会長は九日、中国の中央労働団体である中華全国総工会（総工会）の倪志福主席、江沢民中国共産党総書記らと会談、一九八九年の六・四天安門事件以来事実上凍結されている日中労働界交流の正常化を確認した。中国側は国際的な労働条約を尊重することを表明、関係が悪化している国際自由労連（ICFTU）との関係改善を希望した。

山岸会長らによると倪主席との会談で双方は相互の自主性を尊重し両国のナショナル・センターとして交流と連帯を強化していくことで一致した。しかし人権問題では生存権を第一とする中国側と人権や労働基本権を強調する日本側との意見の食い違いが残った。

江沢民総書記との会談では山岸会長が労働界交流の正常化を説明した。

総書記は正常化を「評価したい」と強調。「中国は国際的にも改革・開放政策に立って、積極的に連帯の努力を強めるという立場だ」と述べ、米国などとの関係改善にも意欲を示した。

人権面での改善求める

江総書記に山岸会長

【北京9日＝岡崎哲也】中国を訪問中の日本労働組合総連合会の山岸章会長は九日、北京市内の中南海で、中国共産党の江沢民総書記と約三十分間会談した。この中で、山岸氏が天安門事件に関連して「国際労働機関（ILO）や国際自由労連（ICFTU）は中国の人権問題に対して厳しい態度をとっているが、連合も同じだ」と中国側の人権面での改善を求めたのに対し、江総書記は「世界には多様な価値観があり、国家の形態も多様だ。一つの国の価値観を他の国に押し付けてはならない」と述べた。

5/10 中国関係報道振り

5/9 (追加分)

竹下氏、中国側も触れず
日本の決断待ち

下中 竹下氏 陛訪 皇天ご

中国を訪問していた竹下元首相は八日夜、北京発の日航機で帰国した。北京滞在中、竹下氏は万里全人代常務委員長、江沢民総書記、楊尚昆国家主席、李鵬首相と相次いで会談したが、日本大使館筋によると双方から日中間の最大の懸案となっている天皇陛下ご訪中問題への直接的な言及はなかったという。背景には、この問題での調整役を期待された竹下氏ですら、「動きようがない」（周辺）のが実情とされており、訪中問題がきわめて微妙で、深刻化している現実を浮き彫りにしている。

竹下氏は中国側要人との一連の会談に先立ち、橋本駐中国大使などと打ち合わせをしたが、天皇陛下ご訪中については日本側からは触れないことを確認したという。自民党内で慎重論が高まっているうえ、政府が決断していない以上、竹下氏としても「言いようがない」（日中関係筋）と判断したためだ。

天皇陛下ご訪中をめぐって中国側は、平成元年に李鵬首相が訪日した際に招請したのをはじめ、先に来日した江沢民総書記が今秋の訪中に強い期待感を示すなど、再三要請している。それだけに政治的な影響力を持つ竹下氏への期待は強く、現役首相並みの扱いとされる四首脳との会談をセットした背景にもなっている。

中国側が領海法に尖閣諸島の領有を明記したり、自衛隊の国連平和維持活動（PKO）参加に慎重な対応を求めるなどしたことで自民党内が反発、竹下氏としても当面は党内の沈静化を見守ることにしたようだ。

中国側もこうした国内事情に配慮、「竹下氏を困らせるようなことは言及しない」（日中関係筋）ことにしたようで、八日、楊尚昆主席が要人交流をさらに促進する余地があると間接的な表現で訪中を暗に促した程度だった。とはいえ四首脳が直接言及しなかったことは裏返せば、「（天皇陛下ご訪中問題に対する）日本側の決断を待つだけだ」（同）という姿勢を無言の中で示したともいえなくはない。このため、日本側は早急な決断を迫られた格好にもなっている。

（中静敬一郎）

環境問題で意見を交換

竹下・李鵬会談

【北京八日＝中静敬一郎】竹下元首相は八日昼（日本時間同日午後）、北京の迎賓館（釣魚台）で、李鵬首相と十五分間会談した。竹下氏はこの中で環境問題に関連、「（火力発電所が排出する硫黄酸化物に対する）脱硫装置の導入はどうするのか」と尋ねたのに対し、李首相は設計、建設、生産に関する三つの環境政策を説明するにとどめた。

改革・開放、陳雲氏も支持

上海市長表明



中国・上海の黄菊市長は八日夕、大阪で開催の上海貿易投資セミナーで講演後、産経新聞記者と会見、「上海での改革・開放の動きはやがて中国全土に広がるだろう。陳雲氏（中国共産党中央顧問委主任）＝写真＝もこの考えに同意している。彼は古い形だが経済学者で、改革と開放の必要性を十分認識している」と語った。

同セミナーでは、黄菊市長は上海の浦東地区の建設と開放が進んでいることを強調。今年に入り、①行政管理体制の整備と投資手続きの簡素化②九三年までの地価の据え置き③分譲住宅の建設と売却の自由化―などの新措置を取ったと説明。さらに、深圳に比べ、浦東地区では小売業など第三次産業の営業や証券取引所、外国金融機関の支店の設置を認め、諸外国にとって有利だとして、積極的な投資を求めた。

また、同市長は「鄧小平氏、江沢民総書記、李鵬首相も浦東開発を支持している。一海は改革・開放をとことんまでやる」と述べた。

李鵬首相、蒙首相と会談

【北京八日＝山本秀也】中国訪問中のビャムバスレン・モンゴル首相は八日、北京の人民大会堂で李鵬・中国首相と会談、通商の拡大など二国間関係のほか、ソ連崩壊後の地域情勢について意見を交換した。

この中で李鵬首相は、モンゴル首相として三十年ぶりに公式訪中したビャムバスレン首相に歓迎の意を表明、二国間関係の現状について「満足している」と評価した。

これに対しビャムバスレン首相は、中国とモンゴルの関係強化はアジア地域の安定と繁栄に貢献するものだと語り、訪問の意義を強調した。また、国内経済の再建に絡み中国との協力拡大に強い意欲を示した。

ビャムバスレン首相は七日、李鵬首相の招きで北京に到着した。

米上院外交委 対香港政策を採択

【ワシントン支局＝八日】米上院外交委員会は七日、一九九七年七月に中国に返還される香港に対する米国の基本的な外交政策を定めた「米国の香港政策条例」を満場一致で採択した。中国政府は同条例について、「中国の内政に干渉するもの」と反発を強めており、米中間の新たな火種になることも考えられる。

同条例は共和党のミッチ・マコネル上院議員（ケンタッキー州選出）が中心に作成したもので、中国返還後の香港と米国の関係維持および貿易拡大のほか、香港の民主化や人権を保護することもうたっている。

中国情報

3都市に外銀開設認める

【北京八日＝山本秀也】国営新華社通信によると、中国人民銀行（中央銀行）はこのほど、広州（広東省）、大連（遼寧省）、天津の三都市で新たに外国銀行の支店開設を認める方針を明らかにした。

また、中国政府は外国銀行に対し、人民元建て取引を認可する方向で検討を進めている。

シンガポールで資金調達

【シンガポール八日＝小城敬三】シンガポールのフー蔵相は六日、香港でのアジア開発銀行（ADB）年次総会に出席後、記者会見し「中国がシンガポール市場での融資活動、資金調達に積極的な姿勢を見せている」と語り、中国人民銀行の代表団が近くシンガポールを訪問、金融界関係者と意見交換する予定であることを明らかにした。

天皇陛下ご訪中を暗に要請

楊尚昆国家主席、竹下元首相に

【北京八日＝中静敬一郎】北京滞在中の竹下元首相は八日午前（日本時間同）、人民大会堂で楊尚昆国家主席と約三十分間会談した。この中で楊主席は「日中関係はさらに促進する余地がある。両国指導者は常に会い、二国間関係及び世界の問題について意見交換することが重要だ」と述べ、日中両国首脳の相互訪問強化を提案した。天安門事件（一九八九年）以降、海部首相（当時）が昨年八月に西側首脳として初めて訪中しているが、さらに、宮沢首相の早期訪中を求めたものと受けとめられている。

中国側が繰り返し要請している天皇陛下の訪中問題には言及しなかった。

これに対し、竹下氏は「日中関係は引き続き重要だ」と述べ、日中関係発展のためにハイレベルの交流の必要性を強調した。これは、楊主席自身の訪日や天皇陛下の訪中実現などを念頭に置いた発言とみられる。

また、楊主席は「中日の友好協力関係の発展は外交上の重要な政策である」と述べ、改革・開放政策の推進のために竹下氏の協力を要請。竹下氏も「今後とも一生懸命努力したい」と約束した。

首脳の相互訪問提案

中国・楊国家主席　竹下氏と会談

【北京8日＝田口晃也】中国訪問中の竹下元首相は八日午前（日本時間同）、北京市内の人民大会堂で、楊尚昆国家主席と約三十分間会談した。この中で楊主席は「日中関係はさらに促進する余地が十分にある。両国指導者は常に会い、二国間関係及び世界の問題について意見交換することが重要だ」と述べ、日中両国首脳の相互訪問強化を提案した。天安門事件（一九八九年）以降、海部首相（当時）が昨年八月に西側首脳として初めて訪中しているが、さらに、宮沢首相の早期訪中を求めたものと受けとめられている。

中国側が繰り返し要請している天皇陛下の訪中問題には言及しなかった。

これに対し、竹下氏は「日中関係は引き続き重要だ」と述べ、日中関係発展のためにハイレベルの交流の必要性を強調した。これは、楊主席自身の訪日や天皇陛下の訪中実現などを念頭に置いたものとみられる。

また、楊主席は「中日の友好協力関係の発展は外交上の重要な政策である」と述べ、改革・開放政策の推進のために竹下氏の協力を要請。竹下氏も「今後とも一生懸命努力したい」と約束した。

日中環境保全センター起工式

【北京8日＝田口晃也】中国の公害防止の調査研究、人材育成のため北京市朝陽区に建設される「日中友好環境保全センター」の起工式が八日午前（日本時間同）、現地で行われた。

式には、日本側から竹下元首相、中国側から呉学謙副首相らが出席した。

これに対し、竹下氏は「日中友好環境保全センター」の起工式が八日午前、北京の現地で行われ、竹下元首相や呉学謙副首相などが出席した。

このほか楊主席は環境問題が深刻化していることを認め、「日本の環境問題解決に向けての経験を学びたい」と述べ、竹下氏も協力を約束した。

日中環境センター起工式

【北京八日＝中静敬一郎】中国の大気汚染や水質汚濁などの環境汚染を防止するため、日本の無償資金協力で建設される「日中友好環境保全センター」の起工式が八日午前、北京の現地で行われ、竹下元首相や呉学謙副首相などが出席した。

同センターは、①環境観測データの収集解析②公害防止技術の研究③環境保全に従事する人材育成ーなどを目的に中国国家環境保護局が使用するもの。日本政府は、本部センター（鉄筋コンクリート造り二万六千三百平方㍍）施設や機材のため、百二億円を供与する。

日中指導者の交流を要望

竹下氏に楊主席

【北京8日＝佐藤和雄】中国を訪問中の竹下登元首相は八日午前九時半（日本時間同十時半）から約三十分間、北京市内の人民大会堂で楊尚昆国家主席と会談した。楊主席は「中日両国の指導者は常に会い、二国間関係と世界の問題について意見交換することが重要だ」と述べ、日中関係発展のためにハイレベルの交流の必要性を強調した。これは、楊主席自身の訪日や天皇陛下の訪中実現などを念頭に置いた発言とみられる。

また、楊主席は「中日の友好協力関係の発展は外交上の重要な政策である」と述べ、改革・開放政策の推進のために竹下氏の協力を要請。竹下氏も「今後とも一生懸命努力したい」と約束した。

よりハイレベルの人的交流を

竹下元首相に楊国家主席表明

【北京8日倉重篤郎】中国を訪問中の竹下元首相は八日、北京の人民大会堂で楊尚昆国家主席と三十分間会談、楊氏は中国が中日友好関係の発展を重視していることを強調。先の江沢民総書記来日に触れ「中日関係はさらに発展させる必要がある。両国指導者は常に会い二国間関係および世界の問題について意見交換することが重要だ」と述べ、江沢民総書記よりさらにハイレベルの人的交流の必要性を強調した。同氏のこの発言は、両国間の懸案となっている天皇陛下の訪中問題などについて前向きの対応をとるよう期待感を表明したものとみられる。

これに対して竹下氏は「日中正常化二十周年行事が、すべて成功するよう努力したい」と述べるにとどまった。

竹下氏はこの後、李鵬首相と会談した。

竹下元首相あす中国訪問
日中関係調整へ意欲

5/4 A②

竹下登元首相は五日から八日まで中国を訪問し、江沢民・中国共産党総書記、李鵬首相ら中国側要人と会談する。中国側が求めている今秋の天皇陛下訪中に自民党内から強い反発が出るなど日中関係が「きしみ」を募らせている中で、「調整能力では政界随一」とされる竹下氏としては、両国関係の調整に一役買いたいとの考え。また、国連平和維持活動（PKO）協力法案への中国側の対応は、国会審議がやま場を迎えようとしているだけに、法案の成否にも影響を与えると見られ、内外から注目を集める訪中となりそうだ。

竹下氏の訪中は昨年五月以来、ちょうど一年ぶり。今回の訪中のきっかけとされているのは、劇団四季によるミュージカル「李香蘭」の大連での公演の鑑賞。三泊四日の短い日程の中、五日夕に呉学謙・副首相、六日には江沢民総書記、今月二十五日に日本を訪れる万里・全国人民代表大会常務委員長（日本では国会議長に当たる）、八日に李鵬首相と会談する。

焦点となっている天皇訪中問題については、竹下氏は昨年十二月に来日した田紀雲副首相から「促進する役割を果たしてほしい」と、協力を求められている。竹下氏が今年三月末に韓国を突然訪れ、盧泰愚大統領と会談した主な目的も、天皇訪中への理解を求めることにあったようだ。

しかし、天皇訪中への自民党内の「予想以上の反発」（外務省幹部）もあって、今回の訪中ではいまのところ、「こちらから直接言及するのは避けたい」（竹下氏周辺）考えだ。

とはいえ、この問題で竹下氏は「何とかして軟着陸させたい」と思案しているといわれ、今回の訪中をきっかけに、じわじわと調整を進めて合意を形成する「竹下流」の真価を発揮したいという意欲はある。

一方、PKO法案について四月上旬に来日した江総書記は慎重な対応を求めた。これに対し、宮沢首相が先の国会審議で「PKOをどの程度ご存じの上で答えたのか明確でない」と答弁するなど、中国側の真意を巡っては日本国内には論議がある。法案の修正で与野党の水面下の駆け引きが活発化する中で、江総書記の発言が変化するとすれば、国会審議に影を落とすことは間違いない。

②天皇ご訪問など焦点 竹下氏あす訪中

5/4 A

竹下元首相は五日から四日間、中国を訪問する。北京滞在中、江沢民中国共産党総書記、李鵬首相、万里全国人民代表大会（全人代）常務委員長などの中国側要人との会談が予定されている。

今回の訪問は中国外交部の招待。竹下氏は八日、北京で行われる日中友好環境保全センターの起工式への出席などを目的としているが、一連の会談で中国側は天皇陛下の中国ご訪問や国連平和維持活動（PKO）への自衛隊参加問題などを取り上げるものとみられる。

竹下氏としては、自民党内に、天皇陛下の中国ご訪問に反対論が強まってきたことや、宮沢首相が四月上旬の江沢民総書記との会談で表明した「引き続き真剣に検討する」などと述べたことを踏まえて日本の国内事情を重ねて説明、理解を求めるものとみられる。

また李鵬首相らは会談の中で、今秋に予定されている第十四回中国共産党大会を控え、保守、改革両派の人事抗争の行方などを切り出す可能性もあるとされ、中国首脳部の動向も占うことになりそうだ。竹下氏は北京から大連へも足を運び、八日夜、帰国する予定。

連合代表団が初の訪中
6日から1週間 中国労組と交流再開

A③

山岸章会長を団長とする本格的な連合の代表団が、六日から七日間の日程で初めて訪中する。

天安門事件後続けてきた中国の労組との交流凍結方針を転換、今後の交流について話し合うのが主要な目的。西側先進国の中央労働団体の中で、中国の労組と交流再開に踏み切るのは連合が初めて。会談では、中国の人権・労働基本権の現状についても、突っ込んだ意見交換が予想される。山岸会長はまた、江沢民中国共産党総書記ら党、政府の要人とも会談する予定。

八九年の天安門事件に伴い、連合の前身である当時の民間連合が国際自由労連（ICFTU）の方針に従い、中国との交流を凍結、連合もその方針を堅持してきた。しかし、九〇年の北京戒厳令解除で政財界や連合加盟労組が次々と中国と交流を再開している中で、アジアの労組との連帯を深めるためにも中国との交流が不可欠と判断、交流再開に踏み切った。

山岸会長ら一行は、六日に日本を出発、七日から九日にかけて中華全国総工会の倪志福主席ら労組幹部のほか、江沢民総書記とも会談する予定。その後、代表団は中国南部の広州、深圳を訪れ、十二日に帰国する。

万里氏、訪日に期待表明

5/4 ②Y

【北京3日＝藤野彰】中国を訪問中の桜内衆院議長（日本国際貿易促進協会会長）は三日、北京・釣魚台国賓館で、万里・全国人民代表大会（全人代）常務委員会委員長と会談した。中国新聞社電によると、万里氏は、今月二十五日からの自らの日本公式訪問について「両国人民の相互理解と友好を促進すると信じる」と語り、日中関係の強化が図られることへの期待感を表明した。

5/4 中国関係報道ぶり

6. 中国との意見交換等

橋本大使より行渋全人代日中友好議連会長
5/4

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する質問は調査班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

限定配布

極秘

電信写

総番号	R090242		主管
	月 4日	[redacted] 中国発	
平成 4年	5月 4日	本省着	アジア局長

外務大臣殿　　橋本大使

てん皇訪中問題（本使：フ・コウ全人代日中友好小組主席会見）

第１６０７号　極秘　至急（ゆう先処理）

（限定配布）

４日、本使は、てん皇へい下御訪中問題につきフ・コウ全人代日中友好小組主席とこん談したところ、その概要次の通り（先方コ・ギョウリ、当方サイトウ、ミツオカ同席）。

１．本使より、てん皇御訪中問題に関し、センカク・民間賠償・ＰＫＯ等、中国の党・政府に申し入れた概要を説明の上、全国人民代表大会としても、日本側に協力して、てん皇御訪中が実現するよう努力して欲しい旨要望すると共に、日本内部の御訪中にしん重ないし消極的なグループに反対の口実を与えないよう、やつかいな問題はとうみんさせて欲しい旨申し入れた。更に、てん皇御訪中問題に対する中国側の受け止め方、特に民間の動きにつき説明を求めた。

２．これに対し、フ・コウ主席は次の通り述べた。

（１）てん皇へい下の御訪中問題については、日本にも異なる意見があるし、中国の一部にも異なる意見がある。

（２）チョウ魚島（注：センカク諸島）の問題は、多年来のもので自分（フ・コウ）が駐日大使のおりにも、時として生じたことがある。この問題に対する中国側の立場は明確であり、たな上げの方針は変わつていない。先般もこの問題が表面化したが、中国側の従来の立場がそのまま出てきたまでである。この問題が日本の一部の人との間で議論を引き起こすこととなつたが、致し方のないことである。

（３）民間賠償の問題については、一部の全人代代表が法律の手続きに従つて、３０人以上が一しよになり議案を提出した。しかし、主席団はこれを正式の議題として採択せず、関係部門に対し内容を研究するように伝達したまでである。中国政府の立場は、中日共同声明において対日賠償請求権を放棄しており、この立

大臣	政務次官
事務次官	外務審議官
外務審議官	儀典長
官房長	秘書課
北米大使	経済大使
環境大使	査察使
総括審議官	外務研修所長
国際連合局長	条約局長
文化交流部長	厚生課
情報調査局長	研修所
領事移住部長	在外公館警備対策室
外務報道官	参事官
文化交流部長	審議官（一、二）
条約局長	参事官（政策、保健、対策、旅券）
領事移住部長	審議官（地球、中東） 参事官（北東、西一）
北米局長	審議官（一、二、保健、地球）
中南米局長	参事官（一、二）
欧亜局長	審議官（西一、ロ、洋一） 参事官（西東二）
	参事官（一二アア一二）
経済局長	次長 総括参事官 経済課長（経一、経二、国際機関、国際経済、エネ安、漁業）
	参事官（海洋、準備）
経済協力局長	審議官（政策、開発、無償、技術、有償、調査）
条約局長	審議官（条約、協定）
国際連合局長	審議官（政治、経済、人権、社会）
科学審議官	科学原子力参事官
情報調査局長	参事官（情報、分析、調査） 企画調整室

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

極秘

電信写

場に変わりはない。

（4）台湾及び海外の中国人は、民間賠償の問題を提起している。昨ばん、台湾の立法院議員をしたことのあるふるい政治家と夕食を共にしたが、同人の反日感情は強く、てん皇へい下の御訪中にも反対であつた。過去に侵略を受けた不ゆかいな歴史があり、感情の問題になつている。しかし、自分（フ・コウ）は、国と国との関係においては、過去の問題にとらわれることなく、正常な協力関係を発展させるべきであると主張している。

（5）中日双方に両国関係の発展をぼう害する人がいるが、中日双方は、「1つのてのひらでは音が出ない」ので、双方が共通の努力をして関係を発展させる必要がある。

（6）てん皇御訪中問題についての貴使の考えには、自分も基本的に同感であり、この問題につき日中双方が協力すべきであると考える。

3．本使より、全人代が民間賠償の問題を正式の議題としなかつたことを評価すると共に、中国側の内部でてん皇御訪中に反対する勢力は小さいものと理解して良いかと質したところ、フ・コウ主席は、中国の国内で影響力のある人で公にてん皇訪中に反対する者はいない、反対があつたとしてもその影響力は決して大きくはない旨答えた。（了）

06/09:58 [redacted] 1878 01/04 P01 R090200

file・万里訪日
・天皇訪中

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

極秘

電信写

[redacted] [redacted] 04－043

大臣	政務次官	運輸政務次官	外務審議官	儀典長	官房長

北米大使	経済大使	国連大使	査察審	参事官	外務審議官

総合政策	対口審	文化交流	厚生	情報	研修

警察庁	人事	領事	在外	儀典	監察	史料	オ

外務報道官	参事官	報道	内閣外政

文化交流	審議官	一	二

移住	参事官	政策	保健	対外経済	旅券

長	参事官	地球規模	情報	通信	一	二	西

北米局長	審議官	一	二	保健	地球

中南米局長	参事官	一	二

欧亜局	審議官	西欧	一	二	洋

近東アフリカ局長	参事官	一	二	アフリカ	一	二

経済局長	次長	総括	一	二	経済	一	二	途上国	一	二	国連	一	二	エネ安保

	参事官	海洋	審議官	準備

経済協力局長	審議官	政策	開発	無償

	審議官	調査	技術	有償

条約局長	審議官	条約	協定	規則

国連局長	審議官	政治	経済	人権

	審議官	軍縮	不拡散	原子力	社会

科学審議官	科学原子力

調査企画課長	参事官	総務	企画	調整	安全保障

総番号 R090200 主管

月 4日 [redacted] 中国発 亜中

平成 4年 5月 4日 本省着

外務大臣殿 橋本大使

万り全人代委員長の訪日（本使・フ・コウ全人代日中友好小組主席会見）

第１６０４号 極秘 至急（ゆう先処理） [redacted]

４日、本使は万り全人代委員長訪日につきフ・コウ全人代日中友好小組主席（万り委員長訪日に随行予定）とこん談したところ、その概要次の通り。（同席者：先方ーコ・ギョウリ外事局職員、当方ーサイトウ、ミツオカ）

１．本使より次の通り述べた。

万り委員長の訪日は国交正常化２０しゆう年をけいしゆくするための友好訪問であり、日中間の個々の懸案や意見の相違がある諸問題について、論議したり、問題提起をすることはないと了解するが中国側の見解如何。

また、てん皇へい下御訪中問題につき、何等かの申入れが、万り委員長によつて行われるか否か承知したい。

２．これに対しフ・コウ主席は次の通り述べた。

（１）万り委員長は中国の指導者の一人であり、全人代委員長というのみならず、国家の重要な政策立案・決定にも参画しており、中国の最高指導者の一人である。万り委員長の訪日は友好訪問であるが、コウ・タクミン総書記訪日に次ぐ重要な訪問である。今次訪日は日本の衆参両院議長の招きによる訪問であり、日中国交正常化２０しゆう年を記念するための重要な訪問である。日本国会の客として日本を友好訪問する訳であるが、各方面が万り委員長の訪日を重要視している。

（２）万り委員長訪日についての貴使の理解は万り委員長訪日の実際の状況に合致している。万り委員長は全人代委員長のかた書で訪日するので、日中間の個々の具体的問題について自ら進んで提起することはない。

（３）てん皇訪中問題については、先般、コウ・タクミン総書記が訪日した際、自らこの問題を提起した。てん皇訪中招請につき中国側には何らの変化もない。万り委員長がこの問題を提起するか否かについては、

極秘

電信写

全くの自分（フ・コウ）の考えであるが、この問題に触れる可能性はある。しかし、コウ総書記が既に申し入れているので、触れたとしてもそれはいわゆるぎれい的なものであろう。（了）

武大偉 山梅井中国駐在員

5/5

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡あ[illegible]たい。

極秘

電信写

限定配布

大臣	政務次官
事務次官	
外審	
外審	
官房長	
北大使	経大使
環大使	
査察大使	
総括審	
外研長	
欧亜局長	
経協力開発局長	
厚生大臣官房審議官	
情報調査局長	
科学技術庁長官	
警察庁長官	
電気通信監理官	
外務報道官	参報際内外
文化交流部長	審一二
参事官	参政保対旅外
領事移住部長	審地中東 参北東西
北米局長	審一二保地
中南米局長	参一二
欧州局長	審西ロ洋 西東
アジア局長	参一二アア
経済局長	次総経途 参経漁国 経エ国 安ネ二
	参海 審準
経済協力局長	審政国開無 審調技有理
条約局長	審条協規
国連局長	審政経人 審軍社
科学審議官	科原
情報調査局長	参情析調 企安

総番号 R092111

主管

月 6日 [redacted] 中国発 アジア局長

平成 4年 5月 6日 本省着

外務大臣殿 橋本大使

てん皇訪中問題

第１６５９号 極秘 至急（ゆう先処理）

（限定配布）

５日、武大イ外交部日本処長と当地出張中のタルイ中国課長がこん談したところ、てん皇へい下御訪中に関して武処長が述べたところ次の通り。

１．ハシモト大使より少くともてん皇へい下御訪中までの期間及び御訪中後の一定期間において日中間でなみかぜが立たないことが必要不可欠の条件であるとの説明をうかがつているところ、中国側としてはこれを十分に理解しその方向で努力してきた。（当方より右についてはわが方も承知しており、評価している旨発言。）

実を言えば、コウ・タクミン総書記は先般の訪日の前にトウ・小平氏と本件問題につき直接話し合つており、両指導者ともてん皇へい下御訪中に極めて強い期待をいだいている。

２．日本国内の現在の状況は報道等で承知しているが、中国国内ではミヤザワ総理とワタナベ副総理に対する評価が極めて高く、強い信頼感をいだいている。従つて、現段階で中国側が本件問題についてとやかく言う積りはなく、御二人の強力な指導者が真けんに検討されているから大じよう夫であるとの空気が強い。

３．（質問に対して）今秋の党大会はおそらく１０月中旬までに終了するであろう。（了）

外務省

橋本大佐山縣政信、武大佐

5/18

極秘

主管課緊急処理用

大臣	政務次官	事務次官	外務審議官	外務審議官	儀典長	官房長
北大使	経済大使	環境大使	査察審議官	総括審議官	外務報道官	研修所長

| 総合外交政策局 | 国際法局 | 条約局 | 文化交流部 | 領事局 | 人権人道大使 | 情報通信課題担当大使 | 国際情報統括官 | 警備局長 | 出入国管理局長 | 在外邦人等保護対策室 | 旅券課 | 外務報道官 | 参事官（報道） | 参事官（国際報道） | 文化交流・在外広報課長 | 審議官（一） | 参事官（政策） | 参事官（保秘） | 参事官（対外関係） | 領事局長 | 審議官（地球） | 審議官（中東） | 参事官（二） | 参事官（北東アジア） | 北米局長 | 審議官（一） | 審議官（二） | 保地 | 中南米局長 | 参事官（一） | 審議官（一） | 欧州局長 | 審議官（西欧） | 審議官（西欧） | 参事官（一） | 参事官（二） | 参事官（アジア大洋州） | 審議官（一） | 審議官（二） | 経済局長 | 次長 | 総括審議官 | 参事官（途上国） | 参事官（経済連携） | 参事官（エネルギー安全保障） | 国際法局長 | 参事官（海洋） | 審議官（海洋） | 経済協力局長 | 審議官（政府開発援助） | 審議官（無償資金協力） | 審議官（技術協力） | 条約局長 | 審議官（条約） | 国際協力局長 | 審議官（人間開発） | 審議官（地球規模課題） | 国際社会協力部長 | 軍縮不拡散・科学部長 | 科学原子力課長 | 情報調査局長 | 参事官（情報収集衛星） | 参事官（調査企画） | 国際安全保障課長 |
|---|---|---|---|---|---|---

修改信 副部長 山谷野ファジア局長

5/31

極秘
無期限
部の内
号
極秘第 39 号

報告・供覧

○大臣 (秘書官) 政務次官 事務次官 ○外務審議官 外務審議官 ○官房長 (正)	主管 アジア局長 御了承 参事官 御了承 (中国課長 (出張中) 当席事務官)	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4年 6月 9日 完結 平成 年 月 日 起案者 電話番号 丸山 2431

回覧先

○儀典長

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

陛下の御訪中問題について
(谷野アジア局長と孫敬信中日外交部副部長との会談)

(別紙の要点等)

GA－7 (昭和63. 4. 1改正) 外務省

回覧番号

極秘
無期限
部の内
号

31日、谷野アジア局長は、徐敦信中国外交部副部長(訪日中の万里全人代委員長に同行し、大阪に滞在中)を往訪し、天皇陛下御訪中問題、ＰＫＯ法案等につき意見交換を行ったところ概要以下の通り。(当方高野参事官同席)

１．天皇訪中問題

(１) 冒頭谷野局長より以下の通り発言した。

(イ) 本日は、陛下の御訪中問題についての現状を改めて説明するために来訪した次第。本件に関する私共の考え方、国内の状況については、橋本大使より貴次官にも既にくわしく御話ししていると承知している。外務省としては、大臣以下、引き続き本件につき国内において理解と支持を得るべく努力を続けているが、自民党の中、経済界長老の一部等に依然御訪中に対する強い慎重論がある。プレスについては、最近良い方向で論調が出てきている。「読売」については、自分(谷野)は論説委員長以下と話をしたが、本件については、支持の立場。「サンケイ」についても、せいぜい条件づき賛成ではないかと思う。「サンケイ」は、訪中賛成、反対の両論をのせているが、自分(谷野)は心配していない。

本件に対する諸外国の反応については、問題は米・韓であるが、政府に関する限り、理解を得られるものと思っている。他方、米議会及び米国のプレス(例.ＮＹタイムス、ワシントンポスト等)からは、彼らが中国を見る目はまだまだ厳しいので批判的反応が出てくることは

極秘
無期限
部の内
号

我々として覚悟している。韓国プレスからは、何故韓国が先でないのかといった反応がありうる。

御訪中の可否の決定のタイミングについては、ＰＫＯ法案が、６月21日の国会会期末までに成立の見込みであるが、いずれにせよそれ以前は諸般の事情よりして難しいであろう。我々としては６月一杯を目途に何とか積極的な結論が得られるよう引き続き努力したい。他方、最悪の場合は、参院選後、すなわち７月一杯かかるかもしれない。ともあれ、事務当局としては、準備の都合もあり、ぜひ早急に結論を出したいと考えている。仮に７月末にずれ込んだ場合、中国側の対応は可能であるかうかがいたい。

（ロ）次にＰＫＯ法案について。ＰＫＯ法案の今後のスケジュールは、自民、公明、民社三党による修正案が明日（６月１日）、提出される。修正の主なポイントは、第一にＰＫＦ（兵力引き離し、地雷の撤去等）については凍結するということ、第二に将来凍結を解除する場合にも国会の事前承認が必要であることの２点である。この修正法案には、社会党は反対するであろうが、今会期中に成立する見込みである。社会党の反対の重要な根拠に「中国の懸念」がある。我々としては、今回の法案は（ましてや修正案ということになればなおさらのこと）二重、三重のしばりがかけられており、特に、修正案については、貴国に更に配慮した内容になっていると考える。いずれにせよ、法案成立後、法案の趣旨をあらためて速やかに橋本大使より貴国政府要路に、小和田次官より楊大使に説明することとする。因みに、アジア諸国からは貴国の他には、韓国から懸念表明があるのみで、その他の国につ

いては積極的に支持する向きも多い。

さて、以下は御相談であるが、貴国から表明されている懸念、その背後にある貴国の国内事情については理解するところ、法案の成立時に中国の懸念に対応するために例えば、総理大臣談話を出すことは如何。本件については、まだ総理とは話をしていないが、中身は「日本は、軍事大国の道を再び歩まないとの方針は不変。アジア諸国の懸念には引き続き配慮していく」等が考えられる。陛下の御訪中実現のためには、自民党内の声を踏まえると、貴国には、法案成立時にこれを支持はしなくとも、黙っていていただくという対応はいただけないものだろうか。すなわち我々の希望を申し上げれば、中国側より一切の反応を出さずに、質問があれば、例えば「本件は国連と日本の間で決めること」、「コメントを差し控える」、「総理の談話に留意する」等の対応ですますことはできないであろうか。貴国より再度、「自衛隊の派兵は慎重にして欲しい」等の反応があれば、自民党内を刺激することになる。陛下の御訪中問題にも良い影響はないであろう。

（2）これに対し、徐敦信副部長は以下の通り発言。

（イ）御訪中問題についての只今の説明を了解した。決定時期は6月でも7月でも結構である。日本の決定を辛抱強く待つということは、橋本大使にもお伝えしてある通り。我々は本件について、渡辺大臣及び外務省事務当局がいろいろ努力されていることを十分承知している。

（ロ）ＰＫＯの問題については、我々の認識は、この問題は陛下の御訪中問題とは無関係ということである。若干関係があるとすれば、本

件が、御訪中問題の結論を出す時期と重なっているということである。中国の考え方は、江沢民総書記訪日の際申し上げた通り、日本はこの敏感な問題に慎重に対処して欲しいというもの。他方中国政府は、この敏感な問題に対してこれ迄十分自制的な態度を持して来ていると考える。今、局長が述べられた総理談話のアイデアは自分(徐)は良い方法だと思う。我々は、そのようなものがあれば助かる。但し、ＰＫＯ法案について中国一般大衆の基本的な受け取り方は「軍隊を再び出す」というものであり、右は極めて敏感な問題である。黙っておれと言われても、本件は在北京の日本の特派員たちが必ず聞いて来る。我々が求めてコメントを出しているのではない。

（３）これに対し、谷野局長より、中国の工兵隊もカンボディアで活動を行っており、在「カ」今川大使の報告によれば、彼らは、日本からも早くきてもらい一緒に仕事をしたいと言っている由である旨を紹介しつつ、いずれにせよ、我々は、中国以上のことをやろうというわけではないのだから理解してもらいたいと述べた。(これに対し、徐副部長は自分たちは日本の考えは、よく分かっているのですと何回も述べていた。)これに対し、徐副部長は、ＰＫＯ法案に係る中国の反応については、日本のマスコミが大きな関心を有している。彼らに聞かれることは必至であり、聞かれれば、「慎重にやって欲しい」と従来のラインを繰り返すことになろう。他方ＰＫＯ法案の成立は中国側としては天皇訪中問題に影響を与えるものでは全くない旨応答した。

２．その他

（１）谷野局長より在長崎中国総領事館総領事が長らく空席であることを指摘し、現地は後任者が早急に任命されることを希望していると述べたのに対し、先方は現在、人選を進めているところであり、早急に決めたい旨発言。

（２）谷野局長より、在北京サンケイ新聞支局の設置問題につき、その意義にふれつつこれの認可は同社台湾の支局を閉鎖することが前提か質問したところ、徐副部長よりは、かかる前提は存在しない。サンケイ新聞は中日共同声明の原則を遵守し、その政治姿勢を改める必要がある旨応答した。（例えば中華民国という表現を紙面で多用。台湾の双十節に大きな祝賀の広告を出す等。）

（了）

加藤官房長官臨時会見

6/19

限定配布

極秘第 44 号

※総第 06366964号001公館宛

平成 ※平成 4 6 19
17 時 8 分 0 日 秒受付

極秘
無期限
7 部の内
7 号

電信案

電信課長

大臣 7-1
秘書官
政務次官
事務次官 7-2 (E部より)
外務審議官 7-4
外務審議官
官房長 7-3-4 (E)

主管
アジア局長 7-6
審議官
中国課長
首席事務官

※発電係 1729 2

起案
平成 4 年 6 月 19 日

起案者 泉 電話番号 2426

協議先

儀典長 7-5

(※印欄内は電信課記入)

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名
天皇陛下ご訪中(宮務官の楊中国次長への発言)

主管・文書記号	※電番	大至急 / 普通	至急(優先処理)	パターン・コード
アジア局長	第1703号			

転電
転送 在
転報

※転電番号

大使・総領事あて

大至急 至急
普通 (優先処理)

(八〇字)

「限定配布」

※

06366964 優先 TYUUGOKU 漢 自暗

GB-1 外務省 回覧番号

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(昭和六三・六・二十改正)

極秘
無期限
部の内
号

１９日、休暇帰国を前にした楊振亜中国大使は、挨拶をかねて加藤官房長官を往訪したところ、その際の天皇陛下御訪中問題に関するやりとり次の通り（樽井中国課長、河野秘書官同席）。

（官房長官）：総理は本件御訪問を実施させたいとの気持ちで努力している。これまで日中両国政府は論議が起こらないよう努力してきたところであり、特に中国側がこの点につき大きな努力を払ってこられたことをよく承知している。まだもう少し時間のかかるプロセスかなと感じるが、総理は何とか頑張ってみたいとしている。中国側におかれても、現在の姿勢を維持していっていただきたい。近々橋本大使が帰国する予定であるが、党内外のキーパーソンに状況を説明してもらうこととしている。

（楊大使）：橋本大使は大変積極的に努力しておられる。自分としても自民党の事情は知っているつもりであり、中国側としては冷静かつ慎重な態度を取ってきた。例えば、民間賠償の問題についていえば、個人の活動を強制的に押さえ込むことはできないが、全人代は本件を重視しておらず、現に人民日報は本件につき一切報道したことはない。

（官房長官）：先日のプレス・クラブにおける総理発言は質問に応じて答えたものであるが、総理としては、世論形成の上でプレスの動きは極めて重要であると考えており、この際考え方を率直に述べ、出方を見た方が良いと判断されたようだ。この発言のタイミングについてい

えば、冷却期間との関係でリスクをおかすものであった。現に自民党内では早速論議が起こっている。しかしながら総理としては、自分の考えを一言述べ置きたいとの判断があったようである。

（楊大使）：日本の世論は良い方向に向いているのではないかと感じている。

（官房長官）：自分も良い方向が出てきていると感じている。最近では、民間賠償や尖閣の問題が出てきてはいない。慰安婦の問題についても、中国側はこれを正式に提起しておらず、ＰＫＯ法案に関しても、中国側は抑制された態度を維持しておられることはよく分かっているつもりである。自民党内には自分たちが何をいっても態度を変えない中国に対する警戒心や恐れがあり、中国はこのような態度を改めてほしいとの気持ちがあるようだ。お互いに譲り合ってこそ、良好な関係が維持できるということだろう。自民党内の御訪中反対論者の論拠はいろいろとあるようだが、大きなものとしては２つあるようだ。１つは、大国中国に将来飲み込まれてしまうのではないか、といった恐怖感である。他方で中国側は日本の経済力についての過大評価があり、過去の問題ともからめて、恐怖心を持っているやに見受けられる。このように双方共が、相手を過大に評価していると、外交はうまく行かないと想う。第２の理由は、靖国神社問題であり、国のために戦死したものを弔うのがなぜ悪いのかといった反発がある。本件については中国側にも言い分のあることは承知しているが、自民党議員の対中反発の

極秘
無期限
部の内
号

根底には本件問題があるようだ。以上２つが大きな理由であり、尖閣諸島問題、民間賠償問題はこれに比べれば小さな問題に過ぎない。いずれにしろ、６０代、７０代の党員の中国感は多少我々とは違うようだ。

（楊大使）：ご指摘の諸点は深いところで歴史に関わってくる問題である。いずれにしろ、中国は発展しても日本に対する脅威にはなりえない。ともかく現在は膨大な人口を養うので精一杯である。

（官房長官）：個人的考えだが、アジアにおける核兵器及び通常兵器の完全軍縮が実現すれば、完全ではないまでも相互の恐怖心は除去できるものと思っている。

（楊大使）：現在のアジア情勢は比較的安定しており、日中友好関係の発展は、これらに良い影響を与えるであろう。そういった意味で、日中関係の重みはますます強まっているといえる。天皇御訪中は大事業であり、国交正常化２０周年の本年が絶好の機会であると考えている。日中二千年の往来の中で、元首の往来は一度もない。この面での空白をぜひ突破したいと考えている。いずれにせよ、本件実現のために静かに努力していきたいと考えている。（これに対し官房長官より同感である旨応答。）

（了）

吳邦正

全國人民代表大會委員長

萬里

五里沢日時の振り（橋本哲也氏修正）

5/18

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡あられたい。

限定配布

極秘

電信写

		一

大臣	政務次官
事務次官	外務審議官
外務大臣官房長	
北米局長	経済局長
環境庁大気保全局長	総合外交政策局長
大使	査察審議官
外務報道官	参事官（報道）
文化交流部長	参事官（対外広報）
国際協力局長	参事官（総括）
領事移住部長	参事官（在外邦人保護）
条約局長	参事官（国際情報）
中南米局長	参事官（警察庁）
欧亜局長	参事官（海上保安庁）
経済協力局長	参事官（原子力）
軍縮課長	参事官（宇宙開発）
国際法局長	参事官（科学技術）
国際社会協力部長	参事官（経済安全保障）
国際情報局長	参事官（情報調査）
科学審議官	参事官（企画調整）

総番号 R101293

平成 4年 5月 19日

[redacted]

月 19日

主管

中国発

本省着

アジア局長

外務大臣殿

橋本大使

万リ全人代委員長の訪日

第１８５７号 極秘 大至急

（限定配布）

１８日、本使は、ジョ・トンシン外交部副部長と万リ全人代委員長訪日時の日中双方の対処振り等につき意見交換を行つたところ、右概要次の通り。（中国側：武大イ日本処長、ゴ・コウコウ同処員、日本側：マキタ、ヌマタ同席）

１．本使より、万リ委員長が今般訪日されるに当たり、セン閣問題やＰＫＯ問題等個別の懸案事項には触れないものと思うが、てん皇訪中問題については如何なる対応を考えておられるのかと問うた。

２．これに対し、ジョ副部長より本使の意見は如何と問うて来たので、本使より、率直かつきたんのない意見を言えば、本件についても触れていただかない方が良いと思うが、問題は、万リ委員長がてん皇へい下に会見される際の対応振りである。へい下の御訪中をお待ちするとの話は流れとして当然出てこようが、新聞発表は行わないという方向が良いのではないかと思う旨応答。

３．ジョ副部長より、貴使のご意見は参考になると思う。自分（ジョ）個人としては、万リ委員長訪日時に中国側から進んで本件に触れない方が良いという貴使のご意見には賛成であり、２０日に万リ委員長に直接会う機会があるので、この点は同委員長に自分よりしつかりとブリーフしておく。論理的には、本年４月に訪日したコウ・タクミン総書記が、誠心誠意をもつてん皇へい下の御訪中につき御招請申し上げ、ミヤザワ総理からは真けんかつ積極的に検討するとの回答をいただいている、中国側はその結果をお待ちしているところであるので、万リ委員長が再度かかる形での招請を申し上げる必要はないと思う。今回の万リ委員長の訪日は、百パーセント友好・親善訪問である。ただし、貴使御指摘の通り、へい下との会見時、自然の流れとして本件話が出てくることは排除されず、右について新聞発表をしないという点についても理解はする

外務省

R101293-02

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

極秘

電信写

が、問題はむしろ中国側というより日本側において新聞発表はしないとの保証が出来るか否かではないかと述べるところがあつた。

4．よつて、本使より、それならば、てん皇へい下の御えつ見の際にも、双方が極力、御訪中問題についての話題をさけ、日本の新聞等で雑音が出ないようにしようと述べたところ、先方は、それが今の時期には一番良いと答えた。（了）

外務省

石里記日用花笑要領（名古屋合用）

極秘
無期限
部内号

決裁書

大臣	主管	保存期間
秘書官	○アジア局長	1類（永久） 2類（10年） 3類（5年） 4類（1年）
政務次官	~~審議官~~	起案 平成 4 年 5 月 19 日
○事務次官	中国課長	決裁 平成 年 月 日
外務審議官	首席事務官	起案者 泉 電話番号 2426
外務審議官		
官房長		

協議先

（大臣用には大きな字でコピーを）

コピー決裁
○儀典官
（天皇陛下御訪中 応答要領部分のみ）

了 北米第一課長
決裁後20部一等書記官
（大臣メッセージ部分のみ）

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件名

万里全人代常務委員長の訪日（渡辺大臣用資料）

本件起案は26日の大臣応答会で使用

GA－1（昭和63．4．1改正）　外務省　回覧番号

【応答要領】天皇陛下御訪中

（中国側より、「日中の最高指導者間の交流を更に一層進めることは有意義」等の間接的言い回しで、天皇陛下の御訪中につき期待感の表明がある場合、）

答．日中両国民の間の相互理解と相互信頼の絆を更に強めていくためにも、かかる交流は大変意義深いものと思料する。

（中国側より、「本年秋の天皇陛下の御訪中を心より歓迎申し上げる」等の直接的言い回しで、天皇陛下の御訪中につき招請がある場合、）

答．天皇陛下の御訪中については、これが実現されれば、日中関係にとって真に意義深いことと考える。政府内では貴国の累次に亘る招請を踏まえ、現在本件を真剣に検討しているところ。

（注）中国側は事前に言及してこないと思われる。我から言い出すことは無いようにしたい。

天皇陛下の五里霧天への「お言葉」(案)

不要の折は御返却願います。

極秘
無期限
6 部の内
5 号

決　裁　書

大臣 秘書官 ~~政務次官~~ ○事務次官 ○外務審議官 ~~外務審議官~~ 官房長	主管 アジア局長 cc 審議官 中国課長 首席事務官	保・存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4 年 5 月 19 日 決裁 平成 年 月 日 起案者 泉 電話番号 2426

協議先

○儀典長

儀典官

下記の件に関し、決裁を求めます。（関係文書別添）

件名

天皇陛下の五里全人代委員長へのお言葉（案）

天皇陛下の万里全人代常務委員長へのお言葉（案）

92.5.19
中国課

２６日に予定されている天皇陛下の万里中国全国人民代表大会常務委員長ご引見の際の陛下よりのお言葉ぶり（案）については、先の江沢民総書記訪日時の例（別添）をも参考の上、下記の通りとし、宮内庁に提出することと致したい。（陛下の御訪中に対する招請がある場合の応答要領も合わせ提出することと致したい。）

記

天皇陛下より万里全人代常務委員長へのお言葉ぶり（案）

１．貴委員長閣下が、我が国を御訪問になりましたことを、心から歓迎します。また、初めてお会い出来たことを心より嬉しく思います。

２．本年は、日中国交正常化２０周年に当りますが、この間我が国と貴国との関係が順調な発展を遂げてきたことは、誠に喜びにたえません。この記念すべき年に当たり、貴委員長を我が国にお迎え出来ましたことは、両国国民間の相互理解を一層深め、友好親善関係を更に増進させる上で大変有意義であると思います。

3．貴国は、現在、政治と経済の両面に亘る改革・開放政策を掲げられ、国内建設に大胆に取り組んでおられますが、貴委員長はその当初より改革・開放の陣頭に立たれ、日夜ご尽力されてこられたと聴き及んでいます。貴委員長が引き続きその卓越した指導力を発揮され、立派な成果を収められますようお祈りします。

4．貴委員長は、今回の我が国滞在中、東京の外、札幌、高松、岡山、大阪の各地を訪問され、広く我が国国民各層との交流を行なわれるご予定と承知しています。我が国の実情を十分に御覧頂くとともに、広く友好増進の実を挙げられることを希望いたします。

5．我が国は、丁度、青葉が目に鮮やかな季節にあたっております。各地方への訪問日程は大変忙しいものと伺っておりますが、貴委員長が、我が国各地の風光を十分にお楽しみ頂けるよう希望いたします。

【応答要領】

（万里委員長より、天皇・皇后両陛下の本年秋の中国御訪問を招請申し上げる等の話がある場合、）

答．現在、政府内において真剣に検討しているところと承知しています。~~が、そのような機会があれば嬉しく思います~~。

（了）

（別添）

天皇陛下より江沢民中華人民共和国共産党総書記へのお言葉ぶり

一、貴総書記閣下が、我が国を御訪問になりましたことを、心から歓迎しますとともに、初めてお会い出来たことを大変嬉しく思います。

二、本年は、日中国交正常化二十周年に当たりますが、この間我が国と貴国との関係が順調な発展を遂げてきたことは、誠に喜びにたえません。この記念すべき年に当たり、貴総書記を我が国にお迎えできましたことは、両国の相互理解を深め、親善関係を一層増進させる上で大変有意義であると思います。

三、貴国は、現在、政治と経済の両面にわたる改革・開放政策を掲げられ、国内建設に大胆に取り組んでおられますが、貴総書記はその陣頭に立たれ、日夜ご尽力されておられるとお聞きしています。貴総書記がその卓越した指導力を発揮され、立派な成果を収められますようお祈りいたします。

四、貴総書記は、今回の我が国滞在中、東京を起点に大阪、岡山、福岡の各地方を見学され、我が国国民各層との交流を行われる御予定と承知しています。我が国の実状を十分にご覧頂くとともに、広く友好増進の実を挙げられることを希望いたします。

五、御多忙な日程と伺っておりますが、貴総書記が、満開の桜を始めとする我が国の春の風物を十分にお楽しみ下さるよう希望します。

【応答要領】

（江沢民総書記より、天皇・皇后両陛下の本年秋の中国御訪問を招請申し上げる等の話がある場合、）

答、現在、政府内において真剣に検討していることと承知していますが、そのような機会があれば嬉しく思います。

部内連絡 安木（発電せず）

（佐月、橋本大伏よりも同様の問題点減につき電話連絡あり。）

発電せず

※総第

※平成　　年　　月　　日
　　時　　分　　秒受付

極秘
無期限
部内
号

電信案

電信課長			
~~大臣~~ ~~秘書官~~ ~~政務次官~~ 事務次官 ~~外務審議官~~ ~~外務審議官~~ 官房長	主管 ○アジア局長 ~~審議官~~ 中国課長 首席事務官	※発電係　1　2 起案 平成 4 年 5 月 20 日 起案者　泉　電話番号　2426	（※印欄内は電信課記入）

協議先

総務課長

在　中国　大使 総領事 あて　外務大臣 発

件名　部内連絡

主管・文書記号	※電番	大至急 至急（優先処理）普通	パターン・コード
アジア局長			

転電 転送 在 転報	※転電番号 大使・総領事あて	大至急　至急 普通　（優先処理）

（八〇字）

※

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（昭和六三・六・二十改正）

GB-1　　外務省　　回覧番号

貴電第１８５７号４に関し、

谷野アジア局長より

１．天皇陛下の御訪中問題については、今次万里委員長の訪日にあたっても、日中間で新聞等で雑音が発生し御訪中決定に悪影響を生ずることを極力避ける努力を行なう必要があり、本件に関する貴使のご努力については本省において極めて多としているところであります。

２．他方、万里委員長が全く本件に言及しなかったこととすれば、却って余計な憶測（「中国側は招請を断念した」、「陛下の御訪中問題は一歩後退」等の見出し記事）を招き、御訪中決定に逆の影響を与えることとなりかねないとの点が懸念されます。

３．従って、天皇陛下の万里委員長のご引見の際には、我が国プレスも自然に予想しているシナリオに沿って淡々と処理することとしては如何かと考えております。すなわち、万里委員長より先般行なわれた江沢民総書記よりの御招請に触れ（改めて招請するとの形としない方が良い）、これに対し陛下より「政府にて検討中と承知」とのラインで応答していただくことにしたいと思います（このやり取りはプレスにも公表する）。

４．上記につき貴使にて特段の御異存がなければ、あらかじめ貴館より中国側にご説明おきいただければ幸甚です。

（了）

天皇陛下の五里安島御引見（記録）

5/26

極秘
無期限

秘
無期限
部の内
号

天皇陛下の万里委員長御引見

平4、5、26

中国課

[redacted]

以下、５ページは非公開。

部内連絡

極秘
無期限
部の内号
5—4

※総第　054299号001公館宛

平成4年5月27日 1時3分47秒受付

電信案

電信課長

大臣 / 秘書官	主管	※発電係 1 2
政務次官	アジア局長	起案 平成4年5月26日
事務次官	審議官	起案者 泉
外務審議官	中国課長	電話番号 2426
外務審議官	首席事務官	
官房長		

協議先 総務課長

（※白欄内は電信課記入）

在 中国 庁便 総領事 あて 外務大臣 発

件名 （部内連絡）

主管・文書記号	※電番	大至急 / 普通	パターン・コード
アジア局長		至急（優先処理）	

転電
転送 在
転報

※転電番号

大使・総領事あて

大至急　至急
普通　（優先処理）

（八〇字）

谷野アジア局長より、

26日午後の天皇陛下の万里全人代常務委員長ご引見（約30分間）の際の模様は以下の通りです。

※

05429971　優先　TYUUGOKU　部内　自暗

GB-1　外務省

回覧番号

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（昭和六三・六・三十改正）

以下、６ページは非公開。

天皇陛下の万里平安御祈り　5/26

（中国プレス報道ぶり）

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－035

総番号	R108339		主管
	月 28日 [redacted]	中国発	亜中
平成 4年 5月 28日 [redacted]		本省着	

外務大臣殿　　橋本大使

日中関係（２７日付報道振り）

第１９９２号 [redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＰＫ９９３３－０４）

大臣 政務次官 事務次官 外審議官 外審官 儀典長
北米局長 経済局長 大使 アジア大使 総括審議官 査察大使 外務研修所長
総合外交政策局長 国際情報統括官 人権人道大使 在外邦人保護審議官 儀典長 警察庁長官 史料館長
外務報道官 参事官 報道官 内閣参事官
文化交流・在外邦人課長 審議官 一等書記官 二等書記官
参事官 政策企画室長 保健衛生対策室長 旅券課長 外国人課長
領事局長 審議官 地球規模課題総括 東南アジア第一課長 東南アジア第二課長 参事官 北東アジア課長 西欧課長
北米局長 審議官 日米安全保障条約課長 地位協定室長
中南米局長 参事官 一等書記官 二等書記官
欧州局長 審議官 西欧課長 西欧第一課長 西欧第二課長 東欧課長
アジア大洋州局長 参事官 アジア太平洋地域協力室長 アジア大洋州第一課長 アジア大洋州第二課長
経済局長 参事官 経済連携課長 国際経済課長 国際貿易課長 国際エネルギー課長 経済安全保障室長
総合外交政策局長 参事官 海洋政策担当大使 審議官 国際法局長
経済局次長 審議官 政府開発援助調整課長 国際開発協力課長 無償資金協力課長 技術協力課長 有償資金協力課長
条約局長 審議官 条約課長 国際協定課長
国際法局長 審議官 国際司法共助課長 国際安全保障課長 軍縮不拡散・科学部長
科学審議官 科学原子力課長
情報調査局長 参事官 分析課長 国際情報官 安全保障政策企画官

２７日付日本関係記事は以下のとおり。（末尾（　）内は掲載紙、掲載面）

１．「日本の天皇、万里と会見」「宮沢万里との会見時に両国の友好関係発展の促進を希望」

２６日、日本の天皇明仁は、全人大常務委員会委員長万里と会見した。

万里委員長は「今回貴国を訪問し、衆参両院議長及び各界友人から歓待を受け、本日、天皇陛下とお会いできてうれしい。まず、楊尚昆主席及び江沢民総書記から天皇陛下へのご挨拶を伝えたい。」と述べた。

天皇明仁は「今年は国交正常化２０周年であり、２０年来、両国関係が順調に発展していることは喜ばしい。万里委員長の来訪を熱烈に歓迎する。中日両国は隣国であり、両国の友好関係の発展は大変良いことである。あなたの訪日が、平和に資する両国人民の相互理解及び両国友好関係の発展を助けることを希望する。」と述べた。

万里委員長は「両国友好関係の発展は両国人民が望んでいることで、我々は、現在両国に既に存在する友好関係が絶えず発展し、世世代代引き継がれていくことを希望する。」と述べた。

両国の歴史文化における交流にふれた際、万里委員長は、「中日両国は文化において多くの共通点があると感じており、最近、天皇皇后両陛下が東京で開催された曽候乙墓展を参観されたと聞き、うれしい。」と述べた。

明仁天皇は、中国の悠久の文化は、過去日本に大きな影響を及ぼしたと述べるとともに、最近、曽候乙墓展を参観した際、出土した貴重な文物に興味を持ったと述べた。さらに、楊尚昆主席、江沢民総書記によろしく伝えるよう依頼した。

２６日、宮沢首相は万里委員長一行と会見した。

宮沢首相は、国交正常化２０周年を迎えて閣下の訪日は錦上花を添えるもので、総理として熱烈に歓迎すると述べた。

万里委員長は、今回貴国を訪問し、本日、宮沢首相とお会いできてうれしいと述べ、江沢民総書記及び李鵬総理から宮沢首相への挨拶を伝えた。また、国交正常化以後、各分野での交流が発展してきており、国交正常化は両国政治家の先見の明のある決断であったと述べた。さらに、今回の訪問では衆参両院、政府などから熱烈な歓迎を受け、中日両国のハイレベルでの交流は両国の友好

協力を促進する上で有益だと思うと述べた。

宮沢首相は、江沢民総書記及び李鵬総理に感謝の意を表した。また、２０年前は、まだ困難があったが、先輩が重要な決断をし、現在、両国の関係は大変発展していると述べるとともに、江沢民総書記訪問は大変な成功を収め、当時、江総書記と会談をしたと述べた。さらに、現在、日中関係は両国だけの関係でなく、世界の平和と安定に貢献する重要な関係であり、両国関係の発展は非常に重要と述べた。宮沢は、また、日本は軍国主義の道を歩まないと述べた。

万里委員長は、２０年来、両国政府人民の努力を経て、中日両国の関係は大変良く、満足すべきものであり、事実、両国の友好は両国人民に利益となり、アジア・太平洋地区及び世界の平和と安定にも役割を果たしている、と述べた。

万里委員長は宮沢首相の求めにより、以下のとおり中国の改革開放の状況を説明した。鄧小平が南方を視察した後、中国は改革開放の足どりを早めた。我々は“１つの中心、２つの基本点”の基本路線を堅持し、百年間不変である。今年の第７期全人大第５回会議で改革開放を加速し、経済の発展を促進する決議がなされた。鄧小平同志は、一切の先進国家から先進的科学技術及び先進的管理経験を学ばなければならないと提案した。また、日本は経済大国で中国とは近隣の国であることから日本からも学習しなければならないと述べた。

宮沢首相は、中国の改革開放を助けるため、日本は借款、エネルギー開発の面で協力を推進しており、また、現在、中国は今後の経済発展のため、基礎を築いており、中国が希望するなら日本は協力及び支持を惜しまないと述べた。

万里委員長は以下のとおり述べた。中国の当面の改革の主要点は大中型企業の活性化であり、方向としては大中型企業を市場化に向かわせ、科学技術で大改造することで、これが成功すれば国家経済は大変な発展を遂げるであろう。農業改革も重要な役割を発揮しており、人口が多く土地が少ないという状況の下で温飽（衣食足りること）を実現している。農業をより一層市場経済に向かわせるため、今後、さらに農業改革を実施し、科学技術の投入を強化して農業をさらに発展させる。現在、中国国内の政治・社会は安定しており、周辺国家との関係も非常によい。また、１０数年の改革開放を経て、経験を積み、大変有利な時期である。この時期を逃さず、精力を集中して経済を向上させたい。

（人民日報、１・４面）

2．「万里、日本の衆参両院議長と会見」

全人大委員長の万里は、２６日、長田参院議長と会見した。

長田議長は、１９７８年の日中両国議会の交流開始以来、中国は、鄧穎超副委員長などが日本を訪問したが、今回の万里委員長の訪日により、両国の密接な議会の交流は成熟の段階に入り、日中両国人民の相互理解及び信頼関係を増進する上で積極的かつ重要な役割を果たすと述べた。

長田は、両国関係が一層発展するよう希望するとともに、日中両国がアジア太平洋地区の良きパートナーとして積極的に世界の平和と安定に貢献するよう希望すると述べた。また、改革開放政策が成功し、人民の生活水準が高くなっていることを祝福した。

万里は、中日平和友好条約締結以来、両国議会の間に正式の関係が建立され、交流が活発になっているのは喜ばしいと述べた。また、両国議会の間の交流は両国の交流の重要な道筋となっており、相互理解及び信頼を増進し、両国の友好関係を促進する上で積極的な役割を絶えず発揮していると述べた。

さらに、現在、中国の特色ある社会主義を建設し、改革を深化し、開放を拡大し経済発展の速度を加速しようとしている。中国の経済発展は両国の友好協力関係に有利な条件で、双方が中日共同声明及び平和友好条約の精神を遵守し、共同の努力により、今後、両国議会の友好交流は必ず活発になり、両国人民の世世代代の友好という目標のため新たな貢献をすると信じていると述べた。

万里は長田議長が都合のいい時期に正式に訪中するよう招待した。

全人大委員長の万里は、２６日、桜内衆院議長と会見した。

桜内は、今年は国交正常化２０周年で、江沢民総書記の先月の訪日は両国の友好関係を深めたが、今回の万里委員長の訪日も両国の友好関係を強化するのみならず、２１世紀に向け、日中議会交流に画期的な意義を持つと述べた。

また、日中両国は２千年に及ぶ豊富で多彩な交流の歴史があり、近隣の２つの重要な国家であり、日中両国の友好関係の発展は両国にとってのみならず、アジア太平洋地区及び世界の平和と安定に重要な意義を持つと述べた。

万里は、国交正常化以来、両国の友好協力関係は両国人民に巨大な利益をもたらし、アジア太平洋地区及び世界の平和、発展及び安定に積極的な影響を与えている。世界情勢には重大な変化があり、多極化しつつある国際情勢下でよ

り一層両国の友好協力関係を発展させることは重要な意義があると述べた。

また、中国の全人大と日本の国会は、両国の友好協力関係に重要な責任を負い、日本の衆院は、国交正常化実現及び平和条約締結に重要な役割を果たしており、両国の善隣友好協力関係の発展にも積極的な貢献をしていると述べるとともに中国の人大は日本の国会の友人と一緒に両国の友好協力関係発展に努力したいと考えている旨述べた。

万里は、桜内衆院議長が都合のいい時期に正式に訪中するよう招待した。（人民日報、６面）

３．「日本の衆参両院議長万里委員長歓迎宴開催－桜内は日中友好は世界の安定と平和に有利と述べ、万里は中日友好の発展は両国の共同願望と述べた」

日本の衆参両院は、２６日、全人大委員長万里の歓迎宴を挙行した。（人民日報、６面）

４．「渡辺外相万里歓迎宴を開催」

２６日、日本の渡辺内閣副総理兼外務大臣は万里委員長一行の歓迎宴を開催した。（人民日報、６面）

５．「万里、東京で二国間関係を強調」（チャイナデイリー、１面）（内容は１．、２．とほぼ同じ。）

６．「日本の天皇、万里と会見」（北京日報、４面）（内容は１．とほぼ同じ。）

７．「日本の首相、万里と会見」（北京日報、４面）（内容は１．とほぼ同じ。）

８．「万里日本の衆参両院議長と会見、両院議長盛大な宴会を挙行」（北京日報、４面）（内容は２．、３．とほぼ同じ。）

９．「万里、日本を訪問－日本の天皇、首相及び衆参両院議長とそれぞれ会見」（光明日報、４面）（内容は１．、２．とほぼ同じ。）

１０．「日本の５つの銀行、対中借款」

日本の５つの銀行は、２６日、中国に対して２，６００万ドルの借款を供与することを正式に決定し、対外経済貿易信託投資公司と署名した。

５つの銀行は、第一勧業銀行、さくら銀行、住友銀行、中央信託銀行、安田信託銀行である。（人民日報、７面）

香港に転電した。

（了）

新華社 報道振り(万里関連)

外務省　渡辺様

ラヂオプレス　調査部

◎天皇陛下、万里委員長と会見

【ＲＰ＝東京】二十六日の北京発新華社電は次のように伝えた。

日本の明仁天皇は二十六日午後、宮中で万里全人代常務委委員長と会見した際、日中国交正常化から二十年の間に両国の関係が順調に発展したことは喜ばしいことであると表明した。

明仁天皇は万里委員長と会見した際、親しく友好的に話し合った。天皇は万里委員長の訪問に熱烈な歓迎の意を表明し、次のように述べた。日中両国は海を隔てて望むことのできる隣国であり、両国の友好関係を発展させることは極めて結構なことである。天皇は万里委員長の訪問が両国人民の相互理解と両国間の友好関係の発展に助けとなるよう希望し、これは平和にとっても有利なことだと表明した。

万里委員長は次のように述べた。私は今回日本を訪問して日本衆参両院議長と各界の友人から熱情的な歓待を受けた。今日はまた天皇陛下と会見することができ、非常な喜びを感じている。

万里委員長は、中日両国の友好関係を発展させることが、両国人民の共通した願いであると述べ、さらに現在両国間にすでに存在している友好関係を世々代々発展させたいと希望している旨を表明した。

双方が両国の歴史文化の交流について触れた際、万里委員長は次のように述べた。「私は中日両国が文化の面とその他の各方面で多くの共通点を持っていると感じた。われわれは最近天皇と皇后の両陛下が時間を割いて東京で開催された中国曽侯乙墓展を参観されたことを喜びの中で知った」。

天皇は次のように述べた。「中国の悠久な歴史と文化は、過去日本に大きな影響をおよぼした。最近、私と皇后は曽侯乙墓展を参観して、多くの貴重な出土文物に大きな興味を持った」。

万里委員長は天皇に対する楊尚昆主席と江沢民総書記の真摯な挨拶を伝えた。天皇陛下も楊尚昆主席と江沢民総書記に対する親しい

2/4

挨拶を万里委員長に託した。　~~中A-1~~

楊振亜日本駐在中国大使が会見に参加した。　ーターー

◎宮沢首相、万里委員長と会見

【ＲＰ＝東京】二十六日の北京発新華社電は次のように伝えた。

宮沢喜一日本首相は二十六日午後、首相官邸で現在日本を訪問中の万里全国人民代表大会常務委員会委員長と会見した。双方は中日関係の重要性と相互に興味を持つ問題について親しく友好的に話し合った。

宮沢首相は先ず万里委員長の訪問に熱烈な歓迎の意を表明し、次のように述べた。今年は日中国交正常化二十周年にあたる。万里委員長の今回の訪問は日中国交正常化二十年の祝賀活動の花にさらに花を添えるものである。

万里委員長は次のように述べた。中日国交正常化二十周年に際して日本を訪問し、さらに今日首相にお会いできて私は大いな喜びを感じている。中日国交正常化の後、双方の各領域における交流は全て良好な発展を遂げている。中日国交正常化は中日両国の政治家による遠大な見通しを持った政策決定だった。中日両国の高層指導者による相互訪問は、両国の友好協力の上で大きな意義を持っている。

宮沢首相は次のように述べた。二十年前を回顧すると、両国には困難があったが、われわれの先輩は極めて重要な決定を下した。現在、両国の関係は立派に発展している。最近、われわれは江沢民総書記を歓迎した。江沢民総書記の訪問は大きな成功を収めた。

宮沢首相は次のように述べた。現在、日中関係は単に二つの国家の関係に止まらず、世界の平和と安定に貢献することのできる極めて重要な関係となっている。日中関係の発展は極めて重要である。

万里委員長は次のように述べた。二十年来の両国政府と人民の努力によって、現在中日両国の関係は良い。事実は中日友好が両国人民に利益となり、アジア太平洋地区と世界の平和に役立つことを証明している。

万里委員長はさらに宮沢首相の要求に応じて、中国における改革と開放に関する状況を紹介した。万里委員長は次のように述べた。

№29

時代や国を超えた しつけの尊さ

〝台湾版・中江藤樹の母〟が来日

5/27

〝台湾版・中江藤樹の母〟―本紙コラム「産経抄」で紹介した台湾の在日留学生、張慶賢君(二〇)=早大=のご両親が来日、二十六日午後、東京・大手町の産経新聞を訪れた。

台湾・宜蘭県五結郷成興村の張清城さん(七三)、王阿秀さん(七〇)夫妻で、研究助成金を受ける張君がその一部で母親を日本に呼ぼうとしたところ、「とんでもない。それはお前が勉学をするための大切なお金です」と王阿秀さんは息子をたしなめた。その話を「産経抄」が伝えると、たくさんの読者が「中江藤樹の母の姿を見た」と感激し、ご両親を日本へ呼ぶお金約三十万円を贈ってくれた。

夫妻はともに日本の植民地時代に〝皇民化教育〟を受けた世代で、来日は初めて。四十七年ぶりの日本語とか。張君をさとした教えについては、「中江藤樹の話は初めて聞きました。教科書に出ていたことは全部覚えていますから、学校では教わらなかったと思います」と阿秀さんはいう。母のしつけの尊さということでは、時代や国籍を超えた日中共通のもの、〝偶然の一致〟だったかもしれない。

読者の善意、来日費用30万

「明美ちゃん基金に」

ここで夫妻はいずまいをただし、「読者のみなさまの熱いご好意はありがたくいただきました。その代わり私たちのお礼の気持ちとしてこれで恵まれない人たちに役立てて下さい」と三十万円全額を差し出した。夫妻の意思が固かったので産経新聞ではこのお金を「明美ちゃん基金」に入れた。



台湾から来日した〝台湾版・中江藤樹の母〟の王阿秀さん(右)と父親の張清城さん(中)と在日留学生の張慶賢君

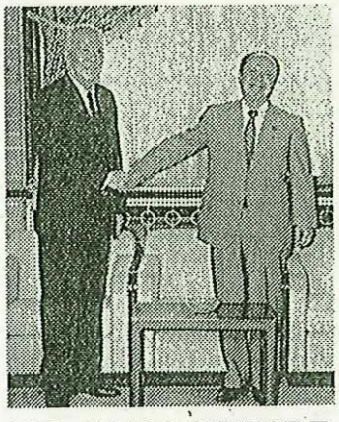
日中友好促進で一致

万里氏と宮沢首相

来日中の万里・中国全人代常務委員会委員長は二十六日午後、官邸に宮沢首相を訪ね、日中関係や中国の経済改革開放政策などについて、約一時間会談した。この中で宮沢首相は「中国との平和、友好関係の維持は非常に大切だ」と述べたのに対し、万里氏も「激動化、多極化する世界情勢の中、日中関係はますます大切。世々代々の友好関係をつくっていきたい」と述べ、日中友好を一層発展させていくことで一致した。

さらに、中国の経済開放路線について万里氏は「開放政策は国政の安定など有利な条件のもとで拡大しているが、資金不足の問題もあり、日本からも投資を拡大してほしい」と要請、宮沢首相は「(中国の)エネルギー価格の影響は大きい。今後とも中国経済発展のため協力していきたい」と答えた。

5/27 M 2



万里・中国全人代常務委員長(左)と握手する宮沢首相―官邸で26日午後3時すぎ

一時帰国望む妻たち

5/27

【北京26日=五十川倫義】一九七〇年のよど号乗っ取り事件で朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)に渡り、今も残っているメンバーのうち六人が日本人女性と結婚、その妻たちが一時帰国を望んでいることが二十六日、平壌訪問を終え、北京に出た支援組織の幹部によって確認された。

幹部によると、六人は七〇年代後半ごろ結婚し、それぞれ子供がいる。このうち五人の女性について、日本政府は八八年八月、「北朝鮮工作員との接触」などを理由に旅券の返納命令を出し、旅券が無効の状態になっている。女性たちは、この理由を否定、命令の撤回、旅券の再発行を求めている。女性たちは一時帰国を望んでおり、また子供たちが無国籍の状態になっていることから、問題解決の協力をこの幹部に依頼した。

A 30

訪中の要請は出ず

5/27

A 30

天皇陛下は二十六日午後二時から、来日中の万里・中国全国人民代表大会常務委員長を皇居・宮殿に招き、正殿竹の間で約二十分間会見された。陛下と中国要人との会見は、四月初めに来日した江沢民・中国共産党総書記以来。

宮内庁によると、会見は和やかに進んだが、懸案になっている天皇陛下の訪中について、中国側から改めての招請はなかった。

8

8. 国会質問

5月18日 参・外務委 黒柳明 (2)

外相用（想定）

５月１２日（火）参・外務委　黒柳　明君　（公）

問、天皇陛下の訪中見通しを問う。

（結論）

天皇陛下の御訪中については、中国側より、日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、わが方としては、これに対し、真剣に検討しているところ。

（参考）

４月６日に行われた宮沢総理と江沢民中国共産党総書記との会談において、中国側より改めて本件招請があり、宮沢総理より「引き続き真剣に検討する」旨回答した経緯あり。

（アジア局中国課長　樽井澄夫）

（谷野局長手持ち用資料）

（対政府委員）想定

5月12日（火）参・外務委　黒柳明[redacted]君（公）

問．　天皇陛下の中国御訪問は政治的要請ではなく、日中双方の国民の率直な理解と友好関係が前提となるのが望ましいと思うがどうか。

答．　御指摘の通り陛下の外国御訪問については、友好親善の観点より行われるべきものと思料。

(3)

（対政府委員）想定

5月12日（火）参・外務委　奥村　[redacted]君（公）

問．　政府は天皇陛下の御訪中の決定を先送りしたが、この事は、日中間に天皇陛下が訪問されるにふさわしい「成熟した信頼関係」が構築されていないと考えて良いのか。

答１．　日中関係は国交正常化２０周年を迎えより一層安定した段階に入ったとの認識。この点は先に訪日された江沢民総書記と宮沢総理との間で行われた首脳会談においても認識の一致を見たところ。

２．　政府としては、このような日中間の関係を前提に天皇・皇后両陛下の中国御訪問につき現在真剣に検討しているところ。

（アジア局中国課長　[redacted]）

（対政府委員）想定

5月12日（火）参・外務委　黒柳明君（公）

問.　中国が天皇陛下御訪中招請に情熱を燃やすのは何故か。

答.　先に訪日された江沢民総書記は、東京における共同記者会見において、記者の質問に答えて、天皇陛下の御訪中を要請する目的について「天皇陛下の御訪中の要請の目的は、両国民の友情を更に深めたいというものである」旨、答えており、中国側は大局的立場に立って日中友好親善のため御訪中を招請しているものと思料。

[エビ所宛] 大臣　儀典長　外務報道官　官邸：
(入) 次官　官房長　広報担当参事官　総理秘書官
斉藤外審　総括審　報道課長　官房長官秘書官
国際報道課長

中国課長 4/8 江沢民総書記対同記者会見(要旨) [中国課 92.4.8]

(天皇陛下の御訪問につき、宮沢総理との会談の中で話しをされたが、日本側の回答に満足しているか、あるいは何か不満を残すものであったか)

宮沢総理とお会いし、双方はよい会談を行った。中日両国の友好関係を発展させることで一致を見た。国交正常化２０周年の本年、折しも桜が満開の頃の今回の訪問は、中国人民の日本国民に対する友誼の情を伝えるためである。天皇陛下の御訪中の要請についても、その目的は、両国民の間の友情を更に深めたいというものである。これをどのようにアレンジするかは、日本が決めることであり、具体的なことについては、両国の関係部門で相談すべきことである。

(自衛隊の海外派遣については、江総書記は掃海艇派遣の時を除いて慎重な態度をとってきたと承知している。しかるに、今回の訪日では、災害救助などの平和目的ならよいと言われたとのことであるが、これはどのような考えに基づくものか。過去の日中関係とも関連付けつつ述べてほしい。)

本件については、今回来日して少なからぬ記者の方から質問を受けた。また、中国を訪れる多くの日本の方々からも質問されている。本件についての私の考えは、終始一貫している。日本の経済は発達しており、既に世界の経済強国とも言い得るが、自分は、かつて自然災害などの救助活動につき経済の発展した国々が支援を行うことは結構な事だと言ったことがある。私たちの衷心からの希望として、日本は引き続き平和的発展の道を歩んでほしい。そして、アジアの平和と発展に貢献してほしい。これは日本国民の利益に合致することであり、また、アジアの全ての人々の歓迎するところである。周知の原因により、日本の海外派兵は敏感な問題である。友好国として、日本側においては、やはり慎重に対処してほしい。

5月12日（火）参・外務委　黒柳明（公）君

（対政府委員）想定

問　天皇陛下が中国に行って韓国に行かないは問題であるとの声があるが、これをどう思うか。

答

1.　天皇陛下御訪中に関しては、中国側より、日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、我が国としてはこれに対し真剣に検討しているところ。

2.　他方、天皇陛下の御訪韓については、今後とも諸般の事情を慎重に見極めつつ検討していく所存。

（参考）

1.　９０年５月、盧泰愚大統領が来日時、陛下をご訪問した際、「即位の礼の後には陛下が外国訪問をなさることになると思いますが、その際、韓国にもおいで頂きたい」旨述べ、陛下は、「政府と調整して返答申し上げる」旨お答え。

2.　９１年１月、海部総理訪韓時、盧大統領よりできれば陛下の訪問を歓待したいとの話があり、総理より、陛下に御報告申し上げ、政府として検討したい、感謝すると述べた。

3.　本年１月、宮澤総理訪韓時、盧大統領より「適当な時期に御訪韓して頂くよう陛下に伝えてほしい」と話があり、総理より「陛下にお伝えする。政府内で検討したい」と述べた。

（対政府委員）想定

5月12日（火）　参・外務委　黒柳明[redacted]君（公）

問．　天皇陛下の御訪中について我が国は何時どのような状況になったら決断するのか。

答．　天皇陛下の御訪中については現在政府内で真剣に検討が行われているところであり、御質問の点についての具体的コメントは差し控えたい。

(3)

5月14日 参・内閣委 田村秀昭君 (自)

田村秀昭君（自）

問一　天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。

（答）

一．　天皇陛下の御訪中については、中国側より、日中国交正常化二十周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、我が方としては、これに対し、真剣に検討しているところ。

二．　いずれにせよ陛下の御外遊は日本国民の祝福が得られる中で行われるべきものと理解。

（対官房長官用）

五月十四日（木）参・内閣委（一般）　田村秀昭君（公）

問一、天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。諸般の事情にかんがみ、慎重に対処すべきではないか。

外務省作成

（答弁作成責任者）

外務省アジア局中国課長　樽井澄夫
連絡先　役所　三五八一―二九一五
自宅　[redacted]

5月14日 参・外務委 田英夫 君(社)

（外相用）

５月１４日（木）　　参・外務委　　田　英夫君（社）

問１、天皇訪中問題に関して自民党の若手（右寄り）より反対論が出ているが、外相としてはこの反対論をどう考えているか。

外相の天皇訪中問題に対する見解を問う。

（結論）

中国側より、日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、我が方としてはこれに対し真剣に検討しているところ。

（理由）

天皇陛下の御訪中については、中国でも日本でも祝福される雰囲気の中で実現されることが一番望ましいと思料。その環境をつくるために目下努力しているところ。

（参考）

４月６日の宮沢総理・江沢民総書記との会談における天皇陛下の御訪中問題のやりとりに関する記者ブリーフ内容。

「江沢民総書記より改めて招請があり、宮沢総理よりは『引き続き真剣に検討する』旨回答した。」

（アジア局中国課長　樽井澄夫）

至急

天皇陛下ご訪中（国会質問状況）

'92.4.22

中国課

２２日の衆院外務委における標記を巡る質問状況の要旨以下の通り。

１．鈴木宗男議員（自民党）

（鈴木議員）天皇陛下のご訪中を実現すべきと考えるがどうか。

（渡辺大臣）本年は日中国交正常化２０周年の記念すべき年であり、天皇陛下のご訪中を求め、それにより日中間の過去に一線を画し、前向きの話で日中関係に取り組んでいこう、ご訪中の際は決して迷惑をかけないし、条件も付けない、必ず熱烈歓迎するからと言って、自信を持って、中国側より累次にわたる招請が来ている。政府としては、それを踏まえて、目下、真剣に検討しているところ。陛下のご訪中の実現のためには、我が国国内の一層幅広い支持・理解が必要と考えるので、その理解を得る努力をあわせ行って参りたい。

（鈴木議員）大臣としては陛下に中国に行っていただきたいとのお気持か。

（渡辺大臣）今言ったように国内の幅広い支持を得られるならそれに越したことはないと考える。

２．藤田高敏議員（社会党）

（藤田議員）天皇訪中の問題は前後６～７回も中国側より要請があり、先の江沢民総書記の訪日の際にも重ねて招請があったものと承知。江沢民総書記は中国のトップであり、こうした形で要請があったことに対し、天皇の政治的利用は論外だが、外交上の問題として失礼のないようにすべきである。中国の最高責任者よ

り国交正常化２０周年の際の訪中招請があったのであるから、これに対し、日本政府として少なくともＹＥＳかＮＯかをはっきりさせるべきであり、宙ぶらりんはよくないと考える。本年秋を目途に訪中するのか、どのような返事を考えているのか。

（渡辺大臣）江沢民総書記より、是非とも訪中を歓迎したいとの丁重な言葉があったのは事実。それに対し真剣に検討すると答えたのも事実。天皇陛下が訪中される以上、中国でも日本でも祝福される雰囲気の中で訪中されるのが一番望ましい。その環境を作るため目下努力しているところである。

（藤田議員）率直に言って、大臣は今年１月に訪中された時、中国側との間で前向きの形で話があったのではないかと推察する。そうでなければ、日本が諾の回答を行うとの感触がなければ、総書記からあのような形で話を表に出さなかったであろう。本件については外交的に非礼にならない対応が大事であると思う。

（渡辺大臣）１月に訪中した時、尖閣諸島の問題等の色々な問題が未だ表に出ていなかった。その後国内においてそれらに対するリアクションがあり、正しい理解を得るにはまだ時間がかかるということである。環境整備に目下色々努力している。こうした状況を踏まえて中国側には真剣に検討中である旨回答しているところである。

（了）

5月21日 原・安保特委 上田哲君(社)

file 天皇

（外相用）

５月２１日（木）衆・安保委　上田　哲君　（社）

問５、天皇訪中の見通し如何。

（結論）

天皇陛下の御訪中については、中国側より、日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、わが方としては、これに対し、真剣に検討しているところ。

（参考）

４月６日に行われた宮沢総理と江沢民中国共産党総書記との会談において、中国側より改めて本件招請があり、宮沢総理より「引き続き真剣に検討する」旨回答した経緯あり。

（アジア局中国課長　樽井澄夫）

5月21日 無・安保野党 森正一郎君(公)

(石原慎太郎出生)

（外相用）

５月２１日（木）衆・安保委　渡部一郎君　（公）

問５．中国全人代委員長が来日するが天皇訪中について会談するのか。

（結論）

１、万里全人代委員長が来日された際に何を会談するかは現在検討中であり、コメントは避けたい。

２、いずれにせよ、本件について、我が方は、中国側よりの日中国交正常化２０周年の本年秋に御訪中頂きたい旨の累次招請を踏まえ、現在政府内で真剣に検討しているところ。

（アジア局中国課長　樽井澄夫）

9、記者会見、談話

小西次官と在京中国特派員との懇談

5/18

fb 天皇訪中

取扱注意

小和田次官の在京中国特派員との懇談

平成４年５月１８日
国　際　報　道　課

小和田外務次官は１８日、在京中国特派員と昼食を交えつつオフレコ・ベースの懇談を行ったところ、先方の関心事項に対する次官の応答振り以下の通り（中国側出席者別紙の通り、当方より卜部秘書官、森元報際長同席）。

（宮沢総理訪中の可能性如何）
現在のところ、かかる可能性は検討されていない。

（天皇陛下訪中の可能性如何）
本件は外務省として真剣に検討中。個人的にはその実現を図りたいと考えるが、そのためには多くの国民の間で一致して、陛下の訪中を歓迎する状況が必要。

（そうした状況に至ったとする判断の基準如何）
国民の間で１００％意見が一致はしないとしても、色々な人々が反対するのでは陛下が訪中していただくことは困難。陛下が訪中されるとなれば、政治的なものであってはならず、日中の友好関係強化に資するものでなくてはならない。反対がある中で無理をして訪中すれば、論争を呼び、国論を分けることになり、結果的に良くない訪問となる。

（そのためには、むしろ訪中により何等かの突破口をつくることが必要ではないか）
陛下の訪中を関係改善の突破口とするというのであれば、中国へは行っていただかない方が良い。

（現在の情勢で外務省としては中国に行けると判断しているか）
今は何とも言えない。

（それでは、方向性が明確ではないとの指摘に対し）
［語気荒く］真に状況判断が立たないと申し上げている。正直言って尖閣列島やＰＫＯ法案に対する中国側の反応もあり、日本国民の間で反感があるのも事実。かかる状況で行けると判断することは不可能である。

（天皇訪中の利点如何）
陛下は新しい時代を代表する人。アジアやその他の地域に於いて、新しい関係、広い意

味で国際秩序を築く上で適格であり、（訪中がもし成されれば）日中関係が一歩前進するであろう。

しかるに過去の問題について責任を問われたり、反省を求められるようなことが起きれば、中国へ行っても逆効果である。実際、総理が訪韓した際、慰安婦や賠償といった問題ばかりが正面に出て、結果として日韓関係は訪問前より冷えてしまった。日中関係はそうなってはならない。

（田中元総理が訪中した時も反対があったが、田中元総理は命を掛けて訪中した。その意味では政府が指導的役割を果たすべきではないか）

第一に、慎重に検討しているということは行かないということではない。状況を睨んでいるというものであり、方向性としては何とか実現にこぎつけたいと努力している。慎重に検討中であることを行かないことと解釈することは大きな間違いである。

第二に、総理と天皇は別の存在であり、総理は政治的決断の下、国論を統一するために行くことはあっても、陛下は自ら決断する立場になく、国論が統一された下でないと行くことは出来ない。

（慎重であるということは外務省として消極的に検討しているのか、それとも積極的に検討しているのか判然としない）

再三外務省の立場を申し上げている積りだが、外務省としては基本的に陛下の訪中は日中関係にとって良いこととの判断の下、本年１月、渡辺大臣が訪中した時にも本問題について話し合っていただいた。但し、具体例はいちいち挙げないが、その後色々な事があったのは事実であり、これからそのような事情を踏まえ、この間に日中間に残った大変という雰囲気をどう消せるのか、あるいはこれがどう消えていくかを見守りつつ考えているところである。

（尖閣列島問題、ＰＫＯ法案）

尖閣列島問題に関する中国の議会内の動きはよく承知している積り。

他方、わが国のＰＫＯ法案に対する中国の認識は誤っている。日本としては「金持ち喧嘩せず」との態度を採ることはもはや時代にそぐわずおかしいとの認識の下、資金面以外にも国際社会の安定に積極的に貢献しようとしている。そもそもＰＫＯは国連が組織するものであり、国益追及のために日本が自ら実力を行使するものではない。中国側がこれをもおかしいと言うのであれば、日本として何が出来るのか。日本国民は国際貢献を行うことでやる気になっているところであり、これに水を差すのであれば、陛下の訪中問題にも影響が出てくるであろう。

小和田事務次官主催在京中国特派員との昼食懇談会

平成４年　５月13日
国　際　報　道　課

１．日時

５月１８日（月）　１２：３０～１４：００

２．場所

赤坂　「維新號」Ｉ　Ｓｈｉｎｇ　Ｇｏｕ
（TEL:３２６１－２２１３、３２６２－７６３８）

３．出席プレス

新華社	劉　文　玉（Liu,Wen Yu）東京分社副社長
人民日報	于　　青（Yu,Qing ）東京特派員
中国新聞	楊　国　光（Yang,Guoguang ）東京支局長
光明日報	将　道　鼎（Jiang,Des Ding）東京支局長
北京週報	白　日　昶（Bai,Ri Chang）東京支局長
北京放送	張　富　生（Zhang,Fusheg）東京支局長
北京日報	陳　鄂　生（Chen,E Sheng）東京支局長
中国青年報	艾　　智（Ai,Zhi）東京支局長

４．当方同席者

ト部次官秘書官及び森元国際報道課長

極秘
電信

H. 4. 5. 19

極秘 至急

槙井亜中局長殿

報償局長 森元

18日，小和田次官が在京中国特派員と懇談した際の中国関連部分の記録をお届けします。貴課長の御判断で局内関係にも回覧下さい。

なお，次官とコップの懇談記録は通常作成していないところ，本件記録も次官の決裁を得たものではありませんので，お含みおき願います。

申し送り先：大部次官秘書官

小西田次官記者懇談

6/17

外報官	参報際内外
文長	審一二
領移長	参政保対旅外
ア長	審地中東 参北東西一
北米長	審一二保地

外務審議官　　条約局長　　報道・広報担当参事官
官房長　　報道課長
総括審議官
総務課長
企画官　　国際報道課長　　一般情報班
情報課長　　国内広報課長
企画課長　　海外広報課長
○次官秘書官　　（担当 官邸内2681）

次官記者懇談要旨　（6月17日）（水）
（17:00～ 於:会見室）

○天皇訪中問題

（問）総理が今日、天皇訪中問題で「行かれるのが望ましい」とのやや前向きの発言をされたようだが、これは従来のラインより進んだ発言か。

（次官）総理の発言についての報道は見たが、正確に総理がどう言われたのかは承知していない。基本的には、陛下のご訪中が国民の祝福を得られた形で実現するということになれば大変けっこうなことだとの趣旨は前から総理は言っておられたと承知している。基本的にはそのラインに沿った発言であろう。

（問）総理は「今は冷却期間である」と言われたようだが、この冷却期間は何時解けるのか。

（次官）これは自分の発言ではないのでコメントは差し控えたいが、国民がゆっくりこの問題を良く考えてみる、或いは中国側に於ける状況、日本に於ける状況が熟して国民が祝福するような中で訪中が実現することを希望するとの一般論を総理はお述べになったのだろう。

（問）現時点でも熟すのを待つ、冷却期間中であるということになると

最終的に訪中を行う、或いは行わないという結論を出すのはまだかなり先になるのか。

（次官）「冷却期間」をどの様な気持ちでおしゃっているのかわからないが、一般論としては、何時までに決めなければならないとのデッドラインが明確に決まっているわけではない。常識的に考えてこの秋の訪中という事であれば、それに相応しいような準備期間を置いてある段階で決めなければならないということはあると思う。状況を判断しながら慎重に検討して行くという従来の政府の考え方に沿ってのご発言であると思う。

（問）機が熟した、熟さないということには色々な徴候があると思うが、中国側もＰＫＯにつきかなり理性的な態度を示しており、そのような判断もあると思うが、外務省としてはどの様な判断を持っているか。

（次官）外務省の基本的な考え方は変わっていない。つまり、今年は国交正常化の２０周年の年であり、これからの新しい国際秩序を構築して行かなければならない情勢の中でアジア太平洋に於ける安定を考えたときに、この一つの節目の年に陛下の訪中が国民に祝福されるような形で実現されるのであれば大変結構なことであるというのが外務省の基本的な考え方である。その意味で今度の総理のご発言というのは、基本的に我々の考えていることと同じラインの発言であると思う。

官房長官記者会見

6/17

次官
斉藤外務
外報官

アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

レベル

天皇陛下の御訪中関係

6月17日午後 加藤官房長官記者会見でのやりとり
(河野秘書官よりの電話連絡、未手受)

問、総理は今日の公演で是非(陛下に中国に)行って欲しいと述べた。
政府の受け止め方如何。

答、(陛下の御訪中については)現在、政府部内で真剣に検討中である。
総理の言った通りである。しかし、未だ党内にいろいろな意見
があり、(陛下の御訪中は)国民の祝福を受け、日中関係の前進に役立つ
ような形でやりたい。

問、一時期とくらべ、党側の反対論が弱まっていると見る向きもあるが。
答、冷却期間をおいているからだと思う。

問、冷却期間はどの位か
答、いましばらくということだ。

問、20周年ということなので(御訪中は)年内か。
答、20周年を記念して御訪中を検討している。

問、PKOが影響しているのか。
答、この問題は日中でお互いをどこまで理解し合えるかという問題だ。

問、中国のPKOに対する反応如何。

答、おさえぎみと思う。

問、おさえぎみの背景には天皇訪中があるのか。

答、しらない。

日本新聞協会講演後の宮沢総理コメント　6/7

（5/7 対外応答用想定問答）

取扱注意

（対プレス想定問答）

天皇陛下御訪中問題（宮沢総理コメント）

92.6.17
中国課

1．宮沢総理は17日の日本新聞協会での講演後のやりとりにおいて、天皇陛下の御訪中問題に関し、質問に答えて以下の通り述べられた(共同記者より入手のメモ)。

○天皇訪中

私は陛下がおいで頂くことが望ましいと考えている。ただ、一時いろいろな議論があった。それについて中国側もその間の事情も理解されて、訪中が親善の中で行われることを国民に分かって頂いた上で。

実は今、議論があったので、冷却期間を置いた方がいいだろうと考えていて、今その時期に当たるのです。やがて中国側の事情も国民にご説明しながら、国民の祝福の中で訪中して頂きたいというのが私の考えであり、希望だ。

2．本件に関する想定問答以下の通り。

問1．本件は総理が天皇陛下御訪中問題につき一歩前に進んだ発言をしたと捉えてよいか。

答．天皇陛下の御訪中については、「現在真剣に検討中であるが、いずれにせよ陛下のご外遊は国民の祝福の得られる中で行われるべきものと考える」というのが従来の国会での総理の答弁のラインである（別添1参照）。本日の総理発言の詳細を承知している訳ではないのでコメントは差し控えたいが、基本的に総理のお考えは一貫しているものと承知。

問２．江沢民総書記訪日時に、中国側記者ブリーフの中で、宮沢総理が首脳会談において、「陛下の御訪中は意義深い」との趣旨を述べた（別添２参照）という話があったが、本日の総理コメントもそれに沿ったものか。

答．総理は、陛下の御訪中が国民の祝福を得られる中で実現するとすれば、日中関係にとり意義深いとのお考えを持っておられると承知しており、本日のご発言も同趣旨と理解している。

問３．秋に実現とすれば、具体的にロジをすすめるのに時間があまり残されていないところ、既に準備作業を始めているのか。

答．現在御訪中の問題を真剣に検討中である。これ以上のコメントは差し控えたい。

問４．政府としての決定は参院選の前になるのか、後になるのか。

答．具体的問題についてのコメントは差し控えたい。

(別添1)

田村秀昭衆（自）

問一　天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。

（答）

一．　天皇陛下の御訪中については、中国側より、日中国交正常化二十周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、我が方としては、これに対し、真剣に検討しているところ。

二．　いずれにせよ陛下の御外遊は日本国民の祝福が得られる中で行われるべきものと理解。

（対官房長官用）

五月十四日（木）参・内閣委（一般）　田村秀昭君（公）

問一、天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。諸般の事情にかんがみ、慎重に対処すべきではないか。

外務省作成

（答弁作成責任者）
外務省アジア局中国課長　樽井澄夫
連絡先　役所　三五八一―二九一五
自宅　[redacted]

（別添2）

取扱注意

宮沢・江沢民会談における天皇陛下ご訪中問題の言及
（呉建民外交部スポークスマンの記者ブリーフ）

92.4.6

亜　中

6日夕刻、呉建民外交部スポークスマンが内外記者に対する宮沢・江沢民会談に関するブリーフィングを行ったところ、右模様以下の通り。（当方の照会に対し、同ブリーフィングに同席の韓佐民外交部新聞司副処長が記者会見用に用意した呉建民スポークスマンのメモを読み上げたもの。）

「二人の指導者は日本の天皇陛下の御訪中の問題について意見交換を行った。宮沢総理は、日本側は中国側による両陛下への招きに対して、心からの感謝の意を表した。宮沢総理は、国交正常化20周年にあたってこの訪問を実現することは、両国関係を更に発展させ、両国人民の伝統的誼みを増進させるために重要な影響をもたらすと述べた。」

日本人記者より、「今回の会見により天皇陛下の御訪中に対する日本側の見方は一歩進んだと見ているか」との問いがあり、それに対し、呉スポークスマンは「先ほど申し上げた通りである」旨答えた。

（了）

◎共同・時事
(16:40迄)

(別添3)

平成4年6月17日
報道課

共A3T234国政09S
◎天皇訪中実現が望ましい
参院選後も外相留任
首相、都内で講演
【編注】朝刊メモ(　)の(　)
差し替える

宮沢首相は十七日昼、東京・内幸町の日本プレスセンターで講演し、この秋の天皇陛下の中国訪問について「陛下にお出掛けいただくことが望ましい」と実現に意欲を示した。

また、九月に予定されるロシアのエリツ㋑ン大統領との北方領土交渉に関連し「渡辺外相とコズイレフ外相が(大統領来日までに)二回会談することになるだろう」と述べ、参院選後も引き続き渡辺外相を留任させ北方領土交渉に当たらせる考えを強調した。

(了)㊐(14)92 6 17 14 21

配布先

次官(秋)

報々室

取扱注意

大至急

※総第６２６２１号００１公館宛

平成 ※平成 4 年 6 月 17 日 4 時 9 分 秒受付

電信案

電信課長

大臣 / 秘書官	主管	※発電係 1 2
政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	起案 平成 4 年 6 月 17 日 起案者 泉 電話番号 2426
協議先		

（※印欄には電信課記入）

（注意）１枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 事務連絡

主管・文書記号	※電番		パターン・コード
亜中	第１６６９号	大至急 至急 普通 （優先処理）	[redacted]

転電 転送 在 転報	※転電番号 大使・総領事あて	大至急 至急 普通 （優先処理）

（八〇字）

槙田公使へ 榎井中国課長より、

陛下の御訪中問題に関する17日の官房総

理コメント（共同より入手のメモ）及び想定

問答を豊[redacted]参考までにFAX送信します。（了）

（官）

※

06262108 大至急 TYUUGOKU 漢

GB-1 外務省 回覧番号

（昭和六三・一・三〇改正）

FAX信

FAX

GM:6403-

※総第 062622号001公館宛 GM6403-07_-7

平成 ※平成 4 年 17 時 6 月 4 分 17 日 48 秒受付

取扱注意

大至急

電信案

電信課長

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	※発電係 17 20 2 起案 平成 4 年 6 月 17 日 起案者 泉 電話番号 2x26

(※印欄内は電信課記入)

協議先

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 事務連絡

主管・文書記号	※電番		パターン・コード
亜中	FAX信	大至急 至急 普通 (優先処理)	[redacted]

転電
転送 在
転報

※転電番号

大 使・総領事あて

大至急 至急
普通 (優先処理)

(八〇字)

往電3中ネ1669号別FAX信。

※

06262221 大至急 TYUUGOKU F信

GB-1 外務省

回覧番号

(昭和六三・六・三十改正)

GM:6403-

取扱注意

（対プレス想定問答）

天皇陛下御訪中問題（宮沢総理コメント）

92.6.17
中国課

1．宮沢総理は17日の日本新聞協会での講演後のやりとりにおいて、天皇陛下の御訪中問題に関し、質問に答えて以下の通り述べられた(共同記者より入手のメモ)。

○天皇訪中

私は陛下がおいで頂くことが望ましいと考えている。ただ、一時いろいろな議論があった。それについて中国側もその間の事情も理解されて、訪中が親善の中で行われることを国民に分かって頂いた上で。

実は今、議論があったので、冷却期間を置いた方がいいだろうと考えていて、今その時期に当たるのです。やがて中国側の事情も国民にご説明しながら、国民の祝福の中で訪中して頂きたいというのが私の考えであり、希望だ。

2．本件に関する想定問答以下の通り。

問1．本件は総理が天皇陛下御訪中問題につき一歩前に進んだ発言をしたと捉えてよいか。

答．天皇陛下の御訪中については、「現在真剣に検討中であるが、いずれにせよ陛下のご外遊は国民の祝福の得られる中で行われるべきものと考える」というのが従来の国会での総理の答弁のラインである（別添1参照）。本日の総理発言の詳細を承知している訳ではないのでコメントは差し控えたいが、基本的に総理のお考えは一貫しているものと承知。

問２．江沢民総書記訪日時に、中国側記者ブリーフの中で、宮沢総理が首脳会談において、「陛下の御訪中は意義深い」との趣旨を述べた（別添２参照）という話があったが、本日の総理コメントもそれに沿ったものか。

答．総理は、陛下の御訪中が国民の祝福を得られる中で実現するとすれば、日中関係にとり意義深いとのお考えを持っておられると承知しており、本日のご発言も同趣旨と理解している。

問３．秋に実現とすれば、具体的にロジをすすめるのに時間があまり残されていないところ、既に準備作業を始めているのか。

答．現在御訪中の問題を真剣に検討中である。これ以上のコメントは差し控えたい。

問４．政府としての決定は参院選の前になるのか、後になるのか。

答．具体的問題についてのコメントは差し控えたい。

田村秀昭衆（自）

問一　天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。

（答）

一．　天皇陛下の御訪中については、中国側より、日中国交正常化二十周年の本年秋に御訪中頂きたい旨招請があり、我が方としては、これに対し、真剣に検討しているところ。

二．　いずれにせよ陛下の御外遊は日本国民の祝福が得られる中で行われるべきものと理解。

（対官房長官用）

五月十四日（木）参・内閣委（一般）　田村秀昭君（公）

問一、天皇訪中問題についての現在の検討状況如何。諸般の事情にかんがみ、慎重に対処すべきではないか。

外務省作成

（答弁作成責任者）
外務省アジア局中国課長　樽井澄夫
連絡先　役所　三五八一二九一五
自宅　[redacted]

GM:6403- 6 (別添2)

取扱注意

宮沢・江沢民会談における天皇陛下ご訪中問題の言及
(呉建民外交部スポークスマンの記者ブリーフ)

92.4.6

亜　中

6日夕刻、呉建民外交部スポークスマンが内外記者に対する宮沢・江沢民会談に関するブリーフィングを行ったところ、右模様以下の通り。(当方の照会に対し、同ブリーフィングに同席の韓佐民外交部新聞司副処長が記者会見用に用意した呉建民スポークスマンのメモを読み上げたもの。)

「二人の指導者は日本の天皇陛下の御訪中の問題について意見交換を行った。宮沢総理は、日本側は中国側による両陛下への招きに対して、心からの感謝の意を表した。宮沢総理は、国交正常化20周年にあたってこの訪問を実現することは、両国関係を更に発展させ、両国人民の伝統的誼みを増進させるために重要な影響をもたらすと述べた。」

日本人記者より、「今回の会見により天皇陛下の御訪中に対する日本側の見方は一歩進んだと見ているか」との問いがあり、それに対し、呉スポークスマンは「先ほど申し上げた通りである」旨答えた。

(了)

◎共同・時事
(16:40迄)

G M:6403 (別添3)

平成4年6月17日
報道課

7

共A3T234国政09S
◎天皇訪中実現が望ましい
参院選後も外相留任
首相、都内で講演
【編注】朝刊メモ（）の（）
差し替える

宮沢首相は十七日昼、東京・内幸町の日本プレスセンターで講演し、この秋の天皇陛下の中国訪問について「陛下にお出掛けいただくことが望ましい」と実現に意欲を示した。

また、九月に予定されるロシアのエリツ㋑ン大統領との北方領土交渉に関連し「渡辺外相とコズイレフ外相が（大統領来日までに）二回会談することになるだろう」と述べ、参院選後も引き続き渡辺外相を留任させ北方領土交渉に当たらせる考えを強調した。

（了）㊍（14）92 6 17 14 21

配布先

次官（秋）

報々室

(3)

1992/06/17 宮沢首相（日本新聞協会講演後のやりとりで）

●天皇訪中

私は陛下がおいで頂くことが望ましいと考えている。ただ、一時いろいろな議論があった。それについて中国側もその間の事情も理解されて、訪中が親善の中で行われることを国民に分かって頂いた上で。

実は今、議論があったので、冷却期間を置いた方がいいだろうと考えていて、今その時期に当たるのです。やがて中国側の事情も国民にご説明しながら、国民の祝福の中で訪中して頂きたいというのが私の考えであり、希望だ。

総理の所感

6/22

2ページ目以降

報告・供覧

大臣 秘書官 政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	主管 アジア局長 審議官 参事官 中国課長 首席事務官	保存期間 1類 2類 3類 4類 (永久) (10年) (5年) (1年) 起案 平成 4年 6月 22日 完結 平成 年 月 日 起案者 電話番号 岡島 2425

回覧先

下記の件に関し、別紙のとおり報告・供覧します。

件名

宮沢総理記者会見（天皇陛下御訪中問題関連）部分

（別紙の要点等）

22日夕後に行われた標記会見の記録。

総理記者会見（天皇陛下御訪中問題関連部分）

平成４年６月２２日

中　　国　　課

本日午後３時より総理官邸で行われた宮沢総理記者会見のうち天皇陛下の中国御訪問に関連する部分以下の通り。

問．天皇陛下の中国御訪問に関して、先日プレスセンターで講演された際に、以前より積極的なお考えを示されたが、この問題について総理自身の考えあるいは日本政府の方針に変化があったということであるか。

答．江沢民総書記が来日された時に真剣に検討を続けると申したことに別に変化はない。国交正常化２０年、いろいろさざ波はあったけれども、体制の違うこの２つの大国がこれだけ親善を進めてきたという事は私は非常に意義のあることだと思うので、向こうがそうしきりにいうから、もしおいでになって頂ければ意義が深いことだと前から思っていることに変わりはない。ただこれについては国内にも色々な考え方があるから、もしおいで頂けるとすればぜひ国民が祝福を申し上げる中で、つまり議論が賛成反対と飛び交うような状況ではない中でおいで頂くことが大事であろうと思っている。だから、お互い我が国も中国もそういうことが段々わかってきて、そういう機運が醸成されて来ればそれは意義深いことだと思うが、そうでない場合には事の性質上なんでもかんでもという話ではないので、国内の国民の気持ちの向かうところによって考えていかなければならない。

問．そうすると、一部では秋に御訪中頂くことも検討されているようだが、国内に異論があるうちはなかなか難しいということか。

答．多くの人が大体わかったということになり、それなら（御訪中を）お願い申し上げようかということになってくれば良い。全部が全部（賛成でなければ）と考えている訳ではないが、しかし、やはり祝福のうちにおいで頂けるような雰囲気になればお願い申し上げようかということである。

問．そのために総理自身が党内調整を行い、党内実力者などに会うという場面は今後あるのか。

答．今、調整ということではなく、中国の中でこの問題をどういうふうに考えているかというようなことが、時間と共に自然にお互いにわかって来るというそういう状況の判断によって国民の気持ちの動きというものがあるだろうから、説得とか調整とかいうこととは違う。もう少し自然な流れというものをもっていくということだ。

（この間、他の質問についてのやりとりあり）

問．天皇訪中に関して、しばらくは様子を見るという発言であったと思うが、そうなると日中（国交正常化）２０周年を期しての訪中は難しいということか。

答．そういうつもりではない。両国ともこの問題については大事に考えており、私も真剣に検討すると言っているのであるから、おいで頂くことが望ましいと皆が思うような雰囲気が生まれて来るという、流れを大事にしたいということである。消極的な返事をしたつもりではない。

（了）

地域政策課長

首席事務官 ほか 局内幹部、関係課（アジ、アア）にも配布

アヤ

安保室

宮沢総理記者会見記録

平成4年6月23日

アジ地政 飛平井

昨日行われた本件、記者会見の記録をビデオテープより起こしたところ別添の通り。

~~（要すれば決裁後ワープロ打ち直します。）~~

（了）

宮沢総理記者会見記録

平成４年６月２２日
ア　地　政

１．アジアにおける安全保障

やはりこういう冷戦後の時代になって、ヨーロッパのＣＳＣＥのようなああいう屋根、まあ屋根といってもまだ仮の屋根といったかんじですが。なんとなくああいうものが考えられてきている。我々アジアの場合は、加藤官房長官が色々肝いりでアジアの問題を皆さんに検討してもらって、今日も又、リー・クァンユーさんがそのためにわざわざ来ていただくわけですが。アジアの場合にそういう将来、安全の仕組みができるか。当然、米国も入ってもらうわけだし、中国も、ソ連もでしょうね。そういう将来への構想を、時間がかかりますけれども、どのようにしていく、発展させていくかが課題だと思います。

２．日朝交渉の見通し

日本と朝鮮民主主義共和国。これは今としては、結局ヨンビョン周辺にあると伝えられている、再処理施設。実験ではあってもプルトニウムは、それは何に使うのかというところの議論があって、ＩＡＥＡの一遍の査察では明らかではなかったわけですから。幸い両国とも相互査察に同意しているわけだから、そういう対象にしてもらったら疑いも晴れるだろうと。もし事実でなければ、というところに問題は帰着している。

これは南北の問題ではあるが、南北の問題だけでなく、我が国のように近い国ですとある程度のミサイルがありますと届きうるわけでして。日本としても関心を持たざるをえない。解決されると一番大きな支障が除かれるのではないでしょうか。これは我が国と北朝鮮の問題であり、米国、韓国、ＩＡＥＡの問題でもあり、そういうところと関心を共同にしながら問題を解明していくことが一番大事である。

この問題の所在は北側にわかっており、議論というよりは北がどのように対応されるのかによって変わっていくのではないですか。この問題が今一番交渉の差し障りになっているわけですからこのような事実がないならないでそれでいい。あるのなら将来どう処理するのかという問題になるので、そこは北の対応如何でしょうね。

３．天皇陛下の御訪中

江沢民さんが来られた時に真剣に検討を続けると申したこと、別に変化はありません。国交正常化２０年。色々小波のようなものはあったけれど、体制の違うこの二つの大国がこれだけ親善を進めたことは、私は意味があることだと思います。もしおいでになっていただければ、意味が深いと思っていることに変わりはありません。ですから互いの気運が醸成されてまいりましたら、その意味が深いことだと思っているんです。国内のそういう国民の気持ちの向かうところによって考えていかなければいけないと思います。なるほどそういうことだったのか、と多くの人が思って、やっぱり祝福の内においでいただける雰囲気になればお願いしたい。

調整ということではなく、時間と共に自然にお互いに分かってくるそういう状況の判断。

それによって国民の気持ちの動きが分かるんでしょうか。もう少し自然の流れを見ていくべきじゃないでしょうか。

問　天皇訪中についての総理の考え方。

（答）

本年は日中国交正常化二十周年に当たるが、日中両国は七十二年の共同声明以来、いくつかのさざ波を克服し、「社会制度の相違」を乗り越え、平和友好関係を着実に発展させてきた。日中国交正常化二十周年という記念すべき年に、天皇陛下の御訪中は意義深いことと思う。

私としては、国民の祝福の中で行って頂くよう状況を見極めたい。

更問　いつごろ結論が出るのか。

（答）

内外の情勢も見ながら真剣に検討しているところ。

六月二十二日（月）総理記者会見用想定問答

問、天皇陛下の御訪中についての総理のお考え如何。

外務省作成

（答弁作成責任者）

外務省アジア局中国課長　樽井澄夫

連絡先　役所　三五八一―二九一五

自宅　[redacted]

六月二十二日（月）総理記者会見用想定問答

ボツ
（差し換え）

問：天皇陛下の御訪中についての総理のお考え如何。

外務省作成

（答弁作成責任者）

外務省アジア局中国課長　樽井澄夫

連絡先　役所　三五八一―二九一五
自宅　[redacted]

問　天皇訪中についての総理の考え方。

（答）

一．　本年は日中国交正常化二十周年に当たるが、日中両国は七十二年の共同声明以来、いくつかのさざ波を克服し、「社会制度の相違」を乗り越え、平和友好関係を着実に発展させてきた。今、中国は日中両国関係の将来を見据え、この日中国交正常化二十周年の本年秋に、天皇・皇后両陛下を中国にお招きしたい旨累次に亘り丁重な招請を行なってきている。

二．　政府としては、中国側招請を踏まえて、現在真剣に検討を行なっているところであるが、自分としては日中両国の国民の祝福を得て、天皇・皇后両陛下が中国を御訪問されることが出来れば、日中両国及び国民の一層の友好関係の発展にとり、この上なく意義深いことと考える。

(1) 中国外交部定例記者会見

file 大臣訪中

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写 [redacted] [redacted] 08－034

大臣	政務次官
事務次官	外務審議官
外務審議官	儀典長
北大使	経大使
欧大使	総合外交政策局審議官
査察大使	外務報道官
研修所長	
総合外交政策局	
対日審議官	
文化交流審議官	
国際情報統括官	
軍縮不拡散・科学部審議官	
人権人道大使	
在外公館警備対策室長	
外務報道官	参報道官
文化交流審議官	審一二
参事官	参政保対旅外
軍縮不拡散・科学部長	審軍縮不拡科一 参北東西一
北米局長	審一二保地
中南米局長	参一二
欧州局長	審西一欧一 西東二
総合外交政策局審議官	参一二アア一二
経済局長	次総経途二 参経漁国一一 経エ国安ネ二
	参海 審準
経済協力開発部長	審政国開無
経済協力開発部審議官	審調技有理
条約局長	審条協規
国際法局長	審政経人 審軍社
科学審議官	科原
情報調査局長	参情分調 企安

総番号 R098353 主管

月 14日 [redacted] 中国発 亜中

平成 4年 5月 15日 [redacted] 本省着

外務大臣殿 橋本大使

外交部定例記者会見（5月14日）

第1797号 至急（ゆう先処理） [redacted]

14日行われたゴ・ケンミン外交部新聞司長による本件記者会見の概要以下の通り。

1．発表事項

（1）デン・キウン副総理のスウエーデン・ノルウエー・デンマーク・フインランド訪問（5月26日－6月11日）

（2）エクアドル副大統領の中国訪問（5月21日－30日）

（3）北朝鮮最高人民会議議長の中国訪問（5月19日－30日）

2．主要質疑応答

（1）台湾関係

問．仏からの台湾への100機の戦闘機の輸出に関する中国の見解如何。

答．中国は、いかなる国であつても中国と外交関係を持つ国が台湾に武器輸出することに強く反対する。中仏関係を重視しているが、もし実際に戦闘機を輸出することになれば、強い反応をせざるを得ない。

問．強い反応とはいかなるものか。

答．中国としてはそういつたことが起こらないよう希望する。具体的措置は実際そうなるまでは分からない。

問．最近エストニア総理が中国を訪問しているが、その際に台湾問題を協議したか。また、「エ」公式代表団が台湾を訪問したと伝えられているが、中国の見解如何。

答．「エ」総理の訪中時に両国は台湾問題を議論し、「エ」側は外交関係じゆ立コミュニケの中で、台湾が1つの省に過ぎないという中国の立場を了承した。われわれは「エ」の態度を評価する。他方、中国は、いかなる国であつても中国と外交関係を有する国が台湾と公式の関係を持つことに反対する。公式の関係とは

電信写

公式接触を含む。

問. 欧州各国の中に最近台湾に公式代表団を派遣しているところがあるが、中国はこれらの国に対しても何も抗議を行つていない。「反対する」と答える目的は何か。

答. 中国は原則の国家である。原則について聞かれれば、原則を答えるのが当然である。

（2）ホンコン関係

問. 在ホンコン越難民に関する英越両国の合意についての中国の見解如何。

答. 越難民がホンコンに与える影響をゆう慮するところ、今回の合意をかん迎する。今後、両国が合意を実せんし、効果的方法を採つて、ホンコンの安定に寄与すること希望する。

問. ホンコン新空港に要する費用管理に問題があるとの批判があるが中国の見解如何。

答. ホンコン新空港に要する費用は現在まだ協議中である。

問. 最近英国の総理外交顧問が訪中したが何を協議したか。メージャー総理のメッセージを持参したとのことだが、リ・ホウ総理もメッセージを託したか。

答. 2国間関係の発展のため、ホンコン新空港問題等を協議した。リ・ホウ総理も、メージャー総理あてに中英関係の発展を希望する旨のメッセージを渡した。

（3）その他

問. ヨウ・フクショウ外交部副部長が現在中東を訪問しているが、その目的は何か。リビア問題で中国がちゆう裁をする目的が含まれているか。

答. ヨルダン・レバノン・キプロスの3国を訪れ、国際問題に関する意見交換と2国間関係の強化を図ることが目的である。

問. だれが6月のかん境サミットへの中国代表となるか決定したか。

答. 高いレベルの代表団となる。だれが行くかは、決まつたらお知らせする。

問. 中国と台湾が不合理な為替レートを利用して輸出をそう作しているとの報告が米国議会でなされ、台湾はこれを否定しているが、中国の見解如何。

答. 中国は経済の均こう発展の必要から為替レートの調整を行つており、現在の為替レートは合理的である。従つて、中国に対する米国の指摘は不合理である。中国は輸出入の両面を考慮しており、輸入拡大のための

電信写

方策も講じている。

問. １０月２７日からの日本のてん皇の中国訪問について確認できるか。（ＢＢＣ）

答. この件について確認することは何もない。

問. 南北朝鮮総理会談についての中国の見解如何。

答. 和解に向けての新たな一歩としてかん迎する。双方が更に努力を続けて朝鮮半島に安定をもたらすよう希望する。

問. キョウ石が国家機密保持の重要性を強調したと報道されたが、外交部の見解如何。

答. あらゆる国家は国家機密を有しており、その保護は非常に重要である。

中国４公館、スウエーデン、ノルウエー、デンマーク、フインランド、エクアドル、仏、ロシア、越、英、米、韓に転電した。（了）

21/21:00 [redacted] 2843 03/08 P01 R103601

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－034

大臣 政務次官 事務次官 外務審議官 儀典長
北米局長 経済局長 国際法局長 外務報道官 総合外交政策局長
大使 大使 大使 大使 審議官
総合安全保障戦略室 対日平和条約特別会計室 厚生労働省大臣官房国際保健政策担当参事官 情報調査局研究員 オランダ王国大使館在日公使
外務報道官 参事官（報道担当）
文化交流・海外広報課長 審議官（一）
領事移住部長 参事官（政策調整担当） 審議官（旅券課担当） 審議官（保護担当） 審議官（国際テロ対策担当） 審議官（領事担当）
北米局長 審議官（日米安保担当） 審議官（二国間関係担当） 審議官（地位協定担当）
中南米局長 参事官（一）
欧州局長 審議官（西欧担当） 審議官（東欧担当） 審議官（ロシア・ＣＩＳ担当）
近東アフリカ局長 参事官（一） 参事官（二）
経済局長 次席国際経済紋室長 参事官（経済連携担当） 参事官（漁業担当） 参事官（国際エネルギー安全保障担当）
参事官（海洋政策担当） 審議官（海洋政策担当）
経済協力局長 審議官（政策調整担当） 審議官（開発協力担当） 審議官（技術協力担当）
条約局長 審議官（条約担当）
国際法局長 参事官（経済条約担当） 参事官（社会条約担当）
科学審議官 科学原子力政策室長
情報調査局長 参事官（情報分析担当） 参事官（調査担当）

総番号 R103601

平成 4年 5月 21日 [redacted] 主管 亜中

月 21日 [redacted] 中国発

本省着

外務大臣殿 橋本大使

外交部定例記者会見（5月21日）

第1912号 大至急 [redacted]

２１日行われた本件定例記者会見の概要次の通り。

１．発表事項

ソグロ・ベニン大統領の訪中（５月２６－３１日）

２．主な質疑応答

（問１）越の外務省は、中国の海洋石油総公司と米国のクレストン社が署名した南サ諸島西部水域における石油・てん然ガス資源の共同開発契約に対し、抗議したと報じられているが、中国側の対応如何。

答、南サ及び西サ諸島は中国の領土である。中国は南サ及び西サ諸島ならびにその付近の海域に対し、主権を有する。越外務省による抗議については十分反ばくできるものである。

（問２）本日（２１日）午前、そく聞するところによれば、ドイツのテレビ記者がし事中、中国側当局によりこう留された由であるが如何。

答、当該案件について詳細は承知していない。ただし、次のことは言えよう。即ち、中国政府は、外国記者の取材活動における正当な権利を保護し、そのための利便を供するものである。他方、外国の記者は中国の法律及び規定をじゆん守しなければならない。

（問３）先月、フッケン省、オン州を回つてきた。中国の規定になんら違反していないにもかかわらず、その際、さつ影したフイルムを現地でぼつ収されてしまつた。中国においては通常の取材活動も認められないのか。

答、中国政府は外国記者の通常の取材活動における正当な権利を保護するものである。他方、外国記者は中国の法律及び規定をじゆん守しなければならない。これは国際慣例である。いかなる者といえども外国に来

電信写

た場合にはその国の法律・規定を守らなければならない。

（問４）最近、ワシントン・ポスト紙の北京支局が中国側公安当局により家たくそうさくを受けたが、サン記者は具体的には、如何なる中国の法律ないし規定に違反したというのか。また本件は既に終わつたのか。

（同旨の質問複数あり）

答、中国側当局によつて、すでにサン記者に対し重大な警告を行つている。私は、この場で、同記者に対し、この国に滞在する間は、中国の法律・規定をじゆん守するようちゆう告する。本件については、昨日（２０日）、新華社が報じている通りである。外国の記者は通常の取材活動を行つている限り、心配される必要はない。そのための利便を供するのがわれわれの政策である。

（問５）インドのヴェンカタラマン大統領の北京滞在は終わつたが、主な成果如何。

答、インド大統領は、中国側との間で二国間関係及び広範な国際問題について真し、かつ友好りに会談を行つた。双方は、両国は共に発展途上の大国であり、経済的な相互補完性も兼ね備えており、その見通しは、ぼう洋としているとの認識で一致した。現下の国際情勢のしたで、協力関係を強めていくことはアジア、世界の平和と安定に有利である。

（問６）ホンコンの「民主建港連盟」設立に対するコメント如何。

答、ホンコンの法律ならびに「一国二制」のわく組みに基づいてホンコンのはん栄と安定の維持に資するものであれば、いかなる団体であれ、それをしよう賛する。

（問７）来週、バン・リ全人代委員長が日本を訪問するが、その際、バン・リ委員長は日本側に対し、てん皇訪中の問題を提起する予定か。（東京新聞）

答、てん皇訪中についてはこれまでも種々述べており、この場で新たに述べることはない。

（問８）最近の中台関係に対するコメント如何。

答、台湾海きよう両がんの中国人はともに中国は一つと認識している。従つて、台湾海きように関する問題は厳密に言えば外交部のスポークスマンが回答することではない。中国の統一は中華民族の根本的な利益に適うものである。

中国４公館、米、越、インドに転電した。（了）

外務省

10、報道

日中女性議員連盟 常任理事会

5/7

5/8 A(4)

天皇訪中、前向きに検討

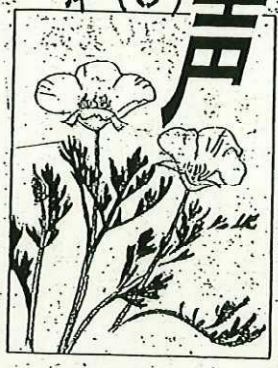
日中議連意見交換

超党派の国会議員でつくる日中友好議員連盟（会長・伊東正義元官房長官）は七日の常任理事会で、天皇訪中問題について意見交換した。出席者からは「これまでの経緯もあり、中国に対して礼を失することのないように対応しなければならない」（林義郎・同議連幹事長）など、基本的には政府が訪中の実現に前向きに努力すべきだとの見解が多数を占めた。林氏が近く宮沢首相に会って、論議の内容を報告する。

理事会では、後藤田正晴元官房長官が、訪中反対論が大勢だった先の自民党総務懇談会の模様を報告。これに対して「国論を二分するような事態は避けなければならない」「天皇の戦争責任が問われることがあってはならない」「決断のタイミングが難しい」などと慎重論も出たが、多くは「結論的には行った方がいい」（伊藤英成・民社党総務局長）との意見だった。

5/8 A(5)

声



はなびしそう

両陛下ご訪中 熱烈歓迎する

大阪市　周　秀泉（留学生　42歳）

今年は日中国交正常化二十周年にあたる記念すべき年である。日中友好関係は多くの曲折した道をたどってきたが、ようやく今まで にない好局面を迎えるようになった。二十一世紀へ向けて、日中関係を一層深めることは、両国政府と人民が共に抱く共通の願いである。

そういった意味で、この年に天皇皇后両陛下ご訪中の要請は中国政府と中国人民が両陛下への敬意と同時に中日友好新時代をつくる決意を表すものである。

しかし、先の江沢民総書記訪日の際、再び両陛下ご訪中の要請をしたのに対して、日本政府は引き続き真剣に検討するといった反応しか示さなかった。

この問題に関して中国国内のマスコミは一切報道していないらしい。これは、一番に、中国要人の面目が失われることになりそうだからだ。次に、日本の態度が中国国民の反感を招くのではないかという二つの恐れがあるからだろう。

日中両国は一衣帯水の隣国で、今、政治大国の中国と経済大国の日本はいずれ両方とも政治、経済の大国となるに違いない。日中両国の今後を考えれば日本政府は中国側の誠意ある要請を引き受けるべきではないか。

われわれ日本に滞在する多くの中国留学生も心より両陛下のご訪中を熱烈歓迎している。

5/8 M(1)

首相、答弁を撤回

「PKO法案、江沢民氏は知らぬ」の員指摘に

参院の国際平和協力特別委員会は七日、国連平和維持活動（PKO）協力法案など三法案についての総括審議を再開した。この中で宮沢首相は中国共産党の江沢民総書記がPKO協力法案による自衛隊の海外派遣に慎重な対応を求めていることに関連して「江沢民さんがどれほどPKO協力法案について）知って答えたか、必ずしも明確ではない」とした先月二十八日の同特別委での答弁を撤回した。竹村泰子氏（社会党・護憲共同）が非礼であるとして撤回要求したのに対して、首相は「PKOについて仮にご存じでなくても、無理のないことだ、ということを言った。もしそれが非礼であるととられることがあれば私の本意ではなく撤回する」と述べた。

また首相は「訓練を受け、命令系統を持った組織でないと、本当に有効な仕事はできない。足手まといになっても困る」と述べ、改めてPKOには自衛隊の活用が不可欠であるとの考えを強調した。

村礼議員「非礼」竹

報道ぶり 朝日 8/19

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（5月20日～5月25日）

アジア局中国課

社説

天皇訪中を両国友好の礎に

T8

国会議長にあたる中国の万里全国人民代表大会（全人代）常務委員長が二十五日来日する。日中間の懸案である今秋の天皇訪中問題も非公式に話し合われるはずだ。

今秋の天皇陛下の中国ご訪問については、さきに訪日した江沢民総書記も含め、中国側が再三要請しているのに対し、日本側は「真剣に検討したい」として明確な回答を避けてきている。

これは自民党内に「天皇を政治に巻き込むべきではない」という観点からの慎重論が根強く、政府としても態度を決めかねているからにほかならない。

だが今秋の天皇訪中を実現させるとすれば、もう時間的余裕はない。今回の万里委員長の訪日の際、政府は何らかの意思を伝えざるを得ないところに追い込まれているのである。

天皇訪中は昭和天皇の在世中からの懸案であり、二十一世紀に向けての日中友好の基礎をより強固にするためにも、ぜひ実現すべきである。日中国交正常化二十周年にあたる今秋が絶好のタイミングである。宮沢首相の決断に期待したい。

日中両国の友好関係の促進は、単に両国だけでなく、アジア・太平洋地域の平和と安定を図るうえからも不可欠である。ところが、国交正常化二十周年を迎えるとはいえ、現在の日中両国は、なお日本の中国侵略の歴史からくるこだわりが何かというと頭をもたげがちであり、真の信頼関係ができあがった、という状態には、必ずしも至っていない。

そこで天皇訪中問題が重要性をもってくる。かつて七五年の昭和天皇の訪米が、その後の日米友好の基礎を固めるのに役立ったように、二千年の日中交流の歴史の中で、今秋、初めて天皇訪中が実現する場合、必ずや日中相互の信頼関係は深まる、と思うからである。

もちろん天皇は日本国の象徴であり、政治的権能は持ち合わせていない。したがって天皇訪中にあたっては、一切の政治問題に巻き込むことのないよう中国側から確約をとりつける必要はある。

だが実際問題、そういう心配は要らないのではないか。江総書記は、さきの訪日前「天皇訪中時に中国側から難題を持ち出すつもりは全くない」と語り、銭其琛外相も最近、加藤紘一郎・本社会長のインタビューの中で「日本でいろいろ議論があることは承知している。論争を起こさないためにも、こちらからは意見は言わない」と述べるなど、日本側に理解を見せる発言を行っている。

これらは天皇訪中の際、日中戦争の謝罪や民間の賠償問題で中国側が無理な注文を出す考えのないことを示唆したもの、と受け取っていい。

天皇訪中それ自体が何らかの政治的意味合いを持つことは当然だ。過去の歴史に対するわれわれの認識がいい加減でないことを相手に知ってもらうためにこそ、天皇の訪中が必要なのではないか。改革・開放路線を加速させようとする中国としては、日本の協力のパイプを太くするためにも今秋の天皇訪中を強く望んでいるフシがないでもない。だが日本の協力は中国を国際協調のワク組みに引き込むのに役立つはずだ。伝えられる中国内部の保守、改革両派の争いも改革・開放路線を進めることでは一致しており、路線の変更は考えられない。

天皇訪中をめぐって故意に国論を二分させるような動きが自民党内に見られるのは残念だ。自重を促したい。

韓国からも天皇訪問の招請があるが、当面は、国交正常化二十周年を迎える中国を先にするのが妥当であろう。

5/25

万里委員長きょう来日

43

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長（日本では国会議長に当たる）が二十五日、衆参両院議長の招きで来日する。今秋の日中国交正常化二十周年を記念する要人交流の一環で、中国側からは四月の江沢民・共産党総書記に続く要人訪問。六月一日までの滞在中、天皇陛下と会見し、宮沢喜一首相と会談する。

中国核実験を ロシアが批判

MK

【モスクワ23日共同】二十三日のロシア通信によると、ロシア外務省は中国が今月二十一日実施した大規模な地下核実験について「国際情勢の好転や軍拡競争の抑制を非常に困難にする」と批判する声明を発表した。

声明は、この核爆発の規模が米国と旧ソ連が七四年以来守ってきた百五十キロトン規模と比べ桁違いに大きいと指摘した。

広東省で売春婦7千人摘発

A5

【北京支局24日】中国広東省で、4月初めから5月中旬までに、売春の一斉摘発が行われ、7000余人の売春婦が検挙された。中国新聞社電によると、売春は省都広州や深圳などのホテルや理髪店などが舞台となっている、という。

◇新華社香港支社長に交代の観測　実質的な在香港中国大使館である新華社香港分社の支社長が交代するとの観測が流れている。香港の華字紙「信報」によると、外交部出身の周南支社長に代わり、中国共産党中央委員会に直結した許家屯元支社長クラスの人物が起用される可能性があるという。MK 9

婦人用セーター生産 伊藤忠と中国で合弁

MK5

ニット船富

婦人セーター製造のニット船富（本社大阪府高石市、社長船富岸太郎氏）は慢性的な従業員不足に対応するため伊藤忠商事、中国江蘇省の南通市と合弁で中国にニット会社を設立した。新会社は「南通船富時装有限公司」。

本社は南通市に設き、資本金は五十五万ドル。出資比率はニット船富が六〇％、伊藤忠三〇％、南通市経済技術開発区総公司一〇％で、社長（総経理）にはニット船富の船富雄三専務が就任した。同公司が賃貸用に整備した工場（延べ床面積二千七百平方㍍）を使い、十月から操業する。

国内では加工賃が高く、採算が合わない婦人用の刺しゅう入りセーターなどを中心に初年度は七万五千枚生産する。原料のニット糸や編み機などは日本から持ち込む。

中国全人代委員長 万里氏きょう来日

MK2

中国の全国人民代表大会（全人代）の万里常務委員長が二十五日、来日する。国交正常化二十周年記念の要人往来の一環。

袋小路の天皇訪中問題

風見鶏

NK 2

出発点に戻って冷静な判断を

○…今年一月に訪れた北京では「日中国交二十周年を記念して是非、天皇陛下をお招きしたい」との中国側の熱意が様々な形で伝わってきた。

なぜ天皇訪中なのか。中国政府の思い入れについて、在北京の日本外交官は「こちらの人からみると、日本の国民の皇室に対する特別な敬愛の感情はなにか不思議なもので、それだけに強烈な印象を与えている」と語っていた。

政治の外にあって、なおかつ国民の敬愛の念を集める皇室の存在は、国際親善に大きな役割を果たしてきた。しかし、この秋にも実現すると思われていた訪中は自民党内の反対論にあって、いまや袋小路に入った感じがする。

○…自民党内では「反対論がある以上は慎重に」との意見が増えてきているが、なぜ反対なのかという肝心のところは、それほどはっきりしているわけではない。

例えば、中国が自衛隊の国連平和維持活動（PKO）参加に懸念を示し、日中間の過去の歴史にこだわる姿勢を崩していないことが、反対の理由にあげられている。「日中関係はまだそこまで成熟していない」というわけだ。

しかし、これはそっくり賛成の理由にもなる。PKO協力は、これまでの「内むき平和主義」からの脱皮を目指すものだが、戦前の軍国主義のイメージと重なって、近隣諸国の懸念を生んでいる。訪中は、そうした「過去」へのわだかまりを払しょくし、国際社会で積極的役割を果たす環境づくりの好機ともなる。

「それでは天皇の政治利用になる」との意見もあるが、「PKOなどへの態度が気にいらないから訪中をやめろというなら、それこそ政治利用になる」（政府筋）との見方もできる。

○…確かに皇室と政治の関係には微妙なものがある。英国のエリザベス女王は、この十二日にフランスのストラスブールの欧州議会を初めて訪れ、演説した。女王の欧州議会訪問は永年の懸案だったが、欧州共同体（EC）の急ピッチの統合に消極的なサッチャー前首相の時代は実現しなかったものだ。今回の訪問には保守党の一部から疑問の声が出たと伝えられる。

一九七五年の昭和天皇の訪米の際は、主に革新とされる側の中に「天皇を日米協調に利用するもの」との反発があった。

皇室外交はあくまで「友好・親善」が目的だが、国と国との付き合いで重要な要素となる儀礼外交が、広い意味で政治の場に影響を与えることは避けられない。

カーター元米大統領が現職時代に来日した際、昭和天皇との会見に深い感銘を受けた話は有名だ。皇太子時代の天皇のフィリピン訪問が、その後の対日感情の改善につながった例もよくあげられる。

天皇が昨年一年間に会われた外国の要人は、首脳や大使を含めてゆうに百人を超える。「友好・親善」が外交の基礎とするなら、皇室外交から政治的側面を一切切り離すことは不可能である。

結局のところ、訪中問題をどう考えるかは、日中友好を促進するのが望ましいかどうか、の判断に尽きる。

○…思い返せば、米ソ対立は政財・自民党にとって頼りがいのある羅針盤であった。外交問題の大半は、東西を指して動く針を見ながら判断すればまず安全航海ができた。

この羅針盤がなくなれば、方向感覚は次第にあやしくなってくる。訪中問題をめぐる自民党の迷走ぶりにも、その気配が感じられる。

中国との間には人権問題など、「国家体制が違う」というだけでは見逃せない問題があるし、「友好」の二文字で包み切れない対立もある。しかし、意見が違っても、それが感情的な衝突に発展しない成熟した日中関係をつくるために、歴代の自民党政権は尽力してきたのではないか。

昭和天皇が訪中を強く望まれていたことは、関係者の間でよく知られている。自民党内には「時機尚早論」があるが、「鄧小平後」の中国の行方などを考えれば、日中の歴史を画する天皇訪中の好機がそうあるとは思えない。

「真剣に検討する」と中国側に約束してきた政府は「今がいい時機」（宮沢首相）と認めながらも、時間をかけて党内の意見や世論の流れを見極める構えだ。

最終的には首相が判断することになろうが、袋小路で迷った時は、冷静に方向感覚を働かせ、話の出発点に戻ることが大事ではないだろうか。

（政治部次長・河西敬一）

「頭を出す鳥は撃つ」

中国で内部文書配布

天安門事件3周年控え

学生運動に厳しい対応を訴え

【北京24日清水美和】信頼できる中国筋によると天安門事件（六・四）三周年を前に、学生運動に対し「頭を出す鳥（リーダー）は撃つ」など厳しい対応を呼びかける内部文書が共産党・国家機関の幹部に配布された。中国では今春、鄧小平氏の南方視察をきっかけに「思想の解放」「極左的傾向の防止」のキャンペーンが強まっているが、同文書は学生の民主化要求への対応では依然保守派が強い影響力を保持していることを示している。

中国筋によると、この文書は北京大学党委員会の林炎志副書記が執筆した。同副書記は同大学では学生運動を否定する教育を繰り返してきたと述べ（「事件」の）評価は社会主義か資本主義かの問題が含まれており、評価を変えることは社会主義転覆につながる」と「人民内部の矛盾も扇動に利用されれば敵対的な闘争になりうる」とあくまで厳しい姿勢で臨むことを呼びかけている。

すべてに優先する」と学生が集まると解散させるのは困難なので幹部は学生寮や教室で学生を現場に行かせないよう働きかけるべきだとしている。

さらに「闘争は鋭く対決しなければ勝利できない」いったん学生運動対策に「まず先に警告し、頭を出す鳥は撃ち、人が集まればすぐ介入し、機を見て処分する」との方針で臨んでいると強調。八九年の弾圧を正当化している。

また過去の学生運動の総括から①状況②リーダー③組織④デマ――の四つの要素が運動につながるとし、事件以来、学生には「安定

5/25

中国関係

報道ぶり

file 1.

A2

「友好の象徴」としての訪中を

社説

天皇陛下の中国ご訪問が、日中間の当面の最大の焦点となっている。国交正常化二十周年の節目に当たって強く招請する中国に対し、自民党内には時期尚早とする慎重論も強い。中国の国会にあたる全国人民代表大会の万里常務委員長が二十五日から訪日するが、この問題をめぐる日本側とのやりとりは重苦しいものになりそうだ。

結論を先にいえば、われわれはこの機会に天皇訪中が実現するのが望ましいと考える。宮沢首相の決断を促したい。

先に日本を訪れた中国共産党の江沢民総書記は「今秋、両陛下を中国にお迎えできることを期待しています」と特に時期を示して直接、天皇に訪中を要請した。

二千年に及ぶ日中交流の歴史でも天皇や元首の相互訪問は例がない。江総書記は訪中要請について「子々孫々にわたって友好関係を発展させていきたいという両国民の願いに合致する」と熱意を示した。

経済建設を急ぐ中国は日本の協力に強く期待している。さらに天安門事件や人権問題をめぐり、欧米先進国との関係がぎくしゃくする中で、日本をしっかり引き付けるねらいもあるとみられている。

もしも中国側が天皇訪中にそうした目的を含ませているのなら、次のことはぜひ指摘しておかねばならない。

日本の侵略を受けながら戦争賠償請求を放棄した中国に対し、経済大国に成長した隣国としてできるだけ協力したい。だが、天皇は憲法に定められた日本国の象徴であって国政に関与はできない。中国は天皇に政治的役割を期待すべきではない。

むろん訪中の際、「過去」を避けて通ることはできないだろう。一九七五年に米国を訪問された昭和天皇が「私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争」と発言されたことやそのお人柄は、米国人の対日感情に影響を与え、ニューヨーク・タイムズ紙のレストン記者は「日本に対する憎しみや苦々しい感情はなくなった」と書いた。

江総書記は、「謝罪を求めるのか」との日本人記者の質問に「どのようなお言葉を述べられるかは日本側が考えること」と答えている。ある知日派中国人ジャーナリストは「内容よりむしろ、どれだけ誠意を示されるかの問題だろう」と指摘する。

戦争の歴史を直接、背負っていない天皇だが、ご自身の気持ちを率直な表現で伝えることは、必ずしも象徴天皇の地位と矛盾しないと思う。

九四年は日清戦争百周年にあたる。百年余の日中関係を振り返ってみると、最近の二十年を除いては残念ながら友好の歴史とはいえなかった。日清戦争から日中戦争までたびたび両国は激しくぶつかり、戦後もその後遺症は長く続いた。

率直にいって、わが国が過去の歴史を反省し、歴史の教訓に学ぶ謙虚な姿勢に欠けていたことは否定できない。小手先の対応では相手の心を打たない。侵略を是認するような誤った考えを批判し、友好を妨げる要因を取り除かなければならない。

宮沢首相は、過去の不幸な日中関係を清算するためにも、天皇訪中は決着させねばならない重要な課題と考えているという。合わせて、二十一世紀へ向けての日中関係の安定といった長期的な展望からも、前向きに取り組むべきだと思う。

天皇陛下には韓国からも招請があるが、こちらは年末に大統領選挙があり、日中国交二十周年という大義名分を考えると、中国先行は不自然ではあるまい。

「友好の象徴」としての天皇の訪中は、アジア重視の象徴的な第一歩となろう。

(2面)

A4

「自民が結束し実現すべきだ」

天皇訪中で中曽根氏

中曽根康弘元首相は二十一日、自民党の当選一回代議士有志に招かれて講演し、同党内で論議になっている天皇訪中問題について「実現した方がいいと思う。ただ政治に巻き込まないことだ。そのためには、自民党が結束して意思を強固に統一しなければならない」と述べた。

党内のコンセンサスを条件に、今秋の訪中に向け政府・自民党が前向きに取り組むべきだとの考えを示したものだ。

(4面)

5月21日付 朝日新聞(朝刊)

切っても切れぬ政治色

どうなる天皇訪中 (上)

絡む「戦後」の区切り

A4 後には難題 訪韓控える

天皇陛下の中国訪問計画が暗礁に乗り上げたままだ。政府は秋の日中国交回復二十周年に合わせたご訪問になお積極的だが、自民党内の反対論が根強く、二十五日来日する万里・全人代常任委員長にも「朗報」は伝えられそうにない。天皇外遊の例としては、昭和天皇の訪欧、訪米、それに現天皇の東南アジア訪問があるが、日本による侵略や植民地支配の歴史をもつ中国と韓国の訪問は、残された大きな懸案だ。それにしても、友好親善をうたう「天皇の外遊」が、どうしてこんなに問題になるのか、その背景と論議を探ってみる。

訪欧・訪米

天皇外遊の歴史は佐藤政権時代の一九七一年秋、昭和天皇ご夫妻の欧州七カ国訪問に始まった。「皇太子時代に訪れた欧州をもう一度」というご自身の希望もあった。敗戦国としての難しさに加え、七十歳というご高齢、しかもハードスケジュール。懸念の声もあったが、天皇は「国際親善に努めたい。私はやるよ」と、相手国優先の日程作りを希望されたという。

往路、給油のため寄った米国のアンカレジに、わざわざニクソン米大統領夫妻が出迎え、天皇と会見した。春以来、日米繊維交渉がこじれたうえ、この夏は大統領訪中とドル防衛策の発表と「ニクソンショック」が続いただけに、日本の感情を和らげよう、との狙いがあった。この席で大統領は、天皇の米国訪問を要請した。

天皇は訪欧後、「欧州に行った以上、ほかの国にも行くのが当然だと思う。事情の許す限り今後も……」と積極姿勢を示され、訪米が日程に上ってきた。だが、それからが大変だった。

続く田中政権がいったん七三年十月の訪米計画を立てたが、社会、共産両党が「内政の失敗から目をそらすための政治利用だ」と強く反発。「天皇訪米のあと、ニクソン大統領が訪日」という順序に、自民党からも反対が出た。宮内庁は「反対を押し切って行われるべきではない」と慎重で、結局は断念。釈明のため大平正芳外相が訪米する事態になった。

訪米が実現したのは、次の三木政権になってから。相手もフォード大統領に代わっていた。訪米の二カ月前に、内閣広報室が世論調査をし、その賛否を尋ねた。だが、調査の事実と「六九%が賛成」という結果が発表されたのは、訪米終了後のこと。天皇は米国で「私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争」に触れられ、戦後の米国の援助に謝意を表明。この訪米はいま、日米友好の基礎固めに大きな役割を果たしたと評価されている。

訪中

昭和天皇は訪米直後、「日中平和友好条約が締結され、訪中の機会が訪れれば非常にうれしい」と述べられた。平和条約の締結二カ月後の七八年十月、来日した鄧小平副首相が天皇に直接、訪中を要請。だが、これは公表されず、八〇年に来日した趙国鋒首相の招請と合わせて、八六年に明るみに出た。

昭和天皇の訪中は「高嶺」で実現しなかったが、代わって検討された皇太子の訪中も実現できなかった。八四年から八七年にかけて中国大使を務めた中江要介氏は「日中友好ムードが最高潮になった八四年がチャンスだった」と悔やむ。翌年、中曽根康弘首相の靖国神社公式参拝に中国が反発、京都の中国人留学生寮の所有権問題も起き、友好ムードは冷めていった。

現在の天皇陛下は八九年八月、即位後初めての記者会見で「私の立場から外国の人々との理解と親善の増進に役立つよう努めていきたい」。中国、韓国訪問も「機会があれば」と述べられた。

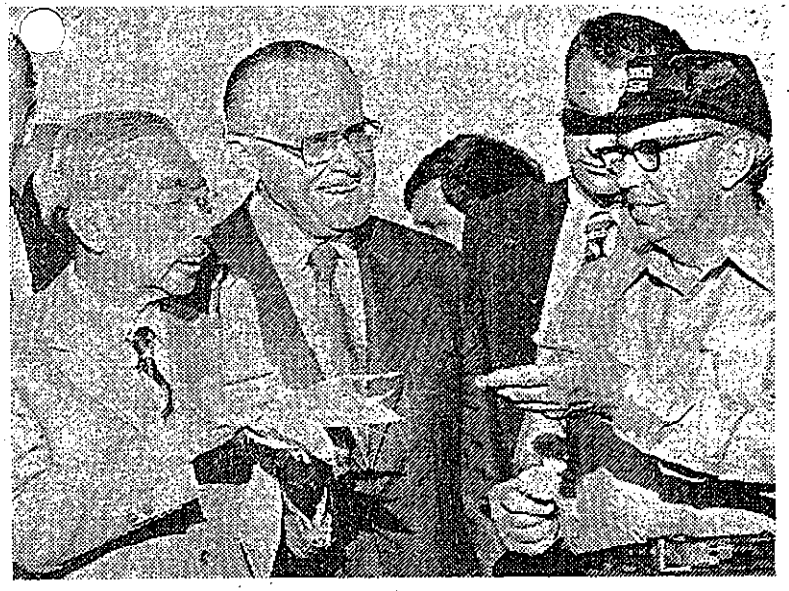
だが、その二カ月前に起きた天安門事件で、当時は環境が最悪だった。それが変化したのは、昨年八月の海部俊樹首相の訪中で日本が中国の孤立状況を救ってから。今年は国交回復二

天皇陛下の皇太子時代の公式外国訪問

53年 ①イギリス
60年 ②米国③イラン、エチオピア、インド、ネパール
62年 ④パキスタン、インドネシア⑤フィリピン
64年 ⑥メキシコ⑦タイ
67年 ⑧ペルー、アルゼンチン、ブラジル
70年 ⑨マレーシア、シンガポール
71年 ⑩アフガニスタン
73年 ⑪オーストラリア、ニュージーランド⑫スペイン
75年 ⑬ネパール
76年 ⑭ヨルダン、ユーゴスラビア、イギリス
78年 ⑮ブラジル、パラグアイ
79年 ⑯ルーマニア、ブルガリア、オランダ
81年 ⑰サウジアラビア、スリランカ⑱イギリス
83年 ⑲ザンビア、タンザニア、ケニア
84年 ⑳ザイール、セネガル
85年 ㉑スペイン、アイルランド㉒スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド
87年 ㉓米国

5/20日
朝日新聞(朝刊) 4頁

次頁へ



訪米された昭和天皇（左）は農場も訪問。農場主と歓談された＝75年、シカゴ郊外で

招請を重ねている。江総書記に「引き続き真剣に検討する」と答えた宮沢喜一首相は「実現すれば、友好関係発展のため、極めて意義深い」とも語った。「見送れば、日中間は非常にまずいことになる」（外務省幹部）との見方が政府内には強い。

訪韓

訪韓の難題も控えている。八四年秋、金斗煥大統領来日の際、韓国側が昭和天皇の訪韓を持ち出したのが始まりだ。八六年三月、日韓両国は皇太子が秋に「天皇の名代」として訪韓されることで協議に入った。

だが、韓国の野党や反体制団体が「反対」「阻止」などの声明を出し、一部の新聞も時期尚早論を展開した。過去に対する激しい感情のほか、韓国の独裁政権や在日韓国人の指紋押捺（おうなつ）問題などが背景にあった。やがて両国政府は「延期」を発表。公式の理由には美智子妃（現皇后陛下）のご病気による日程上の問題が挙げられた。

昭和天皇の外遊は皇太子時代を含めても三回だけだったが、現天皇は皇太子時代の公式訪問だけでも三十八カ国に及ぶうえ、まだ五十代。政府は今後も「年に一回程度は」と考えており、隣国でもある韓国訪問は早めに実現させたいところだ。

だが今回、中国を見送るようなら、韓国はとうてい無理という観測が政府内には強い。もともと反日感情が強いうえ、旧日本軍の従軍慰安婦問題なども表面化、一方で対日投資赤字も深刻になっているからだ。

天皇の外遊は「政治色抜き」が建前だが、日本との関係が難しい国ほど「友好の象徴」としての訪問自体、政治的な意味を帯びるのも宿命だ。天皇陛下の中国、韓国訪問が無事に終わった時、日本の「戦後」にも一区切りつく、と見る向きは多い。

天皇の外国訪問

<昭和天皇>

訪問国と期間	訪問中のハプニング
71年9月27日 ―10月14日 デンマーク ベルギー フランス イギリス オランダ スイス 西ドイツ	▽天皇の車に卵が投げられ、窓ガラスに当たる（ベルギー） ▽お手植えの杉の苗木が切り倒される（英国） ▽天皇の車に水の入った瓶が投げられ、窓ガラスにヒビが入る（オランダ）
75年9月30日 ―10月14日 米　国	▽クジラ愛護団体の40人が、天皇が訪れた博物館にプラカードを持って集まる ▽米国の警備当局が銃を持った男性ら3人を逮捕 ▽爆弾を首席随員の福田赳夫副総理の部屋に仕掛けた、とのいやがらせ電話

<現天皇>

91年9月26日 ―10月6日 タイ マレーシア インドネシア	▽第2次大戦中、補助兵力として日本軍に雇用されたインドネシア人の元「兵補」が記者会見し、当時の未払い給与や貯金の返還を訴える（インドネシア）

十周年とあって「絶好のタイミング」と中国が熱心に働きかけてきた。

天安門事件の後遺症と並び、自民党が気にするのは天皇の「お言葉」だが、四月に来日した江沢民・共産党総書記は政府首脳に、お言葉で「文句はつけない」と伝えたという。経済界きっての中国通である春名和雄・日中友好協会長も「日本の経済支援を必要とする中国がいま、お言葉で文句をつけることはなかろう」という。それだけに今がチャンスとの見方もある。

中国側はこの一年間に七回も

file 天皇

保守内の対立なお深く

どうなる天皇訪中 (下)

5/21 付朝日新聞（朝刊）4面

A4



衛藤　晟一氏
（代議士）

反対

政治不介入に背く
中国側の認識に疑問

――政府は天皇訪中に前向きのようですが。

「憲法に対する認識が甘いのではないか。憲法は天皇は政治に不介入、と決めている。外国訪問も、外交課題がなく、単なる親善ならば良い。しかし、政治的効果が期待されているという状態で、天皇が行くのは憲法の精神を理解していない」

――訪中に政治的な意図を感じますか。

「みんな感じている。中国国内には保守派と改革派との権力闘争があるし、共産国だ。過去についてどう発言するか、政府でも明確になっていない。尖閣諸島の領土問題も出てきた。そういう時に、天皇が行く必要は全くない」

――政府の対中外交はどう思いますか。

「それは総理が行けばいい。天皇に肩代わりさせることがナンセンスだ」

――日本の国連平和維持活動（PKO）のための自衛隊派遣に中国は批判的です。

「（中国政府は）どういう時代認識をしているのだろう。過去の日本をうんぬんというのはわからんでもないが、そんな時代認識しかしていないのかな、という感じだ」

「南京虐殺は調査すべきだと思う。事実ならば、どこにどのような責任があるのか、その実態を調べて、責任は取らねばならない。賠償すべきもの、すべきでないものを明確に分ければ良い。何で僕ら戦後世代までがいつまでも、この問題を引きずらなければならないんだ」

――党内の戦中派から「新たなナショナリズム」という声もでていますが。

「過去の引っ掛かりは、あの世代にはあるかもしれないが、僕らにはわからない。ならば、どうしてきちんとした責任の取り方を、あの世代でやらないのか。『新しいナショナリズム』なんて冗談じゃないよ」

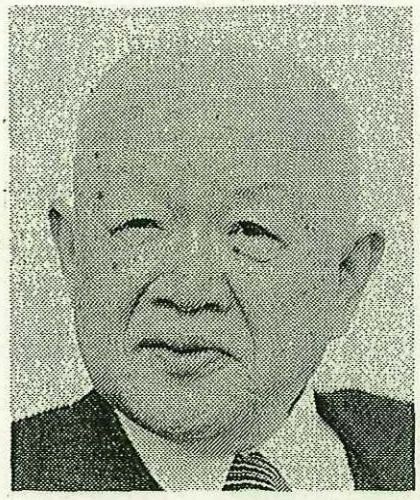
大分一区選出の自民党代議士（三塚派）。当選一回。石原慎太郎氏が率いる「黎明の会」のメンバー。四月に当選一回代議士有志で結成した国民輔幹事長に「天皇訪中は時期尚早」と申し入れた、仕掛け人。四十四歳。

天皇陛下の中国訪問は、今年一月に計画が表面化するや、自民党内から激しい批判を浴び、四月には党執行部が政府に慎重な対応を求めた。その後も計画は一向に進展せず、友好関係確立のための訪中が、逆に日本の保守陣営の中国への冷ややかな視線を浮き彫りにした形だ。訪中は実現すべきなのか。そうではないのか。賛成論、反対論を展開する代表的な二人にインタビューした。

A4

賛成

中国国民も心開く
アジアの安定に寄与



猪木　正道氏
（平和・安全保障研究所会長）

――なぜ賛成なのですか。

「国家にとって安全保障は一番重要な問題だが、日本として最も重要なのは日米同盟を堅持し、強化すること。二番目は、中国との関係。アジアで強力な国はなんと言っても、日本と中国。日本は経済超大国であり、中国は核保有国。対照的な両国が、良好な関係を保つことで朝鮮半島も東南アジア情勢も安定する。逆に、覇権を争えば緊張を生む」

――友好関係確立のために訪中が必要と。

「一九八〇年ごろから、よく中国を訪れるが、中国の人と会って感じるのは、やはり過去の恨みは忘れていないということ。外交上手だから露骨には言わないが、心は開いていない。友好関係にある国の元首が相互訪問するのは、常識だ。何千万の日本人が行って、日中友好を説くよりも、天皇陛下の訪中によって、中国国民が『日中新時代が来た』と思い、心を開くのでは、と期待している」

――反対派は、中国が領海法で尖閣諸島の領有権を主張したことや、天安門事件に見られた人権侵害などを理由に挙げています。

「どちらもこじつけ。たしかに領海法に入れたのは良くない。しかし、尖閣諸島は日本が今、実効支配している。これは抗議すれば済む問題だ。天安門事件も遺憾な事件だが、そう簡単に民主化するとは思えない。人権論者が言うのならば別だが、他国の人権問題に熱心でなかった人が、それを理由に反対するのは口実としか思えない」

――天皇が政治に巻き込まれる恐れがあるとの主張も強い。

「天皇は政治に関与できないので、『侵略して済みません』と謝罪する必要はない。中国も期待していないから問題ない。自民党の若い世代から反対論が出ているのは、日本が中国で何をやったかを知らないからではないか。日本は、中国に大きな借りがある。陛下が訪問することだけでも、かなりの部分、返すことができる。中国がことあるごとに訪中を要請しているのに、それを断ったら、しこりを残すことにもなる」

平和・安全保障研究所会長。一九四九年に京都大学教授となり、政治学・政治史を教えた。七〇年七月、当時の中曽根防衛庁長官に請われ、七八年七月まで防衛大校長。七十七歳。

A4

――は自民党内

厳しい中国への批判
賛成派は動き控える

天皇訪中計画にブレーキをかけている自民党反対派の中で火付け役となったのは、もともと教科書問題や靖国神社の公式参拝をめぐる中国側の対応に反発を見せていた藤尾正行氏（党総務）ら旧来のタカ派勢力だった。しかし、衛藤晟一代議士（三塚派）ら若手議員七人も党執行部に訪中反対を申し入れた。いずれも、「天皇を政治に巻き込むべきではない」というのが反対の最大の理由だ。

だが、これまで実現した欧州、米国、東南アジアへの天皇訪問に比べて今回、反対の声が一段と強いのは、自民党内に中国に対する厳しい見方が根強くあるからだ。

「体制の違う国に、即位したばかりの天皇がなぜ好んで行くことがあるのか」という激しい意見や、天安門事件に見られる人権抑圧、武器輸出といった中国の政策を批判する声が相次いだという。さらに今回は、中国が二月に制定した領海法で尖閣諸島の領有を明記したことや、国連平和維持活動（PKO）協力法案による自衛隊の海外派遣に慎重な対応を求めたことが、自民党内の反対派を勢いづける結果となった。

こうした反対論によって、党執行部は慎重論に傾いていった。台湾派で知られる金丸信副総裁は、もともと天皇訪中には賛成の立場だったと言われる。

しかし、「反対、賛成で意見が二分している時に、反対を押し切ってまで行ってほしい、というわけにはいかない」と周囲に漏らしている。

一方、賛成派は、表立って賛成論を展開すると党内の意見対立が激化し、かえって訪中実現が遠のくと見て、動きは控えめ。宮沢喜一首相は竹下登元首相や中曽根康弘元首相らに根回ししつつ、訪中実現に向け党内の空気を変えて行きたいとしているが、なかなか壁は厚そうだ。

訪問も、政府が「親善訪問」に強くあるからだ。

よる政治的効果を計算に入れていたことは否定できない。ころした四月の党総務会懇談会では

10

天皇陛下御訪中関連報道ぶり

4．5．28

中　国　課

天皇陛下御訪中をめぐる最近(4、5月)の主要六紙及び外字紙一紙の報道ぶりは以下の通り。朝日、毎日、日経、東京は社説で賛成の立場を明確化。

1．**朝日新聞**：「『友好の象徴』としての訪中を」(5月21日付社説)…賛成。
・訪中はアジア重視の象徴的な第一歩。過去の不幸な日中関係の清算のためにも、21世紀に向けての両国関係の安定のためにも、前向きに取り組むべし。
・天皇陛下は政治的役割を果たせないが、「過去」についてご自分の気持を率直に伝えることは可能。「過去」は避けて通れず。
・訪韓より先に行っても不自然ではない。

2．**毎日新聞**：「日中が超えるべきハードル」(4月8日付社説)…賛成。
・「国交正常化２０周年の今年が一番望ましい」(外務省幹部)ということだが、このタイミングを生かして、日中両国民が素直に歓迎できる天皇訪中が実現するよう両国政府の努力を促したい。

3．**読売新聞**：「『天皇訪中』結論　なお時間」(5月24日付分析記事)

4．**産経新聞**：「正論」で賛否両論を紹介。

5．**日本経済新聞**：「自然態の陛下の中国訪問を期待する」(5月28日付社説)
…賛成。
・賛成論、反対論は一枚のコインの裏表の関係。
・御訪中問題から政治的な思惑を完全に取り除けることは所詮不可能。宮沢内閣の責務は、政治的な思惑を力の限りを尽くして脱色すること。
・総理は自ら①中国首脳との間で万全の意思疎通の道を確保し、②「日本が突出するわけではない」旨米欧各国に理解求め、その上で決断を。
・御訪中問題は日本側の問題。政府の決断にかかっているが、訪中が決まれば国民は静かに見守りたい。

6．**東京新聞**：「天皇訪中を両国友好の礎に」(5月25日付社説)…賛成。
・21世紀に向けて日中相互の信頼関係を深める為にも、ぜひ実現すべし。
・訪中時、中国側が政治的に難題を出す可能性は無い。
・訪中は日中の協力を強め、更には中国を国際強調の枠組みに引き込むのに役立つ。
・自民党内に故意に国論を二分させるような動きがあるのは残念。自重を促したい。
・当面、訪韓より先に行うのが妥当。

7．Asahi Evening News: "LDP Should Consider Emperor's Visit to China"
(5.27 Opinion;朝日新聞論説委員)…賛成。
・９月訪中の実現のため、総理が決断するべし。

(了)

A2

「友好の象徴」としての訪中を

社説

天皇陛下の中国ご訪問が、日中間の当面の最大の焦点となっている。国交正常化二十周年の節目に当たって強く招請する中国に対し、自民党内には時期尚早とする慎重論も強い。中国の国会にあたる全国人民代表大会の万里常務委員長が二十五日から訪日するが、この問題をめぐる日本側とのやりとりは重苦しいものになりそうだ。

結論を先にいえば、われわれはこの機会に天皇訪中が実現するのが望ましいと考える。宮沢首相の決断を促したい。

先に日本を訪れた中国共産党の江沢民総書記は「今秋、両陛下を中国にお迎えできることを期待しています」と特に時期を示して直接、天皇に訪中を要請した。

二千年に及ぶ日中交流の歴史でも天皇や元首の相互訪問は例がない。江総書記は訪中要請について「子々孫々にわたって友好関係を発展させていきたいという両国民の願いに合致する」と熱意を示した。

経済建設を急ぐ中国は日本の協力に強く期待している。さらに天安門事件や人権問題をめぐり、欧米先進国との関係がぎくしゃくする中で、日本をしっかり引き付けるねらいもあるとみられている。

もしも中国側が天皇訪中にそうした目的を含ませているのなら、次のことはぜひ指摘しておかねばならない。

日本の侵略を受けながら戦争賠償請求を放棄した中国に対し、経済大国に成長した隣国としてできるだけ協力したい。だが、天皇は憲法に定められた日本国の象徴であって国政に関与はできない。中国は天皇に政治的役割を期待すべきではない。

むろん訪中の際、「過去」を避けて通ることはできないだろう。一九七五年に米国を訪問された昭和天皇が「私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争」と発言されたことやそのお人柄は、米国人の対日感情に影響を与え、ニューヨーク・タイムズ紙のレストン記者は「日本に対する憎しみや苦々しい感情はなくなった」と書いた。

江総書記は、「謝罪を求めるのか」との日本人記者の質問に「どのようなお言葉を述べられるかは日本側が考えること」と答えている。ある知日派中国人ジャーナリストは「内容よりむしろ、どれだけ誠意を示されるかの問題だろう」と指摘する。

戦争の歴史を直接、背負っていない天皇だが、ご自身の気持ちを率直な表現で伝えることは、必ずしも象徴天皇の地位と矛盾しないと思う。

九四年は日清戦争百周年にあたる。百年余の日中関係を振り返ってみると、最近の二十年を除いては残念ながら友好の歴史とはいえなかった。日清戦争から日中戦争までたびたび両国は激しくぶつかり、戦後もその後遺症は長く続いた。

率直にいって、わが国が過去の歴史を反省し、歴史の教訓に学ぶ謙虚な姿勢に欠けていたことは否定できない。小手先の対応では相手の心を打たない。侵略を是認するような誤った考えを批判し、友好を妨げる要因を取り除かなければならない。

宮沢首相は、過去の不幸な日中関係を清算するためにも、天皇訪中は決着させねばならない重要な課題と考えているという。合わせて、二十一世紀へ向けての日中関係の安定といった長期的な展望からも、前向きに取り組むべきだと思う。

天皇陛下には韓国からも招請があるが、こちらは年末に大統領選挙があり、日中国交二十周年という大義名分を考えると、中国先行は不自然ではあるまい。

「友好の象徴」としての天皇の訪中は、アジア重視の象徴的な第一歩となろう。

朝日 5月21日付朝刊 ②

社説

日中が越えるべきハードル

天安門事件のあと中国首脳として初めて来日した江沢民総書記が、宮沢首相をはじめ与野党の党首らと会談した。日中国交正常化二十周年にあたって、日中関係をさらに発展させるうえで有意義な対話だったと思う。

この中で江沢民、宮沢両氏は良好な日中関係が両国にとってはもちろん、アジア・太平洋地域ひいては世界の平和と繁栄のためにも、欠かせないことを確認し合った。

正常化二十年の時の流れと冷戦後の新しい国際環境の変化は、いまや両国に「世界の中の日中関係」を求めている。両首脳が未来を展望する日中関係を築いていくことで一致したことは大きな意味がある。

世界の国民総生産の一五％を占める経済大国の日本と、十二億の人口を擁して巨大な潜在力をもつ中国の安定した関係を抜きにして、アジア・太平洋地域の平和も、安定もあり得ない。

それは、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の国連加盟や、核査察の受け入れ、カンボジア和平などをめぐる中国の政治的な影響力をみてもはっきりしている。

しかし、日中両国が国際平和のために共に手を携えていくには、中国が現在の改革・開放路線を継続し、国際協調の対外政策をとることが前提にならざるを得ない。

江沢民総書記は宮沢首相との会談や講演を通じて、改革・開放路線への強い自信を示している。最高実力者の鄧小平氏の指導の下で、改革路線が定着しつつあることをうかがわせる。日中関係にとって好ましい姿勢であり、日本の経済支援にもはずみがつくことになるだろう。

日本は天安門事件のあと、先進国首脳会議（サミット）で対中制裁解除のイニシアチブをとり、第三次円借款を再開したのをはじめ、昨年は西側先進国首脳として初めて当時の海部首相が訪中するなど他の国々より柔軟な態度をとってきた。中国の改革路線を支持し、国際的に孤立させないためには妥当な判断だったといえる。

だが、今度の首脳会談が総論では一致しても、具体論になると双方に認識のずれがあることを改めて明白にしたのも事実だ。

中国側が七度にわたって要請した天皇訪中問題で進展がなかったのは、中国側を失望させたかもしれない。「引き続き真剣に検討する」という首相の答えは、一月に訪中した渡辺外相の発言から後退した印象を与える。

訪中によって「天皇の戦争責任」の問題が出ることや、開放政策をめぐる中国内の権力抗争などを警戒して、自民党内の親台湾派を中心に慎重論が強まっているためだ。そのことはとりもなおさず、宮沢政権の政治基盤が弱体であることをも示している。

憲法上、天皇が政治にかかわることは許されない。その一方で、日本の歴史の過ちを清算し、未来を志向する友好親善関係を築くうえで、天皇訪中を区切りとしたいという中国側の気持ちも理解できる。

その意味では、「国交正常化二十年の今年が一番望ましい」（外務省幹部）ということにもなろう。このタイミングを生かして、日中両国民が素直に歓迎できる天皇訪中が実現するよう日中両国政府の努力を促したい。

日中両首脳は、人権問題や武器輸出の規制などの軍備管理・軍縮問題をめぐっても意見が一致しなかった。

国際社会への仲間入りや近代化のためには、中国はこれらの問題に積極的に応えなければならない。巨額の経済支援を行っているわが国としても、その実現のための努力を重ねることが国際的な責務でもあろう。

新時代の日中関係を築くには互いに越えなければならない多くのハードルが横たわっている。

「天皇訪中」結論 なお時間

自民は尚早派大勢
首相決断時期探る

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日に来日するが、焦点は天皇陛下の訪中問題。政府は引き続き「真剣に検討中」として確答は見送る構えだ。この背景には、訪中に消極的な自民党が実現に意欲を燃やす外務省を批判、動きを封じ込められた形の外務省は宮沢首相の政治決断に望みを託しているものの、首相は自民党の顔色をうかがうばかりで決断を先延ばしという図式が浮き彫りになっており、結論が出るまでにはなお時間がかかりそうだ。

外務省は刺激避け沈黙

政治決断

宮沢首相は、天皇訪中について、公式には「真剣に検討する」と繰り返すだけでその態度を明確にしていない。さる十八日、盧溝橋事変五十周年を機に、アジアの中心である日中の交流を促進する突破口にしたいという思いがあるというのが周辺の解説だ。首相は、これまで、最終判断の基準として、①政治的に利用されない②国民に歓迎される――の二点を示してきた。そのうち、第一基準について、「江沢民（中国共産党総書記）さんも、面倒なことはいっていない」（四月下旬の記者団との懇談）とし、クリアずみとの認識を示しているが、問題は第二の基準。

自民党内には、「まず、首相官邸が汗を流し、反対派を説得すべきだ」（幹部）との声が強い。首相が竹下元首相と十九日に会談したのも、訪中実現のカギを握るといわれる竹下氏に党内根回しの協力を求めるため、との見方があるが、自民党内の反対が強いだけに、首相としては、決断の時期を慎重に見極めざるを得ない、というのが実情だ。

慎重姿勢

自民党内は「この問題に対し、政治的に利用される」などの懸念から根強い反対論があり、こうした党内状況を踏まえて党執行部も慎重な姿勢だ。

反対論の理由は、①天皇の訪中が中国国内の改革派と保守派の権力闘争に利用される②訪中時に、日中関係の過去への謝罪を求められる心配がある③中国が尖閣諸島の中国への帰属の主張や、国連平和維持活動（PKO）参加に懸念を表明するなど、訪中できる環境にあるとは言えない――など。こうした立場から、若手議員が既に四月下旬に宮沢首相に天皇訪中反対を申し入れている。

この問題は総務会や党四役会議でもしばしば論議されているが、総務会は時期尚早との意見が大勢。これを踏まえて、四役も、「党内に反対論、慎重論が強いことを重視する」との認識で一致している。

この中で中国との間に太いパイプを持つ竹下元首相は基本的には訪中に前向きと見られているが、慎重論や反対論が前面に出ている党内の空気に慎重姿勢をとっているとされる。中曽根元首相も竹下氏とほぼ同様の考えのようだ。党内の大勢が慎重論であることから、日中議連関係者など賛成論者も積極的に動けず、訪中実現に向けての党内環境は自ずと厳しさを増しているのが実情だ。

首相頼み

天皇訪中実現に一番熱心なのは、国交正常化二十周年の節目に当たる中国が外務省にとって最も望ましい相手であるのも事実。「このチャンスを逃したら、しばらくは難しい。日中関係に及ぼす影響も心配だ」（外務省幹部）との思いが強い。

それだけに先行き不透明さを増しつつある状況に、外務省幹部の間からは「援軍がない」とのぼやきも出がち。「もう我々のレベルの問題ではない」（外務省筋）として、宮沢首相の政治決断にケタを預けた格好だ。

＜天皇の中国ご訪問問題をめぐる最近の動き＞

月日
1. 4　渡辺美智雄外相、訪中。李鵬首相らの天皇訪中招請に、「真剣に検討していく」と表明。
2.21　楊振亜・駐日中国大使が記者会見で「両国の一時期の不幸な歴史に対して態度表明を行えば、中日両国民ともに自然なことと思う」と述べ、天皇陛下の訪中でお言葉問題への期待を示す。
自民党４役会議で天皇訪中で慎重対処で一致。
2.25　中国、全国人民代表大会で、尖閣諸島を中国領と規定した中国領海法を採択。日本は抗議。
3. 9　日本の中国侵略の戦争賠償を求める法案が全人代に提出される動き表面化。
4. 6　江沢民総書記来日。宮沢首相との会談で①尖閣諸島領有問題の棚上げ方針は不変②国連平和維持活動は敏感な問題、慎重に対応を――などの考えを表明。宮沢首相は天皇訪中で「引き続き真剣に検討したい」と述べる。
4.24　自民党佐藤孝行総務会長、首相に訪中は時期尚早との党内世論を報告。
5. 8　楊尚昆国家主席、訪中した竹下元首相に天皇陛下訪中問題で直接言及せず。

読売5/24付朝刊②

自然体の陛下の中国訪問を期待する

社説

若葉がもえる美しい日本に、中国全国人民代表大会の万里常務委員長が訪れている。今年が日中国交正常化二十周年に当たるのを機会に、両国の相互理解を深めようと合意した要人による相互訪問の一環である。われわれはこの際、万里委員長が自分の目で見た日本の国情を中国の大衆に伝達されることを切に望みたい。

現在、日中両国間には緊急に解決を必要とする懸案はほとんどない。だが、この中国要人の訪問をめぐって何か「奥歯に物のはさまった」ような違和感がただよっている。両国政府の意識の底に、最大の懸案である天皇陛下の中国ご訪問問題が、どっしりと腰を下ろしているからだ。宮沢首相との会談の場でもこの問題について双方は言及しなかったという。

日本国内には依然、陛下のご訪中をめぐって賛否両論がある。反対論は、日本の国連平和維持活動（PKO）をめぐる中国側の「敏感な問題」という姿勢、日中間の過去の歴史に関するこだわり、西側先進諸国が追及する人権問題、さらには天皇訪中が政治的に利用されるのではとの懸念などが背景になっている。

しかし、本紙の政治コラム「風見鶏」も指摘しているように、反対論の理由は賛成論の理由にもなる。PKOに対する中国の懸念は、過去の日本軍部の中国侵略が温床になっており、陛下のご訪中は中国のわだかまりを払しょくする好機にもなる。賛成論、反対論は一枚のコインの表裏の関係にある。

われわれはあえて天皇陛下のご訪中を期待する。日本国憲法の規定からも言っても、陛下を政治的な思惑に巻き込んではならないことは自明の理である。

だが、人間が直接関与するこの世の中に、建前はともかく政治的な思惑から純粋に隔絶された真空地帯があるだろうか。陛下のご訪中問題をめぐって人間ができることは、力の限りを尽くして政治的な思惑を脱色する作業だけである。これが宮沢内閣に課せられた責務である。

中国側は根回しの段階から「天皇陛下の訪中について、日本側を困らせるようなことはしない」ことを繰り返し伝えている。現段階で言えることは、宮沢首相は自ら中国首脳との間で万全の意思疎通の道を確保すると同時に、人権問題に厳しい米欧各国に「日本が突出するわけではない」旨の理解を求めたうえで決断を下すことである。警護その他の点からも時間のゆとりはそれほど残されてはいない。

われわれが天皇陛下のご訪中を期待するのは、賢明なお人柄に信を寄せているからである。昨年夏のテレビ放映を思い起こして欲しい。島原の普賢岳噴火による被災者を見舞われた時、腕まくりしたワイシャツ姿で床に両ひざをつき、目線を合わせて慰問された。新しい陛下像がここにあったように思われる。

ご訪中の問題は日本側の問題である。日本政府の決断にかかっているが、中国訪問が仮に決まれば、国民は静かに見守りたい。〝雑音〟は自然体の陛下を損なうだけである。

日本経済新聞
1992年(平成4年)5月28日(木曜日)

社説

天皇訪中を両国友好の礎に

国会議長にあたる中国の万里全国人民代表大会（全人代）常務委員長が二十五日来日する。日中間の懸案である今秋の天皇訪中問題も非公式に話し合われるはずだ。

今秋の天皇陛下の中国ご訪問については、さきに訪日した江沢民総書記も含め、中国側が再三要請しているのに対し、日本側は「真剣に検討したい」として明確な回答を避けてきている。

これは自民党内に「天皇を政治に巻き込むべきではない」という観点からの慎重論が根強く、政府としても態度を決めかねているからにほかならない。

だが今秋の天皇訪中を実現させるとすれば、もう時間的余裕はない。今回の万里委員長の訪日の際、政府は何らかの意思を伝えざるを得ないところに追い込まれているのである。

天皇訪中は昭和天皇の在世中からの懸案であり、二十一世紀に向けての日中友好の基礎をより強固にするためにも、ぜひ実現すべきである。日中国交正常化二十周年にあたる今秋が絶好のタイミングである。宮沢首相の決断に期待したい。

日中両国の友好関係の促進は、単に両国だけでなく、アジア・太平洋地域の平和と安定を図るうえからも不可欠である。ところが、国交正常化二十周年を迎えるとはいえ、現在の日中両国は、なお日本の中国侵略の歴史からくるこだわりが何かというと頭をもたげがちであり、真の信頼関係ができあがった、という状態には、必ずしも至っていない。

そこで天皇訪中問題が重要性をもってくる。かつて七五年の昭和天皇の訪米が、その後の日米友好の基礎を固めるのに役立ったように、二千年の日中交流の歴史の中で、今秋、初めて天皇訪中が実現する場合、必ずや日中相互の信頼関係は深まる、と思うからである。

もちろん天皇は日本国の象徴であり、政治的権能は持ち合わせていない。したがって天皇訪中にあたっては、一切の政治問題に巻き込むことのないよう中国側から確約をとりつける必要はある。

だが実際問題、そういう心配は要らないのではないか。江総書記は、さきの訪日前「天皇訪中時に中国側から難題を持ち出すつもりは全くない」と語り、銭其琛外相も最近、加藤紘一郎・本社会長のインタビューの中で「日本でいろいろ議論があることは承知している。論争を起こさないためにも、こちらからは意見は言わない」と述べるなど、日本側に理解を見せる発言を行っている。

これらは天皇訪中の際、日中戦争の謝罪や民間の賠償問題で中国側が無理な注文を出す考えのないことを示唆したもの、と受け取っていい。

天皇訪中それ自体が何らかの政治的意味合いを持つことは当然だ。過去の歴史に対するわれわれの認識がいい加減でないことを相手に知ってもらうためにこそ、天皇の訪中が必要なのではないか。

改革・開放路線を加速させようとする中国としては、日本の協力のパイプを太くするためにも今秋の天皇訪中を強く望んでいるフシがないでもない。だが日本の協力は中国を国際協調のワク組みに引き込むのに役立つはずだ。伝えられる中国内部の保守、改革両派の争いも改革・開放路線を進めることでは一致しており、路線の変更は考えられない。

天皇訪中をめぐって故意に国論を二分させるような動きが自民党内に見られるのは残念だ。自重を促したい。

韓国からも天皇訪問の招請があるが、当面は、国交正常化二十周年を迎える中国を先にするのが妥当であろう。

東京 5月25日付 朝刊 ⑧

LDP Should Consider Emperor's Visit to China

By Tatsuro Iwamura
Asahi Shimbun Editorial Writer

Prime Minister Kiichi Miyazawa is faced with the difficult task of deciding whether or not to have the Emperor visit China this fall to commemorate the 20th anniversary of the normalization of diplomatic relations between Japan and China.

The subject has been a long-pending issue between the two nations and Miyazawa must either comply with China's strong request for the visit or decide against it, at least for the time being, taking into consideration opposing and circumspective views held by some members of his Liberal Democratic Party.

I believe the prime minister should decide on having the Emperor visit China. This is because it is not desirable to turn the question of whether the Emperor should or should not visit China itself into a diplomatic issue from the point of view of establishing a stable, long-lasting relationship with the country.

With the time needed on both sides to prepare for the Emperor's visit in September, which marks the 20th anniversary of the normalization of diplomatic relations, Miyazawa is expected to make the decision this week, as Wan Li, chairman of the National People's Congress, China's Parliament, is visiting Tokyo. There's little time left to consider the matter.

China has repeatedly invited the Emperor to visit the country. It hopes to realize mutual visits by the supreme leaders of both countries to mark the 20th anniversary, upgrading the level of mutual visits of high-ranking officials and showing the world the firm Japan-China friendship. It hopes, therefore, to invite the Emperor to Beijing and, in return, plans to have President Yang Shangkun visit Tokyo.

China asked for the Emperor's visit in April 1989, just before the outbreak of the military crackdown on pro-democracy activists in Tiananmen Square. Premier Li Peng, who was visiting Tokyo at the time, brought up the subject with then-Prime Minister Toshiki Kaifu, who replied, "We will consider the matter with pleasure."

But the Tiananmen Square incident led Japan to withhold visits to China by government officials for some time. At the 1990 summit of the seven Western industrialized countries held in Houston, Kaifu advocated a step-by-step lifting of economic sanctions against China by Western states. In 1991 he visited Beijing himself,

'92. 5. 27
Opinion Pg
ASAHI
EVENING
NEWS

1/2

prior to visits by British Prime Minister John Major and Italian Prime Minister Giulio Andreotti, taking the initiative to improve relations with China after Tiananmen Square.

Since Western countries did not express opposing views against Japan's move, the Miyazawa administration took a positive attitude to materialize the Emperor's visit to China. And in the spring Foreign Minister Michio Watanabe told China that the government would seriously consider realization of the Emperor's visit to China.

But right after that it was revealed that China had spelled out the Senkaku Islands, which lie south of Okinawa, Japan's southernmost prefecture, as its own in its newly established law concerning territorial waters. Japan has maintained its sovereignty over the islands.

In addition, the move within China to collect signatures to demand reparations for the Japanese invasion of China in World War II and the repeated requests by China for Japan to be cautious about a move that could lead to the dispatch of Japanese forces overseas, referring to the U.N. peacekeeping operations bill that has been deliberated in the Diet, have, together with China's move on the Senkaku Islands, caused some members of the LDP to oppose the Emperor's visit to China.

The LDP General Council, which is the organ to decide party policies, has met several times to discuss the issue, and its chairman Koko Sato has advised Miyazawa that the problem of the Emperor's China visit needs some more consideration with circumspection.

At the root of such an assertion by LDP members lies the wariness that the Emperor's visit to China could lead to a situation in which China may demand that the Emperor apologize for Japan's invasion in the past.

Japan's Constitution spells out clearly that the Emperor has nothing to do with politics. The LDP members maintain that if the Emperor is asked to comment on war responsibilities and he answers in any way, it would be a way to use him politically.

Frankly speaking, I believe the late Emperor Hirohito, posthumously known as Emperor Showa, who was the supreme leader of Japan up to the end of World War II, should have apologized as a person for war responsibilities and the invasion when he was alive.

When Deng Xiaoping, who was then deputy prime minister of China, visited Japan in 1978, Emperor Showa said that "an unhappy era once existed between Japan and China in the past." But if he had gone on further to make such a statement as, "I am truly sorry. I can't die in peace without making an apology," when he was still alive, it would not have been necessary for Japan to be on the defensive about how China would broach the subject on the occasion of the Emperor's visit to China.

But, unfortunately, Emperor Showa died without speaking out his true feelings. And Emperor Akihito is being asked to make up for what his father never got around to.

Japan's Constitution describes the Emperor as "the symbol of the unity of the people" and not the head of state. Since he holds the position of the symbol of the unity of the people, who have different opinions, there is a limit to what he can say, and much more so when it comes to political problems.

But whether or not to make frank apologies to China, South Korea and other countries that were victims of Japan's aggressive acts in the past is a humanitarian question that transcends politics.

And if so, to realize the Emperor's visit to China this fall on the occasion the 20th anniversary of normalized relations between Japan and China, complying with China's strong request, and to have him speak in his own words about the past and future relations between Japan and China would no doubt be to the benefit of a long-lasting future relationship between the two countries, but never to its disadvantage.

I believe the LDP should consider the Emperor's visit to China from such a broad outlook and hope that Prime Minister Miyazawa will arrive at a wise decision.

—Asahi News Service

2/2

至急

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（5月24日～5月28日）

アジア局中国課

自然体の陛下の中国訪問を期待する

社説

若葉がもえる美しい日本に、中国全国人民代表大会の万里常務委員長が訪れている。今年が日中国交正常化二十周年に当たるのを機会に、両国の相互理解を深めようと合意した要人による相互訪問の一環である。われわれはこの際、万里委員長が自分の目で見た日本の国情を中国の大衆に伝達されることを切に望みたい。

現在、日中両国間には緊急に解決を必要とする懸案はほとんどない。だが、この中国要人の訪問をめぐって何か「奥歯に物のはさまった」ような違和感がただよっている。両国政府の意識の底に、最大の懸案である天皇陛下の中国ご訪問問題が、どっしりと腰を下ろしているからだ。宮沢首相との会談の場でもこの問題について双方は言及しなかったという。

日本国内には依然、陛下のご訪中をめぐって賛否両論がある。反対論は、日本の国連平和維持活動（PKO）をめぐる中国側の「敏感な問題」という姿勢、日中間の過去の歴史に関するこだわり、西側先進諸国が追及する人権問題、さらには天皇訪中が政治的に利用されるのではとの懸念などが背景になっている。

しかし、本紙の政治コラム「風見鶏」も指摘しているように、反対論の理由は賛成論の理由にもなる。PKOに対する中国の懸念は、過去の日本軍部の中国侵略が温床になっており、陛下のご訪中は中国のわだかまりを払しょくする好機にもなる。賛成論、反対論は一枚のコインの表裏の関係にある。

われわれはあえて天皇陛下のご訪中を期待する。日本国憲法の規定から言っても、陛下を政治的な思惑に巻き込んではならないことは自明の理である。

だが、人間が直接関与するこの世の中に、建前はともかく政治的な思惑から純粋に隔絶された真空地帯があるだろうか。陛下のご訪中問題をめぐって人間ができることは、力の限りを尽くして政治的な思惑を脱色する作業だけである。これが宮沢内閣に課せられた責務である。

中国側は根回しの段階から「天皇陛下の訪中について、日本側を困らせるようなことはしない」ことを繰り返し伝えている。現段階で言えることは、宮沢首相は自ら中国首脳との間で万全の意思疎通の道を確保すると同時に、人権問題に厳しい米欧各国に「日本が突出するわけではない」旨の理解を求めたうえで決断を下すことである。警護その他の点からも時間のゆとりはそれほど残されてはいない。

われわれが天皇陛下のご訪中を期待するのは、賢明なお人柄に信を置いているからである。昨年夏のテレビ放映を思い起こして欲しい。島原の普賢岳噴火による被災者を見舞われた時、腕まくりしたワイシャツ姿で床に両ひざをつき、目線を合わせて慰問された。新しい陛下像がここにあったように思われる。

ご訪中の問題は日本側の問題である。日本政府の決断にかかっている。中国訪問が仮に決まれば、国民が、中国訪問が仮に決まれば、国民は静かに見守りたい。〝雑音〟は自然体の陛下を損なうだけである。

日本経済新聞

1992年（平成4年）5月28日（木曜日）

天皇訪中への道

…上…

自民に広がる慎重論

尖閣、賠償など政治利用警戒

日中国交正常化二十周年のことし、中国政府の招請にこたえて天皇陛下の訪中を実現させるかどうか、政府の決断が延び延びとなっている。二十五日に来日する中国全国人民代表大会の万里委員長に対しても、歯切れのいい返答は期待できそうにない。政府の「迷い」の底流を探った。

「陛下の話は恐れ多くて出るわけがない」―。十九日昼、宮沢首相との一時間半に及ぶ会談を終えた竹下元首相は「天皇訪中の話は？」と曇みかける記者団の質問をぴしゃりと封じた。

竹下氏も口を閉ざす

竹下氏は五月六日から八日まで中国を訪れ江沢民・共産党総書記ら中国要人と会談した。八千百億円の第三次円借款をまとめた同氏に対する中国側の信頼は絶大。天皇訪中問題で中国側の感触を持ち帰ったのではないか、という憶測が出ても不思議ではない。

しかし「口にすること自体、切腹に値する」と神経過敏ともいえる竹下氏の反応にみられるように、同氏周辺からもこの問題をめぐる話は一切漏れていない。

竹下氏の直後に訪中した海部前首相の場合も同じだ。天安門事件の後遺症で国際的に孤立していた中国に昨年八月訪問、今回は「新しく井戸を掘った人」と中国側の厚遇を受けたというが「天皇の話は全くなかった」と口を閉ざす。

中国側の動きを警戒

天皇訪中の実現に期待を寄せる人々の沈黙と対照的に、自民党の一年生議員が「天皇訪中は時期尚早」と綿貫幹事長に申し入れるなど、反対論、慎重論の根は党内に深く張りつつある。

「中国との関係は大事だ。しかし日中間に尖閣諸島の問題などハードルがあるのに陛下を訪中させようとしているのは、安易すぎる。中国の改革路線への支援は政府がやることで、天皇を利用すべきではない」

若手の反対運動を引っ張る衛藤晟一氏（大分一区）は「天皇は政治に不介入という憲法を政府はちゃんと理解しているのか」とまで言いながら政府批判を展開する。

政府は新年早々の渡辺外相の訪中で「今年秋の天皇訪中」の路線をしいた。これにブレーキを掛けたのは、自民党総務会での藤尾元文相らの発言。当初は党内タカ派の異論にすぎなかったが、尖閣諸島の領有権明記や日本の中国侵略に対する民間賠償請求など中国側の動きが党内の慎重論に火をつけた。

米国への気兼ね示唆

超党派の日中友好議連（伊東正義会長）の議論でも、野党議員から慎重論が出ている。日中国交正常化に先べんをつけた公明党だが、遠藤国際局長は「日中関係の大局からみれば行くべきだというのが党内の空気だ。天皇のことは軽々に発言できない面もあるが、あえて黙っているわけではない」と言うものの、同党に「天皇訪中」を積極的に後押ししようとする雰囲気は感じられない。

経済界もさめている。今月八日、自民党首脳との定例朝食会の席上、日商の石川六郎会頭は「中国の政治情勢は安定していない。陛下の訪中に失敗は許せない」と政府、自民党にクギを刺し、平岩外四経団連会長も「党内が割れているようでは難しいでしょうな」と同調した。

経済さえしっかりやっていれば日中関係は問題ないとの判断がのぞくと同時に、中国との関係改善に足踏みする米国への気兼ねをうかがわせるものだった。

こうした状況を踏まえ宮沢首相の側近でもある林義郎日中友好議連幹事長は、万里氏の来日を前に「タイムリミットがすぐ来るわけではないので慎重に検討してはどうか」と進言せざるを得なかった。



天皇として初外遊となった東南アジア３カ国歴訪での両陛下＝91年10月１日、クアラルンプール

92.5.24 岐阜新聞（朝刊）②

天皇訪中への道

…下…

アジア重視外交の柱

外務省は強気

首相決断待ち

「外務省はあきらめていません。一カ月もあれば準備はできる」―。自民党を中心とする慎重論の合唱にもかかわらず、天皇訪中の旗振り役である外務省は、推進姿勢を崩していない。

「訪中賛成七五%、反対五%、不明二〇%」

この数字が外務省の強気を支える。今年四月、総理府がひそかに実施した天皇訪中をめぐる世論調査の結果だ。「国論を二分してまで陛下に行っていただくつもりはないが、自民党の反対論を国論とみるかどうかだ」と宮沢首相に近い政府筋は言う。

外相、珍しく口堅く

ただ、渡辺外相が「今は静かにしていることだ。一切ノーコメント」と珍しく口を固く閉ざしているのをはじめ、政府は当面、党内の反対論議の沈静化を待つ構えである。

符節を合わせるように中国政府もこのところ静観姿勢が目立つ。今月十二日、銭其琛外相は「日本国内で天皇訪中についていろんな意見があることは知っている。各種の論争を起こさないためにも中国側は意見を発表しない方がいいと思う」と日本からの訪問団に述べた。

漢詩に託して不快感

日本の国連平和維持活動（PKO）協力法案に対する中国側の論評も竹下元首相の訪中前ごろから、ぴたりとやんでいる。

四月の来日時に、期待に反して「天皇訪中受諾」の返事を得られなかった江沢民・中国共産党総書記は、宮中での昼食会の席上、隣の渡辺外相に漢詩に託して「不快感」を示したが、いまだに立っていた中曽根元首相に要請してきて、断ったときの反動は大変だ。経済界が楽観するほど日中関係は不動ではない」（政府筋）との懸念が働いたとみることができる。

断念時の反動を懸念

こうした中国側の姿勢の変化は、自民党内にも微妙な影響を与え始めている。首相経験者で慎重論の先頭に立っていた中曽根元首相をはじめ

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（5月28日～5月29日）

アジア局中国課

自然体の陛下の中国訪問を期待する

社説

若葉がもえる美しい季節が訪れている。今年が日中国交正常化二十周年に当たるのを機会に、両国の相互理解を深めようと合意した要人による相互訪問の一環である。われわれはこの際、万里委員長が自分の目で見た日本の国情を中国の大衆に伝達されることを切に望みたい。

現在、日中両国間には緊急に解決を必要とする懸案はほとんどない。だが、この中国要人の訪問をめぐって何か「奥歯に物のはさまった」ような違和感がただよっている。両国政府の意識の底に、最大の懸案である天皇陛下の中国ご訪問問題が、どっしりと腰を下ろしているからだ。宮沢首相との会談の場でもこの問題について双方は言及しなかったという。

日本国内には依然、陛下のご訪中をめぐって賛否両論がある。反対論は、日本の国連平和維持活動（PKO）をめぐる中国側の「敏感な問題」という姿勢、日中間の過去の歴史に関するこだわり、西側先進諸国が追及する人権問題、さらには天皇訪中が政治的に利用されるのではとの懸念などが背景になっている。

しかし、本紙の政治コラム「風見鶏」も指摘しているように、反対論の理由は賛成論の理由にもなる。PKOに対する中国の懸念は、過去の日本軍部の中国侵略が温床になっており、陛下のご訪中は中国のわだかまりを払しょくする好機にもなる。賛成論、反対論は一枚のコインの表裏の関係にある。

われわれはあえて天皇陛下のご訪中を期待する。日本国憲法の規定から言っても、陛下を政治的な思惑に巻き込んではならないことは自明の理である。

だが、人間が直接関与するこの世の中に、建前はともかく政治的な思惑から純粋に隔絶された真空地帯があるだろうか。陛下のご訪中問題をめぐって人間ができることは、力の限りを尽くして政治的な思惑を脱色する作業だけである。これが宮沢内閣に課せられた責務である。

中国側は根回しの段階から「天皇陛下の訪中について、日本側を困らせるようなことはしない」ことを繰り返し伝えている。現段階で言えることは、宮沢首相は自ら中国首脳との間で万全の意思疎通の道を確保すると同時に、人権問題に厳しい米欧各国に「日本が突出するわけではない」旨の理解を求めたうえで決断を下すことである。警認その他の点からも時間のゆとりはそれほど残されてはいない。

われわれが天皇陛下のご訪中を期待するのは、賢明なお人柄に信を寄せているからである。昨年夏のテレビ放映を思い起こして欲しい。島原の普賢岳噴火による被災者を見舞われた時、腕まくりしたワイシャツ姿で床に両ひざをつき、目線を合わせて慰問された。新しい陛下像がここにあったように思われる。

ご訪中の問題は日本側の問題である。日本政府の決断にかかっているが、中国訪問が仮に決まれば、国民は静かに見守りたい。〝雑音〟は自然体の陛下を損なうだけである。

日本経済新聞
1992年(平成4年)5月28日(木曜日)

モンゴル支援国会合に出席するため来日したビャムバスレン・モンゴル首相は二十八日、都内のホテルで毎日新聞との単独会見に応じ、総選挙（六月二十八日）の後、引き続き与野党連立内閣が必要になるとの見方を明らかにした。今回の総選挙では従来の二院制（定数合計四三〇）から一院制（定数七六）に大幅に議員が削減されるが、同首相は与党・人民革命党（旧共産党）が過半数を獲得できるかどうかは極めて微妙であることを示唆、今後の野党協力は不可欠だと強調した。（外信部・町田幸彦）

総選挙後も連立

多面的な対日関係を期待



モンゴル首相
ビャムバスレン氏と会見

5/29 M7

――総選挙後も首相の座に就くつもりか。

首相　それは選挙で大勝した政党が決めることで、時期尚早だ。

――これまでの改革・刷新をどう評価しているのか。

首相　政治改革、市場経済の導入、対外関係の改善などでは成果を上げた。その半面、とくに市場経済移行に際し、独占禁止法などの法的整備が十分でなかったし専門家も欠けていた。また深刻な外貨不足に直面し、国民生活の低下を招いてしまった。

――今後の対日関係の展望は。

首相　経済大国である日本は経済面だけでなくアジアの安全保障にとっても中心的な地位を占めている。対日関係は多面的に発展させていきたいが、とりわけエネルギー、運輸、通信分野などを中心に、モンゴルへの技術援助、投資を期待している。

一問一答は次の通り。

――総選挙の行方をどうみるか。

ビャムバスレン首相　今度の総選挙は、新憲法下で初めて行われるもので、モンゴルの民主化にとって重要な意義がある。（与党）人民革命党はこれまで党内改革を進めて支持獲得に努めてきたが、他の統一党、民族進歩党、民族復興党、社会民主党は重要な政治勢力として伸長している。

――どの政党が選挙で勝ちそうか。

首相　現時点でその質問に答えるのは難しい。人民革命党は最多議席を得るかもしれないが、それでも過半数に達しない事態になれば当然、他の進歩的勢力との協力が必要になるだろう。

――新内閣には野党閣僚を現在以上に迎え入れるつもりか。

首相　（急激な政治・経済改革の影響による多党化現象、インフレなど）社会生活の混乱が続く中、一党だけの政権運営は無理だ。政府にとって、人民革命党以外の政党、進歩的勢力の協力がより不可欠になっている。

対中投資6倍に

日本、香港に次ぎ2位

1―3月

NK 5 5/29

【北京28日＝飯野記者】日本企業の対中直接投資が一段と加速してきた。中国対外経済貿易省によると、日本からの今年一―三月の投資契約額は前年同期比約五〇〇％増（六倍）の十億六千万㌦に達し、過去最高だった前年の通年実績（八億一千万㌦）を三カ月で突破した。八九年の天安門事件以来の政治不安が薄れてきたうえ、最高実力者の鄧小平氏の号令で指導部が改革・開放政策を一段と進めたことなどが、日本企業の投資意欲を誘っているようだ。

対外経済貿易省によると、一―三月の対中直接投資契約額が最も多いのは香港で、三十八億㌦だった。次いで日本の十億八千万㌦、米国の三億四千万㌦、台湾の三億二千万㌦の順。過去数年間、日本の対中直接投資は香港のほか米国あるいは台湾に次いで三番目にとどまっていたが、今年は香港に次ぐ二位になるとの見方が強い。

日本企業の直接投資が急増している原因について、対外経済貿易省外国投資管理局の幹部は、中国の政治、経済、社会の安定への評価が高まっている、と分析。その結果、「日本電気や東芝、松下電器産業、富士通など大手メーカーが対中投資に乗り出した」と指摘している。日本の関係者の間でも「天安門事件の記憶が薄れて、比較的慎重だった大手企業が生産拠点設置に前向きになってきた」（平公明・日本貿易振興会北京事務所長）との見方が強い。

同時に経済発展に伴って急成長している中国市場をにらんだ投資も活発になってきた。自動車業界や二輪車業界では昨年来、中国での生産拡大に踏み切る動きが相次いでいる。国際流通グループ、ヤオハンが深圳市（広東省）に続いて上海市への出店を決め、ダイエーも北京市内にショッピングセンターの開設を検討するなど、流通業界も対中本格進出に動き始めた。

こちら特報部

03(3471)7242

5/29

デスク・メモ

欧米には訪問された日本の天皇が、隣国である中国、韓国へ戦後四十七年たっても訪問されていないのは不思議だ。慎重にという声もわからないではないが、ことなかれ外交になるのも困る。

いまは「政治に利用するな」と言って政争の具に供されている感じ。両国の親善が目的なら、もっとフランクでよいのでは。（I）

T10



来日中の万里・中国全人代常務委員長（左）と会談する宮沢首相＝首相官邸で

→次頁へ

7

どう考える？ 天皇訪中問題

各界の10人に聞く

5/29 T10

天皇陛下の中国訪問が、暗礁に乗り上げている。中国の再三の訪中要請に対し、日中復交二十周年を記念しての訪中を計画していた政府が、自民党タカ派などの『天皇を政治の道具に使うな』との反発で、決断しかねているからだ。来日中の万里・中国全国人民代表大会常務委員長と政府首脳との会談でも、明確な答えは出せずじまい。『今が絶好のタイミング』という声が強い中で、天皇訪中問題をどう考えればいいのか。各界の十人に聞いた。

「政治情勢微妙 慎重に」

「基本的に言えばとっくに行ってて普通やと思ってました。ああ、まだ行ってへんのか、という感じですね」

元読売新聞大阪本社社会部長で「黒田ジャーナル」代表の黒田清氏は、戦後四十七年にもなるのに天皇訪中が実現していないことに驚く。同時に、隣国なのだからもっと気軽に出掛けるべきだと主張する。

「そうなっているのは、天皇陛下が悪いのんではなくて、取り巻きや政治家が悪い。おわびの言葉はどうすんねんとか共産圏だからとか、そんなことばっか言うてますな。取り越し苦労ばっかりせんと、えらいすんまへんでしたと行かれたらええと思います。これからも大きな存在である中国に、前のいきさつがあるからよう行かんというのでは論だ。



昭和53年10月、日中平和友好条約の批准書交換のため来日、昭和天皇の案内で午さん会の開かれる豊明殿に入る鄧小平・中国副首相（当時）

『周りが構え過ぎでは』

だめ。皇室外交はまわりが構え過ぎてはできません」

『中国国民には喜ばれる』

元防衛大校長で、平和・安全保障研究所会長の猪木正道氏も、中国は日本の大事な隣国との立場から賛成を機に両国元首が相互訪

「日中友好は日米同盟に次いでわが国の安全保障上、重要です。私も中国の国際問題研究所などの招きで何度か訪れましたが、中国の人の心はまだ開かれていないと痛感しました。今度、陛下が行かれるだけで喜ばれると思います。これ問すれば日中関係は、より緊密なものになるでしょう」

新聞記者出身で日中関係を外交交渉中心に研究する東海大学教養学部・永野信利教授（国際関係論）も、アジアの隣国として推進すべきだとの立場だ。

「中国はアジアの大国であり、国連安全保障理事会の常任理事国という重要な国です。二国間でも日本は加害者だったのですから、本当の意味での関係修復を図るためにも、国交正常化二十周年に陛下が訪中され、体制の違いを超えて友好関係を維持することが必要でしょう」

もし訪中計画が中止されればかなりの緊張が生まれ、国際的にも影響が出かねないと警告する。

『中止では保守派台頭』

「中国は国連の湾岸戦争武力行使決議で棄権したり、天安門事件を起こしたりしたので、西側は何とか同一歩調を取らせようと腐心しています。保守派の中には日本が十年以内に軍国化するというあきれた論文を出す人もいるので、訪中中止で改革派が苦しい立場に立つと、保守派が台頭し中国が強硬になる恐れがあります。対中関係がぎくしゃくすれば宮沢政権にも影響してくる」（永野教授）

『政治利用されても行くべき』

皇室ジャーナリストの河原敏明氏は、天皇の気持ちも考えて訪中すべきだとする。

「今の陛下は非常に平和的な方。国交回復の時に、皇太子だった陛下は中国の宝物展が開催された際、駐日大使へ陳謝され、新華社りしたので、西側は何とか同一歩調を取らせようと腐心しています。保守派の中には日本が十年以内に軍国化するというあきれた論文を出す人もいるので、訪中中止で改革派が苦しい立場に立つと、保守派が台頭し中国が強硬になる恐れがあります。対中関係がぎくしゃくすれば宮沢政権にも影響してくる」（永野教授）

『政治利用されても行くべき』

皇室ジャーナリストの河原敏明氏は、天皇の気持ちも考えて訪中すべきだとする。

「今の陛下は非常に平和的な方。国交回復の時に、

が大きく報道したことがありました。右翼に気兼ねした宮内庁はこれを否定して結局玉虫色解釈になったが、陛下自身には昔から申し訳ないというお気持ちはあったと思います」

それだけに、今回の訪中はしょく罪の機会にもなると積極的に勧める。

「もろ刃の剣で慎重になる点もありますが日本が過去、満州事変から始まって日中戦争、第二次世界大戦とどれだけの侵略をしてきたことか。南京大虐殺など多くの犠牲を与えたのだから多少、政治的に利用されても行っていただきたい」

15面に続く

「大事な隣国 気軽に」

5/29 T 15

『避けては通れぬ問題』

『資金援助が本音では』

中国の政情の不安定性や民主化の遅れ、人権問題への対応などから、反対論も根強い。

外交評論家の加瀬英明氏は「天安門事件で人権がじゅうりんされてから中国訪問したのは、香港返還問題で行った英メージャー首相だけ。国際的に孤立している中を天皇陛下が出掛けるのは火中のクリを拾うようなもの」と訪中に反対する。

また加瀬氏は「米は天安門事件で最恵国待遇打ち切りを上下両院で可決したまま。二月の国連安保理首脳会議でも、ブッシュ大統領は李鵬首相ににこりともしなかったのに、宮沢首相は四月に来日した江沢民総書記に笑いかけて不謹慎だと思った」と、あくまで人権問題のけじめを優先すべきだとする。

アジアの乱開発に関心を持つ国際問題評論家の北沢洋子さんも反対の立場だ。

「基本的には日本の戦争責任をうやむやにしたまま訪中するのは反対です。天安門事件をなし崩しにするため利用しようという背景もありますが、本音は日本から資金援助を受けたいのでしょう。現在、揚子江の真ん中に巨大な三峡ダムを建設中で環境破壊が懸念されています。対ソ支援が世界的な問題になり、どこも中国に協力しないので、この種の建設計画に日本の資金を引き出させようとしている」

天皇を政治的に利用すべきではないとの立場から反対するのは女子栄養大学の藤原彰教授(日本現代史)。

「中国に行けば戦争責任問題が浮上するが、天皇の役割と別。天皇が謝罪に行くから反対というのではなく、ドイツが欧州やイスラエルなど各国に戦争責任を明確にし補償を行っているように、日本も国民が自覚して歴史の上で明らかにすべき問題。戦争責任が焦点に浮かぶのは意義があるが、天皇が意見を言うのは不適当です」

漫画家のはた山ハッチさんは「的を射ているか分からないが、いまの政治情勢はタイミングが悪い」と反対する。

『20周年こだわらずに』

「PKO論議でアジア諸国はピリピリしているのでそれの懐柔役に(天皇訪中が)使われてしまうのではないかという気がします。非常に微妙な時期に行くことで相手の気持ちをそらす意図があるのでは」

難しい問題だけに、慎重なうえにも慎重な対応を求める声もある。

政治評論家の細川隆一郎氏も原則的には賛成だが、客観情勢を見ると慎重さが求められると注意を促す。

「私はもともと皇室外交は慎重に行うべきと思っていますが、今の中国を見るとさらにその必要性を感じます。二十周年に招へいしたい気持ちはよく分かる。しかし、保守派の動きもあり、中国が本当に一体化しているのか疑問。米以外に一国だけを訪問されたことはないし、二十周年にこだわることもない。状況を見定めた方がいいと思います」



昨年9月、タイを訪問し、マハタート寺院を訪れる天皇、皇后両陛下

『時間をかけ論議し妙案を』

評論家の犬養智子さんも「一度は行くべきだし、ご本人も行かれたいと思っているのでは」としながら、一部の民間から日本に戦争賠償を求める動きがあることを挙げ、訪中でかえって対日問題が噴き出す可能性を指摘、慎重な対応を求める。

そのうえで、犬養さんは「それでもこれ以上、避けて通れないでしょう。次は訪韓問題も出て来るけど、どこかで未解決のわだかまりにけりをつけなくては。難しいけど、時間をかけて論議を深めれば妙案は出ると思います」と、前向きに検討することを求める。

『政府は堂々と対処すべきだ』

前出の猪木氏は、天安門事件など中国には人権や民主化の問題が残っているなどの反対論について「人権問題を方便に使っているだけで本当は中国自体にいい感情を持っていないのでは。訪中は日本のためだけでなく東アジア全体の安全を保つ上でも重要。政府は堂々と対処すべきです」と提言するのだが……。

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（6月18日～　月　日）

アサ

アジア局中国課

天皇訪中10月にも

首相 実現に強い意欲


天皇陛下

宮沢首相は十七日、都内で開かれた日本新聞協会第六十四回定例会員総会に出席、講演とそれに続く質疑応答の中で、日中国交正常化二十周年を記念して政府が検討を進めている天皇陛下の訪中問題について、「私は陛下においでいただくことは望ましいことと考えている」と明言した。さらに、その後、首相は記者団に対し、訪中への国民の理解を得るための「冷却期間」が来年に及ぶようなことは「全然考えていない」と述べ、年内の訪中実現に強い意欲を表明した。これに関連して政府首脳は訪中の実施時期について、「できれば秋だ」とし、国交正常化二十周年の記念行事（九月二十九日）や、十月初旬といわれる中国共産党大会終了後の十月下旬にも実現する方針であることを明らかにした。（関連記事2面に）

首相はこれまで、陛下の訪中について、「真剣に検討する」と述べるだけで、具体的な言及を避けてきた。

しかし、この日、首相は、「（わが）国の中で、一時、いろいろ議論があり、それについて中国側もその間の事情に配慮された。（また）訪中が立派に行われることを国民によくわかっていただいたうえで、冷却期間を置いた方がいいだろうと考えていた」とし、特に、自民党内に根強い慎重論などに十分配慮して訪中の実現可能性を模索してきたことを説明。その上で、「いまはその（冷却）期間にあたるが、やがて、中国側の事情も国民に説明しながら、できるならば、国民の祝福申し上げる中で訪中していただきたいというのが私の考え、希望だ」と述べた。

これに関連して、加藤紘一官房長官は同日夕の記者会見で、訪中時期について、「二十周年を記念して訪中していただくように考えたい」と語り、政府首脳も、「今回が一つのチャンスだ」と述べ、今秋の訪中実現を念頭に置いていることを明らかにした。

また、天皇訪中を実現する場合の障害とみられる国連平和維持活動（PKO）協力法に対する中国側の懸念について、加藤長官は、「お互いにどこまで理解しあえるかということだ」とし、中国側の理解を求めていく考えを示したが、政府首脳は「中国は比較的おさえた発言をしている」と指摘、中国側が天皇訪中実現を念頭に、PKO法に関し慎重な配慮をみせているとの認識を示した。

このほか、首相はこの日の総会あいさつの中で、PKO法成立に関連して、今月中に、カンボジアに調査団を派遣することを表明するとともに、多国籍軍への参加については、「今でも反対だ。海外における武力行使を憲法は許していないと思っている」と強調した。

さらに首相は、今夏の参院選の見通しについて、「善戦できると考えている」と述べ、強気な見方を示した。

【中国通信＝東京】東京十七日発新華社電は、宮沢首相が同日、今秋の天皇訪中について「望ましいことだ」と語ったことを伝えるとともに、「日本の首相が天皇の訪中問題について明確な態度表明を行ったのは初めてだ」と指摘した。

92.6.18 読売朝1面

6/18 (1)

天皇陛下の今秋中国訪問

首相、前向き姿勢

6/18 (11)

宮沢首相は十七日、都内で開かれた日本新聞協会総会であいさつし、天皇陛下の中国ご訪問について、「国民の祝福の中で陛下にお出掛けいただくのが望ましいというのが私の考えだ」と述べ、これまでより積極的な姿勢を示した。政府首脳も同日夕、「日中国交回復二十周年というのがいい機会になる。訪問されるなら今秋で、この時期を逸したら難しい」と述べ、あくまで今秋に実現させる方向で検討を進めていることを強調した。

首相はあいさつのなかで、天皇陛下のご訪中に対し自民党などから慎重、反対論が出ている現状について、「冷却期間があった方がいいだろうと思って、その期間を置いて中国側の事情を国民に説明している」と述べた。

陛下のご訪中問題は、国交正常化二十周年を機会に中国側が強く要請し、日本政府も「日中友好の象徴」としてご訪問を実現する方針で検討してきた。今年一月に訪中した渡辺外相が「真剣に検討する」と伝え、今秋を軸に具体的な日程を打診している。

しかし、自民党内からは、中国の人権、武器輸出問題などを理由に、反対、慎重論が噴出し、決断が延ばされてきている。

一方、首相はこの日のあいさつで、国連平和維持活動（PKO）協力法について、「武力行使につながらないよう規定を盛り込み、憲法違反という議論には徹底的に自分の所存を述べてきた。憲法違反をしたなら、万死に値する。憲法違反という議論は、このへんで決着させてほしい」と同法が憲法に違反しないことを重ねて強調した。

しかし、首相は国民の間に自衛隊の海外派遣に対し反対論があることに触れ、「その背景を十分注意していきたい」と述べ、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）へのPKO参加にあたっては十分調査を重ね、慎重に進めていく考えを示した。

92.6.18 サンケイ 朝 1面

天皇訪中実現に意欲

首相 最終決断は夏以降


宮沢首相

宮沢首相は十七日午後、都内の日本プレスセンターで開かれた日本新聞協会総会で講演し、質疑の中で天皇陛下の中国訪問問題について「中国の事情も国民に説明し、できるならば国民が祝福を申し上げる中、訪中していただきたいというのが私の考えであり、希望です」と述べ、国民合意を得たうえで、日中国交回復二十周年を記念した今秋に天皇訪中を実現したい意向を表明した。

【関連記事2面に】

首相は同時に「国の中で一時、（天皇訪中の是非をめぐり）いろいろ議論があった。これはあってもよろしいと思うが、少し冷却期間を置いたほうがよく、今はその冷却期間だ」と述べ、国内世論や自民党内の動向をさらに慎重に見極めたうえで、夏以降に最終決断をしたい考えを示した。

これに関連し、加藤官房長官は同日夕の記者会見で、「国連平和維持活動（PKO）協力法だけが問題ではないが、これをお互いにどこまで理解し合えるか、ということはある」と述べ、PKO協力法に対する中国側の理解が天皇訪中実現への判断材料の一つであるとの考えを示し、「中国のPKO協力法への反応は比較的抑えぎみだと思う」と述べた。

また政府首脳は同日夕、首相のこの日の発言は、従来よりも天皇訪中に積極的な考えを表明したものだとの認識を示すとともに、時期は日中国交回復二十周年の今秋しかないとの考えを強調した。

天皇訪中は中国側が再三にわたり実現を要請。政府も十月をめどに準備を進めてきたが、尖閣諸島問題などで自民党内に慎重論が強まり、政府部内でも一時、このままでは実現は困難との判断が強まっていた。

首相としては、ここにきて党内の慎重論が沈静化してきたとの判断もあり、中国側の強い要請に沿って天皇訪中を実現したい意向を示したものとみられる。

6/8 ⑦ (1)

92.6.18 東京朝 1面

同上 2面

天皇訪中の首相発言 新華社が速報

【北京17日清水美和】十七日の中国国営新華社は天皇陛下の今秋訪中を希望する宮沢首相の発言を「日本の首相が初めて天皇訪中問題に明確な意思表示をした」とのコメントを付け速報した。

新華社は報道の中で、今年四月の江沢民総書記訪日などを通じ中国が行った天皇訪中の要請は「釣魚台（尖閣諸島）の主権をめぐる日中両国間の紛争で自民党内保守的議員の反対に遭っていた」と説明している。

6/8 ⑦ (2)

「天皇訪中」
首相積極発言

「PKO」抑制対応など
中国の姿勢変化

92.6.18 読売朝刊 2面

宮沢首相が十七日、日本新聞協会総会で今秋の天皇訪中に前向きの発言をした背景には、今春に自民党内で慎重論がわき上がった時点から一定の「冷却期間」が過ぎ、これまで自衛隊の「海外派兵」に慎重な対応を求めていた中国側が、国連平和維持活動（PKO）協力法成立に対し「極めて抑制された反応」（外務省首脳）を示すなど、天皇訪中実現に向けた環境が整いつつあるとの判断があるとみられる。

もともと政府部内には、今秋の天皇訪中には「それになったようだ。

宮沢首相は、今年四月の江沢民・中国共産党総書記来日の際の首脳会談で、「国交正常化二十周年にご訪問が実現すれば、日中両国民の将来にわたる友好関係発展のために極めて意義深い」との表現で、訪中実現への意欲をにじませた。しかし、自民党内から、「天皇訪中を中国に政治的に利用される」などといった時期尚早論がでていたため、国論を二分した中での天皇訪中は望ましくないとの判断から、中国側の訪中招請に対して明確な回答は避けた。

その後、政府は天皇訪中問題をめぐる議論が過熱しないようにとの配慮から、意図的に静かな環境を作るよう努めた。一方、中国政府もこれに呼応するように、PKO協力法案の参院通過、成立などに対しても厳しい対日批判は避け、一貫して抑制した対応を取り、日本の軍事大国化に強い懸念、警戒を示した韓国とは際立った違いを見せた。

92.6.18 毎日(朝)1

天皇訪中
「望ましい」

首相が積極姿勢

宮沢首相は十七日、東京・内幸町のプレスセンタービルで開かれた日本新聞協会総会で、天皇訪中問題について「陛下においでいただくことが望ましい。今は（議論の）冷却期間だが、できるならば国民に祝福される中で訪中していただきたいと考えている」と、今秋の実現に意欲を示した。

加藤官房長官は同日午後の記者会見で、あくまで日中国交正常化二十周年の記念として、今秋の訪中実現を念頭に置いていることを強調した。

天皇訪中

92.6.18 朝(朝)1

今秋実現に意欲
首相、自民慎重派説得へ

宮沢喜一首相は十七日、日本プレスセンターで開かれた日本新聞協会総会で講演し、日中間の最大の外交課題となっている天皇陛下訪中問題について「陛下においでいただくのが望ましい。今は冷却期間にあたるが、中国側の事情も説明しながら、国民が祝福するなかで、訪中していただきたい」と述べ、日中国交回復二十周年の今秋の訪中実現を、あくまでめざす強い意欲を表明した。

（2面に関係記事）

首相が、こうした明確な表現でこの問題に積極姿勢を示したのは初めて。政府は訪中時期についての中国側との調整を、九月下旬ないし十月をめどに進めており、決定の事実上のタイムリミットとされる八月に向けて、「訪中は中国側に政治的に利用されかねない」と主張する、自民党内の慎重論者の説得に乗り出すことになる。

首相は講演後、記者団が「年を越すような冷却期間を考えているのか」と質問したのに対し「そんなことは、全然考えていない」と述べた。

この問題をめぐって政府は、今年一月のブッシュ米大統領来日の機会などを通じて、年内の天皇訪中実現の方針を伝えるなど、実現への国際的な環境づくりを進めてきた。

しかし、尖閣諸島問題への中国側の強い姿勢などを背景に、自民党内からは従来の対中強硬派だけでなく、若手議員や中曽根康弘元首相らからも慎重論が噴き出し、先の江沢民・共産党総書記が来日した際、首相は日本政府の姿勢として、「真剣に検討する」との表現にとどめた経緯がある。また訪中計画に反発する右翼の動きにも、政府は神経をとがらせてきた。

天皇訪中 今秋にも

首相、実現へ強い意欲

党内の反対論見極め 「今は冷却期間」

宮沢首相は十七日、都内で開いた日本新聞協会総会での講演と質疑で、天皇陛下の中国ご訪問について「私は陛下において頂くことが望ましいと思っている」と言明、日中国交正常化二十周年に当たる今秋の実現を目指して前向きに検討していく考えを明らかにした。



日本新聞協会総会で講演する宮沢首相

この問題に関しては中国が再三にわたって訪中を要請。政府も十月の実現を目指して準備を進めてきたが、尖閣諸島の領有をめぐるあつれきが再燃、自民党内で「政治的に利用される」などの理由から反対論が表面化し、首相も一時、慎重な姿勢を見せていた。

首相は「冷却期間を置いた方がいいということであり、今がその冷却期間である」と実現の基本的な方針は変えず、反対論の鎮静化を待っていることを示唆。そのうえで「中国側の事情も国民に説明しながら、国民の祝福の中で訪中して頂くことが私の思いである」と強調した。

北方領土問題にも触れ、九月一のエリツィン・ロシア大統領の来日の前に、八月に入ってから二度の日ロ外相会談を持ちたいとの外交日程を示し、入院加療中の渡辺副総理・外相を退院後も現職にとどめ、交渉に当たらせる意向を明確にした。

七月の参院選については「善戦できると考えている」と表明した。

92.6.18 日経朝 2面

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（6月18日～6月19日）

[夕]

アジア局中国課

天皇訪中、10月を念頭に検討

(11) 政府筋

政府筋は十八日朝、宮沢首相が積極姿勢を表明した天皇訪中問題に関連し、天皇陛下が訪中される場合の時期について「いろいろ考えるとやはり秋。十月か。それを過ぎると宮中の行事もある」と述べ、今年十月の訪中を念頭において検討していることを明らかにした。

92.6.18 毎日⑨1面

天皇陛下ご訪中 10月が望ましい

政府筋

政府筋は十八日午前、懸案となっている天皇陛下訪中の時期について「十月を過ぎると宮中の行事やら何やらある」とし、十月が望ましいとの考えを示した。天皇訪中に対しては、自民党内に強い慎重論があるが、同筋は「まだ条件は整っていない」としながらも、「いろいろ考えてみるとやはり秋だ」と述べた。

(11) 首相の天皇訪中発言

(11) 北京放送が報道

【RP＝東京】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が十七日、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道。「日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な態度表明を行った」と指摘した。

92.6.18 産経⑨1面

「天皇訪中は10月がよい」

(12) 政府筋

政府筋は十八日朝、宮沢首相が実現に強い意欲を示した天皇陛下の中国ご訪問の時期について「十月を過ぎると宮中の行事やら何やらある」と述べ、十月が望ましいとの考えを示した。天皇訪中に対しては自民党内に強い慎重論があり、同筋も「条件は整っていない」との認識を示したが、同時に「いろいろ考えてみるとやはり秋だ」と語り、政府として秋の訪中実現に全力を挙げる考えを強調した。

首相の天皇訪中発言

北京放送が報道

【RP】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が十七日、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道。「日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な態度表明を行った」と指摘した。

92.6.18 日経⑨3面

宮沢首相の天皇訪中発言を報道

T-3 北京放送

6/18 (9) 【RP】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道した。

92.6.18 東京⑨3面

6/18(9刊)

中国関係

報道ぶり

6/19 T~②

天皇訪中に慎重論

自民 首相のおひざ元からも

宮沢首相が今秋の天皇訪中実現に意欲を示したことに対し、自民党内から十八日、反発が出た。首相のおひざ元の宮沢派幹部会でも慎重論が強く、田沢副会長が首相に「挙党体制がようやくできつつある時なので慎重に対処してほしい」と電話で要請した。

また藤尾元文相は同日の代議士会、三塚派総会と世話人会で「日中国交回復二十周年という政治行為に天皇陛下を引きずり込むことは、天皇の地位を政治目的に利用したと言われても仕方がなく、宮沢首相の責任は免れない」と首相を厳しく批判。

さらに「天皇が訪中されれば〝お言葉〟で『第二次大戦の侵略行為は遺憾だ』と述べる機会が多い。昭和天皇や昭和(時代)を傷つけることを誘発するのはもってのほかだ」と指摘した。

三塚派総会では若手の衛藤晟一、松岡利勝両氏が藤尾氏に同調。同派世話人会でも中山前外相が「天皇の訪問先はアジアだけでなく、ヨーロッパを優先してバランスを取るべきだ」と、訪中に異論を述べた。

首相は十七日の日本新聞協会総会で「国民が祝福する中で訪中していただきたい」と述べたものだが、党三役の間にも「事前に何の話もなかった」と反発の声が出ており、首相は対応に苦慮しそうだ。

92.6.19 東京朝 2面

6/19 中国関連報道ぶり

6/19 天皇訪中に首相前向き

反対や不満の声

自民党内

宮沢喜一首相が天皇陛下の訪中問題について、日中国交回復二十周年を迎える今秋に実現したいという趣旨の発言をしたことに対し、自民党内では十八日、宮沢、三塚両派の会合で慎重論や反対論が相次いだほか、執行部からも首相の発言に不満の声が上がるなど、波紋が広がった。

この日午前に開かれた宮沢派役員会では、津島雄二氏が「党内には天皇の政治利用になる、などとして反対論が強い」と報告。さらに、竹下派幹部から「慎重な対応」を首相に求める電話が、宮沢派事務所にかかってきた。

このため、田沢吉郎・宮沢派副会長が首相に電話でこうした党内の空気を報告するとともに「天皇訪中問題は、慎重に扱った方が良いのではないか」との考えを伝えた。

三塚派の総会でも、藤尾正行氏が「(訪中することは)陛下の地位を政治的に利用したと言われてもしかたない。首相は責任を免れない」と発言したのをはじめ衛藤晟一、松岡利勝両氏からも反対意見や首相発言に対する不満が相次いだ。

さらに三塚派首脳は「譲論になること自体が問題だ。象徴天皇を政治に巻き込むことは良くない」と、天皇訪中に反対する考えをにじませた。

「天皇訪中時期慎重に判断を」

経団連会長

経団連の平岩外四会長は十八日の記者会見で、宮沢喜一首相が天皇陛下の訪中を今秋に実現させたいとの意欲を示したことについて、「総理が判断する大きな問題で、タイムリミットが迫っているのかもしれないが、世論がはっきりしていない段階なので慎重に判断していただきたい」と述べ、慎重な対応を求めた。

92.6.19 朝日朝 4面

「天皇陛下訪中」首相の積極姿勢 ④(下)

党内から反発の声

宮沢首相が天皇陛下の中国ご訪問に積極的な姿勢を示したことに対し、自民党内から十八日、反発の声があがった。

急先ぽうは藤尾正行元文相で、同日の同党代議士会や所属する三塚派総会で「(訪中が実現すれば)陛下の地位を政治目的に利用したといわれても仕方がない。宮沢首相の責任は免れない」と痛烈に批判した。三塚派総会では藤尾氏のほか、若手の衛藤晟一議員らが賛意を示した。

総裁派閥の宮沢派でも、十八日午前の役員会で、津島雄二政調副会長らが、首相発言に党内の一部から強い反発があることを報告。田沢吉郎副会長が午後、電話で首相に「せっかく党内がまとまってきたのにこの種の問題で反発を招くのはよくない。慎重に発言してほしい」と進言した。

慎重な判断を

経団連会長

平岩外四経団連会長は十八日の記者会見で、天皇陛下の中国ご訪問問題について、「総理が決める大きな問題だが、慎重に判断していただきたい」と述べ、現時点で是非を判断するのは時期尚早との見解を示した。宮沢首相が前日、日中国交正常化二十周年に当たる今秋の天皇陛下訪中実現に積極姿勢を見せたのに関連して答えた。

その理由については、「国民世論がまだはっきりしていないし、日本として国際的な問題もある」と指摘した。

92.6.19 サンケイ朝 3面

「天皇訪中」首相発言 自民内の反発呼ぶ

宮沢首相が天皇陛下の中国訪問の実現に意欲を示したことに、自民党三塚派の藤尾元政調会長らが十八日、強く反発、「待った」をかける動きが表面化した。三塚派の若手は他派の若手ととも

もに細眞幹事長に会い、真意を確認することも検討している。こうした動きに宮沢派からも党内結束を維持する意味合いから首相に慎重な対応を求める声が出ているが、首相の姿勢は変わっておらず、訪中問題をめぐり政府・自民党間であつれきが生じそうな情勢になってきた。

藤尾氏は十八日の三塚派総会で「陛下の地位を政治的に利用したと言われても仕方がなく、首相の責任は免れない。中国は核ミサイルなどを輸出し、海軍力を増強しつつあり、発言できるあらゆる機会に事の重要性を訴える」などと首相の発言を批判した。若手の衛藤晟一代議士らも「誠にその通りで大変不満だ」などと同調、細眞幹事長に真意を尋ねる意向を表明した。

こうした状況に宮沢派も同日の役員会で対応を協議。田沢副会長が首相に電話するなど自重を要請した。

党執行部も佐藤総務会長、森政調会長が同日夕、党本部で意見交換し、訪中問題には慎重に対応することを確認した。

中国訪問

「政治利用されぬ」

孫平化・中日友好協会会長が会見

来日した中国の孫平化・中日友好協会会長は十八日、都内で日本経済新聞記者と会見し、天皇陛下の中国訪問に触れ、「(ご訪中が実現した場合)政治的に利用されることはない」と語り、日本の一部にある天皇訪中が政治的に利用されるとの見方を強く批判した。焦点となる過去の日中間の歴史に対する天皇のお言葉について「(どうするかは)日本の政治家の判断だ」としながらも、「天皇陛下のアジア各国歴訪の際、常に過去の歴史へのお言葉が議論になってきた」と

92.6.19 日経朝 2面

週明けに首相と党4役が協議

天皇訪中問題

綿貫自民党幹事長は十九日、宮沢首相の天皇訪中前向き発言に党内の反発が強まっていることを受け、二十二日に党四役が首相と緊急協議する方針を決めた。協議で綿貫氏らは、天皇訪中について慎重な対応を求めるものとみられる。また十九日、衛藤晟一氏ら若手自民党衆院議員七人が綿貫氏と首相に対し、天皇訪中反対を申し入れた。

これに対し首相は「機が熟すればというのが元々の考えだ。多数決で決めるべきものではない」と答えた。

一方、この日の総務会では藤尾正行氏が「天皇訪中を国民が祝福するという環境にない。党内も全員賛成という状況ではない」と慎重対応を求めるなど四氏が慎重・反対論を展開した。

毎日、(1)

6/19(夕刊)

中国関係報道抜粋

天皇訪中

来週、首相と調整

自民4役 反対論が相次ぎ

東京、(2)

宮沢首相が天皇訪中に積極姿勢を示したことに対する自民党内の反発が十九日さらに強まり、午前の総務会で藤尾元文相らが改めて首相を批判したのに続いて、昼前には三塚派を中心に若手議員が綿貫幹事長ら執行部に慎重対応を申し入れ、首相に①政治利用されない環境がどこまで整ったのか②中国の人権問題、武器輸出、尖閣諸島領有問題は改善の兆しをみせていると考えるのか――などの質問状を届けた。

党総務会では藤尾氏が「天皇の地位を政治目的に利用したと言われても仕方がなく、首相の責任は免れない。昭和天皇を傷つけることを誘発するのはもってのほかだ」などと、首相を厳しく批判。さらに、中尾前通産相や浜田党広報委員長らからも同様の発言が続いた。

このため、綿貫幹事長が「天皇訪中問題を含め、補正予算の規模などについて、来週に四役が首相と意見交換するので、その際に結論的なものを得たい」と提案、結果については改めて総務会に諮ることで了承された。

一方、三塚派などの若手衆院議員七人は綿貫幹事長に、中国が国連平和維持活動（PKO）協力法に懸念を示していることや、天安門広場での日本人記者連行などを取り上げて、天皇訪中に反対する考えを申し入れた。

これに対し、綿貫氏は「首相の発言は寝耳に水だった。私も慎重にすべきだと思っている」と答えた。

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（6月19日～6月22日）

追加

アジア局中国課

政治ライ

首相の前向き発言

PKOの次は天皇訪中

党内説得は竹下氏に要請

宮沢首相が、今秋の天皇訪中実現に向け動き始めた。十七日の首相発言は、国連平和維持活動(PKO)協力法の成立や衆参同日選回避など政局の〝重荷〟を下ろした首相が、本格的に動きだす姿勢を示したものとみられる。首相はすでに竹下元首相に党内説得を依頼。環境整備に乗り出しており、「顔が見えない」との批判に応えた動きとみられる。

首相は十八日、官邸を訪れた小和田外務事務次官に対し、「陛下に(中国に)おいでいただくことが望ましい」と述べた十七日の日本新聞協会総会での発言を改めて説明、天皇の訪中実現への強い意欲を重ねて示した。

首相は十八日の記者団とのやりとりでも「私はあのような考えだと述べました」と強調したが、同総会での首相発言は「用意したあいさつ文にはなく、質疑の中で突然に出た」(側近)もの。宮邸筋も「突然という感じでびっくりしている」との受け止め方だ。

首相周辺には「基本的には今までのスタンスだが、半歩踏み込んだかな、という感じ」という見方がある一方、「〝(首相発言で)国民が祝福して〟と言っているところが慎重部分」として従来と変化ないとの解説がある。

首相はこれまで天皇訪中問題について「真剣に検討している」と繰り返し述べるにとどまり、実現のための条件として「国民の祝福(理解)」を挙げてきた。また「民意がどういうものかを判断するのが私の仕事。党でも内閣でも材料を集めなければならない」と述べ、中国から帰国した竹下元首相との会談(五月十九日)などを通じて、実現の可能性を探ってきた。

関係者によると、竹下元首相との会談で宮沢首相は訪中実現への党内説得を要請したとされ、翌二十日には竹下元首相と金丸自民党副総裁が会い、その後、慎重論をぶっていた竹下派幹部が容認論に転換するといった動きも出ていた。

今回の発言は、自民党内に慎重論が残っていることを承知のうえで観測気球をあげるとともに、訪中実現に向けて努力を継続していきたいとの首相の意思が強く反映していると見られる。

そのきっかけがPKO法の成立だったわけで、側近も「ここにきて国内情勢が大きく変わったわけではないし、首相は実現に向け、半歩踏み込んだ」と説明している。

政府筋は訪中の時期について十月としており、決断にはまだ、時間があるものの「首相の発言は早すぎたかも」(首相側近)との声も出ており、きょう十九日に開かれる自民党総務会でどのような意見が出るかを注目している。

自民党 容認論広がりも

宮沢首相の天皇訪中発言で自民党内は十八日、訪中慎重論が再燃、一方で容認論もジワジワと広がる気配をみせ始めた。

最初に敏感に反応したのは原田憲衆院議員(竹下派)。同日、首相に「党内がせっかく宮沢氏を支援しようとしている時にこれを壊すようなことはすべきでない。慎重に対応すべきだ」と進言した。

また、藤尾元文相は同日の三塚派総会で、「天皇陛下を政治問題に介入させないのが憲法の精神だ。訪中すれば天皇陛下を政治利用したと言われても仕方ない。首相の責任は免れない」と、天皇訪中反対の考えを改めて表明。

しかし、慎重論が大勢だった党内世論には、微妙な変化も出始めている。これまで慎重論を唱えていた竹下派幹部も十八日、「宮沢さんが決断して、何があっても責任を取る気持ちならばいい」と述べ、竹下派の空気が変わり始めていることを裏付けた。

92.6.19 毎日(朝) 2面

(追加)

天皇訪中問題 22日に協議

首相と自民四役

天皇陛下の訪中問題をめぐり、自民党内で十九日、慎重な対応を求める動きが相次いだ。この日の総務会では藤尾正行氏ら四人が「少なくとも国民が祝福する環境はできていない。党内も賛成という状況ではない」などとして慎重論や反対論を展開した。衛藤晟一氏ら若手議員七人も首相官邸に宮沢首相を訪ね、「国論が二つに分かれている時は、まだ慎重に対応すべきではないか」などと申し入れた。こうした動きを踏まえ、党四役と首相が二十二日に対応を協議することにした。

天皇訪中問題はこの日の党外交部会でも取り上げられたが、「慎重に対応すべきだ」とする意見の一方で、推進派からは「日本の国益、将来のことを考えて判断すべきだ」とする考えも示された。

6.20 日経(朝) 2面

参院選「比例順位」や天皇訪中問題協議へ

首相と自民四役

宮沢首相は来週早々にも自民党の綿貫幹事長ら党四役と首相官邸に会い、参院選比例代表選の候補者名簿順位の問題や天皇訪中問題、補正予算案の規模などについて協議する。綿貫幹事長が十九日開かれた総務会で明らかにした。

92.6.20 読売(朝) 3面

天皇訪中問題は冷却期間を

政府首脳

政府首脳は十九日夕、宮沢首相が天皇陛下の中国訪問に積極姿勢を示したことに自民党内の反発が強まっていることについて「首相は国民が祝福する中、天皇訪中を実現したいと言ったのであって、今のように国内（の反対論が）がわぁーわぁーなっているのは、それとは違う」と述べ、国内に反対論が強い状況では、天皇訪中を決断するのは難しい、との認識を示した。

そのうえで「日中両国とも、まだしばらく冷却期間をおいてこの問題を考えた方がいい」と述べた。

6.20 東京(朝) 2面

6.20 朝日(朝) 4面

天皇訪中」反発相次ぐ

自民総務会

宮沢喜一首相が天皇訪中の実現に積極的な考えを表明したことが、十九日午前の自民党総務会で取り上げられ、「国民が訪中を祝福する環境がまだ整備されていない」（藤尾正行代議士）といった反発が相次いだ。綿貫民輔幹事長は二十二日に予定している党四役と首相との会談で訪中問題を取り上げる考えを表明した。

6.20 読売(朝) 3面

天皇訪中向け慎重派説得も

首相が意欲

宮沢首相は十九日、天皇陛下の中国訪問に関連し、「（訪中は）いろいろなお話を聞いて、皆さんが納得した形でね」と語り、訪中実現の前提として、自民党内などに根強い慎重論を説得する重要性を強調、自ら、これに乗り出す意向であることを示唆した。

先週のニュース

92.6.22 東京(朝) 7

（天皇訪中問題で）天皇が訪中されれば〝お言葉〟で、第二次大戦の侵略行為は遺憾だ、と述べる機会が多い。昭和天皇や昭和（時代）を傷つけるのはもってのほかだ。

〈藤尾正行・元文相〉

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（6月24日～　月　日）

アジア局中国課

92.6.24(水)日経2面

天皇訪中、参院選後に結論

外務省筋 6/24 (朝)(12)

外務省筋は二十三日夜、日中国交正常化二十周年を記念しての天皇陛下の中国訪問について「（実現の可能性は）六分四分というところだ」と述べた。訪中実現に際しては「自民党内の反対勢力が無視できない存在になってきている」と指摘したうえで、決断の時期に関して「党内にどう根回ししていくかで、七月二十六日の参院選後になるだろう」との考えを示唆した。

92.6.24(水)サ ケイ(朝)3面

天皇陛下の訪中実現は依然微妙

6/24 (S)(3)

政府筋

政府筋は二十三日、今秋に予定される天皇陛下の中国ご訪問が実現する見通しについて、「現在は六対四ぐらいだ」と述べ、自民党内や国民の中に反発があり、訪中実現は依然として微妙な状態にあるとの認識を示した。

さらに、同筋は「（実現する場合の）正式決定は参院選後になるのではないか」と述べ、ご訪問される場合の閣議決定は早くても七月二十六日の参院選挙以降になるとの見通しを示した。

さらに「政府としては（天皇陛下のご訪問が）何らかのかたちで実現できるように努力するしかない」として、訪中実現に全力を挙げる考えを示した。

92.6.24(水)朝日4面

「天皇訪中」に条件付き賛成

6/24 (A)(14)

中曽根元首相

中曽根康弘元首相は二十三日、記者団と懇談した中で、自民党内に慎重論の強い天皇訪中問題について「私は原則としてやった方がいいと思う。ただし条件がある」と述べた。

中曽根氏は「条件」の内容を具体的には示さなかったが、これまで非公式の場で、自民党内および国内の世論が訪中賛成で一致することや、韓国の理解を得られることなどを挙げている。

国民の75%が天皇訪中に賛成

6/24(2)

政府筋は二十四日午前、天皇陛下の訪中問題について内閣が三月に実施した非公式な国民の意識調査結果に触れ、賛成が約七五%、反対は五%だったことを明らかにした。そのうえで、「自民党内で起きているほど反対は多くない」と語り、訪中の前提とされている「国民的な合意は「できつつある」との認識を示した。

92.6.24 読売(夕) 2面

国民的合意できつつある

6/24(NK)5(3)

天皇訪中で政府筋

政府筋は二十四日朝、天皇陛下の中国ご訪問問題について国民的合意はできつつあるとの認識を示した。天皇訪中には自民党内に強い異論があるが、同筋は、政府部内で実施した世論調査で「賛成が七五%ぐらいで反対は五%ぐらいだった」ことを明らかにし、訪中実現の環境が整いつつあるとの見方を強調した。

92.6.24 日経(夕) 3面

天皇訪中賛成75%

政府非公式世論調査 高齢者に反対多数

(7)(8)

政府筋は二十四日朝、天皇陛下の中国訪問問題で、政府としては実現への国民の合意ができつつあるとみている、との認識を示した。

その根拠として、政府が三月中旬に二一三千人を対象にした非公式な世論調査を行い、その結果訪中賛成が約七五%に上り、反対は五%ほどにとどまったことを明らかにした。

年齢別では、高齢者に強硬な反対者が多く、若い層には賛成者が多かった、という。

政府筋は、若い層に賛成が多いことについて「中国は日本にとって大事な国だから、中国の思いを大切にしなくてはいけない、ということだ」と分析した。

宮沢首相が先に天皇訪中実現に意欲を示したのは、この調査結果も影響しているとみられる。

92.6.24 (夕) 東京 3面

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（6月2日～6月3日）アサ

アジア局中国課

92決戦 各国の視線

6/2 (火)

警戒と期待

民族主義台頭で一免

中国「経済」も絡み心中複雑



日中戦争発端の地・盧溝橋を訪れる中国人は多い

北京市郊外の盧溝橋。一九三七年七月に日中戦争の発端となる盧溝橋事件が発生したこの地には、両側の橋を見物するため、連日、数多くの中国人が訪れている。

欄干に五百近い獅子(しし)の石像をあしらった美しい橋を見物するため、連日、数多くの中国人が訪れている。

幼い孫の手を引いた人民服姿の、六十二歳になるという老人は、「戦争の責任は一部の軍国主義者にある。その他の普通の日本人はむしろ我々と同様に被害者で、みんな良い人。もし時間があればあなたも私の家に来て話をしませんか」と言って、きさくに笑いかけてきた。

この老人の対日戦争観は、中国指導部が一貫して国民に教育してきた公式見解そのもので、実際ほとんどの中国人に共通している。その一方で、日本に軍国主義が台頭することへの中国側の警戒感は、戦後四十七年たった今なお根強く、それは日本の国連平和維持活動(PKO)協力法案について「慎重な対応」を求め続ける姿勢に表れている。

今年は日中国交正常化二十周年。わが国が、より積極的な国際的役割を果たしていくうえで、「過去の問題」を抱え、さらに天皇訪中という政治懸案が横たわる隣国・中国との関係は、いっそうむずかしいカジ取りを求められている。

中国要人がPKO協力法案でテープレコーダーのように繰り返す「慎重な対応」について、日本政府内では、「『慎重に』というのは、やってはいけないということとは違う。慎重にやる分には反対しないという意味だ」(外務省筋)との解釈が広まっている。しかし、中国の政府関係者、学者、有識者らの見方は、必ずしも日本側と一致していない。むしろ自衛隊が海外に派遣されることに、はっきり反対する声もある。

上海国際問題研究所の樊勇明副所長は、「日本が国連の枠内で平和外交を行うのは、中国にとっても望ましい」と一定の理解を示す一方で「本当の問題は、八〇年代以降、日本の民族主義が日増しに高まっており、その一部の民族主義者は良い。でも、変な民族主義を抑える役割として、野党にも存在価値がある。その意味で、衆院は自民、参院は野党、という現状維持が良い面もある」と、複雑な中国側の思惑をのぞかせる。

八九年六月の天安門事件で国際的に孤立した中国は、アメリカなど西側諸国との関係修復の「仲介役」を務めてきた日本との関係を特に重視している。対米関係の改善が人権や武器輸出問題で思うように進展していないこともその一因だ。

さらに、今年に入って最高実力者の鄧小平氏が南方視察などを通じて改革・開放路線の加速化、経済発展重視の方針を明確に打ち出したが、これを実現するためには今まで以上に海外からの投資、経済・技術協力が必要となる。当然のことながら、約八千百億円の第三次円借款、約七千億円の第三次エネルギー借款や、沿海部の経済開発区などでの合弁事業への投資の「供給役」としての日本への熱い期待は高まる一方だ。

こうした期待の反面、国民感情や指導部内の保守派の存在を考えた場合、PKO問題などでより好意的な態度を取りきれないところに、現在の中国指導部のジレンマがあるとも言える。

一方、「今秋」で検討されている天皇訪中は四月の江沢民・中国共産党総書記の訪日と「二つで一つのパッケージ」という認識が、中国政府内にあると言われる。このため、仮に天皇訪中が見送られ、このパッケージの片方が欠けた場合には、中国の対日感情が一気に悪化しかねないとの懸念が日本側に出ている。

中国が「過去の問題」に敏感にならざるをえないように、日本政府にとって「天皇」は極めて微妙な問題だ。最終的な決定は宮沢首相、渡辺美智雄外相ら首脳部の判断にかかっている。

(政治部・内田明憲)

読売 6/2 朝 1-2面

A6/3-⑮

論壇

天皇訪中と外交ゲーム



卓　南生

今年は日中国交回復二十周年であり、日中友好の象徴として、「天皇訪中」の課題が議事日程にのせられても別に不自然ではない。この敏感な課題について、一昨年五月のノ・テウ韓国大統領訪日直前のような「お言葉」をめぐる摩擦が起きたとしても、驚くべきことではないはずである。しかし、この問題をめぐる数カ月来の日中両国の態度（少なくとも表面的な態度）と波風を振り返ると、戸惑いを感じざるをえない。

日本国内には「天皇利用反対」の声がある。しかし、「新皇室外交」が人々（特にアジアの人々）の日本に対するイメージを変え、「政治大国」日本へとまい進しようとする霞が関の政策と歩調が合っていることはだれが見ても気づくことだ。したがって、あらかじめ各国の反応を打診し、訪問の雰囲気と条件づくりをしておくことが、霞が関にとって大事な仕事になる。日本政府が昨年九月、「戦争の影が比較的薄い」と考えられるタイ、マレーシア、インドネシア三国をまず選び、新天皇訪問を慎重な計画のもとに行ったことはそのいい例といえる。

面白いのは、もともと「政治大国」日本のカードだったはずのものが、いつの間にか北京の手に移ってしまったことである。日本の新聞によると、中国の指導者はすでに七回にわたって天皇訪中を東京に要請している。北京がこれほどに積極姿勢を見せ、この敏感なカードを使っていることに、驚きと当惑を感じずにはおれない。

これは、北京が日本の経済支援を期待し、天皇をサンタクロースと誤解しているのだと説明する人もいる。また、日本にどうしても頼らざるをえなくなって、民間の賠償要求など「非友好的言動」をやめるよう中国に対し要求する動きも出ている。

同時に日本政府も、日本の国連平和維持活動（PKO）参加を支持もしくは黙認するよう、中国に対し頻繁に政治的圧力をかけている。天皇の訪中は日本の国際的地位を高めようとするカードであり、PKO参加は日本の政治大国化ないし軍事大国化に道をつけるカードと言えよう。この二枚のカードをかけひきに持ち出すのは、奇妙な外交ゲームだと言わざるをえない。中国が政治的に譲歩し、自衛隊の海外派遣を黙認するか反対の声を小さくすることと、もう一つの「天皇訪中」をかけひきの条件として使うのは、日本にとって、都合のよいそろばんをはじいているとしか言いようがない。

第三者である東南アジアは、アジアの二大国が友好と協力に向かって発展することを当然、希望している。なぜなら、それはアジアの平和にとって重要な保証となるからである。

しかし、今回の外交ゲームを見ていると、次のような印象をもたざるをえない。二十年前、日中復交促進に努めた周恩来首相の原則堅持の外交旋風と雄姿に比べて、いまの北京の外交理念やセンスは分かりにくくなった。反対に、東京は優位を固めながら、機に乗じて「いじめ外交」をしているという印象をぬぐえない。これは、霞が関外交とその隣国観が、田中角栄元首相が復交にあたって述べ、当時外交上の笑い話になった、「中国国民に多大のご迷惑をおかけした」という発言で済ませようとしたころの感覚をいまだに越えていないことを如実に反映するものではないだろうか。

（トー・ナムセン　シンガポール人、上智大学国際関係研究所客員研究員）＝原文も日本語。

朝日6月3日付朝：15面

〔配布先〕総理秘書官、官房長官秘書官

アジア局長、竹中審議官

天皇陛下御訪中関係報道

（5月30日～6月1日）

アジア局中国課

政治的でない天皇訪中とは

天皇陛下はさらっと中国へ行けないものだろうか。

日中国交正常化二十周年の今年秋、実現するかと思われた天皇訪中は自民党の反対で様子見となった。一日帰国する万里・全人代委員会委員長と天皇、宮沢首相らとの会談では全く触れられなかったという。

反対論は「政府レベルの問題に天皇を巻き込むべきではない」というものだ。天安門事件、尖閣諸島の領有明記、国連平和維持活動（PKO）協力法案に対する懸念などの問題が出ている時だけに、政治的に利用されるというのである。

「中国は一枚岩ではない。改革派が保守派を抑え込む方策として位置付けているのではないか」「米中関係は良好ではなく、日米中のパワーポリティクスの中で、中国には米国から日本を引き寄せる意図がある」という中国側の政治的利用を指摘する反対論もある。反対論に共通しているのは、日中関係は成熟していない、という点だ。

ところが、そうであるからこそ必要というのが推進論の立場だ。

政治と全く無関係な天皇の外国訪問は考えにくい。日本政府は、天皇を対外的には「元首」扱い、外国もそう見ている。昭和天皇の大喪の礼に参列した外国の顔ぶれを見れば一目りょう然である。外国を訪問すれば儀礼だけでは済まなくなっている。

昭和天皇は欧州と米国を訪問、今の天皇は東南アジアを訪問している。天皇は政治的に動けないから、外国訪問は一切しないという原則をつくるなら別だが、中国へは行かないというのも政治的である。国交二十周年の訪問は絶好の機会なのである。

外国人に会うと、天皇が戦前とあまり変わっていないと思っているのに驚くことがある。天皇の外国訪問は、日本が国際社会と価値観を共有してやって行くことを世界に理解を得るいい機会である。

一九八六年秋、フィリピンのアキノ大統領が昭和天皇と会見したとき、天皇は、第二次世界大戦中に日本がフィリピンにかけた迷惑についておわびを言い続けたという。大統領側から明らかにされたが、日本政府は「ノーコメント」だった。両国政府が合意したお言葉という政治的な謝罪より、天皇が個人的なお気持ちを率直に述べられることの方がどれほど効果的か。成熟していないのは、国内の皇室に対する考え方の方なのかもしれない。（政治部・椎橋勝）

点評

毎日 5/31 朝 2面

政治ファイル

天皇訪中問題

反対論 沈静化待つ政府

中国側も話題にせず、結論先送り

日中国交正常化二十周年の要人相互往来の一環で、五月二十五日来日した万里・中国全人代委員長は一日帰国するが、同委員長は滞在中、日本側のどのレベルでの会談でも、懸案の天皇陛下訪中問題に一切触れなかった。ここでこの問題を持ち出すと、自民党内の反対論を再び刺激して訪中実現にマイナスになるとの日中双方の思惑が一致した結果と見られる。政府は当面、反対論の沈静化を待つ構えで、最終結論は七月の参院選後になるとの見方が強まっており、天皇訪中問題はしばらく水面下に潜り続けそうだ。

天皇訪中問題について、政府は「慎重に検討している」（宮沢首相）との姿勢を依然として崩していない。ひとつ間違えば政権基盤が揺らぎかねない問題だけに、首相としては国連平和維持活動（PKO）協力法案をめぐり政局が緊迫化しつつあるいまは、判断を保留しておきたいというのが本音のようだ。内閣が極秘に実施した世論調査では、訪中賛成論が七五％の高率を示した。しかし、政府は自民党内で反対の声が大きい点を重視しており、党内論議の帰すうを見極めようとしている。



天皇陛下

当の自民党内は、このところ反対論に微妙な変化が出てきた。佐藤総務会長が三回に分けて開いた総務懇談会では訪中慎重論が大勢だったが、佐藤氏が宮沢首相に報告する際、この問題への言及をあえて避けた。

これは「一度『党内の大勢がノー』と口にしたら、元に戻すには二倍の努力がいる」（佐藤氏周辺）からだった。強硬な反対論者とみられていた佐藤氏のこうした配慮の裏には中曽根元首相、渡辺副総理兼外相の存在がある、との指摘もある。

党内実力者のいまの姿勢はおおむね「訪中はいいが、国論を二分しては困る」（首脳）というものだ。「首相官邸が秋までに環境整備をできるかどうか。こちらは邪魔はしないようにする」（幹部）と首相の決断待ちを強調する声もある。

しかし、この問題については、官邸内も首相が前向きなのに対し、加藤官房長官、近藤、石原両副長官は慎重といわれ、まとまっていないのが実情。首相周辺には「天皇訪中を決めた途端に党からはしごを外されたらおしまい」（宮沢派幹部）との警戒心もある。

政府は当初から、万里委員長は天皇訪中問題を取り上げないだろうとみていた。「まだ結論を出せる状況でないことを中国側はわかってくれているはず」（外務省筋）との判断からだが、一抹の不安があったのも事実。四月に来日した江沢民・中国共産党総書記が天皇訪中問題で日本政府が確答できる状況でないことを察知していたのに、天皇との会見と宮沢首相との会談であえて「秋の訪中」を招請した経緯があったからだ。

今回、万里委員長が天皇訪中問題に触れなかったことについて、政府は「日本を困らせることはしない、決めてくれるまで待つという中国側の理解ある対応と受け止める」（外務省筋）とホッとした様子だ。

結論を出すタイムリミットについては「（訪中を招請されている秋の）一カ月前というわけにはいかない」（外務省首脳）としているが、訪中実現の場合は取りやめの場合より、決定が多少遅くなっても問題はない、との考えだ。宮内庁も「結論までにはまだ時間がかかるだろう」（幹部）とみており、もうしばらくは「機が熟すのをじっと待つ」（外務省筋）構えだ。

毎日 6/1 朝 2面

6/1 (1)

天皇陛下の訪中難しく

政府「政治性」「反日感情」懸念

6/1 (S) (3)

政府は天皇陛下のご訪中問題について、現時点では当初予定されていた今秋の実現は無理との判断に傾きつつある。三十一日までに複数の政府筋や首相周辺が明らかにした。自民党内に「ご訪中が政治的に利用される」との意見が根強いことや、ご訪中が実現すれば、反日感情の強い韓国へのご訪問問題が浮上してくる可能性が強いことを懸念したものだ。五月の竹下元首相訪中、万里・中国全人代委員長の来日の際、中国側からご訪中問題が持ち出されなかったことで、「中国側が日本国内の情勢を理解したもの」（政府筋）との判断も働いた。

政府・自民党では、渡辺外相らが「日中国交正常化二十周年にあたる」（自民党の推進派議員）ことを理由に、積極姿勢を見せているものの、自民党総務会では「時期尚早」との意見が大勢を占め、四月二十三日には自民党若手議員有志が、党執行部に「慎重な扱い」を申し入れ、党内の意見を二分していた。

反対派の懸念は、「天皇陛下のご訪中が、先の戦争とからめられたり、改革・開放派と保守派の対立する中国国内の政局に政治的に利用される可能性がある」（自民党若手）点にある。さらに、「先の戦争とからめられることにでもなれば、ご訪韓の問題も必ず出てくる。しかし、反日感情が先鋭化し、天皇陛下の人形を焼く事態が起きており、行っていただくわけにはいかず、ご訪中も見送ったほうがいい」（同）との考えが強い。

党内の政権基盤を揺るがしかねない微妙な問題だけに、首相も記者会見などで国民のコンセンサスを強調。首相に近い政府筋も「絶対反対という人がいるなかでは、（ご訪中は）まずい」との慎重な見通しを示していた。

陛下のご訪中は、平成元年四月に来日した李鵬首相が、陛下との会見で直接伝えたほか、さらに同首相は、昨年八月の海部前首相訪中時、今年一月の国連安全保障理事国首脳会議（安保理サミット）を利用しての宮沢首相との懇談でも言及した。さらに、今年四月、江沢民・中国共産党総書記が来日した際にも招請を行った。

産経 6/1 朝 3面

5/12付 世界日報（中川弘論文）

fyi 天皇訪中

小和田 事務次官

竹内 総理秘書官

河野 官房副長官秘書官

有馬 大臣秘書官

谷野 アジア局長

中村 儀典長

平成4年(1992年) 5月12日(火曜日) 世界日報 The Sekai I

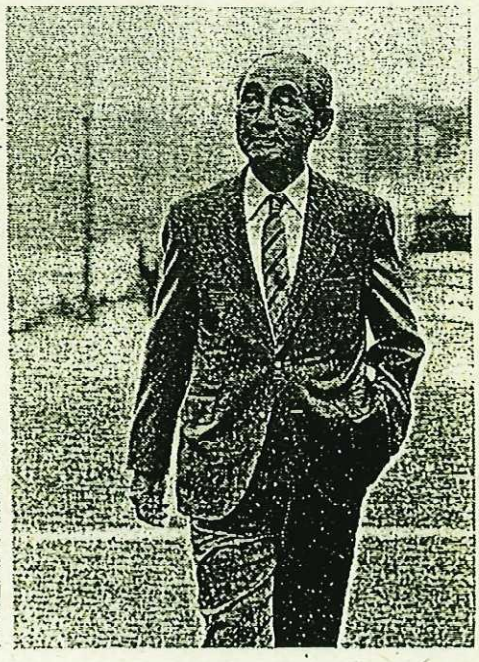
Viewpoint

天皇の中国御訪問を希望する

外交評論家 中川 融

憲法上も外交上も問題ない

歴史に区切り必要



無視できない政界の態度

天皇の御訪中について、賛否の両論が言論界を賑わしている。一部の学者の間の論議である間は差して気にする必要はないが、政界にも飛火して、自民党の四役が揃って慎重論を唱えるような事態になると、政治的にも無視し得ない要素となり、政府の対処如何では外交上も悪影響を起こしかねない。

中国側は天皇の御訪中に熱心で、昨年六月以来再三の申し入れがあり、本年四月来日の江沢民総書記は、宮沢総理に対してのみならず、天皇御自身に対しても直接の要望を行った。宮沢総理は、「日本政府としても真剣に検討している」旨の前向きの応答をしている。

言論界及び自民党内での御訪中反対論の理由は、大別して二つである。第一は憲法論であって、天皇は政治的行為は慎しまねばならず、外交は政府が行うべきものだという主張である。第二は、天皇が公式訪問される相手国として、今日の中国は適当でないとの政治論である。

第一の憲法論は、天皇の権限は憲法に定められており、その中に「外国訪問」は挙げられていない。外交は政府が行うものであり、天皇がなさるべきものではないというものである。

そもそも、憲法第七条に列挙された国事行為の中で、最後の「儀式を行うこと」とあるのは、マッカーサー草案にあった原英文の誤訳であり、「儀礼的職能の実施」とでも訳すべきものであった。そうすれば、いわゆる皇室外交はこの規定で読み得たであろう。憲法の公定英訳では、ほぼ原文に忠実に「Performance of ceremonial functions」となっている。

第二の議論は、今日の中国は、天皇の公式訪問の対象として不適当であるとするものであるが、その理由としては、(一)教科書やPKO参加の問題で日本の内政に干渉を試みた、(二)尖閣列島を自国領土として「領海法」に規定した、(三)天安門事件についての国際的非難がまだ続いている等の理由が挙げられている。

教科書問題は一応結着が付いており、今日改めてこの問題を持ち出すことは寝た子を起こす結果になり兼ねない。PKO問題についての中国の立場は、中国の国民感情に鑑み慎重にして貰いたいということである。希望の表明であって、是が非でもやめろという要求ではない。「内政干渉」と目くじらを立てる程のことではなかろう。尖閣列島を「領海法」に規定したことは、あらずもがなの措置と感ずるが、江総書記も問題解決を次世代に任せるとの七八年当時の鄧小平発言を再確認しており、領土問題についての立前論と受け取っておけばよいのではないか。

日本の避けて通れぬ課題

天安門事件は重大な人権の蹂躙(じゅうりん)として国際社会による批判を招いたが、日本はこの批判に同調しながらも、中国を国際孤立に陥れないよう当初から一味違った柔軟な姿勢を取ってきた。昨年八月、海部総理の訪中により、日本による対中制裁措置は全面的に解除された。爾来、鄧小平を首席とする中国の指導体制は、保守から改革に大きく軌道を修正しようとしており、ある意味で日本の努力が実を結んだと言えようこのような状況の下で、今秋、日中国交正常化二十周年を記念して天皇御訪中が実現する場合、国際的に特に波風が立つことはないのではないか。

中国は、米国・ロシア・独国と並んで、日本にとり最も重要な隣国である。天皇の御訪問により、過去一世紀に亘る日中間の不幸な歴史に、一つの区切りを付けることは、日本外交の避けて通れぬ課題である。中国の熱心な要望に応えてその実現を計ることは、宮沢内閣の重大な使命と言わねばならない。

東京日日新聞外報部の鉄外相インタビュー（評価）5/3

取扱注意

（報告・供覧）

東京（中日）新聞代表団の銭其琛外相インタビュー（注目点）

92.5.13
中国課

銭其琛中国外相は、１１日、東京（中日）新聞代表団の単独インタビューに応じ、特にＰＫＯ法案、天皇陛下御訪中問題等について、我が国国内世論に配慮し、以前にも増して抑制された対応を行なっているところ、注目すべき点以下の通り（関連報道別添）。

１．日中関係全般

○　銭外相より「歴史的にみても、日中が対立したり衝突したりすればアジアに平和を保つことは出来ない」、「日本と中国はアジアで最も重要な国で隣り合っており相互関係を発展させるのが自然でアジアの繁栄に役立つ」旨述べ、日中関係重視の姿勢を示した。これは先の江沢民総書記訪日の折にも示されたアジア・世界の平和・繁栄に対する日中の政治的役割を強調する発言と軌を一にするもの。

２．ＰＫＯ法案

○　銭外相より、質問に答える形で、「ＰＫＯ法案はいま日本の国会で審議され、意見も一致していないと聞いている。中国はこの問題についての態度表明は慎重であるのが良いと思う」旨述べたが、これは従来の「海外派兵は慎重に」とのラインに比べ、よりトーン・ダウンされたものとなっている。

○　東京新聞解説も「これまでの中国指導者の発言に比べ、はるかに抑制されたもの」となっているとし、「これは国会審議が煮詰まっているこの時期に中国が突出して批判している印象を与え日中関係が悪化するのを避ける配慮が働いている」と中国側の対日配慮を指摘している。

○　東京新聞見出しは「ＰＫＯできれば別組織で」となっているが、実際のやり取りでは、後方支援について問われ、銭外相より「人道的援助は自衛隊ではない別の機構によって行なわれれば、煩わしいことはない」旨述べたとのみ報じており、ＰＫＯに自衛隊は関与すべきではないとのニュアンスはない。

３．天皇陛下御訪中

○　銭外相は、天皇陛下の御訪中問題についても、「中国側は国交正常化２０周年に当り、日中双方のハイレベルの往来は有利だと思っている。具体的にどのよ

うに実現するかはそれぞれ考えるべきだ」とし、陛下の御訪中が実現されない場合の悪影響についての問いに対しても、「日本の国内で天皇陛下の訪中についていろんな意見のあることは承知している。各種の論争を起こさないためにも、中国側は意見を発表しない方がいいと思う」旨述べ、際立った配慮を示している。

○　東京新聞解説も「自民党内で反対論が高まり、政府が決定に慎重になっていることに中国政府が不快感を覚えているのは想像に難くない」としつつ、銭外相の示した「柔軟な姿勢」を評価している。

４．評価

○　東京新聞は、銭外相の発言を「日中友好を重視」した「抑制的な発言」として解説記事の見出しとしている。同解説は、中国側には日本の資金力への打算、軍事大国化への警戒感はあろうが、上記の銭外相発言には「歴史的経験から日中間の対立につながることは何とか防止しようという中国政府の考えは貫かれている」として、「こうした『大人』の姿勢を保つ中国に対し、日本の政府や世論も冷静に対応し、各種の交流を通じ歴史的な相互の不信感を除く努力を重ねるべきであろう」旨述べている。

（了）

東京 5/13-①

〔1〕 12版　　第17889号　(明治25年3月12日第3種郵便物認可)

「天皇訪中」なお注視

PKOできれば別組織で

中国外相が本社会長に表明



【北京12日清水美和】中国の銭其琛外相は十二日、北京の中国外務省で加藤巳一郎会長をはじめとした中日新聞社（東京新聞）訪中団の単独インタビューに応じた。同外相はこの中で国交正常化二十周年を迎えた日中関係について「歴史的にみても日中が対立したり衝突したりすればアジアの平和を保つことはできない」と友好関係継続の決意を強調。天皇陛下の訪中問題については「具体的にどう実現するかはそれぞれが考えるべきだ」と日本国内での論議に配慮し、なお注視する柔軟な姿勢を示した。【関連記事3面に】

国会で審議中の国連平和維持活動（PKO）協力法案に関連し、災害や医療など人道的援助での自衛隊出動については「自衛隊でなければもっといい」と述べ、派遣は別組織が理想的との考えを表明した。

銭外相は両国関係について「中国と日本はいずれもアジアでもっとも重要な国で隣り合っており相互関係を発展させるのが自然でアジアの繁栄に役立つ」と述べた。

天皇訪中問題では「中日国交正常化二十周年の今年にハイレベルの往来が実現するのが両国関係発展に有利と考える」と期待感を示しながらも「日本国内でいろいろな論議があることは承知している。各種の論争を起こさないためにも中国が意見を発表しないのがいいだろう」と世論などへの配慮を示した。

また自衛隊の海外派遣問題についても「現在国会でこの問題が討論され意見の一致をみていない。だから中国の態度表明は慎重であるのがよいと思う」と語るにとどめ、これまでにない抑制された対応だった。

ソ連解体の中国への影響については「北側の脅威がなくなった」と極めて率直に表現。六月に開かれるブラジルでの国連環境開発会議について「先進国には環境汚染の主要な責任があるが、会議を南北対立の場にしてはならない」と南北協力の必要を強調した。

＝中川陽写す

92年5月13日付
東京新聞（朝刊）
（1面）

日中友好を重視

中国外相、抑制的な発言

本社会長との会見

解説

本社訪中団の単独会見で銭其琛外相は、自民党内の一部の反対で決定を見ない天皇訪中問題に柔軟な対応を示した。成立が濃厚になった国連平和維持活動(PKO)協力法案についてもこれまでになく抑制された発言をした。「日中が対立すればアジアに平和はない」(同外相)との認識から両国関係を重視する姿勢の表れとみてよい。

天皇訪中について先月訪日した江沢民総書記に宮沢首相が「国交正常化二十周年の年に実現すれば両国関係の発展に有利」と前向きの発言をした。その後自民党内で反対論が高まり、政府が決定に慎重になっていることに中国政府が不快感を覚えているのは想像に難くない。

しかし銭外相が「どう実現するかはそれぞれが考えるべき」と日本政府のしりごみに柔軟な姿勢を示したことは「天皇訪中を断念すれば日中関係が悪化するのでは」といった恐れを一応はぬぐい去った。

自衛隊の海外派遣問題も「過去の歴史を考え慎重に」ということれまでの中国指導者の発言に比べ、はるかに抑制されたものだ。これは国会審議が煮詰まっているこの時期に中国が突出して批判している印象を与え日中関係が悪化するのを避ける配慮が働いている。

こうした姿勢の背景には中国の経済的離陸のために日本の協力が不可欠といった打算もある。日本の政治・軍事大国化への根強い警戒感があるのも事実。しかし歴史的経験から日中間の対立につながることは何としても防止しようという中国政府の考えは貫かれている。

こうした「大人」の姿勢を保つ中国に対し、日本の政府や世論も冷静に対応し、各種の交流を通じ歴史的な相互の不信感を除く努力を重ねるべきだろう。

(北京・清水美和)

(3面)

92年5月13日付
東京新聞(朝刊)

銭外相との会見要旨

【北京12日垂水健二】中国の銭其琛外相と本社訪中代表団との会見要旨は次の通り。

――日中両国首脳の交流が盛んになっているが、中国側は最近の日中関係をどう評価しているか。

銭外相　日本と中国はアジアの中で最も重要で隣り合った国だ。歴史が立証したように、中日両国が対立したり衝突すればアジアに平和をもたらせない。両国が友好的であれば、アジアの平和だけでなく繁栄にも役立つ。見識のある政治家は日中両国が世々代々、友好的に付き合っていくことを主張している。

――天皇陛下の中国ご訪問を日中友好を深める面で、どう考えるか。

銭外相　中国側は国交正常化二十周年に当たり、日中双方のハイレベルの往来は有利だと思っている。具体的にどのように実現するかはそれぞれ考えるべきだ。

――天皇訪中が実現しない場合、日中関係に悪影響があるか。

銭外相　日本の国内で、天皇訪中についていろんな意見があることは知っている。各種の論争を起こさないためにも、中国側は意見を発表しない方がいいと思う。

――日本で国連平和維持活動(PKO)協力法案が成立する可能性が強くなっている。後方支援の国際世論が高まっている中で、中国は後方支援の範囲内でも自衛隊の参加を認めないか。

銭外相　PKO法案はいま日本の国会で審議され、意見も一致していないと聞いている。中国はこの問題についての態度表明は慎重であるのがよいと思う。人道的援助は自衛隊ではない別の機構によって行われれば、煩わしいことはない。

――旧ソ連の崩壊を中国はどう考え、国際関係の中でどういう立場をとるか。

銭外相　旧ソ連が解体した、最も直接的な影響は中国の北側の脅威がなくなったことだ。西側の一部には旧ソ連の解体によって、中国も解体するという意見の人もいるが正しくない。中国と旧ソ連は内政も外交もやり方が違う。旧ソ連の崩壊でペレストロイカ(立て直し)は失敗に終わり、中国の進めている改革・開放政策は成功した。

――国連環境開発会議(地球サミット)が来月ブラジルで開かれるが、環境保全は国際的にどう扱われるべきか

銭外相　環境保全と経済発展を結びつけるのは正しい。環境保全を忘れ、発展だけを求めるのも、発展を忘れ環境保全だけを求めるのも正しくない。工業化の過程で最初は環境に留意しなかった。数百年の発展で発達してきた先進国は環境保全にもっと責任を持つべきだ。具体的にいえば先進国は資金、技術を発展途上国に提供し、経済発展の中で環境保全に努力することが必要だ。中国側は地球サミットを南北協力の会議とし、対立の会議にならないようにしたい。

中国専門家（夏旭東、施建元）発言

5/14

日中国交20周年　両国間の懸案は

M9

北京市社会科学院外国問題研究所長　夏　旭東氏

外交学院教授（日中関係論）　陸　建元氏

日中両国は九月に国交正常化二十周年を迎えるが、天皇訪中、尖閣諸島（中国名・釣魚島）領有権、人権など日中間の懸案は多い。中国の専門家はこの問題をどう見ているのか。国際関係や人権問題が専門の夏旭東・北京市社会科学院外国問題研究所長＝写真右、日中関係論の陸建元・外交学院教授＝同左＝に聞いた。両氏は天皇訪中の実現、尖閣諸島問題の話し合い解決を要望。人権問題については米欧型の個人主義に根ざした人権に対して東洋型の集団を基本にした人権思想が存在し得ることを強調した。

（北京で岸本卓也）



謝罪、賠償求めない

●●天皇訪中問題

夏　日中の長い交流の中でも日本の国家元首が訪中したことはなく、天皇訪中は日中友好に画期的な役割を果たすだろう。実現を熱望する。

——日本側には戦争責任問題について天皇陛下に謝罪を求める声が強いのではと懸念する向きもある。

陸　中国は広い国で人も多く、天皇にさまざまな感情を抱くのは当然のことだ。しかし、中国政府としては天皇に来てほしいだけで何を話してもらうかまでは要求していない。

——中国国内で戦時中の民間賠償を日本に求める動きが出ていることも影響しそうだ。

陸　そういう意見が出ているのは事実だが、中国政府が正式に日本側に賠償請求するとは考えられない。一九七二年の国交正常化の際、中国は日本に対し戦争賠償要求はしないと約束しているからだ。

あくまで話し合いを

●●尖閣諸島問題

陸　釣魚島は歴史的、地理的にみて中国の領土であるが、この問題はあくまで話し合いで解決すべきだ。二十年前の国交正常化の際、棚上げされたはず。蒸し返すのは両国にとってプラスとならない。

——今回の論争は中国側が領海法に尖閣諸島を領土として明記したことが発端ではないのか。

陸　そうは思わない。領海法は中国側の従来からの主張の確認に過ぎない。

——日本の領海法は「日本のすべての領土を基準に」と書いているだけで、具体的な島の名前は出していない。中国側も穏やかな法文を作ることは可能ではなかったか。

陸　領海法のように運用が具体的に行われる場合は具体的に領海を確定させた方がいい。あいまいな表現は法の運用に支障となる。

●●人権問題

夏　中国に人権がないというのは間違いだ。この百年間は人権を得るために苦闘してきた。孫文の三民主義による国民革命から日本の敗戦へと続く歴史は、人権を獲得する過程であった。私の母は日本軍に殺された。そういうことがない状態こそ人権ではないか。

米欧型がすべてでない

——天安門事件は日本をはじめ西側各国に衝撃を与えた。

夏　研究者の間では天安門事件の発生前から人権問題を研究していた。中国にとって人権問題は解決すべき問題だが、米欧型の個人主義を基本とする思想だけが人権思想とは思わない。中国や日本では集団、つまり共同体を基本にした人権思想があると思う。儒教の影響かも知れない。人権問題はそれぞれの国の歴史的、社会的、経済的事情に応じて考えるべきだ。

5月14日付
毎日(朝刊)9面

日中合弁企業で働く中国人
給料や労働時間に不満

All

アジア社会問題研調べ

通産省の外郭団体、アジア社会問題研究所がこのほどまとめた「日中合弁企業で働く中国従業員の意識調査」によると、合弁企業の中国人の三人のうち二人までが給料に満足せず、二人に一人が福利厚生や労働時間・休暇に不満を抱いていることが分かった。このため、給料や労働時間など条件が同じなら、日中合弁企業よりも中国企業、欧米、香港、韓国、台湾の合弁企業で働きたい、としている比率が三分の一前後に達している。

調査は、中国科学院心理研究所の協力を得て一九九一年三月にかけて実施した。北京や上海、大連、広州など十一都市の、三十七の日中合弁企業で働く中国人六千四百七十八人から回答があった。集計によると、給料や労働時間などに不満が多い一方、「雇用の安定性」では全体の四二・七%、「日本人上司の態度」にも三八・〇%が満足している。しかし、昇進の機会について二

左派の経済特区にだれが行くか！

田副首相　「改革」抵抗の保守派批判

M9

【香港13日＝坂東賢治】香港紙「サウスチャイナ・モーニングポスト」や「星島日報」がこのほど報じたところによると、中国改革派のリーダーの一人である田紀雲副首相は四月下旬、共産党中央高級党校で講演し「左派の経済特区を作ったら、だれがそんなところに行きたいと思うだろうか」と、改革・開放の加速に抵抗する保守派を皮肉たっぷりに攻撃した。

報道によると、田氏は「鄧小平氏の『主に防ぐべきは左だ』との談話を具体化するのには抵抗が大きい」と保守派がなお根強い抵抗を示していることを認めたうえで、保守派の一部の人々は改革・開放の成果を享受しているくせに五、六〇年代の経済体制を懐かしんでいる、と指摘。

「（そんなに今の経済特区が気にくわないのなら、人民公社時代の）生産大隊に戻って合作化をやり、低賃金、低物価で、配給キップでものを買い、行列しなければならないような経済特区を作ればいい。彼らですらそこに行くとは限らないだろう」と批判したという。

週刊文春（5/14号）THIS WEEK 報道

ノーかイエスか。微妙な天皇訪中問題で試される宮沢首相の決断力

連休前の訪欧中、宮沢首相の披露した〝中国観〟が、自民党内から注目されている。

ミッテラン仏大統領やコール独首相との会談で、

「改革・開放派が力を強めているといっても、所詮は共産党の一党支配。開放したいのは経済面だけで、旧ソ連が目指したグラスノスチ（公開性）を求めているわけではない」

と、一刀両断。

西欧諸国が最も関心を寄せている人権問題についても、

「鄧小平氏は人格尊重派ではありませんよ」

「顔が見えない」という宮沢評がウソのような直言ぶり。

折りしも天皇訪中問題が自民党内で論議されているときだけに、

「陛下のご訪中は『ノー』という間接的サイン」

と、解釈されているのだ。

実は、〝天皇訪中〟に関する宮沢語録は、いずれも玉虫色で真意が解りにくかった。

一月に安保理サミットで顔を合わせた李鵬首相には、

「真剣に検討します」

来日した江沢民総書記にも、

「引き続き真剣に検討します」

その直後から自民党内には、

「中国側の狙いは、陛下のご訪中を機に開放策に必要なジャパン・マネーを引き出すこと。ご訪問を政治的に利用する腹がミエミエ」（自民党幹部）

と、反対論が噴出。



何事も慎重が一番ですヨ、コールさん

党内の若手から突き上げられた格好の綿貫幹事長が、「オレも同感だ」と、〝反対宣言〟。佐藤総務会長からは、「賛成する党総務は誰一人いなかった」という聞き取り調査の結果も報告されていた。

が、宮沢首相の返事は、

「慎重に検討します」

要するに、訪欧の成果に気を良くして、つい本心を明かしてしまったということらしい……。

気になるのは、連休中に訪中した竹下元首相への宮沢首相の〝返答〟。

「中国側は竹下氏に自民党内の反対論をなだめてもらいたがっている。親中派の竹下氏が首相のシリを叩くかも」（党幹部）

さあ、どうする宮沢サン？

銀行トップ続々引責辞任。で、大蔵、日銀は？

一連のバブル事件で、ほとんどの銀行トップが引責辞任していったが、唯一「引責」していなかったのが東海銀行。が、このほど、とうとう引導が渡された。

ドン加藤隆一会長が取締役相談役（代表権あり）に退き、会長は空席、次期頭取候補だった稲垣伊久男副頭取も退任――という構想が固まったのだが、

「これは、完全に日銀が詰め腹を切らせた」

というのが、もっぱらの評判。

「昨年、不祥事が起きた時点で東海銀行は新井永吉副会長に責任をかぶせ、トカゲの尻尾切りをはかった。実は新井氏は日銀出身。三顧の礼で迎えた人物だったのに、ドン加藤のツルの一声でクビを切ったため、日銀サイドは相当アタマにきていた」（金融記者）

日銀が資金枠を引きあげたのも、この問題への仕返しとする見方もあるほどで、「住友や富士銀行にならってアタマがケジメをつけろ」とヤクザのような怒りが日銀に渦まいていたらしい。

「しかも、東京地区の最高責任者は新井氏ではなく、ドン子飼いの稲垣氏であると判明したため、加藤氏の行内把握力にも疑問が生じ、一気に退陣に追いこまれた」（同）

それにしても、大蔵、日銀の方の「引責」はどうした？



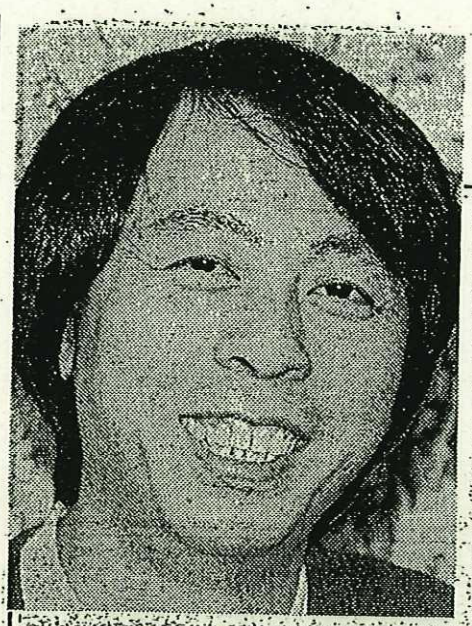
日銀軽視のツケ？

驚きがあり、感動が生まれる！
エレガントな旅のシーンを、華麗なリゾート「あさやホテル」で
美しい自然の中に建つ「あさやホテル」は12階へとつづくアトリウム（吹抜け）を生かしたヨーロピアンスタイルのホテルです。
国際的イベントにコンベンションホール（1500名様収容）。他、中、小ホール。雅な雰囲気の大宴会（1000名様収容）、他、中、小宴会場。趣を凝らした大人のナイトライフ「プレジャーロード」。おしゃれなショッピング街「ミ・ロード」。などなど 魅力いっぱい//
営業所●東京／03(3841)1251●名古屋／052(451)5889●大阪／06(365)1202
政府登録 日光国立公園鬼怒川温泉
あさやホテル
TEL 0288(77)1111(代表)

中曽根元総理 高松講演

5/16

Y 5/17 ⑪



顔

日本で胡弓の普及指導を続ける
楊興新（ヤン・シンシン）さん

胡弓（こきゅう）は、中国古来の二本弦の楽器だ。その独特な音色の奏で方を、横浜で弟子たちに教える一方、演奏活動にも励む。

六歳で独学で胡弓の音階を覚えた。十三歳で地元歌舞団にデビューし、天性の才能を評価されたが、世は文化大革命の時代。作家の父は反革命者として無期服役中だった。"罪人の息子"とわかると、歌舞団を追われ、どの音楽学校の入学、入団も許されなかった。

「父を恨みました。母は、どたどしい日本語が無念さで震える。「薬を飲んで自殺未遂も。でも胡弓をやめた。毛沢東の死後、父も解放され、自分も大学に迎えられた。

遼寧省丹東市生まれ。中国音楽家協会会員、中国歌舞団シルクロード団長。36歳。

私のために父と離婚。何度も胡弓を捨てて普通の労働者になろうと思った」。

来日直後はパン屋やホテルで働いたが、胡弓を手放せなかった。

去年の暮れ、横浜中華街の大道芸人のわきで、持って

「胡弓を続けてこられたのは父がいたから、と今は思う」。埼玉県吉川町の自宅には今、実物大の父の顔写真が飾ってある。

だった〝自由の国〟日本で暮らしたい」と、四年前に日本へ。

この出来事などがきっかけで、横浜で二十人の日本人に胡弓を教えることになった。今年三月には「全日本ソリストコンテスト」に出場し「国際親善賞」を受賞。「日本で胡弓を広めたい」と永住を決意した。

政治部　飯塚　恵子

日中友好もう一度加速を
中曽根氏
毎5/17 ②天皇訪中消極論けん制

中曽根元首相は十六日、高松市内で開かれた渡辺派参院議員の集会で講演し、最近の日中関係について「尖閣諸島問題、日本の国連平和維持活動（PKO）協力法案に中国が慎重姿勢を求めたことで、お互い信用できないという気分が日本にでてきた」と日中関係悪化への懸念を表明した上で、「向こう（中国）はそれに気づき、日中国交回復二十周年ということで日中関係の再構築を考え始めた。お互いが情熱を持って日中友好の基礎をもう一度エンジンをふかしてつくらなくてはいけない」と述べ、日本側からも中国への配慮を示すべきだとの考えを強調した。これは、自民党内に台頭しつつある天皇訪中消極論をけん制したものと見られる。

中国のミサイル輸出の証拠なし

◆米国務省は14日、中国がパキスタンとシリアにミサイルを輸出した証拠はない、との判断を明らかにした。また同省によると、最近訪中したカンター国務次官は、中国が国際ミサイル技術規制（MTCR）を順守することに強い関心を表明した、という。毎5/17 ⑦（ワシントン支局）

朝日（天皇初は肉声）
5/20付、
5/21付

切っても切れぬ政治色

どうなる天皇訪中 (上)

絡む「戦後」の区切り

A4 後には難題 訪韓控える

天皇陛下の中国訪問計画が暗礁に乗り上げたままだ。政府は秋の日中国交回復二十周年に合わせたご訪問になお積極的だが、自民党内の反対論が根強く、二十五日来日する万里・全人代常任委員長にも「朗報」は伝えられそうにない。天皇外遊の例としては、昭和天皇の訪欧、訪米、それに現天皇の東南アジア訪問があるが、日本による侵略や植民地支配の歴史をもつ中国と韓国の訪問は、残された大きな懸案だ。それにしても、友好親善をうたう「天皇の外遊」が、どうしてこんなに問題になるのか、その背景と論議を探ってみる。

訪欧・訪米

天皇外遊の歴史は佐藤政権時代の一九七一年秋、昭和天皇ご夫妻の欧州七カ国訪問に始まった。「皇太子時代に訪れた欧州をもう一度」というご自身の希望もあった。敗戦国としての難しさに加え、七十歳というご高齢、しかもハードスケジュール。懸念の声もあったが、天皇は「国際親善に努めたい。私はやるよ」と、相手国優先の日程作りを希望されたという。

往路、給油のため寄った米国のアンカレジに、わざわざニクソン米大統領夫妻が出迎え、天皇と会見した。吉以来、日米繊維交渉がこじれたうえ、この夏は大統領訪中とドル防衛策の発表と「ニクソンショック」が続いただけに、日本の感情を和らげよう、との狙いがあった。この席で大統領は、天皇の米国訪問を要請した。

天皇は訪欧後、「欧州に行った以上、ほかの国にも行くのが当然だと思う。事情の許す限り今後も……」と積極姿勢を示され、訪米が日程に上ってきた。だが、それからが大変だった。

続く田中政権がいったん七三年十月の訪米計画を立てたが、社会、共産両党が「内政の失敗から目をそらすための政治利用だ」と強く反発。「天皇訪米のあと、ニクソン大統領が訪日」という順序に、自民党からも反対が出た。宮内庁は「反対を押し切って行かれるべきではない」と慎重で、結局は断念。釈明のため大平正芳外相が訪米する事態になった。

訪米が実現したのは、次の三木政権になってから。相手もフォード大統領に代わっていた。訪米の二カ月前に、内閣広報室が世論調査をし、その賛否を尋ねた。だが、調査の事実と「六九%が賛成」という結果が発表されたのは、訪米終了後のこと。天皇は米国で「私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争」に触れられ、戦後の米国の援助に謝意を表明。この訪米はいま、日米友好の基礎固めに大きな役割を果たしたと評価されている。

訪中

昭和天皇は訪米直後、「日中平和友好条約が締結され、訪中の機会が訪れれば非常にうれしい」と述べられた。平和条約の締結二カ月後の七八年十月、来日した鄧小平副首相が天皇に直接、訪中を要請。だが、これは公表されず、八〇年に来日した韓国全斗煥大統領が訪日と合わせて、八六年に明るみに出た。

昭和天皇の訪中は「高齢」で実現しなかったが、代わって検討された皇太子の訪中も実現できなかった。八四年から八七年にかけて中国大使を務めた中江要介氏は「日中友好ムードが最高潮になった八四年がチャンスだった」と悔やむ。翌年、中曽根康弘首相の靖国神社公式参拝に中国が反発、京都の中国人留学生寮の所有権問題も起き、友好ムードは冷めていった。

現在の天皇陛下は八九年八月、即位後初めての記者会見で「私の立場から外国の人々との理解と親善の増進に役立つよう努めていきたい」。中国、韓国訪問も「機会があれば」と述べられた。

だが、その二カ月前に起きた天安門事件で、当時は環境が最悪だった。それが変化したのは、昨年八月の海部俊樹首相の訪中で日本が中国の孤立状況を救ってから。今年は国交回復二

天皇陛下の皇太子時代の公式外国訪問

53年 ①イギリス
60年 ②米国③イラン、エチオピア、インド、ネパール
62年 ④パキスタン、インドネシア⑤フィリピン
64年 ⑥メキシコ⑦タイ
67年 ⑧ペルー、アルゼンチン、ブラジル
70年 ⑨マレーシア、シンガポール
71年 ⑩アフガニスタン
73年 ⑪オーストラリア、ニュージーランド⑫スペイン
75年 ⑬ネパール
76年 ⑭ヨルダン、ユーゴスラビア、イギリス
78年 ⑮ブラジル、パラグアイ
79年 ⑯ルーマニア、ブルガリア、オランダ
81年 ⑰サウジアラビア、スリランカ⑱イギリス
83年 ⑲ザンビア、タンザニア、ケニア
84年 ⑳ザイール、セネガル
85年 ㉑スペイン、アイルランド㉒スウェーデン、デンマーク、ノルウェー、フィンランド
87年 ㉓米国

5/20日
朝日新聞(朝刊) 4頁

次頁へ

10



訪米された昭和天皇（左）は農場も訪問。農場主と歓談された　＝75年、シカゴ郊外で

招請を重ねている。江総書記に「引き続き真剣に検討する」と答えた宮沢喜一首相は「実現すれば、友好関係発展のため、極めて意義深い」とも語った。「見送れば、日中間は非常にまずいことになる」（外務省幹部）との見方が政府内には強い。

訪韓

訪韓の難題も控えている。八四年秋、全斗煥大統領来日の際、韓国側が昭和天皇の訪韓を持ち出したのが始まりだ。八六年三月、日韓両国は皇太子が秋に「天皇の名代」として訪韓されることで協議に入った。

だが、韓国の野党や反体制団体が「反対」「阻止」などの声明を出し、一部の新聞も時期尚早論を展開した。過去に対する厳しい感情のほか、韓国の独裁政権や在日韓国人の指紋押捺（おうなつ）問題などが背景にあった。やがて両国政府は「延期」を発表。公式の理由には美智子妃（現皇后陛下）のご病気による日程上の問題が挙げられた。

昭和天皇の外遊は皇太子時代を含めても三回だけだったが、現天皇は皇太子時代の公式訪問だけでも三十八カ国に及ぶうえ、まだ五十代。政府は今後も「年に一回程度は」と考えており、隣国でもある韓国訪問は早めに実現させたいところだ。

だが今回、中国を見送るようなら、韓国はとうてい無理、という観測が政府内には強い。もともと反日感情が強いうえ、旧日本軍の従軍慰安婦問題なども表面化、一方で対日貿易赤字も深刻になっているからだ。

天皇の外遊は「政治色抜き」が建前だが、日本との関係が難しい国ほど「友好の象徴」としての訪問自体、政治的な意味を帯びるのも宿命だ。天皇陛下の中国、韓国訪問が無事に終わった時、日本の「戦後」にも一区切りつく、と見る向きは多い。

十周年とあって「絶好のタイミング」と中国が熱心に働きかけてきた。

天安門事件の後遺症と並び、自民党が気にするのは天皇の「お言葉」だが、四月に来日した江沢民・共産党総書記は政府首脳に、お言葉で「文句はつけない」と伝えたという。経済界きっての中国通である脊名和雄・丸紅会長も「日本の経済支援を必要とする中国がいま、お言葉で文句をつけることはなかろう」という。それだけに今がチャンスとの見方もある。

中国側はこの一年間に七回も

天皇の外国訪問

<昭和天皇>

訪問国と期間	訪問中のハプニング
71年9月27日 ―10月14日 デンマーク ベルギー フランス イギリス オランダ スイス 西ドイツ	▽天皇の車に卵が投げられ、窓ガラスに当たる（ベルギー） ▽お手植えの杉の苗木が切り倒される（英国） ▽天皇の車に水の入った瓶が投げられ、窓ガラスにヒビが入る（オランダ）
75年9月30日 ―10月14日 米　国	▽クジラ愛護団体の40人が、天皇が訪れた博物館にプラカードを持って集まる ▽米国の警備当局が銃を持った男性ら3人を逮捕 ▽爆弾を首席随員の福田赳夫副総理の部屋に仕掛けた、とのいやがらせ電話

<現天皇>

91年9月26日 ―10月6日 タイ マレーシア インドネシア	▽第2次大戦中、補助兵力として日本軍に雇用されたインドネシア人の元「兵補」が記者会見し、当時の未払い給与や貯金の返還を訴える（インドネシア）

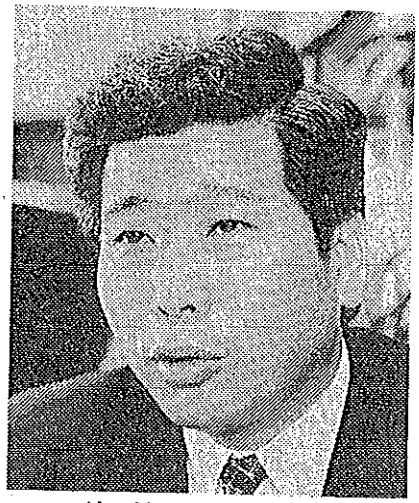
file 天皇

保守内の対立なお深く

どうなる天皇訪中(下)

5/21 付朝日新聞(朝刊) 4面

A4



衛藤　晟一氏
(代議士)

反対

政治不介入に背く
中国側の認識に疑問

――政府は天皇訪中に前向きのようですが。

「憲法に対する認識が甘いのではないか。憲法は天皇は政治に不介入、と決めている。外国訪問も、外交課題がなく、単なる親善ならば良い。しかし、政治的効果が期待されているという状態で、天皇が行くのは憲法の精神を理解していない」

――訪中に政治的な意図を感じますか。

「みんな感じている。中国国内には保守派と改革派との権力闘争があるし、共産国だ。過去についてどう発言するか、政府でも明確になっていない。尖閣諸島の領土問題も出てきた。そういう時に、天皇が行く必要は全くない」

――政府の対中外交はどう思いますか。

「それはそれで結構だと思うが、政府レベルの問題に天皇を巻き込むべきではない」

――政府は日中友好のシンボルとして訪中を実現しようとしているようです。

「南京虐殺は調査すべきだという感じだ」

「過去の引っ掛かりは、あの世代にはあるかもしれないが、僕らにはわからない。ならば、どうしてきちんとした責任の取り方を、あの世代でやらないのか。『新しいナショナリズム』なんて冗談じゃないよ」

――党内の戦中派から「新たなナショナリズム」という声もでていますが。

「過去の引っ掛かりは、あの世代にはあるかもしれないが、僕らにはわからない。ならば、どうしてきちんとした責任の取り方を、あの世代でやらないのか。『新しいナショナリズム』なんて冗談じゃないよ」

――天皇訪中は時期尚早と申し入れた、仕掛け人。四十四歳。

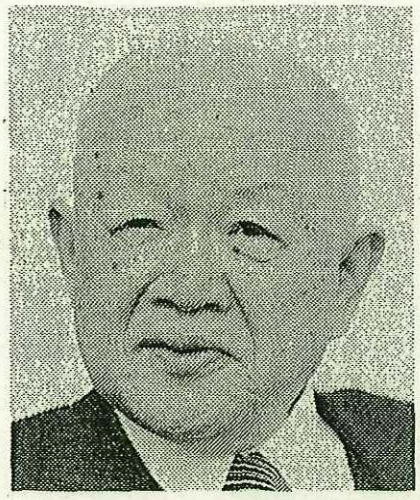
――日本の国連平和維持活動(PKO)のための自衛隊派遣に中国は批判的です。

「(中国政府は)どういう時代認識をしているのだろう。過去の日本をうんぬんというのはわからんでもないが、そんな時代認識しかしていないのかな、天皇に肩代わりさせることがナンセンスだ」

A4

賛成

中国国民も心開く
アジアの安定に寄与



猪木　正道氏
（平和・安全保障研究所会長）

――なぜ賛成なのですか。

「国家にとって安全保障は一番重要な問題だが、日本として最も重要なのは日米同盟を堅持し、強化すること。二番目は、中国との関係。アジアで強力な国はなんと言っても、日本と中国。日本は経済超大国であり、中国は核保有国。対照的な両国が、良好な関係を保つことで朝鮮半島も東南アジア情勢も安定する。逆に、覇権を争えば緊張を生む」

――友好関係確立のために訪中が必要と。

「一九八〇年ごろから、よく中国を訪れるが、中国の人と会って感じるのは、やはり過去の恨みは忘れていないということ。外交上手だから露骨には言わないが、心は開いていない。友好関係にある国の元首が相互訪問するのは、常識だ。何千万の日本人が行って、日中友好を説くよりも、天皇陛下の訪中によって、中国国民が『日中新時代が来た』と思い、心を開くのでは、と期待している」

――反対派は、中国が領海法で尖閣諸島の領有権を主張したことや、天安門事件に見られた人権侵害などを理由に挙げています。

「どちらもこじつけ。たしかに領海法に入れたのは良くない。しかし、尖閣諸島は日本が今、実効支配している。これは抗議すれば済む問題だ。天安門事件も遺憾な事件だが、そう簡単に民主化するとは思えない。人権論者が言うのならば別だが、他国の人権問題に熱心でなかった人が、それを理由に反対するのは口実としか思えない」

――天皇が政治に巻き込まれる恐れがあるとの主張も強い。

「天皇は政治に関与できないので、『侵略して済みません』と謝罪する必要はない。中国も期待していないから問題ない。自民党の若い世代から反対論が出ているのは、日本が中国で何をやったかを知らないからではないか。日本は、中国に大きな借りがある。陛下が訪問することだけでも、かなりの部分、返すことができる。中国がことあるごとに訪中を要請しているのに、それを断ったら、しこりを残すことにもなる」

平和・安全保障研究所会長。一九四九年に京都大学教授となり、政治学・政治史を教えた。七〇年七月、当時の中曽根防衛庁長官に請われ、七八年七月まで防衛大校長。七十七歳。

A4

――は自民党内

厳しい中国への批判
賛成派は動き控える

天皇訪中計画にブレーキをかけている自民党反対派の中で火付け役となったのは、もともと教科書問題や靖国神社の公式参拝をめぐる中国側の対応に反発を見せていた藤尾正行氏（党総務）ら旧来のタカ派勢力だった。しかし、衛藤晟一代議士（三塚派）ら若手議員七人も党執行部に訪中反対を申し入れた。いずれも、「天皇を政治に巻き込むべきではない」というのが反対の最大の理由だ。

だが、これまで実現した欧州、米国、東南アジアへの天皇訪問に比べて今回、反対の声が一段と強いのは、自民党内に中国に対する厳しい見方が根強くあるからだ。

「体制の違う国に、即位したばかりの天皇がなぜ好んで行くことがあるのか」という激しい意見や、天安門事件に見られる人権抑圧、武器輸出といった中国の政策を批判する声が相次いだという。さらに今回は、中国が二月に制定した領海法で尖閣諸島の領有を明記したことや、国連平和維持活動（PKO）協力法案による自衛隊の海外派遣に慎重な対応を求めたことが、自民党内の反対派を勢いづける結果となった。

こうした反対論によって、党執行部は慎重論に傾いていった。台湾派で知られる金丸信副総裁は、もともと天皇訪中には賛成の立場だったと言われる。

しかし、「反対、賛成で意見が二分している時に、反対を押し切ってまで行ってほしい、というわけにはいかない」と周囲に漏らしている。

一方、賛成派は、表立って賛成論を展開すると党内の意見対立が激化し、かえって訪中実現が遠のくと見て、動きは控えめ。宮沢喜一首相は竹下登元首相や中曽根康弘元首相らに根回ししつつ、訪中実現に向け党内の空気を変えて行きたいとしているが、なかなか壁は厚そうだ。

訪問も、政府が「親善訪問」に強くあるからだ。

よる政治的効果を計算に入れていたことは否定できない。ころした四月の党総務会懇談会では

10

5/21付 朝日新聞 社説

file 1.

A2

「友好の象徴」としての訪中を

社説

天皇陛下の中国ご訪問が、日中間の当面の最大の焦点となっている。国交正常化二十周年の節目に当たって強く招請する中国に対し、自民党内には時期尚早とする慎重論も強い。中国の国会にあたる全国人民代表大会の万里常務委員長が二十五日から訪日するが、この問題をめぐる日本側とのやりとりは重苦しいものになりそうだ。

結論を先にいえば、われわれはこの機会に天皇訪中が実現するのが望ましいと考える。宮沢首相の決断を促したい。

先に日本を訪れた中国共産党の江沢民総書記は「今秋、両陛下を中国にお迎えできることを期待しています」と特に時期を示して直接、天皇に訪中を要請した。

二千年に及ぶ日中交流の歴史でも天皇や元首の相互訪問は例がない。江総書記は訪中要請について「子々孫々にわたって友好関係を発展させていきたいという両国民の願いに合致する」と熱意を示した。

経済建設を急ぐ中国は日本の協力に強く期待している。さらに天安門事件や人権問題をめぐり、欧米先進国との関係がぎくしゃくする中で、日本をしっかり引き付けるねらいもあるとみられている。

もしも中国側が天皇訪中にそうした目的を含ませているのなら、次のことはぜひ指摘しておかねばならない。

日本の侵略を受けながら戦争賠償請求を放棄した中国に対し、経済大国に成長した隣国としてできるだけ協力したい。だが、天皇は憲法に定められた日本国の象徴であって国政に関与はできない。中国は天皇に政治的役割を期待すべきではない。

むろん訪中の際、「過去」を避けて通ることはできないだろう。一九七五年に米国を訪問された昭和天皇が「私が深く悲しみとする、あの不幸な戦争」と発言されたことやそのお人柄は、米国人の対日感情に影響を与え、ニューヨーク・タイムズ紙のレストン記者は「日本に対する憎しみや苦々しい感情はなくなった」と書いた。

江総書記は、「謝罪を求めるのか」との日本人記者の質問に「どのようなお言葉を述べられるかは日本側が考えること」と答えている。ある知日派中国人ジャーナリストは「内容よりむしろ、どれだけ誠意を示されるかの問題だろう」と指摘する。

戦争の歴史を直接、背負っていない天皇だが、ご自身の気持ちを率直な表現で伝えることは、必ずしも象徴天皇の地位と矛盾しないと思う。

九四年は日清戦争百周年にあたる。百年余の日中関係を振り返ってみると、最近の二十年を除いては残念ながら友好の歴史とはいえなかった。日清戦争から日中戦争までたびたび両国は激しくぶつかり、戦後もその後遺症は長く続いた。

率直にいって、わが国が過去の歴史を反省し、歴史の教訓に学ぶ謙虚な姿勢に欠けていたことは否定できない。小手先の対応では相手の心を打たない。侵略を是認するような誤った考えを批判し、友好を妨げる要因を取り除かなければならない。

宮沢首相は、過去の不幸な日中関係を清算するためにも、天皇訪中は決着させねばならない重要な課題と考えているという。合わせて、二十一世紀へ向けての日中関係の安定といった長期的な展望からも、前向きに取り組むべきだと思う。

天皇陛下には韓国からも招請があるが、こちらは年末に大統領選挙があり、日中国交二十周年という大義名分を考えると、中国先行は不自然ではあるまい。

「友好の象徴」としての天皇の訪中は、アジア重視の象徴的な第一歩となろう。

(2面)

「自民が結束し実現すべきだ」

A4

天皇訪中で中曽根氏

中曽根康弘元首相は二十日、自民党の当選一回代議士有志に招かれて講演し、同党内で論議になっている天皇訪中問題について「実現した方がいいと思う。ただ政治に巻き込まないことだ。そのためには、自民党が結束して意思を強固に統一しなければならない」と述べた。

党内のコンセンサスを条件に、今秋の訪中に向け政府・自民党が前向きに取り組むべきだとの考えを示したものだ。

(4面)

5月21日付 朝日新聞(朝刊)

サンデー毎日（5/4ゟ）HEAD LINE 報告

中国課長

SUNDAY HEADLINE

政治

どっちに転んでも?? 宮沢・渡辺コンビの新たなアキレス腱とは



またまた難題が——

天皇陛下の訪中問題がどうやら新たな政局の火種として浮上してきたようだ。

「宮沢首相、渡辺外相という現政権の中枢コンビは、なんとか今秋の訪中実現をはかりたい意向のようですが、自民党若手国会議員の間では〝天皇の政治利用につながる〟と反対する動きが公然化してきています」（政治部デスク）

「政府は、中国に対し色よい返事をしてきただけに断れば外交関係がおかしくなり、実現すれば党内がもたないという、「退くも地獄、進むも地獄」というジレンマに陥りそうだ。

中国側の「天皇訪中」招請は、四月の江沢民総書記来日時を入れるとこれで七回目。五月連休に訪中した竹下元首相に対し、楊尚昆国家主席がよりハイレベルな交流を求め、えん曲に天皇訪中を促したのを加えると、この問題に対する中国側の熱の入れ方がよくわかる。

一方、日本サイドは佐藤孝行総務会長が、総務懇談会で訪中二の世論を

したほか、三塚派若手議員らが反対のデモンストレーションを開始。これに対し、政府も「とりあえずは反対運動の鎮静化をはかり、七月のサミット後に再び訪中実現の方向で党内をまとめたい」（首相周辺）と一時的に退却の構え。

政治部記者が解説する。

「宮沢さんも渡辺さんもこの騒ぎが大きくなると下手をすれば政権の命取りになりかねないということに気づき始めたわけです。というのも渡辺外相は一月の自らの訪中時に前向き姿勢を打ち出しており、これを覆すと信義違反。次期政権をめざす渡辺氏にとっては取りたくない道。首相も、当然、連帯責任となります。逆に党内の反対を押し切って実現させた場合、こじれれば事が事だけにすぐ政権が吹っ飛ぶ。どちらにも行けなくなっているわけです」

なんともやっかいな問題を抱えこんだもの。政治改革、PKO法案といったテーマだけでなく、天皇訪中問題でも宮沢首相の決断、指導力が問われることになりそうだ。

地獄の沙汰はやっぱり…社党のある「転身」

国会での政治改革論議がヤマ場を迎える中で、社会党が自民党並みの政治資金団体を設立する構想を進めている。全国状況

社会党が届け出る政治資金は、年間約七十億円程度だが、いろいろ入れれば、「社会党も年間百数十億円の資金がかかる」（自民党筋）という説もある。しかし、自民党ばりの東京佐川急便事件への関与疑惑なども出て、パーティー券の販売にも支障が出るなど資金集めは四苦八

「幅広

」（社会

建前と政治家

まで見

しり取

対する

オに

っさり

いに力

ことか。

窓口になって集金。それを同党に献金していた。選挙の年はそれ以外に億単位の「借金」も同党につぎ込んでいた。

サンデー毎日 5/24

大蛇、外報官、参、

アサ、

報ら、



左ウチワといきますか…

'92.5.24

5/4付 読売新聞報道

「天皇訪中」結論 なお時間

自民は尚早派大勢
首相決断時期探る

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日に来日するが、焦点は天皇陛下の訪中問題。政府は引き続き「真剣に検討中」として確答は見送る構えだ。この背景には、訪中に消極的な自民党が実現に意欲を燃やす外務省を批判、動きを封じ込められた形の外務省は宮沢首相の政治決断に望みを託しているものの、首相は自民党の顔色をうかがうばかりで決断を先延ばしという図式が浮き彫りになっており、結論が出るまでにはなお時間がかかりそうだ。

外務省は刺激避け沈黙

政治決断

宮沢首相は、天皇訪中について、公式には「真剣に検討する」と繰り返すだけでその態度を明確にしていない。さる十八日、黛敏郎・日本を守る国民会議議長らが反対の陳情をした際も、「政治的に利用されるような結果になってはいけない」などと述べたものの、その是非については明言を避けたという。

首相自身は内心、実現に前向き、といわれ、アジアの過去の問題にけじめをつけるとともに、二十周年を機に、アジアの中心である日中の交流を促進する突破口にしたいという思いがあるというのが周辺の解説だ。首相は、これまで、最終判断の基準として、①政治的に利用されない②国民に歓迎される——の二点を示してきた。そのうち、第一基準について、「江沢民（中国共産党総書記）さんも、面倒なことはいっていない」（四月下旬の記者団との懇談）とし、クリアずみとの認識を示しているが、問題は第二の基準。

自民党内には、「まず、首相官邸が汗を流し、反対派を説得すべきだ」（幹部）との声が強い。首相が竹下元首相と十九日に会談したのも、訪中実現のカギを握るといわれる竹下氏に党内根回しの協力を求めるため、との見方があるが、自民党内の反対が強いだけに、首相としては、決断の時期を慎重に見極めざるを得ない、というのが実情だ。

慎重姿勢

自民党内はこの問題に対し「政治的に利用される」などの懸念から根強い反対論があり、こうした党内状況を踏まえて党執行部も慎重な姿勢だ。

反対論の理由は、①天皇の訪中が中国国内の改革派と保守派の権力闘争に利用される②訪中時に、日中関係の過去への謝罪を求められる心配がある③中国が尖閣諸島の中国への帰属の主張や「国連平和維持活動（PKO）参加に懸念を表明するなど、訪中できる環境にあるとは言えない——など。こうした立場から、若手議員が既に四月下旬に宮沢首相に天皇訪中反対を申し入れている。

この問題は総務会や党四役会議でもしばしば論議されているが、総務会は時期尚早との意見が大勢。これを踏まえて、四役も、「党内に反対論、慎重論が強いことを重視する」との認識で一致している。

この中で中国との間に太いパイプを持つ竹下元首相は基本的には訪中に前向きと見られているが、慎重論や反対論が前面に出ている党内の空気に慎重姿勢をとっているとされる。中曽根元首相も竹下氏とほぼ同様の考えのようだ。党内の大勢が慎重論であることから、日中議連関係者など賛成論者も積極的に動けず、訪中実現に向けての党内環境は日ごとに厳しさを増しているのが実情だ。

首相頼み

天皇訪中実現に一番熱心な外務省は、ここに来て、静かに、静かに」（外務省首脳）と、ひたすら沈黙を守っている。というのも、「外交の足らざるところを天皇陛下で補うというのは問題だ」（自民党関係者）という自民党内に根強い外務省批判をいたずらに刺激するのは得策でないとの判断が働いているからだ。

このため、万里氏の来日の際も「江総書記にイエスと言わなかったのに、今回、イエスと言う訳がない」（外務省幹部）と、極力、話題にのぼることを避けたいとの意向だ。

もっとも、天皇陛下の外遊先として有力視される国々の中で米国や韓国が大統領選を控えて政治の季節に入っている事情を考慮すれば、国交正常化二十周年の節目に当たる中国が外務省にとって最も望ましい相手であるのも事実。「このチャンスを逃したら、しばらくは難しい。日中関係に及ぼす影響も心配だ」（外務省幹部）との思いが強い。

それだけに先行き不透明さを増しつつある状況に、外務省幹部の間からは「援軍がない」とのぼやきも出がち。「もう我々のレベルの問題ではない」（外務省筋）として、宮沢首相の政治決断にゲタを預けた格好だ。

＜天皇の中国ご訪問問題をめぐる最近の動き＞

月日
1. 4 渡辺美智雄外相、訪中。李鵬首相らの天皇訪中招請に、「真剣に検討していく」と表明。
2.21 楊振亜・駐日中国大使が記者会見で「両国の一時期の不幸な歴史に対して態度表明を行えば、中日両国民ともに自然なことと思う」と述べ、天皇陛下の訪中でお言葉問題への期待を示す。
自民党４役会議で天皇訪中で慎重対処で一致。
2.25 中国、全国人民代表大会で、尖閣諸島を中国領と規定した中国領海法を採択。日本は抗議。
3. 9 日本の中国侵略の戦争賠償を求める法案が全人代に提出される動き表面化。
4. 6 江沢民総書記来日。宮沢首相との会談で①尖閣諸島領有問題の棚上げ方針は不変②国連平和維持活動は敏感な問題、慎重に対応を——などの考えを表明。宮沢首相は天皇訪中で「引き続き真剣に検討したい」と述べる。
4.24 自民党佐藤孝行総務会長、首相に訪中は時期尚早との党内世論を報告。
5. 8 楊尚昆国家主席、訪中した竹下元首相に天皇陛下訪中問題で直接言及せず。

読売 5/24付朝刊②

「天皇訪中」結論 なお時間

5/24

自民は尚早派大勢
首相決断時期探る

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日に来日するが、焦点は天皇陛下の訪中問題。政府は引き続き「真剣に検討中」として確答は見送る構えだ。この背景には、訪中に消極的な自民党が実現に意欲を燃やす外務省を批判、動きを封じ込められた形の外務省は宮沢首相の政治決断に望みを託しているものの、首相は自民党の顔色をうかがうばかりで決断を先延ばしという図式が浮き彫りになっており、結論が出るまでにはなお時間がかかりそうだ。

外務省は刺激避け沈黙

政治決断

宮沢首相は、天皇訪中について、公式には「真剣に検討する」と繰り返すだけでその態度を明確にしていない。さる十八日、貸敏郎・日本を守る国民会議議長らが反対の陳情をした際も、「政治的に利用されるような結果になってはいけない」などと述べたものの、その是非については明言を避けたという。

首相自身は内心、実現に前向き、といわれ、アジアの過去の問題にけじめをつけるとともに、二十周年を機に、アジアの中心である日中の交流を促進する突破口にしたいという思いがあるというのが周辺の解説だ。首相は、これまで、最終判断の基準として、①政治的に利用されない②国民に歓迎されること――の二点を示してきたが、そのうち、第一基準について、「江沢民（中国共産党総書記）さんも、面倒なことはいっていない」（四月下旬の記者団との懇談）とし、クリアずみとの認識を示しているが、問題は第二の基準。

自民党内には、「まず、首相官邸が汗を流し、反対派を説得すべきだ」（幹部）との声が強い。首相が竹下元首相と十九日に会談したのも、訪中実現のカギを握るといわれる竹下氏に党内

万里氏あす来日

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が衆参両院議長の招きで、二十五日から一週間の日程で来日する。日中国交正常化二十周年を記念しての要人の相互往来の一環で、四月に来日した江沢民・中国共産党総書記に続くもの。

<天皇の中国ご訪問問題をめぐる最近の動き>

月日

1. 4　渡辺美智雄外相、訪中。李鵬首相らの天皇訪中招請に、「真剣に検討していく」と表明。

2.21　楊振亜・駐日中国大使が記者会見で「両国の一時期の不幸な歴史に対して態度表明を行えば、中日両国民ともに自然なことと思う」と述べ、天皇陛下の訪中でお言葉問題への期待を示す。
自民党４役会議で天皇訪中で慎重対処で一致。

2.25　中国、全国人民代表大会で、尖閣諸島を中国領と規定した中国領海法を採択。日本は抗議。

3. 9　日本の中国侵略の戦争賠償を求める法案が全人代に提出される動き表面化。

4. 6　江沢民総書記来日。宮沢首相との会談で①尖閣諸島領有問題の棚上げ方針は不変②国連平和維持活動は敏感な問題、慎重に対応を――などの考えを表明。宮沢首相は天皇訪中で「引き続き真剣に検討したい」と述べる。

4.24　自民党佐藤孝行総務会長、首相に訪中は時期尚早との党内世論を報告。

5. 8　楊尚昆国家主席、訪中した竹下元首相に天皇陛下訪中問題で直接言及せず。

次頁へ

続き

根回しの協力を求めるため、との見方があるが、自民党内の反対が強いだけに、首相としては、決断の時期を慎重に見極めざるを得ない、というのが実情だ。

慎重姿勢

自民党内はこの問題に対し「政治的に利用される」などの懸念から根強い反対論があり、こうした党内状況を踏まえて党執行部も慎重な姿勢だ。

反対論の理由は、①天皇の訪中が中国国内の改革派と保守派の権力闘争に利用される②訪中時に、日中関係の過去への謝罪を求められる心配がある③中国が尖閣諸島の中国への帰属の主張や、国連平和維持活動（PKO）参加に懸念を表明するなど、訪中できる環境にあるとは言えない――など。こうした立場から、若手議員が既に四月下旬に宮沢首相に天皇訪中反対を申し入れている。

この問題は総務会や党四役会議でもしばしば論議されているが、総務会は時期尚早との意見が大勢。これを踏まえて、四役も、「党内に反対論、慎重論が強いことを重視する」との認識で一致している。

この中で中国との間に太いパイプを持つ竹下元首相は基本的には訪中に前向きと見られているが、慎重論や反対論が前面に出ている党内の空気に慎重姿勢をとっているとされる。中曽根元首相も竹下氏とほぼ同様の考えのようだ。党内の大勢が慎重論であることから、日中議連関係者など賛成論者も積極的に動けず、訪中実現に向けての党内環境は日ごとに厳しさを増しているのが実情だ。

首相頼み

天皇訪中実現に一番熱心な外務省は、ここに来て「静かに、静かに」（外務省首脳）と、ひたすら沈黙を守っている。というのも、「外交の足らざるところを天皇陛下で補うというのは問題だ」（自民党関係者）という自民党内に根強い外務省批判をいたずらに刺激するのは得策でないとの判断が働いているからだ。

このため、万里氏の来日の際も「江総書記にイエスと言わなかったのに、今回、イエスと言う訳がない」（外務省幹部）と、極力、話題にのぼることを避けたいとの意向だ。

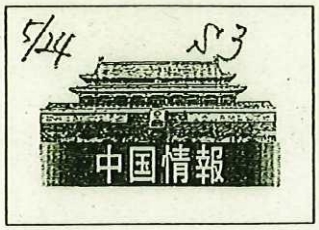
もっとも、天皇陛下の外遊先として有力視される国々の中で米国や韓国が大統領選を控えて政治の季節に入っている事情を考慮すれば、国交正常化二十周年の節目に当たる中国が外務省にとって最も望ましい相手であるのも事実。「このチャンスを逃したら、しばらくは難しい。日中関係に及ぼす影響も心配だ」（外務省幹部）との思いが強い。

それだけに先行き不透明さを増しつつある状況に、外務省幹部の間からは「援軍がない」とのぼやきも出がち。もう我々のレベルの問題ではない」（外務省筋）として、宮沢首相の政治決断にゲタを預けた格好だ。

3条件提案に台湾無回答

【香港二十三日＝杉江弘充】二十三日付の香港の中国系紙「文匯報」によると、昨年六月、中国は台湾に対し①敵対状態を終結させ、台湾問題解決に武力を行使しない②平和統一を実現し、台湾独立に断固反対する③統一は時間をかけて実現する――の三点を提案したが、一年たっても台湾側から何ら回答がない、という。

同日、海峡両岸関係協会の唐樹備常務副会長（前台湾事務弁公室副主任）が米ニューヨークで開かれた会合での講演の中で明らかにしたもの。唐常務副会長は「台湾の国民党が早く正式の回答を寄せてくれることを願っている」と語った。この提案は昨年六月七日に党中央の台湾問題の責任者が党中央の委託を受けて台湾側に伝えた、とされる。



北京―ハノイ間に来月28日から航空便

【北京二十二日＝共同】新華社電によると、中国民航当局者は中国・南寧で二十二日、ベトナムのハノイと中国・北京を結ぶ航空便が六月二十八日から就航する、と発表した。中国・ベトナム間の航空便は今月、広州―ホーチミン市便が就航したばかり。それによると北京―ハノイ便は毎週一回日曜日に就航、午前中に南寧経由でハノイまで飛び、午後再び南寧経由で北京へ戻るという。

北京・ハノイ間に航空便
◆新華社電によると、中国民航当局者は中国・南寧で22日、ベトナムのハノイと中国・北京を結ぶ航空便が6月28日から就航する、と発表した。中国・ベトナム間の航空便は今月、広州―ホーチミン市便が就航したばかり。（共同）

日本・モンゴル交流協会が発足

モンゴルとの相互理解と友好親善を目的とした日本・モンゴル交流協会の設立総会が二十三日、大阪市中央区の大阪商工会議所で開かれた。

同協会は民主化と経済改革を進めているモンゴルと日本が、経済、文化、スポーツなどを通じて交流を深めようと、作家の司馬遼太郎氏などの文化人、関西の官財界人、大阪外国語大学の教授らが発起人となり、準備を進めていた。同日の総会では、会長に宇野章・現代モンゴル文学研究会長を選出した。

5/4付 日本経済新聞「政治論評」

袋小路の天皇訪中問題

風見鶏

NK 2

○…今年一月に訪れた北京では「日中国交二十周年を記念して是非、天皇陛下をお招きしたい」との中国側の熱意が様々な形で伝わってきた。

なぜ天皇訪中なのか。中国政府の思い入れについて、在北京の日本外交官は「こちらの人からみると、日本の国民の皇室に対する特別な敬愛の感情はなにか不思議なもので、それだけに強烈な印象を与えている」と語っていた。

政治の外にあって、なおかつ国民の敬愛の念を集める皇室の存在は、国際親善に大きな役割を果たしてきた。しかし、この秋にも実現すると思われていた訪中は自民党内の反対論にあって、いまや袋小路に入った感じがする。

○…自民党内では「反対論がある以上は慎重に」との意見が増えてきているが、なぜ反対なのかという肝心のところは、それほどはっきりしているわけではない。

例えば、中国が自衛隊の国連平和維持活動（PKO）参加に懸念を示し、日中間の過去の歴史にこだわる姿勢を崩していないことが、反対の理由にあげられている。「日中関係はまだそこまで成熟していない」というわけだ。

しかし、これはそっくり賛成の理由にもなる。PKO協力は、これまでの「内むき平和主義」からの脱皮を目指すものだが、戦前の軍国主義のイメージと重なって、近隣諸国の顰蹙を生んでいる。訪中は、そうした「過去」へのわだかまりを払しょくし、国際社会で積極的役割を果たす環境づくりの好機ともなる。

「それでは天皇の政治利用になる」との意見もあるが、「PKOなどへの態度が気にいらないから訪中をやめろといったら、それこそ政治利用になる」（政府筋）との見方もできる。

○…確かに皇室と政治の関係には微妙なものがある。英国のエリザベス女王は、この十二日にフランスのストラスブールの欧州議会を初めて訪れ、演説した。女王の欧州議会訪問は永年の懸案だったが、欧州共同体（EC）との急ピッチの統合に消極的なサッチャー前首相の時代は実現しなかったものだ。今回の訪問には保守党の一部から疑問の声が出たと伝えられる。

一九七五年の昭和天皇の訪米の際は、主に革新とされる側の中に「天皇を日米協調に利用するもの」との反発があった。

皇室外交はあくまで「友好・親善」が目的だが、国と国との付き合いで重要な要素となる儀礼外交が、広い意味で政治の場に影響を与えることは避けられない。

カーター元米大統領が現職時代に来日した際、昭和天皇との会見に深い感銘を受けた話は有名だ。皇太子時代の天皇のフィリピン訪問が、その後の対日感情の改善につながった例もよくあげられる。

天皇が昨年一年間に会われた外国の要人は、首脳や大使を含めてゆうに百人を超える。「友好・親善」が外交の基礎とするなら、皇室外交から政治的側面を一切切り離すことは不可能である。

結局のところ、訪中問題をどう考えるかは、日中友好を促進するのが望ましいかどうか、の判断に尽きる。

○…思い返せば、米ソ対立は政府・自民党にとって頼りがいのある羅針盤であった。外交問題の大半は、東西を指して動く針を見ながら判断すればまず安全航海ができた。

この羅針盤がなくなれば、方向感覚は次第にあやしくなってくる。訪中問題をめぐる自民党の迷走ぶりにも、その気配が感じられる。

中国との間には人権問題など、「国家体制が違う」というだけでは見逃せない問題があるし、「友好」の二文字で包み切れない対立もある。しかし、意見が違っても、それが感情的な衝突に発展しない成熟した日中関係をつくるために、歴代の自民党政権は尽力してきたのではないか。

昭和天皇が訪中を強く望まれていたことは、関係者の間でよく知られている。自民党内には「時機尚早論」があるが、「鄧小平後」の中国の行方などを考えれば、日中の歴史を画する天皇訪中の好機がそうあるとは思えない。

「真剣に検討する」と中国側に約束してきた政府は「今がいい時機」（宮沢首相）と認めながらも、時間をかけて党内の意見や世論の流れを見極める構えだ。

最終的には首相が判断することになろうが、袋小路で迷った時は、冷静に方向感覚を働かせ、話の出発点に戻ることが大事ではないだろうか。

（政治部次長　河西　敬一）

「頭を出す鳥は撃つ」

天安門事件3周年控え　中国で内部文書配布

【北京24日清水美和】信頼できる中国筋によると天安門事件（六・四）三周年を前に、学生運動に対し「頭を出す鳥（リーダー）は撃つ」など厳しい対応を呼びかける内部文書が共産党・国家機関の幹部に配布された。中国では今春、鄧小平氏の南方視察をきっかけに「思想の解放」「極左的傾向の防止」のキャンペーンが強まっているが、同文書は学生の民主化要求への対応では依然保守派が強い影響力を保持していることを示している。

中国筋によると、この文書は北京大学党委員会の林炎志副書記が執筆した。同副書記は同大学では学生運動対策に「まず先に警告し、頭を出す鳥は撃ち、人が集まればすぐ介入し、機を見て処分する」との方針で臨んでいると強調。八九年の事件以来、学生には「安定がすべてに優先する」と学生運動を否定する教育を繰り返してきたと述べ「（事件の）評価は社会主義か資本主義かの問題が含まれており、評価を変えることは社会主義転覆につながる」と弾圧を正当化している。

また過去の学生運動の総括から①状況②リーダー③組織④デマ――の四つの要素が運動につながるとし、「人民内部の矛盾も扇動に利用されれば敵対的な闘争になりうる」とあくまで厳しい姿勢で臨むことを呼びかけている。

学生運動に厳しい対応を訴え

T7

いったん学生が集まると解散させるのは困難なので幹部は学生寮や教室で学生を現場に行かせないよう働きかけるべきだとしている。さらに「闘争は鋭く対決しなければ勝利できない」

「人民内部の矛盾も扇動に利用されれば敵対的な闘争になりうる」とあくまで厳しい姿勢で臨むことを呼びかけている。

5/25

中国関係

報道ぶり

5/25付 東京新聞社説

社説

天皇訪中を両国友好の礎に

T8

国会議長にあたる中国の万里全国人民代表大会（全人代）常務委員長が二十五日来日する。日中間の懸案である今秋の天皇訪中問題も非公式に話し合われるはずだ。

今秋の天皇陛下の中国ご訪問については、さきに訪日した江沢民総書記も含め、中国側が再三要請しているのに対し、日本側は「真剣に検討したい」として明確な回答を避けてきている。

これは自民党内に「天皇を政治に巻き込むべきではない」という観点からの慎重論が根強く、政府としても態度を決めかねているからにほかならない。

だが今秋の天皇訪中を実現させるとすれば、もう時間的余裕はない。今回の万里委員長の訪日の際、政府は何らかの意思を伝えざるを得ないところに追い込まれているのである。

天皇訪中は昭和天皇の在世中からの懸案であり、二十一世紀に向けての日中友好の基礎をより強固にするためにも、ぜひ実現すべきである。日中国交正常化二十周年にあたる今秋が絶好のタイミングである。宮沢首相の決断に期待したい。

日中両国の友好関係の促進は、単に両国だけでなく、アジア・太平洋地域の平和と安定を図るうえからも不可欠である。ところが、国交正常化二十周年を迎えるとはいえ、現在の日中両国は、なお日本の中国侵略の歴史からくるこだわりが何かというと頭をもたげがちであり、真の信頼関係ができあがった、という状態には、必ずしも至っていない。

そこで天皇訪中問題が重要性をもってくる。かつて七五年の昭和天皇の訪米が、その後の日米友好の基礎を固めるのに役立ったように、二千年の日中交流の歴史の中で、今秋、初めて天皇訪中が実現する場合、必ずや日中相互の信頼関係は深まる、と思うからである。

もちろん天皇は日本国の象徴であり、政治的権能は持ち合わせていない。したがって天皇訪中にあたっては、一切の政治問題に巻き込むことのないよう中国側から確約をとりつける必要はある。

だが実際問題、そういう心配は要らないのではないか。江総書記は、さきの訪日前「天皇訪中時に中国側から難題を持ち出すつもりは全くない」と語り、銭其琛外相も最近、加藤紘一郎・本社会長のインタビューの中で「日本でいろいろ議論があることは承知している。論争を起こさないためにも、こちらからは意見は言わない」と述べるなど、日本側に理解を見せる発言を行っている。

これらは天皇訪中の際、日中戦争の謝罪や民間の賠償問題で中国側が無理な注文を出す考えのないことを示唆したもの、と受け取っていい。

天皇訪中それ自体が何らかの政治的意味合いを持つことは当然だ。過去の歴史に対するわれわれの認識がいい加減でないことを相手に知ってもらうためにこそ、天皇の訪中が必要なのではないか。

改革・開放路線を加速させようとする中国としては、日本の協力のパイプを太くするためにも今秋の天皇訪中を強く望んでいるフシがないでもない。だが日本の協力は中国を国際協調のワク組みに引き込むのに役立つはずだ。伝えられる中国内部の保守、改革両派の争いも改革・開放路線を進めることでは一致しており、路線の変更は考えられない。

天皇訪中をめぐって故意に国論を二分させるような動きが自民党内に見られるのは残念だ。自重を促したい。

韓国からも天皇訪問の招請があるが、当面は、国交正常化二十周年を迎える中国を先にするのが妥当であろう。

5/25

万里委員長 きょう来日

A3

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長（日本では国会議長に当たる）が二十五日、衆参両院議長の招きで来日する。今秋の日中国交正常化二十周年を記念する要人交流の一環で、中国側からは四月の江沢民・共産党総書記に続く要人訪問。六月一日までの滞在中、天皇陛下と会見し、宮沢喜一首相と会談する。

中国核実験を ロシアが批判

M7

【モスクワ23日共同】二十三日のロシア通信によると、ロシア外務省は中国が今月二十一日実施した大規模な地下核実験について「国際情勢の好転や軍拡競争の抑制を非常に困難にする」と批判する声明を発表した。

声明は、この核爆発の規模が米国と旧ソ連が七四年以来守ってきた百五十キロトン規模と比べた違いに大きいと指摘した。

広東省で売春婦7千人摘発

A5

【北京支局24日】中国広東省で、4月初めから5月中旬までに、売春の一斉摘発が行われ、7000余人の売春婦が検挙された。中国新聞社電によると、売春は省都広州や深圳などのホテルや理髪店などが舞台となっている、という。

◇新華社香港支社長に交代の観測　実質的な在香港中国大使館である新華社香港分社の支社長が交代するとの観測が流れている。香港の華字紙「信報」によると、外交部出身の周南支社長に代わり、中国共産党中央委員会に直結した許家屯元支社長クラスの人物が起用される可能性があるという。NK 9

婦人用セーター生産 伊藤忠と中国で合弁

NK15

ニット船富（本社大阪府高石市、社長船富岸太郎氏）は慢性的な従業員不足に対応するため伊藤忠商事、中国江蘇省の南通市と合弁で中国にニット会社を設立した。新会社は「南通船富時装有限公司」。

本社は南通市に置き、資本金は五十五万ドル。出資比率はニット船富が六〇％、伊藤忠三〇％、南通市経済技術開発区総公司一〇％で、社長（総経理）にはニット船富の船富雄三専務が就任した。同公司が賃貸用に整備した工場（延べ床面積二千七百平方㍍）を使い、十月から操業する。

国内では加工賃が高く、採算が合わない婦人用の刺しゅう入りセーターなどを中心に初年度は七万五千枚生産する。原料のニット糸や編み機などは日本から持ち込む。

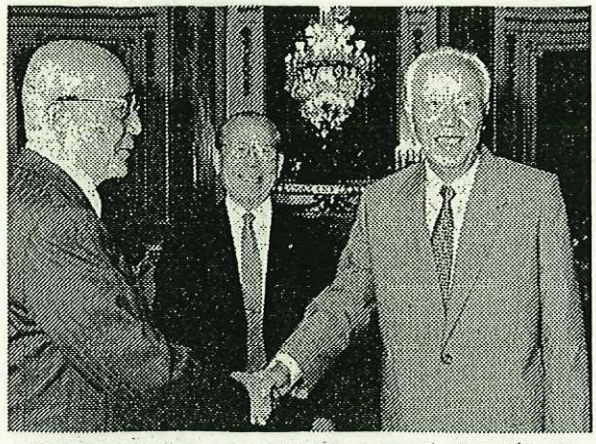
中国全人代委員長 万里氏きょう来日

NK2

中国の全国人民代表大会（全人代）の万里常務委員長が二十五日、来日する。国交正常化二十周年記念の要人往来の一環。

渡辺大臣官房審議官での発言

5/25



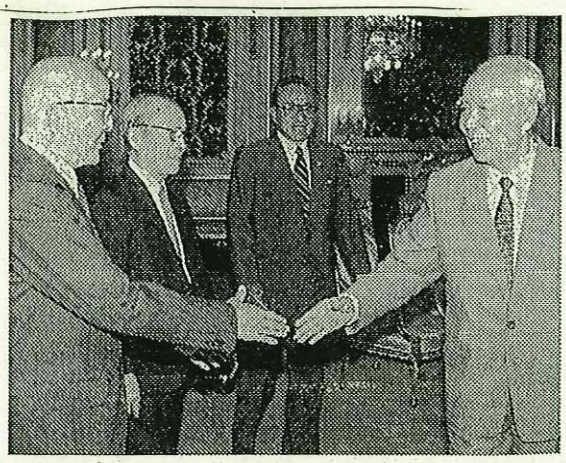
桜内衆議院議長と握手を交わす万里・中国全人代常務委員長（右）。中央は長田参議院議長
＝25日午後３時すぎ、東京・元赤坂の迎賓館で

5/26 A2

万里委員長が来日
歓迎夕食会に臨む

中国の万里・全人代常務委員長（国会議長）が二十五日午後、特別機で羽田に到着した。今秋の日中国交正常化二十周年を記念する要人交流の一環として、衆参両院議長の招きで来日した。万里委員長は同日夕、東京・元赤坂の迎賓館で開かれた衆参両院議長主催の歓迎夕食会に臨んだ。

六月一日まで滞在する。



25日、来日した万里氏㊨を表敬訪問する（左から）桜内衆院、長田参院両議長（迎賓館で）

万里中国全人代常務委員長が来日

5/26 Y1

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日午後、羽田着の特別機で来日した。衆参両院議長の招きによるもので、日中国交正常化二十周年を記念する要人往来の一環。

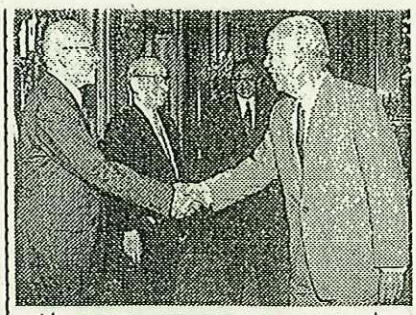
二十六日には天皇陛下と会見するほか、宮沢首相、渡辺美智雄外相、桜内義雄、長田裕二衆参両院議長らと会談する予定。

両院議長に訪中を招請

Y1 5/26

桜内義雄衆院議長と長田裕二参院議長は二十五日、来日した中国の万里・全国人民代表大会常務委員長を東京・元赤坂の迎賓館に訪ね、歓迎のあいさつをした。

この中で万里氏は、「（桜内、長田）両院議長の中国公式訪問を招請したい」と述べるとともに、「日中友好関係は大変重要であり、この関係を発展させることがアジア・太平洋地域だけでなく世界に貢献することになる」と強調した。



桜内衆院議長㊨と握手を交わす万里氏（迎賓館で）

5/26

万里氏が来日 きょう首相と会談

NK2

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日午後、羽田着の特別機で来日した。衆参両院議長の招きによるもので、六月一日まで滞在する。

二十六日には天皇陛下と会見、宮沢首相、渡辺外相とも会談する。今秋の日中国交正常化二十周年を記念しての要人往来の一環で二十八日からは札幌、高松、大阪など地方都市を順次訪れる。これに先立ち、万里氏は二十五日、東京・元赤坂の迎賓館で桜内、長田衆参両院議長とあいさつを交わした中で、両議長の訪中を正式に招請した。

往来

万里全人代委員長来日

中国の万里・全人代常務委員会委員長は25日午後1時半すぎ、羽田空港着の特別機で来日、午後3時から東京・元赤坂の迎賓館で招待者の桜内、長田衆参両院議長の歓迎あいさつを受けた。

5/26 M2

5/26 S2

万里常務委員長が来日

5/26

中国の万里・全国人民代表大会常務委員長が二十五日午後、羽田着の特別機で来日した。衆参両院議長の招きによるもので、六月一日まで滞在する。

万里氏は東京・元赤坂の迎賓館で桜内、長田衆参両院議長とあいさつを交わした中で、両議長の訪中を正式に招請した。

万里氏はさらに「中日友好関係を大変重要に思っている。この関係を発展させることがアジア・太平洋地域だけでなく、世界に貢献することになる」と述べた。桜内氏はこれに同意するとともに、訪中招請に謝意を表明した。

天皇訪中へ外相意欲

渡辺外相は二十五日夜、宇都宮市内での講演で日中関係に言及、「中国との問題というのは、米国との問題に次いで非常に重要だ」と述べ、間接的表現ながら、日中国交正常化二十周年を記念した天皇陛下の年内訪中実現に意欲を示した。

5/26

中国関係報道ふ

full 天皇訪中

25AB38
J5A631 AB38 政 307 16行
〔AB37「〝牛歩〟…」関連〕

◎天皇訪中実現に意欲―外相

渡辺外相は二十五日夜、宇都宮市内での講演で日中関係に言及、「中国との問題というのは、米国との問題に次いで非常に重要だ」と述べ、間接的表現ながら、日中国交正常化二十周年を記念した天皇陛下の年内訪中実現に意欲を示した。

外相はさらに「小さな問題で日中関係をぶち壊してしまうのは愚の骨頂だ」とも述べ、中国が領海法で尖閣諸島の領有を宣言したことなどを理由に天皇訪中に反対する動きを暗に批判した。（了）

25-22:11

岐阜新聞報道（5/4、5/5付）

（5/7 露クラブ 松崎支局長宛 より入手）

天皇訪中への道

…上…

自民に広がる慎重論

尖閣、賠償など政治利用警戒

日中国交正常化二十周年のことし、中国政府の招請にこたえて天皇陛下の訪中を実現させるかどうか、政府の決断が延び延びとなっている。二十五日に来日する中国全国人民代表大会の万里委員長に対しても、歯切れのいい返答は期待できそうにない。政府の「迷い」の底流を探った。

「陛下の話は恐れ多くて出るわけがない」―。十九日昼、宮沢首相との一時間半に及ぶ会談を終えた竹下元首相は「天皇訪中の話は？」と詰みかける記者団の質問をぴしゃりと封じた。

竹下氏も口を閉ざす

竹下氏は五月六日から八日まで中国を訪れ江沢民・共産党総書記ら中国要人と会談した。八千百億円の第三次円借款をまとめた同氏に対する中国側の信頼は絶大。天皇訪中問題で中国側の感触を持ち帰ったのではないか、という憶測が出たとしても不思議ではない。

しかし「口にすること自体、切腹に値する」と神経過敏ともいえる竹下氏の反応にみられるように、同氏周辺からもこの問題をめぐる話は一切漏れていない。

竹下氏の直後に訪中した海部前首相の場合も同じだ。天安門事件の後遺症で国際的に孤立していた中国に昨年八月訪問、今回は「新しく井戸を掘った人」と中国側の厚遇を受けたというが「天皇の話は全くなかった」と口を閉ざす。

中国側の動きを警戒

天皇訪中の実現に期待を寄せる人々の沈黙と対照的に、自民党の一年生議員が「天皇訪中は時期尚早」と綿貫幹事長に申し入れるなど、反対論、慎重論の根は党内に深く張りつつある。

「中国との関係は大事だ。しかし日中間に尖閣諸島の問題などハードルがあるのに陛下を訪中させようとしているのは、安易すぎる。中国の改革路線への支援は政府がやることで、天皇を利用すべきではない」

若手の反対運動を引っ張る衛藤晟一氏（大分一区）は「天皇は政治に不介入という憲法を政府はちゃんと理解しているのか」とまで言いながら政府批判を展開する。

政府は新年早々の渡辺外相の訪中で「今年秋の天皇訪中」の路線をしいた。これにブレーキを掛けたのは、自民党総務会での藤尾元文相らの発言。当初は党内タカ派の異論にすぎなかったが、尖閣諸島の領有権明記や日本の中国侵略に対する民間賠償請求など中国側の動きが党内の慎重論に火をつけた。

米国への気兼ね示唆

超党派の日中友好議連（伊東正義会長）の議論でも、野党議員から慎重論が出ている。日中国交正常化に先べんをつけた公明党だが、遠藤国際局長は「日中関係の大局からみれば行くべきだというのが党内の空気だ。天皇のことは軽々に発言できない面もあるが、あえて黙っているわけではない」と言うものの、同党に「天皇訪中」を積極的に後押ししようとする雰囲気は感じられない。

経済界もさめている。今月八日、自民党首脳との定例朝食会の席上、日商の石川六郎会頭は「中国の政治情勢は安定していない。陛下の訪中に失敗は許せない」と政府、自民党にクギを刺し、平岩外四経団連会長も「党内が割れているようでは難しいでしょうな」と同調した。

経済さえしっかりやっていれば日中関係は問題ないとの判断がのぞくと同時に、中国との関係改善に足踏みする米国への気兼ねをうかがわせるものだった。

こうした状況を踏まえ宮沢首相の側近でもある林義郎日中友好議連幹事長は、万里氏の来日を前に「タイムリミットがすぐ来るわけではないので慎重に検討してはどうか」と進言せざるを得なかった。



天皇として初外遊となった東南アジア３カ国歴訪での両陛下＝91年10月１日、クアラルンプール

92.5.24 岐阜新聞（朝刊）②

天皇訪中への道

…下…

アジア重視外交の柱
外務省は強気
首相決断待ち

「外務省はあきらめていません。一カ月もあれば準備はできる」―。自民党を中心とする慎重論の合唱にもかかわらず、天皇訪中の旗振り役である外務省は、推進姿勢を崩していない。

「訪中賛成七五%、反対五%、不明二〇%」

この数字が外務省の強気を支える。今年四月、総理府がひそかに実施した天皇訪中をめぐる世論調査の結果だ。「国論を二分してまで陛下に行っていただくつもりはないが、自民党の反対論を国論とみるかどうかだ」と宮沢首相に近い政府筋は言う。

外相、珍しく口堅く

ただ、渡辺外相が「今は静かにしていることだ。一切ノーコメント」と珍しく口を固く閉ざしているのをはじめ、政府は当面、党内の反対論議の沈静化を待つ構えである。

符節を合わせるように中国政府もこのところ静観姿勢が目立つ。今月十二日、銭其琛外相は「日本国内で天皇訪中についていろんな意見があることは知っている。各種の論争を起こさないためにも中国側は意見を発表しない方がいいと思う」と日本からの訪問団に述べた。

漢詩に託して不快感

日本の国連平和維持活動（PKO）協力法案に対する中国側の論評も竹下元首相の訪中前ごろから、ぴたりとやんでいる。

四月の来日時に、期待に反して「天皇訪中受諾」の返事を得られなかった江沢民・中国共産党総書記は、宮中での昼食会の席上、隣の渡辺外相に漢詩に託して「不快感」を示したが、いまだに立っていた中曽根元首相に要請してきて、断ったときの反動は大変だ。経済界が楽観するほど日中関係は不動ではない」（政府筋）との懸念が働いたとみることができる。

断念時の反動を懸念

こうした中国側の姿勢の変化は、自民党内にも微妙な影響を与え始めている。首相経験者で慎重論の先頭に立っていた中曽根元首相は「お互いが情熱を持って日中友好の基礎を、もう一度エンジンをふかしてつくらなくてはいけない」と党の総意を条件にしながらも、天皇訪中実現へとかじを切りつつある。

「これだけ中国側が謙虚に下手に出てきて、断ったときの反動は大変だ。経済界が楽観するほど日中関係は不動ではない」（政府筋）との懸念が働いたとみることができる。

宮内庁は訪中を前提にこととしの天皇外遊を組み立てており、仮に中止となれば年内の他の外遊はなくなるという。天皇陛下は記者会見で、ハゼの研究で中国の研究者の協力にわざわざ言及するなど訪中に強い期待をにじませたことがある。

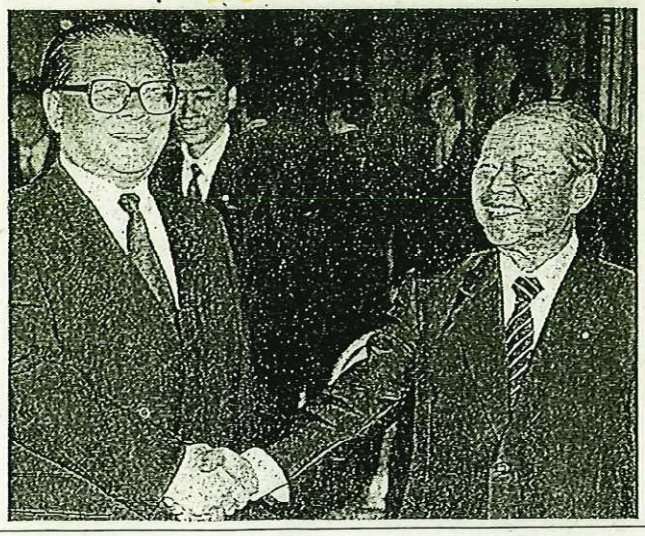
「あとは総理がすぱっと決めなきゃ」と宮沢首相を支える自民党竹下派幹部の一人が言い切るように、残されているのは首相の決断だ。

今度逃せば10年ない

首相は二十一日、「二十一世紀のアジア・太平洋と日本を考える懇談会」（座長・石川忠雄慶応義塾塾長）をスタートさせた。首相の「アジア重視の外交」を具体化し「過去」の総決算とともに「将来」戦略を練る。対中外交方針はその重要な柱となるはずだ。

自民党内の天皇訪中反対論の中には「いまは友好一色かもしれないが、中国とはいずれアジアでの覇権を争う関係になることも考えるべきだ」（外交・国防部会関係者）と「力の外交」の視点もある。

「今度のチャンスを逃せば、陛下の訪中は十年ない」（首相周辺）との判断に立って、首相が天皇訪中への「道」をどう地ならしするか、二十一世紀のアジア外交の基調をも左右する重い決断となるのは間違いない。



ことし4月に来日した江沢民・中国共産党総書記との会談を前に握手する宮沢首相＝92年4月6日、東京・元赤坂の迎賓館

92.5.24 岐阜新聞（朝刊）②

5/26付朝日新聞への投書

5/26 (夕) T11

外出禁止、罰金も

クラブのママ殺人 パスポート一部、偽造

東京都葛飾区新小岩のクラブ経営者楊桂華さん(三五)が二十一日、刺殺された事件で、本田署捜査本部に逮捕された六人のタイ人ホステスらの供述から、小遣い程度の金しかもらえなかったうえ、無断外出も禁じられ、不満がたまり計画的に犯行に及んでいたことが、二十六日までに分かった。

これまでの調べによると、楊さんが経営するクラブには十二人のタイ人ホステスが働いていたが、いずれも昨年十月から十二月にかけて、「日本は金になる」とブローカーに誘われて来日。クラブに勤めたが、パスポートを取り上げられていた。

ホステスは江戸川区内の寮と店をワゴン車で送迎される毎日で、「オーバーステイだから」と、外出を禁じられ、違反すると罰金を取られていたという。

給料についても楊さんから「来日に際し、ブローカーの手数料や、渡航費用として、一人当たり二百万円ほどかかっている」といわれ、実際には毎月小遣い銭程度しか渡されず、反抗すると、暴力を振るわれることもあったという。不満が高まり、六人で殺害前日、犯行を相談した、と供述している。

犯行後、楊さんが管理していた十二人分のパスポートを取り返していたが、一部は偽造だった。また、一緒の寮にいたほかのタイ人ホステスは、事件後、行方不明になっている。

5/26 夕刊
中国関係
報道ふり

天皇のご訪中 時機を考えて

帯広市 浜辺 賢一 (情報処理技術者 55歳)

5/26 (夕) A15

日中国交正常化二十年で、天皇陛下のご訪中が論議されているが、三年前の、あの天安門の弾圧で犠牲者の血に染まった地で、当時、無慈悲な発砲を命じた指導者たちと陛下が握手させられる姿など見たくはない。中国の心ある人々は、謀な企てを追認することになった。歴史上、天皇制は、その永続性に価値があるのだから、一時の権力者の意向に左右されずに、少なくとも一世代くらいの期間に通用する正義・人道にかなった判断をなさっていただきたい。

現在の国民は、自らの意思と責任を持つ憲法上の主権者だから、国際情勢のために天皇が特別お骨折りされる必要はない。仮にご訪中の中止で、日中関係が緊張しても、国民は十分耐えられると思うし、耐えるべきである。

もし、過去の戦争で中国の人々を苦しめたことが、わが国の負い目になっているならば、その償いとしては、例えば、中国人労働者を公に受け入れるような実質的な方策をとるべきであろう。

儀礼としての訪中実現望む

小牧市 百瀬 正昭 (団体職員 61歳)

二十、二十一日の本紙「どうなる天皇訪中」と「『友好の象徴』としての訪中を」の社説を読んで、なお日中関係の歩みの遅々たること、ため息が出る。

天皇訪中に「切っても切れぬ政治色」の影がつきまとっているとは思う。しかし、その「切れぬ政治色」を脱色させることこそ大切だ。

天皇は「国と国民統合の象徴」という現憲法の規定には、旧憲法時代の絶対君主、天皇の持った権力性は消えている。つまり、従来の「元首」とは異なるという基本認識に日中双方が立つことが必要だろう。

象徴的代表である天皇を元首と考えると、そこから「アジアの安定に寄与」という過剰な期待、思い込みが生まれる。それが他方、「政治不介入に背く」ことたとされ「政治利用反対」という別の過剰な反応を生んでいる。天皇訪中に過大な意味を与えず、政治利用という反対論も筋違いと考える私は、国交正常化二十周年を記念する、外交儀礼としての天皇訪中実現を望むだけである。

環境問題で協力要請

5/26 (夕) NK3

万里氏、両院議長と会談

中国の万里全国人民代表大会(全人代、国会に相当)常務委員長は二十六日午前、国会内に桜内衆院議長、長田参院議長を相次いで訪問し、両議長の訪中を正式に招請した。同委員長は桜内議長に「日中の友好を深めることは大変意義のあることだ」と友好関係を進展させる必要性を強調。環境問題にも触れ「中国は石炭エネルギーの使用量が多い。日本はこの面での技術が発展しているので、ぜひ技術協力をしてもらいたい」として日本の支援を要請した。

長田議長には「中国が経済発展を速めようとしていることも両国の友好協力に有利な条件を提供するだろう」と指摘した。

10

file 天皇訪中

天皇ご訪中で友好深めたい

5/27 A15 東京都 孫 楊絨（留学生 24歳）

日中国交正常化二十周年の今年、天皇陛下の中国ご訪問は、中国にとって一番重要な行事として期待されている。

先月訪日した中国共産党の江沢民総書記が今秋を中国ご訪問の時期として提案した。二十五日に訪日した全国人民代表大会の万里常務委員長もこの問題に言及することが予想できる。

日中両国は二千年以上、交流の歴史を持っているが必ずしも、いつも友好的な関係を保ってきたとはいえない。特にこの百年を振り返って見ると、本当の友好関係があったのは最近の二十年しかない。

私は南京市の出身だから、同市にある「南京大虐殺記念館」を何回も見学した。無残な遺骨を見るたびに、ショックを受けるのはもちろんだが、今後こういう不幸な事件を二度と起こさないようにと祈る。

最近、自民党内で天皇陛下のご訪問に対して慎重あるいは反対の意見がある。その理由は、天皇は国家のシンボルであり、政治に参与しないから、ご訪問が中国政府に利用され、政治活動になる恐れがある、というものである。

しかし、天皇陛下の中国へのご訪問を通じて、日中友好関係が強化され、日本の中国市場進出の拡大とともに、中国経済が日本の資金援助で発展できれば、日中両国はもちろん、アジア、世界を安定させる要素になるだろう。

万里常務委員長 中国ご訪問にふれず

5/27 天皇陛下ご会見

天皇陛下は二十六日午後、国会の賓客として来日中の中国の万里・全国人民代表大会（全人代）常務委員長を皇居に招かれ、宮殿の正殿「竹の間」でお会いになった。

今秋の国交回復二十周年に合わせた陛下の中国ご訪問が日中間の懸案となっているが、万里氏はこの問題について特に言及しなかったという。

同席した宮内庁の角谷清・式部官長によると、万里氏は楊尚昆・国家主席、江沢民・中国共産党総書記から陛下への「よろしく」というあいさつの後、「国交回復二十周年の年に訪日できありがたい。この訪問が中日両国の友好に役立つことを願っています」と話した。これに対し陛下は「国交回復二十周年を機に、両国の友好関係がさらに進むことを願っています」と述べられた。5/28

改革への協力要請

5/27 Y1 万里氏、宮沢首相と会談



宮沢首相（右）を表敬訪問し、会談する万里中国全人代常務委員長＝首相官邸で

宮沢首相は二十六日、首相官邸で、来日中の中国の万里・全国人民代表大会常務委員長と約一時間、会談した。宮沢首相と万里氏は、日中の友好関係が、「世界の平和と安定に寄与している」との認識で一致した。

万里氏が、中国の進める改革・開放政策について、「百年は変更しない」と述べるとともに、科学技術、企業管理などの面で日本の協力を要請。首相は、「（中国の）近代化は健全な歩みで進行している、と評価している」と応じ、農村改革や、日本企業の対中投資促進のための環境作りに努力する意向を明らかにした。

また、宮沢首相は、米中の関係改善に向けての中国の努力を求めた。これに対して万里氏は、「良好な米中関係」の重要性を認めながら、「米国の内政干渉は受け入れられない」と、中国の人権、武器輸出問題などに関する米国の姿勢を暗に批判した。

政治的になる恐れが十分に

5/27 仙台市 藤永 剛志（会社員 57歳）

二十一日の社説は、天皇陛下のご訪中実現に向けて、宮沢首相の決断を促している。中国を例外にする理由はないし、基本的には「友好の象徴」として望ましいだろう。

ただし社説が指摘するように「中国は天皇に政治的な役割を期待」しているか否かの見極めが、その前提である。

国交正常化以後の両国関係は、端的にいって、一方はことあるごとに「過去」を問い、他方は経済協力でこれにこたえるという片務的なものに見える。友好条約が定めた相互不干渉、平等、互恵の精神には遠いといえよう。A15

そこに見え隠れするのは「不幸な過去」を背景に、我が国の持続的な経済、技術協力を期待するという中国流の「友好」である。

これが、もし対日戦略であるなら、陛下のご訪中をもってしても、過去の不幸な関係の清算は期待できない。中国が国益上有効な、このカードを手放すはずはないからである。

たび重なるご訪中招請も、この戦略に基づき、中国にとって侵略の象徴である天皇に、直接「過去」の認知を求めるものではないか。

「好々」一辺倒では、すぐれて政治的なご訪中に終わるだろう。

5/27付 アサヒ・イヴニング・ニュース（評論）

LDP Should Consider Emperor's Visit to China

By Tatsuro Iwamura
Asahi Shimbun Editorial Writer

Prime Minister Kiichi Miyazawa is faced with the difficult task of deciding whether or not to have the Emperor visit China this fall to commemorate the 20th anniversary of the normalization of diplomatic relations between Japan and China.

The subject has been a long-pending issue between the two nations and Miyazawa must either comply with China's strong request for the visit or decide against it, at least for the time being, taking into consideration opposing and circumspective views held by some members of his Liberal Democratic Party.

I believe the prime minister should decide on having the Emperor visit China. This is because it is not desirable to turn the question of whether the Emperor should or should not visit China itself into a diplomatic issue from the point of view of establishing a stable, long-lasting relationship with the country.

With the time needed on both sides to prepare for the Emperor's visit in September, which marks the 20th anniversary of the normalization of diplomatic relations, Miyazawa is expected to make the decision this week, as Wan Li, chairman of the National People's Congress, China's Parliament, is visiting Tokyo. There's little time left to consider the matter.

China has repeatedly invited the Emperor to visit the country. It hopes to realize mutual visits by the supreme leaders of both countries to mark the 20th anniversary, upgrading the level of mutual visits of high-ranking officials and showing the world the firm Japan-China friendship. It hopes, therefore, to invite the Emperor to Beijing and, in return, plans to have President Yang Shangkun visit Tokyo.

China asked for the Emperor's visit in April 1989, just before the outbreak of the military crackdown on pro-democracy activists in Tiananmen Square. Premier Li Peng, who was visiting Tokyo at the time, brought up the subject with then-Prime Minister Toshiki Kaifu, who replied, "We will consider the matter with pleasure."

But the Tiananmen Square incident led Japan to withhold visits to China by government officials for some time. At the 1990 summit of the seven Western industrialized countries held in Houston, Kaifu advocated a step-by-step lifting of economic sanctions against China by Western states. In 1991 he visited Beijing himself,

'92, 5. 27
Opinion Pg
ASAHI
EVENING
NEWS

prior to visits by British Prime Minister John Major and Italian Prime Minister Giulio Andreotti, taking the initiative to improve relations with China after Tiananmen Square.

Since Western countries did not express opposing views against Japan's move, the Miyazawa administration took a positive attitude to materialize the Emperor's visit to China. And in the spring Foreign Minister Michio Watanabe told China that the government would seriously consider realization of the Emperor's visit to China.

But right after that it was revealed that China had spelled out the Senkaku Islands, which lie south of Okinawa, Japan's southernmost prefecture, as its own in its newly established law concerning territorial waters. Japan has maintained its sovereignty over the islands.

In addition, the move within China to collect signatures to demand reparations for the Japanese invasion of China in World War II and the repeated requests by China for Japan to be cautious about a move that could lead to the dispatch of Japanese forces overseas, referring to the U.N. peacekeeping operations bill that has been deliberated in the Diet, have, together with China's move on the Senkaku Islands, caused some members of the LDP to oppose the Emperor's visit to China.

The LDP General Council, which is the organ to decide party policies, has met several times to discuss the issue, and its chairman Koko Sato has advised Miyazawa that the problem of the Emperor's China visit needs some more consideration with circumspection.

At the root of such an assertion by LDP members lies the wariness that the Emperor's visit to China could lead to a situation in which China may demand that the Emperor apologize for Japan's invasion in the past.

Japan's Constitution spells out clearly that the Emperor has nothing to do with politics. The LDP members maintain that if the Emperor is asked to comment on war responsibilities and he answers in any way, it would be a way to use him politically.

Frankly speaking, I believe the late Emperor Hirohito, posthumously known as Emperor Showa, who was the supreme leader of Japan up to the end of World War II, should have apologized as a person for war responsibilities and the invasion when he was alive.

When Deng Xiaoping, who was then deputy prime minister of China, visited Japan in 1978, Emperor Showa said that "an unhappy era once existed between Japan and China in the past." But if he had gone on further to make such a statement as, "I am truly sorry. I can't die in peace without making an apology," when he was still alive, it would not have been necessary for Japan to be on the defensive about how China would broach the subject on the occasion of the Emperor's visit to China.

But, unfortunately, Emperor Showa died without speaking out his true feelings. And Emperor Akihito is being asked to make up for what his father never got around to.

Japan's Constitution describes the Emperor as "the symbol of the unity of the people" and not the head of state. Since he holds the position of the symbol of the unity of the people, who have different opinions, there is a limit to what he can say, and much more so when it comes to political problems.

But whether or not to make frank apologies to China, South Korea and other countries that were victims of Japan's aggressive acts in the past is a humanitarian question that transcends politics.

And if so, to realize the Emperor's visit to China this fall on the occasion the 20th anniversary of normalized relations between Japan and China, complying with China's strong request, and to have him speak in his own words about the past and future relations between Japan and China would no doubt be to the benefit of a long-lasting future relationship between the two countries, but never to its disadvantage.

I believe the LDP should consider the Emperor's visit to China from such a broad outlook and hope that Prime Minister Miyazawa will arrive at a wise decision.

—Asahi News Service

2/2

5/8付 日経新聞（朝刊） 社説

社説

自然体の陛下の中国訪問を期待する

若葉がもえる美しい日本に、中国全国人民代表大会の万里常務委員長が訪れている。今年が日中国交正常化二十周年に当たるのを機会に、両国の相互理解を深めようと合意した要人による相互訪問の一環である。われわれはこの際、万里委員長が自分の目で見た日本の国情を中国の大衆に伝達されることを切に望みたい。

現在、日中両国間には緊急に解決を必要とする懸案はほとんどない。だが、この中国要人の訪問をめぐって何か「奥歯に物のはさまった」ような違和感がただよっている。両国政府の意識の底に、最大の懸案である天皇陛下の中国ご訪問問題が、どっしりと腰を下ろしているからだ。宮沢首相との会談の場でもこの問題について双方は言及しなかったという。

日本国内には依然、陛下のご訪中をめぐって賛否両論がある。反対論は、日本の国連平和維持活動（PKO）をめぐる中国側の「敏感な問題」という姿勢、日中間の過去の歴史に関するこだわり、西側先進諸国が追及する人権問題、さらには天皇訪中が政治的に利用されるのではとの懸念などが背景になっている。

しかし、本紙の政治コラム「風見鶏」も指摘しているように、反対論の理由は賛成論の理由にもなる。PKOに対する中国の懸念は、過去の日本軍部の中国侵略が温床になっており、陛下のご訪中は中国のわだかまりを払しょくする好機にもなる。賛成論、反対論は一枚のコインの表裏の関係にある。

われわれはあえて天皇陛下のご訪中を期待する。日本国憲法の規定から言っても、陛下を政治的な思惑に巻き込んではならないことは自明の理である。

だが、人間が直接関与するこの世の中に、建前はともかく政治的な思惑から純粋に隔絶された真空地帯があるだろうか。陛下のご訪中問題をめぐって人間ができることは、力の限りを尽くして政治的な思惑を脱色する作業だけである。これが宮沢内閣に課せられた責務である。

中国側は根回しの段階から「天皇陛下の訪中について、日本側を困らせるようなことはしない」ことを繰り返し伝えている。現段階で言えることは、宮沢首相は自ら中国首脳との間で万全の意思疎通の道を確保すると同時に、人権問題に厳しい米欧各国に「日本が突出するわけではない」旨の理解を求めたうえで決断を下すことである。警護その他の点からも時間のゆとりはそれほど残されてはいない。

われわれが天皇陛下のご訪中を期待するのは、賢明なお人柄に信を寄せているからである。昨年夏のテレビ放映を思い起こして欲しい。島原の普賢岳噴火による被災者を見舞われた時、腕まくりしたワイシャツ姿で床に両ひざをつき、目線を合わせて慰問された。新しい陛下像がここにあったように思われる。

ご訪中の問題は日本側の問題である。日本政府の決断にかかっているが、中国訪問が仮に決まれば、国民は静かに見守りたい。〝雑音〟は自然体の陛下を損なうだけである。

日本經濟新聞
1992年(平成4年)5月28日(木曜日)

高橋RP次長論文（MRI中国特集5月号）

RP 高橋淀論文

MACRO－WATCHING

4月の中国動向

◆李鵬報告報道の誤り◆

第7期全国人民代表大会第5回会議が政府活動報告、三峡工事、全人代・地方人代代表法、工会法、婦女権益保障法などを採択・決定して3日に閉幕した。政府活動報告の内容および三峡工事などについては、すでに各方面で論じられているのでここでは割愛し、歪んで報道された李鵬報告の修正問題について先月述べたところを補強しておく。政府活動報告は大会で修正を加えられるのが当然なのである。毎年、大会で修正が加えられている。例えば、89年に趙紫陽の行った活動報告は、人大代表の意見と提案に基づいて 100余個所を修正された。88年にも同様に 100余個所。86年には趙紫陽総理が行った第7次5カ年計画に関する報告に重要な修正を8カ所行っている。決して李鵬批判云々といったものではない。

三峡ダム関連では、工事は国務院が適当な時期を判断して開始することになっているが、国務院は今年三峡ダム水没区の住民移住費として3億元の支出を決定した。さらに同工事の準備工作としてすでに道路・供水パイプ・送電線・通信ラインなどの建設を1984年から始めていたと報道している。ここから見て、昨年の水害に伴う一連の対策工事が一応目処のついた時期で、意外に早く着工となる可能性がある。

◆改革深化・開放拡大の熱気◆

鄧小平の南方巡視談話の効果は、4月も継続して、各地で改革と開放テンポを早める措置が次々に発表されている。中でも、海南省は洋浦経済開発区で封鎖式の隔離管理と自由港式の各種政策・措置を実行すると宣言した。これは実質的にかつての「租界」である（中国側の説明では主権を中国が掌握している点が異なるが）。洋浦の開発は香港の熊谷組の請け負いとなっているが、最終的には資金および危険負担の面を考慮して数社あるいは数カ国の共同事業となろう。洋浦経済開発区の構想は89年当時「祖国を外国に売り渡す行為」だとされ、その推進者が「売国奴」と罵倒された。変化の早さに改めて驚きを禁じえない。

また、開放政策の関連では小売商業、運輸、コンサルタントなどの分野も開放して外資投資を認める方針だと伝えられる。ヤオハンの浦東進出に続き、北京・天津・広州・深圳でも外資経営スーパーの進出を受入れ準備中だという。

◆中国情勢の正しい読み方◆

日本各紙はまたまた保守派vs改革派論戦の空解釈をやっている。27日付『人民日報』（海外版は28日）掲載の論文「中華民族の偉大な壮志の実現のために――中国現代化発展戦略目標に関する鄧小平同志の思想を学習して」が改革開放路線への批判だという。しかし、筆者には特に注目する論文とも思われない。この論文ではブルジョア自由化反対を強調し、さらに中国を再び動揺させないため、学生の騒ぎを迅速かつ厳しく処理しなければならず、動乱の要素はその萌芽の状態でいかなる手段を用いても排除しなければならないという鄧小平の言葉を強調している。しかし、これは鄧小平の従来からの主張である。鄧小平は共産党の指導権を確保するために改革と開放を進めるのであって、党の指導権が脅かされる危険が生じた場合は、改革と開放を遅らせる、あるいは中止する方を何の躊躇もなく選択する。中国情勢の読み方における誤りは、鄧小平の改革・開放路線を中国の経済を発展させ、民主化を進めるためのものだと、一方的に解釈している点にある。もう一度繰り返すと鄧小平が改革・開放を促進して経済を発展させるのは、共産党の指導権を維持するためであり、それ以上でも、それ以下でもない。

◆第1四半期は輸入が急増◆

経済関連では欠損企業に対する厳しい処置を伝えたものが目立った。また今年第1四半期の経済は一般的に順調な伸びを示し、海関統計では同期の輸出入総額が 287.3億米ドル、輸入総額が23.5%増、137.6億米ドルと近年で最大の増加幅を示したことなどが伝えられた。

鄒家華副総理が広西自治区を視察した際、国務院関連部門が一部省・区と共に①長江沿岸地区、②珠江デルタ地帯、③環渤海地区、④西南・華南一部省・区、⑤西北地区、⑥中原地区、⑦東北地区の地域経済発展計画を重点的に研究中と表明したことは、今後の経済発展政策との絡みで注目されよう。

対外関係では3月に比較して外交活動の活発化が目立ったが、その理由としては先ず季節的なものがあり、次に旧ソ連諸国との関係強化、アジア周辺諸国との善隣外交の展開などが上げられる。

◆いまこそ天皇訪中の好機◆

対日関連も往来が増大した。中国側からは江沢民総書記の日本訪問が実現した。

日中間の問題としては天皇訪中問題が出ている。これは複雑な問題だが、現時点では天皇の訪中そのものに対する反対は少なく、その訪問時期に対して様々な注文が出されているようである。すなわち、中国側に政治的に利用されるとか、韓国訪問との関連などである。しかし、中世紀ならいざ知らず、国家元首の他国訪問に政治的な思惑が全くないということが、果たしてあり得るのか。中南米や大洋州の人口数万人といった小国でも、国連の一票を狙って工作の対象になる今日この頃である。相互の政治的な思惑の絡みの中で成立するのが外交であり、第一そうでなければ外交官などという専門家が不要になる。また、そのような思惑が全く無ければ他国の元首をわざわざ招待しないだろうし、訪問もしないだろう。

様々な思惑があるにせよ、中国側は天皇の訪中を強く希望している。日本側としては、天皇の訪中に戦後処理という両国間の不幸な事件の後始末問題があり、この不幸な側面をできる限り薄くする形で訪中を実現させるのがベターである。それならば、現時点での訪中が、日本側としてもベターということにならないか。

江沢民は日本側に天皇の訪中では決して不愉快な思いをさせないと述べた。日本と中国の間には、戦時中に日本軍が大陸に残した化学兵器の処理、戦地慰安婦の問題、さらに民間人に対する戦争賠償の問題など、様々な難問が存在するのも事実である。これらの問題は日中間に摩擦がなく、中国国内が安定し、経済が一応の発展を続けている間は出てくることが少なく、また出現したとしても中国政府によって簡単に抑えられるだろう。しかし、国内の対立が激化し、経済に不安が生じた時は、問題が顕在化するだけでなく、逆に大衆の不満の吐け口として時の政府に利用される可能性すらある。日本としては、訪問を成功裏に終わらせるためにこの訪問の時期について慎重に考慮すべきである。

矢吹晋横浜市大教授論文（MRC中国情報5月号）

日中友好の「思惑」と「ずれ」

天皇を「領導人」と見る総書記

横浜市立大学教授 矢吹 晋

江沢民総書記来日は、いま一つ盛り上がりに欠けるところがあった。その直後に来日したゴルビー人気と対照的である。金丸信狙撃事件の直後という事情もあって、警備の壁が厚く、率直な市民との対話を演出しにくかったことも確かである。しかし、最大の理由はやはり日中の思惑のスレ違いと、中国側の不透明な政治状況にあると思う。日中国交正常化20周年記念事業については、中国側の積極姿勢が目立っていた。江沢民が東京で天皇訪中を要請したのは9回目のもの、5月の万里全人代委員長来日で10回目の要請を行うといった類の言い方がその一例である。中国側が日中友好の発展のシンボルとして、天皇訪中にかける期待は理解できる（私自身の個人的な感想をいえば、条件をきちんと整えて今年訪中されるのが望ましいと判断している）。ただ、先方の積極姿勢が日本では逆に「天皇訪中を利用するもの」という反発を買って、微妙な成り行きになったことは周知の通りである。

一つ気づいたことがある。江沢民は出発前の4月1日記者会見で「天皇陛下、宮沢首相など日本指導者（原文＝領導人）と実り豊かな会見と会談を期待している」と述べた（『人民日報』92年4月3日）。天皇と首相を同格に並べ、「日本の指導者」とする位置づけには、大きな疑問が残る。新憲法に明記された「象徴天皇」という最も基本的な位置づけに対して、的確な理解を欠いているのではないか。

もう一つ例を挙げると、中日友好21世紀委員会の中国側首席委員張香山は、江沢民訪日に先だち、中共中央総書記が日本最高指導層（原文＝領導層）と国際新秩序、アジア太平洋地区情勢、中日関係の今後など重大問題について大所高所から意見を交換することの意義を強調したが、ここで「日本最高領導層」のなかに、天皇を含めているのではないか。

中国の皇帝と日本の天皇とを二重写しにしてはならない。天皇と皇帝の大きな違いについては、沈才彬『天皇と中国皇帝』（六興出版、1990年）のような専門書があるが、どれほど読まれているだろうか。さらに明治憲法における統帥権をもつ天皇と現行の象徴天皇の区別も重要である。この種の誤解を解くために、政府当局もマスコミも積極的に日本の事情を説明すべきである。

実は日本側にも誤解を増幅させるような態度がありはしないか。単に迎合して、先方の提案をそのまま実現することが友好だと考えるごとき、没主体的友好人士が一方にあり、他方、いくつかの理由から日中友好に反対、あるいは消極的なのだが、そうした感情から天皇訪中問題を利用する人々もあろう。「天皇を利用するな」と主張する人々の間で別な目的のための利用を意図することがなければ幸いである。

中国の若者の間での異常なほどの日本ブームはいぜん続き、ますます過熱気味。それが密航騒ぎの背景にある。過去数年、日本への出稼ぎを目指す就学生が激増した。確かに1カ月働いて1年分、1年働いて10年分の収入が得られるとすれば、どんな苦役をも我慢しようという若者が現れて当然である。賃金格差がこれだけ開くと、不法な密航が後を絶たないのも自然な成り行きである。加えて、留学生の半数が留学期間が過ぎても帰国しようとしないのも（日本経済にとってはさしあたり有用だが）、母国の経済発展にとって大いなる損失である。帰国しても技能、技術を活かせる職場がないというが、もう一つの理由が隠されている。西側の自由な雰囲気に慣れて、精神的自由の保障されない祖国を敬遠することである。

総理府の調査によると、日本人の「中国に対する親近観」は1980年の79％をピークに、89年からは50％台に低下し、91年は51％の最低を記録した。天安門事件、偽装難民問題、就学生をめぐるトラブルなどが、中国イメージに致命的といってよいほどの打撃を与えたことが分かる。親中国ムードは雲散霧消したかに見える。この中国冷えは特に若者の間で著しい。老世代の間には日中戦争への贖罪観や文化的親近観が残っているし、また産業界では具体的な経済交流が着実に進展し成果も上げているこというまでもない。ただ、21世紀の日中関係のような長期的視点から考えると、若者の中国離れ対策が必要と思われる。かつて胡耀邦来日の際に、日本青年3000人招請計画を打ち出し、大量の若者が中国を訪れた。これを機に日中関係の業務に従事したり、業務以外の場で友好に関わっている者も少なくないと聞く。この企画はそれまでの友好人士の訪中から、フツーの青年と中国人の接触に拡大した点で大きな意味があった。中国はいま国際情勢の激変、とりわけ旧ソ連解体以後の世界新秩序再編成に対して、いかなる対応をすべきか、その方向を模索中であるが、新しい明確な構図を描くに至っていない。対日政策の基本もいま一つはっきりしない。「政治大国容認、軍事大国反対」論あり、ＰＫＯ慎重論あり、親日論と反日論が交互に飛び交う観さえある。日本としては開放政策支援を意図した対中政策が肝要である。

宮沢発言(6/11)に対する党内の反応

政治ファイ

首相の前向き発言

PKOの次は天皇訪中

党内説得は竹下氏に要請

宮沢首相が、今秋の天皇訪中実現に向け動き始めた。十七日の首相発言は、国連平和維持活動（PKO）協力法の成立や衆参同日選回避など政局の〝重荷〟を下ろした首相が、本格的に動きだす姿勢を示したものとみられる。首相はすでに竹下元首相に党内説得を依頼。環境整備に乗り出しており、「顔が見えない」との批判に応えた動きとみられる。

首相は十八日、官邸を訪れた小和田外務事務次官に対し、「陛下に（中国に）おいでいただくことが望ましい」と述べた十七日の日本新聞協会総会での発言を改めて説明、天皇の訪中実現への強い意欲を重ねて示した。

首相は十八日の記者団とのやりとりでも「私はあのような考えだと述べました」と強調したが、同総会での首相発言は「用意したあいさつ文にはなく、質疑の中で突然に出た」（側近）もの。宮邸筋も「突然という感じでびっくりしている」との受け止め方だ。

首相周辺には「基本的には今までのスタンスだが、半歩踏み込んだかな、という感じ」という見方がある一方、「『（首相発言で）国民が祝福して』と言っているところが慎重部分」として従来と変化ないとの解説がある。

首相はこれまで天皇訪中問題について「真剣に検討している」と繰り返し述べるにとどまり、実現のための条件として「国民の祝福（理解）」を挙げてきた。また「民意がどういうものかを判断するのが私の仕事。党でも内閣でも材料を集めなければならない」と述べ、中国から帰国した竹下元首相との会談（五月十九日）などを通じて、実現の可能性を探ってきた。

関係者によると、竹下元首相との会談で宮沢首相は訪中実現への党内説得を要請したとされ、翌二十日には竹下元首相と金丸自民党副総裁が会い、その後、慎重論をぶっていた竹下派幹部が容認論に転換するといった動きも出ていた。

今回の発言は、自民党内に慎重論が残っていることを承知のうえで観測気球をあげるとともに、訪中実現に向けて努力を継続していきたいとの首相の意思が強く反映していると見られる。

そのきっかけがPKO法の成立だったわけで、側近も「ここにきて国内情勢が大きく変わったわけではないし、首相は実現に向け、半歩踏み込んだ」と説明している。

政府筋は訪中の時期について十月としており、決断にはまだ、時間があるものの「首相の発言は早すぎたかも」（首相側近）との声も出ており、きょう十九日に開かれる自民党総務会でどのような意見が出るかを注目している。

自民党 容認論広がりも

宮沢首相の天皇訪中発言で自民党内は十八日、訪中慎重論が再燃、一方で容認論もジワジワと広がる気配をみせ始めた。

最初に敏感に反応したのは原田憲衆院議員（竹下派）。同日、首相に「党内がせっかく宮沢氏を支援しようとしている時にこれを壊すようなことはすべきでない。慎重に対応すべきだ」と進言した。

また、藤尾元文相は同日の三塚派総会で、「天皇陛下を政治問題に介入させないのが憲法の精神だ。訪中すれば天皇陛下を政治利用したと言われても仕方ない。首相の責任は免れない」と、天皇訪中反対の考えを改めて表明。

しかし、慎重論が大勢だった党内世論には、微妙な変化も出始めている。これまで慎重論を唱えていた竹下派幹部も十八日、「宮沢さんが決断して、何があっても責任を取る気持ちならばいい」と述べ、竹下派の空気が変わり始めていることを裏付けた。

92.6.19 毎日朝 2面

（追加）

週明けに首相と党4役が協議

天皇訪中問題

綿貫自民党幹事長は十九日、宮沢首相の天皇訪中前向き発言に党内の反発が強まっていることを受け、二十二日に党四役が首相と緊急協議する方針を決めた。協議で綿貫氏らは、天皇訪中について慎重な対応を求めるものとみられる。また十九日、衛藤晟一氏ら若手自民党衆院議員七人が綿貫氏と首相に対し、天皇訪中反対を申し入れた。

これに対し首相は「機が熟すればというのが元々の考えだ。多数決で決めるべきものではない」と答えた。

一方、この日の総務会では藤尾正行氏が「天皇訪中を国民が祝福するという環境にない。党内も全員賛成という状況ではない」と慎重対応を求めるなど四氏が慎重・反対論を展開した。

毎日、(1)

6/19(夕刊)

中国関係報道抜粋

来週、首相と調整

天皇訪中 自民4役 反対論が相次ぎ

6/19(土)

東京(2)

宮沢首相が天皇訪中に積極姿勢を示したことに対する自民党内の反発が十九日さらに強まり、午前の総務会で藤尾元文相らが改めて首相を批判したのに続いて、昼前には三塚派を中心に若手議員が綿貫幹事長ら執行部に慎重対応を申し入れ、首相に①政治利用されない環境がどこまで整ったのか②中国の人権問題、武器輸出、尖閣諸島領有問題は改善の兆しをみせていると考えるのか――などの質問状を届けた。

党総務会では藤尾氏が「天皇の地位を政治目的に利用したと言われても仕方がなく、首相の責任は免れない。昭和天皇を傷つけることを誘発するのはもってのほかだ」などと、首相を厳しく批判。さらに、中尾前通産相や浜田党広報委員長らからも同様の発言が続いた。

このため、綿貫幹事長が「天皇訪中問題を含め、補正予算の規模などについて、来週に四役が首相と意見交換するので、その際に結論的なものを得たい」と提案、結果については改めて総務会に諮ることで了承された。

一方、三塚派などの若手衆院議員七人は綿貫幹事長に、中国が国連平和維持活動（PKO）協力法に懸念を示していることや、天安門広場での日本人記者連行などを取り上げて、天皇訪中に反対する考えを申し入れた。

これに対し、綿貫氏は「首相の発言は寝耳に水だった。私も慎重にすべきだと思っている」と答えた。

台湾の三越 定休日廃止

【台北19日＝上原記者】三越の台湾現地法人である新光三越百貨股份有限公司（本社台北市、董事長呉東興氏）の南京西路店（台北市）は七月から定休日を廃止する。昨年十月の開店時から水曜定休を導入、当初は台湾の百貨店初の試みとして注目された。しかし、消費者の不満が予想以上に大きく従業員の反応も芳しくなかったため、台湾の他の百貨店と同様、年中無休で営業する。

日経(5)

★天安門で亡命　中国公安当局は天安門事件に関与した「証明書」を偽造した18人を摘発。事件に参加していれば政治亡命しやすくなることに目をつけた犯罪という。（共同）

毎日(10)

天皇訪中問題 22日に協議

首相と自民四役

天皇陛下の訪中問題をめぐり、自民党内で十九日、慎重な対応を求める動きが相次いだ。この日の総務会では藤尾正行氏ら四人が「少なくとも国民が祝福する環境はできていない。党内も賛成という状況ではない」などとして慎重論や反対論を展開した。衛藤晟一氏ら若手議員七人も首相官邸に宮沢首相を訪ね、「国論が二つに分かれている時は、まだ慎重に対応すべきではないか」などと申し入れた。こうした動きを踏まえ、党四役と首相が二十二日に対応を協議することにした。

天皇訪中問題はこの日の党外交部会でも取り上げられたが、「慎重に対応すべきだ」とする意見の一方で、推進派からは「日本の国益、将来のことを考えて判断すべきだ」とする考えも示された。

参院選「比例順位」や天皇訪中問題協議へ

首相と自民四役

宮沢首相は来週早々にも自民党の綿貫幹事長ら党四役を首相官邸に呼び、参院選比例代表選の候補者名簿順位の問題や天皇訪中問題、補正予算案の規模などについて協議する。綿貫幹事長が十九日開かれた総務会で明らかにした。

天皇訪中問題は冷却期間を

政府首脳

政府首脳は十九日夕、宮沢首相が天皇陛下の中国訪問に積極姿勢を示したことに自民党内の反発が強まっていることについて「首相は国民が祝福する中、天皇訪中を実現したいと言ったのであって、今のように国内（の反対論が）がわぁーわぁーなっているのは、それとは違う」と述べ、国内に反対論が強い状況では、天皇訪中を決断するのは難しい、との認識を示した。

そのうえで「日中両国とも、まだしばらく冷却期間をおいてこの問題を考えた方がいい」と述べた。

「天皇訪中」反発相次ぐ

自民総務会

宮沢喜一首相が天皇訪中の実現に積極的な考えを表明したことが、十九日午前の自民党総務会で取り上げられ、「国民が訪中を祝福する環境がまだ整備されていない」（藤尾正行代議士）といった反発が相次いだ。綿貫民輔幹事長は二十二日に予定している党四役と首相との会談で訪中問題を取り上げる考えを表明した。

天皇訪中向け慎重派説得も

首相が意欲

宮沢首相は十九日、天皇陛下の中国訪問に関連し、「（訪中は）いろいろなお話を聞いて、皆さんが納得した形でね」と語り、訪中実現の前提として、自民党内などに根強い慎重論を説得する重要性を強調、自ら、これに乗り出す意向であることを示唆した。

6/20 中国関係

報道振り

中国党中央政治局

「左の防止」めぐり なお意見食い違う


喬石氏


宋平氏

【北京21日＝横堀克己】中国共産党の江沢民総書記が〝左〟を強く攻撃する「重要講話」を行った結果、共産党中央内部での意思統一がなされたかにみえたが、中国共産党の最高指導組織、党中央政治局の六人の常務委員の中で、「〝左〟の防止」をめぐって、なお意見の違いがあることが明らかとなってきた。

二十一日の新華社電によると、喬石・党政治局常務委員は二十日まで江蘇省を視察した際、「〝左〟（の存在）は抽象的ではなく、具体的、現実的なものである」と、強く〝左〟を攻撃した。さらに喬石氏は「思想を開放せず、〝左〟の影響の克服に注意しなければ、改革・開放はただの『空話』になってしまう」と述べた。

これに対し、同じ政治局常務委員の宋平・党組織部長は、十八日まで新疆を視察したが、中国の最高実力者、鄧小平氏の「講話」を「〝左〟の防止」には言及しなかった。そのうえ、幹部の選抜に関しては「徳才兼備（思想性と実務能力を兼ね備えること）を原則とする」という持論を展開、イデオロギー重視の姿勢を鮮明にした。

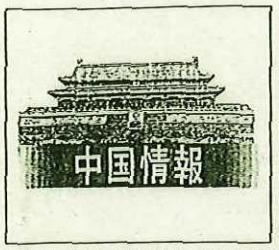
朱副首相に改善要求

東北視察で鄧小平氏

【瀋陽＝聯合報（台湾）特約】消息筋によると、現在、東北を視察中の鄧小平氏は遼寧省内の「三角債」（企業間の借金の付け回し）問題や工業製品在庫問題に強い関心を示し、同行している朱鎔基副首相に抜本的な改善を求めるとともに同省の大型重工業活性化を要求した。

鄧氏は今年上半期、「三角債」問題や工業製品の在庫問題に関し、同省は全国で最も事態が深刻な省の一つであると語った。さらに鄧氏は、大型企業を活性化し、社会主義の優越性を発揮させることによって、改革開放の先兵になることを同省指導者らに求めた。

瀋陽市政府職員によると、鄧氏の来訪について固く口止めされ、「重要人物」が来ていると聞いているという。市内はふだんと同じように平静だ。十八日には同市宣伝部が「鄧小平重要講話学習研究会」を開催、大型企業を集めて改革案を発表させるなど、鄧氏の来訪と関係があるようだ。



原発輸出協定を承認

IAEA

【RP＝東京】二十日の新華社電によると、国際原子力機関（IAEA）理事会は同日、中国がパキスタンに三十万㌔の原子力発電所を輸出する協定を承認した。

パキスタン側は協定で、中国から輸入した原発と核物質を平和目的のために使用し、国際的査察を受けることを約束している。原発輸出契約は昨年十二月に北京で調印された。

カザフ―ウルムチ線開通

【RP＝東京】二十一日の北京放送によると、中国とカザフスタン共和国が今年四月に合意した取り決めに基づいてアルマアタとウルムチの間を往復する十四次、十三次国際旅客列車が二十日、運行を正式に開始した。

アルマアタ時間同日午後十一時五分、国際旅客列車の出発前、アルマアタ第二駅で盛大な開通式典が挙行され、ナザルバエフ・カザフスタン大統領と中国の李森茂鉄道相が、それぞれあいさつした。

財政ノウハウ 海外に伝授

大蔵省がセミナー

大蔵省は七月十五日から五カ月間、中国、インドネシア、ペルーなど外国の若手官僚を対象に「財政金融長期セミナー」を開く。「日本の財政・金融分野の知識を日本の政策担当者から直接学びたい」という開発途上国などからの要望を受けて、同省財政金融研究所が創設する。

セミナーでは、財政・金融政策の立案や運営の実情、日本の経済発展の歴史まで幅広く学ぶ。研修生は、中国などのほか、タイ、マレーシア、ハンガリー、モンゴル、ベトナム、フィリピン、米の十カ国の十一人。

◇天皇訪中実現に意欲
宮沢首相は都内での講演で天皇陛下の訪中問題について

政治

て「国民が祝福を申し上げる中、訪中していただきたい」と述べ、国交正常化20周年に当たる今秋の実現に意欲を示した（17日）

7 政府前 発言

6/18

天皇訪中、10月を念頭に検討

(11)夕 政府筋

政府筋は十八日朝、宮沢首相が積極姿勢を表明した天皇訪中問題に関連し、天皇陛下が訪中される場合の時期について「いろいろ考えるとやはり秋。十月か。それを過ぎると宮中の行事もある」と述べ、今年十月の訪中を念頭において検討していることを明らかにした。

天皇陛下ご訪中10月が望ましい

政府筋

政府筋は十八日午前、懸案となっている天皇陛下訪中の時期について「十月を過ぎると宮中行事やら何やらある」とし、十月が望ましいとの考えを示した。

天皇訪中に対しては、自民党内に強い慎重論があるが、同筋は「まだ条件は整っていない」としながらも、「いろいろ考えてみるとやはり秋だ」と述べた。

(11)夕 首相の天皇訪中発言

(朝) 北京放送が報道

【RP＝東京】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が十七日、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道。「日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な態度表明を行った」と指摘した。

「天皇訪中は10月がよい」

(3)夕 (朝)

政府筋

政府筋は十八日朝、宮沢首相が実現に強い意欲を示した天皇陛下の中国ご訪問の時期について「十月を過ぎると宮中の行事やら何やらある」と述べ、十月が望ましいとの考えを示した。天皇訪中に対しては自民党内に強い慎重論があり、同筋も「条件は整っていない」との認識を示したが、同時に「いろいろ考えてみるとやはり秋だ」と語り、政府として秋の訪中実現に全力を挙げる考えを強調した。

首相の天皇訪中発言

北京放送が報道

【RP】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が十七日、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道。「日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な態度表明を行った」と指摘した。

宮沢首相の天皇訪中発言を報道

T-3 北京放送

6/18(7)【RP】十八日朝の北京放送は、宮沢首相が、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて「陛下がおいでになるのは望ましい」と述べたことを報道した。

6/18夕刊

中国関係

報道あり

平岩俊司連絡先

6/18

6/19 T-②

天皇訪中に慎重論

自民 首相のおひざ元からも

宮沢首相が今秋の天皇訪中実現に意欲を示したことに対し、自民党内から十八日、反発が出た。首相のおひざ元の宮沢派幹部会でも慎重論が強く、田沢副会長が首相に「挙党体制がようやくできつつある時なので慎重に対処してほしい」と電話で要請した。

また藤尾元文相は同日の代議士会、三塚派総会と世話人会で「日中国交回復二十周年という政治行為に天皇陛下を引きずり込むことは、天皇の地位を政治目的に利用したと言われても仕方がなく、宮沢首相の責任は免れない」と首相を厳しく批判。

さらに「天皇が訪中されれば〝お言葉〟で『第二次大戦の侵略行為は遺憾だ』と述べる機会が多い。昭和天皇や昭和(時代)を傷つけることを誘発するのはもってのほかだ」と指摘した。

三塚派総会では若手の衛藤晟一、松岡利勝両氏が藤尾氏に同調。同派世話人会でも中山前外相が「天皇の訪問先はアジアだけでなく、ヨーロッパを優先してバランスを取るべきだ」と、訪中に異論を述べた。

首相は十七日の日本新聞協会総会で「国民が祝福する中で訪中していただきたい」と述べたものだが、党三役の間にも「事前に何の話もなかった」と反発の声が出ており、首相は対応に苦慮しそうだ。

92.6.19 東京朝 2面

6/19

中国関連報道ぶり

6/19 ㊍(4)

天皇訪中に首相前向き

反対や不満の声

自民党内

宮沢喜一首相が天皇陛下の訪中問題について、日中国交回復二十周年を迎える今秋に実現したいという趣旨の発言をしたことに対し、自民党内では十八日、宮沢、三塚両派の会合で慎重論や反対論が相次いだほか、執行部からも首相の発言に不満の声が上がるなど、波紋が広がった。

この日午前に開かれた宮沢派役員会では、津島雄二氏が「党内には天皇の政治利用になる、などとして反対論が強い」と報告。さらに、竹下派幹部から「慎重な対応」を首相に求める電話が、宮沢事務所にかかってきた。

このため、田沢吉郎・宮沢派副会長が首相に電話でこうした党内の空気を報告するとともに「天皇訪中問題は、慎重に扱った方が良いのではないか」との考えを伝えた。

三塚派の総会でも、藤尾正行氏が「(訪中することは)陛下の地位を政治的に利用したと言われてもしかたない。首相は責任を免れない」と発言したのをはじめ衛藤晟一、松岡利勝両氏からも反対意見や首相発言に対する不満が相次いだ。

さらに三塚派首脳は「議論になること自体が問題だ。象徴天皇を政治に巻き込むことは良くない」と、天皇訪中に反対する考えをにじませた。

「天皇訪中時期、慎重に判断を」

経団連会長

経団連の平岩外四会長は十八日の記者会見で、宮沢喜一首相が天皇陛下の訪中を今秋に実現させたいとの意欲を示したことについて、「総理が判断する大きな問題で、タイムリミットが迫っているのかもしれないが、世論がはっきりしていない段階なので慎重に判断していただきたい」と述べ、慎重な対応を求めた。

92.6.19 朝日朝 4面

孫平化中日友好協会会長発言

6/18

「天皇訪中」
首相発言

自民内の反発呼ぶ

宮沢首相が天皇陛下の中国訪問の実現に意欲を示したことに自民党三塚派の藤尾元政調会長らが十八日、強く反発、「待った」をかける動きが表面化した。三塚派の若手は他派の若手とともに綿貫幹事長に会い、真意を確認することも検討している。

ころした動きに宮沢派からも党内結束を維持する意味合いから首相に慎重な対応を求める声が出ているが、首相の姿勢は変わっておらず、訪中問題をめぐり政府・自民党間であつれきが生じそうな情勢になってきた。

藤尾氏は十八日の三塚派総会で「陛下の地位を政治的に利用したと言われても仕方がなく、首相の責任は免れない。中国は核ミサイルなどを輸出し、海軍力を増強しつつあり、発言できるあらゆる機会に事の重要性を訴える」などと首相の発言を批判した。若手の衛藤晟一代議士らも「誠にその通りで大変不満だ」などと同調、綿貫幹事長に真意を尋ねる意向を表明した。

こうした状況に宮沢派も同日の役員会で対応を協議。田沢副会長が首相に電話するなど自重を要請した。

党執行部も佐藤総務会長、森政調会長が同日夕、党本部で意見交換し、訪中問題には慎重に対応することを確認した。

「天皇陛下訪中」首相の積極姿勢 (5/27)

党内から反発の声

宮沢首相が天皇陛下の中国ご訪問に積極的な姿勢を示したことに対し、自民党内から十八日、反発の声があがった。

急先ぽうは藤尾正行元文相で、同日の同党代議士会や所属する三塚派総会で「(訪中が実現すれば)陛下の地位を政治目的に利用したといわれても仕方がない。宮沢首相の責任は免れない」と痛烈に批判した。三塚派総会では藤尾氏のほか、若手の衛藤晟一議員らが賛意を示した。

総裁派閥の宮沢派でも、十八日午前の役員会で、津島雄二政調副会長らが、首相発言に党内の一部から強い反発があることを報告。田沢吉郎副会長が午後、電話で首相に「せっかく党内がまとまってきたのにこの一種の問題で反発を招くのはよくない。慎重に発言してほしい」と進言した。

慎重な判断を

経団連会長

平岩外四経団連会長は十八日の記者会見で、天皇陛下の中国ご訪問問題について、「総理が決める大きな問題だが、慎重に判断していただきたい」と述べ、現時点で是非を判断するのは時期尚早との見解を示した。宮沢首相が前日、日中国交正常化二十周年に当たる今秋の天皇陛下訪中実現に積極姿勢を見せたのに関連して答えた。

その理由については、「国民世論がまだはっきりしていないし、日本として国際的な問題もある」と指摘した。

92.6.19 サンケイ 朝 3面

訪中
天皇

「政治利用されぬ」

孫平化・中日友好協会会長が会見

来日した中国の孫平化・中日友好協会会長は十八日、都内で日本経済新聞記者と会見し、天皇陛下の中国訪問に触れ、「(ご訪中が実現した場合)政治的に利用されることはない」と語り、日本の一部にある天皇訪中が政治的に利用されるとの見方を強く批判した。焦点となる過去の日中間の歴史に対する天皇のお言葉について「(どうするかは)日本の政治家の判断だ」としながらも、「天皇陛下のアジア各国歴訪の際、常に過去の歴史へのお言葉が議論になってきた」と語り、中国ご訪問も例外ではないとの見方を示した。

92.6.19 日経 朝 2面

中間報告の発表

6/23

file 控

天皇訪中、参院選後に結論

外務省筋

6/24 (朝日)

外務省筋は二十三日夜、日中国交正常化二十周年を記念しての天皇陛下の中国訪問について「（実現の可能性は）六分四分というところだ」と述べた。訪中実現に際しては「自民党内の反対勢力が無視できない存在になってきている」と指摘したうえで、決断の時期に関して「党内にどう根回ししていくかで、七月二十六日の参院選後になるだろう」との考えを示唆した。

天皇陛下の訪中実現は依然微妙

6/24

Ⓢ(13) 政府筋

政府筋は二十三日、今秋に予定される天皇陛下の中国ご訪問が実現する見通しについて、「現在は六対四ぐらいだ」と述べ、自民党内や国民の中に反発があり、訪中実現は依然として微妙な状態にあるとの認識を示した。

さらに、同筋は「（実現する場合の）正式決定は参院選後になるのではないか」と述べ、ご訪問される場合の閣議決定は早くても七月二十六日の参院選挙以降になるとの見通しを示した。

さらに「政府としては（天皇陛下のご訪問が）何らかのかたちで実現できるように努力するしかない」として、訪中実現に全力を挙げる考えを示した。

6/24

「天皇訪中」に条件付き賛成

Ⓐ(14) 中曽根元首相

中曽根康弘元首相は二十三日、記者団と懇談した中で、自民党内に慎重論の強い天皇訪中問題について「私は原則としてやった方がいいと思う。ただし条件がある」と述べた。

中曽根氏は「条件」の内容を具体的には示さなかったが、これまで非公式の場で、自民党内および国民の世論が訪中賛成で一致することや、韓国の理解を得られることなどを挙げている。

6/24

中国関係

報道切り抜き

6/24付名紙（国民の支持率に関する政府答弁）

6/24作成 [redacted]

6－1 事務次官 (匿)
－2 斎藤外審
－3 橋本大使
－4 官房長 (匿)
－5 儀典長
－6 アジア局長

中国課長
首席事務官

（報告メモ）

極秘
無期限
部の内
号

original

天皇陛下ご訪中問題（国民の支持率）

'92.6.24

亜　中

1．２４日付本邦各紙夕刊（記事別添）は、政府筋が「政府が３月中旬に２～３００人を対象にした非公式な世論調査を行い、その結果訪中賛成が約７５％に上り、反対は５％ほどにとどまった」と述べた旨報じている。

2．２４日夕、樽井中国課長より、[redacted]に対し、上記１．事実関係について照会したところ、概要以下の応答があった。

（１）[redacted]においては、報じられているような調査は行っていない。

（２）「政府筋」とは石原副長官であり、若干ウロ覚え発言された模様。[redacted]

[redacted]

（了）

(2)

国民の75％が天皇訪中に賛成

24(10) 内閣調査で政府筋

政府筋は二十四日午前、天皇陛下の訪中問題について内閣が三月に実施した非公式な国民の意識調査結果に触れ、賛成が約七五％、反対は五％だったことを明らかにした。そのうえで、「自民党内で起きているほど反対は多くない」と語り、訪中の前提とされている「国民的な合意」は「できつつある」との認識を示した。

(3)

国民的合意できつつある

6/24 (NK) 夕

天皇訪中で政府筋

政府筋は二十四日朝、天皇陛下の中国ご訪問問題について国民的合意はできつつあるとの認識を示した。天皇訪中には自民党内に強い異論があるが、同筋は、政府部内で実施した世論調査で「賛成が七五％ぐらいで反対は五％ぐらいだった」ことを明らかにし、訪中実現の環境が整いつつあるとの見方を強調した。

天皇訪中賛成75％

(下)(3) 政府非公式世論調査 高齢者に反対多数

政府筋は二十四日朝、天皇陛下の中国訪問問題で、政府としては実現への国民の合意ができつつあるとみている、との認識を示した。

その根拠として、政府が三月中旬に二千三百人を対象にした非公式な世論調査を行い、その結果訪中賛成が約七五％に上り、反対は五％ほどにとどまったことを明らかにした。

年齢別では、高齢者に強硬な反対者が多く、若い層には賛成者が多かった、という。

政府筋は、若い層に賛成が多いことについて「中国は日本にとって大事な国だから、中国の思いを大切にしなくてはいけない、ということだ」と分析した。

宮沢首相が先に天皇訪中実現に意欲を示したのは、この調査結果も影響しているとみられる。

Voice 6月号（村松剛論文）

「Voice 6月号」(PHP出版)所収

天皇御訪中に反対する

村松剛（評論家）

中共の狙いは日米分断と現政権への梃子入れなのだ



1

相手が北京となると、日本がわの反応はどうしてつねにこうも感情的、情緒的になるのだろうかと思う。

中共の江沢民総書記が四月に来日し、天皇陛下の御訪中を正式に要請した。真剣に考慮すると政府はこたえ、即答は一応避けたのだが、大方の新聞の論調は御訪中支持だった。たとえば東京新聞（四月九日付）の社説は、次のように書いていた。

「天皇訪中は、両国が友好関係の基礎を固め終え、さらに次の段階の関係への出発点に立つ象徴的な行事として、国交正常化二十周年という節目の年内に実現すれば幸いだ。中国側の期待にこたえずに終われば、関係冷却化さえ心配される」

社説の題は「世界に目を向けた日中関係」であり、「世界」といえば日中関係に関心の深いアメリカや東南アジアやヨオロッパの国々をさすと解するのが、この場合は自然だろう。そういう「世界」を見据えて、国際力学のなかで天皇御訪中の可否を論じているのかと、実は表題を見たときには思った。

しかしこの社説の筆者の視野のなかには、「世界」などまったくない。わずかに北朝鮮の名が出て来る程度で、一文の中心は明かに日中の「関係冷却化」への危惧にある。

周辺の世界の動向を無視して、なぜ「中国側の期待にこたえ」ることのみにひたすら汲々とするのか。こうなるともはや外交論ではなく、中共への一方的な思い入れである。

衛藤瀋吉氏は天皇御訪中を熱烈に支持する文章の末尾を、次のように結んでいた。

「北京の秋空は限りなく澄んで、世界一だといわれる。さわやかに澄みわたった大空の広き心をもって、両陛下の御訪中をことほぎたい」

これもまた思い入れにあふれた情緒的な文章の見本、といってよい。空が澄んでいようと真黒であろうと外交には関係がなく、松岡洋右が昭和十六年にベルリンとローマとを訪れたときには、空は綺麗だったらしい。要するにこの文章のなかにはまぎれもないある感情が表白されてはいても、国際政治の専門家としての衛藤氏の姿は見出だしがたい。

天皇陛下のいまの時期の御訪中には、ぼくは反対である。理由は三つばかりあって、その第一はまさに国際関係にかかわっている。日中関係の現在の時点での緊密化は、日米の関係を険悪化させる。

中共はソ連帝国の崩壊の前後から、アメリカにたいして露骨に挑戦的な態度をとりはじめた。この一月十九日にもリビアのカダフィのナンバー・トゥー、アブド・アス・サラム・ジャルードが軍事技術者の一団をひきいて北京を訪れ、国家主席楊尚昆や李鵬首相と懇談している。議題はリビアが開発しようとしている射程千キロメートルの地対地ミサイルと、毒ガスとの製造の件だった。

アメリカがつくり出そうと考えている「世界新秩序」にいかに対抗するかについて、リビアと中共との首脳部は語りあったと伝えられる。中共はミサイルの技術の提供をリビアに約束し、ガスに関しても二月に化学工業相が代表団とともにリビアに行って、戦略産業人民委員会主任のジュダラー・アル・タルヒとの契約に調印した。そういう動きから推すと、「世界新秩序」への対抗というはなしは本当だろう。

アメリカの国務長官ベイカーは昨年十一月に、――天安門事件いらいアメリカの高官としてははじめて――北京に赴き、人権の尊重と武器輸出の抑制とを中共政府に要請した。それからわずか二箇月後にリビアに軍事支援を約束したのだから、これはベイカーにたいする嘲弄にひとしい。リビアは国際テロリズムの家元であって、パン・アメリカン一〇三便の爆破については、三月の末に国連安保理事会の制裁決議をうけている（中共は拒否権の発動を企図し、米英仏から最恵国待遇をとり消すといって脅されて、ようやく棄権にとどまった）。

中共が過激派諸国との軍事的な結びつきを急速につよめ、反欧米戦線をつくろうとしているという事実を、天皇御訪中を支持している人びとは知らないか、あるいは少くとも視野

のなかにおいていないのである。

国際政治を無視した御訪中支持論

中共がパキスタンに原子炉を売って核兵器用のプルトニウムの入手に成功させ、アルジェリア、イランの核兵器製造にも手を貸していることは、すでにべつの場所にややくわしく書いた（「諸君！」平成四年五月号）。

湾岸戦争のまえから中共はイランとイラクとに地対艦ミサイル、シルクウォーム（HY2）を売り、サウジ・アラビアに中距離ミサイル、東風Ⅲ型（CSS2）百基以上を売り、シリアとイランとには射程六百キロメートルのミサイルM9を、大量に売込んで来た。はじめは経済的窮乏から、なり振りかまわない死の商人という気配が濃厚だったけれど、ソ連帝国の無力化とほぼ歩調をあわせてその方向性が次第に鮮明化されて行く。

昨年七月の李鵬首相のイラン訪問が、大きな転回点だったであろう。北京政府はこのときに軍用機やミサイルだけではなく核の技術もイランに売ることを決定し、それまでの中・パキスタン同盟にイランを加えた三国枢軸が形成された。「世界新秩序」の建設を、ブッシュとベイカーとがしきりに口にしていた時期である。

イランの核開発にたいする援助の決定は、パキスタンの要請によるといわれている（パキスタンはイランと核の開発に関する協定を一九八七年に結び、技術の提供とひきかえにイランから資金援助を得ていた）。直接の契機はそうだったにせよ、中東最大の反欧米国家イランの利用という中共の世界戦略が、その根底にあったことは疑いを容れない。

中東和平会議がアメリカの要望によってスペインで開かれる直前の十月末に、イラン政府は過激派のテロリスト集団の代表をテヘランにあつめ、反和平会議を開催した。アメリカの「世界新秩序」への挑戦が目的であることは、改めていうまでもない。その反和平会議の直後にこんどは国家主席の楊尚昆がパキスタンを経てイランにはいり、大統領ラフサンジャニと会見した。

昨年十一月の時点では三千人の中共系の技術者が、イランのイスバハン、ムバルカ、アラク等の軍事工場で働いていた。だから楊尚昆も十一月二日には、イスバハンを視察している。技術援助は核の開発のほかに、M9とM11とをもとにした地対地ミサイルの製造がその主要な部分であり、ミサイルの組立ての方には北鮮の技術者も協力して来た。

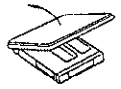
中共と北朝鮮とのあいだには、一時期のような冷いよそよそしさはいまはない。ソ連帝国の消滅にともなう孤立感は、濃淡の差はべつとして二つの国に共通する。東欧諸国を襲った「和平演変」（共産党政権の無血裡の崩壊）を、どちらも恐れているのである。おかれている立場が似ている以上、互いに助け合った方がよいことになる。



（工事いらずで、調整カンタン。）
アンテナとチューナをコンパクトにまとめたBSコンポなら、窓ぎわにセットするだけ。お手持ちのテレビで、すぐBSを楽しめます。アンテナ面全体を使った「マルチレイヤー方式」だから、室内でも安定した受信が可能です。また、受信感度の設定は仰角調整ツマミと、見やすいレベルメータで簡単に、しかも正確にできます。便利なリモコンも付いて、選局ラクラク。

▼南向きか西向きに窓があり、軒などに電波を遮られない位置を選んで設置してください。




①まず、アンテナ部を起こし、仰角目盛りを調整・固定する。


②左右に回転させレベルメータ値を最大に合わせる。

〈設置について、次の点にご留意ください。〉1特殊な窓ガラス（網入りやスタンドグラス）や金属性ブラインドは受信感度が悪くなります。2北海道・沖縄では使用できません。3北向き及び東向きの窓では受信できません。4AV入力端子の無いテレビの場合RFコンバータ（別売）が必要です。
〈屋外用には〉フラットアンテナPA400 40cm角と小型高性能。住まいの外観に調和するデザインです。
標準価格29,000円（工事費・税別）

フラットアンテナ＆BSチューナ 一体型
新商品 BSコンポ

今、BSコンポを買うと話題のWOWOWが当たる！
▶愛用者カードをご返送いただくと、抽選で100名様にWOWOW加入（27,000円相当）、500名様にWOWOWオリジナルTシャツプレゼント。
期間：平成4年3月1日～5月末日（消印有効）――詳しくは店頭で。
●当選された方は、日本衛星放送との加入契約が必要となります。●プレゼントは、WOWOW加入（27,000円＝BSデコーダの供与有）のみです。NHKの衛星受信料及びWOWOW視聴料（月額2,000円、初回は3ヶ月前払い6,000円・税別）はお客様のご負担となります。●BSデコーダは、ご自身で取付け可能ですが、取付けを依頼される場合は、別途4,000円程度の費用が必要です。●WOWOW加入当選者には直接ご連絡いたします。WOWOWオリジナルTシャツ当選者には、商品の発送をもって発表にかえさせていただきます。

National 松下電工

金日成は昨年十月のはじめに北京を訪問し、異例に盛大な歓迎をうけた。人民日報はこの訪問を、両国間の歴史上の画期的な事件として報じた。同盟関係の再出発、という意味であろうか。

北鮮が目下開発中の射程一千キロメートルのミサイル労働一号に、中共はロケット機材や誘導装置を提供した。リビアは昨年の暮にトリポリで北鮮の代表と交渉し、このミサイルを自国で共同で組立てることを決定している。リビア名をアル・ファタハというこのミサイルは、完成すればイスラエルやイタリアの南端にまで届く。

労働一号のいわば心臓部は中共製だから、組立てには北京の許可が必要とされる。カダフィのナンバー・トゥーのジャルードが北京に行ったのは、細かくいえばそのためだった。

北鮮に核の査察をうけ容れさせるためにも日中友好の推進が必要であるという考え方が、一部にはあるように見える。まえに引いた東京新聞の社説にも、そのような意味のことが書かれていた。だがしきりに方々に核を売込んでいる中共が、その「盟邦」に本気で査察のうけ容れを忠告するとは思えない。少くとも日本が例によっておずおずとたのんだくらいでは、相手にしないことはたしかだろうと思われる。

2

一九九〇年にサミットがヒューストンで開催されたさい、日本の海部首相は中共への経済援助の再開を、参加諸国の首脳たちの反対を知りながら一方的に宣言した。

それからまもなくイラクがクウェートに侵攻し、国際連合の安保理事会は即時撤兵をイラクに求める決議案、六六〇号を採択する。日本はアメリカにならって、イラクとイラクの占領下にあるクウェートとの資産を凍結した。

それから二日後の八月四日（日本時間では五日）に、ECにならって日本も対イラク貿易と経済援助とを停止せよという上院議員全員の署名入りの要請状が、駐米日本大使に手渡されるのである。上院議員全員百人の署名入りの手紙は、過去に前例がないと当時の新聞は書いていた。

前例がなかったわけではなく、ソ連政府にこういう形の書状をアメリカの上院が送ったことはある。けれど冷戦下のソ連は、アメリカの敵だった。同盟国にたいする措置としてはたしかに異様であり、日本がいかに不信の目をもって見られていたかを示している。

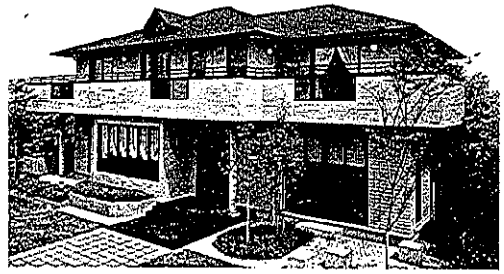
それより十一年まえにイランのアメリカ大使館が占領され、館員が人質にされたとき、アメリカはイランからの石油の輸入を停止した。ところが行き場を失ったイランの石油を、横から日本が買ってしまった。また東芝機械は、ココム違反の事件を起こしている。

いくつかの材料が重なっていたことは事実だが、八月四日の時点で上院議員たちにつよく影響したのは、何といっても



窓から陽光が降り注ぐ
午後のひととき。
心を開け放ち、おだやかなくつろぎへ。
開口幅3.64mもの大きな窓。
2.7mののびやかな天井高、
36畳、大空間のリビングには、
大きなゆとりと開放感が漂っている。
真のやすらぎを
寄棟屋根の優美なシルエットに包んだ、
ニューメルヴェーユ。
建て替えたのは、
豊かな暮らしを可能にする家です。

NEW
メルヴェーユ
ALCコンクリート住宅



しあわせづくり、夢づくり
ダイワハウス　大和ハウス工業株式会社　DAIWA HOUSE INDUSTRY CO., LTD.
本　社 〒550 大阪市西区阿波座1丁目5番16号　大代表06 (532)5111 建設業者許可番号・建設大臣許可(特-1)第5279号
東京本社 〒103 東京都中央区日本橋1丁目3番13号　代　表03(3274)0355 宅地建物取引業者免許番号・建設大臣(9)第245号

前月の中共への経済援助再開宣言だったろう。アメリカの国会は中共にたいする最恵国待遇のとり消しを毎年決議し、大統領が拒否権を発動して辛うじてそれを喰止めて来た。

アメリカの対日感情は、二年まえよりもはるかに悪化している。中共はソ連にかわってアメリカの敵としての路線を、半ば公然ととりはじめた。その状態のなかで日本が中共との結びつきを深め、天皇の御訪中まで実現したら、事態は対日不信などという段階ではもうなくなることを、覚悟しなければならない。

日本ではまだ一般に認識されていないようだけれど、世界の関心の焦点は中東ではイラクからイランへと、次第に移っている。イランは昨年の七月以降、ソ連から新鋭のミグ31二十四機を含む軍用機約百五十機を買い、キロ型潜水艦三隻を安値で購入し、戦術核までカザフを通じてひそかに買入れて、その戦力はいまやイラクをはるかに上まわる。

サウジ・アラビア以下の湾岸諸国にはイランにたいする恐怖心がつよく、したがってアメリカの提案するイラク再爆撃も、サダム・フセイン追落しにも、賛成はしていない。イラクを徹底的に叩いてしまうと、イランにたいする抑止力が消える。またかりにサダム・フセインをクー・デタか暗殺によって消した場合、これにかわる強力な指導者がすぐにあらわれる見込は少いのである。強力な指導者が出現しないかぎりイラクは混沌状態に陥いり、湾岸の支配力はイランが握る。

イラクの脅威に始末をつけるためには、イランを封じ込めなければならない。ところがイランは旧ソ連の非アラブ回教六箇国に働きかけてその抱込みをはかる一方、アフリカ紅海岸のスーダンと軍事同盟を結んだ。

スーダンは一九八九年六月のクー・デタ以降、回教過激派のモスレム・ブラザーフッドが支配権を握って来た。スンニ派系のこの回教過激派が、回教中心主義と反西欧という立場から本来は敵であるシーア派のイランと手を結び、イランは五千人の将兵を最近ここに送り込んで、国際テロリストの訓練や内戦の鎮圧にあたらせている。

スーダンの領内には三十に及ぶ国際テロリストの訓練基地がつくられ、そのうちの十二はイランの直轄下にある。昨年の十月にトルコで爆弾を仕掛け、エジプトの外交官とアメリカ人とを殺傷したのは、スーダンのハルトゥムで訓練されたテロリストたちだった。

PLO（パレスチナ解放機構）のアラファトの乗用機が、四月のはじめにハルトゥムからリビアに向かう途中で砂嵐に遭い、砂漠に不時着を強行して一行は九死に一生を得た。日本の新聞はこの事件をいずれも一面で大きく報道し、アラファトの「強運」について書いた。アラファトがなぜスーダンなどにいたのかという疑問にこたえる解説は、ぼくの知るかぎりどこにも一行もなかった。

新聞記者の怠惰としか、いいようがない。回教過激派のテロリスト集団の巣と化したスーダンに、アラファトは訓練の視察かたがた、たぶん協力の要請のために赴いたのである。世俗主義的なPLOと回教過激派とは仲が悪く、イスラエルの占領地でも両者は対立している。

ソ連と東欧の共産諸国という後楯を失い、さらに湾岸戦争の折りにはイラクを支持して湾岸産油国から絶縁されたPLOとしては、イラン、スーダン系の回教過激派運動と手をつなぐ以外に、生きのびるみちがない。彼の乗用機が行方不明ときいたとき、イラン系の回教過激派が爆弾を仕掛けたのかと一瞬考えた。そうではなかったところから見ると、両者のはなしあいは一応成功におわったらしい。

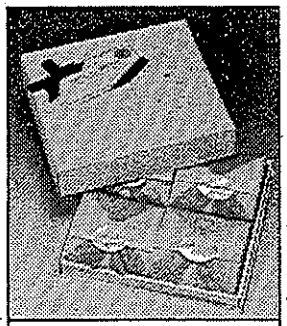
イランはスーダンの対岸のメッカと北の親米国家エジプトとを、明かにその標的としている。スーダンが巨大な軍事力をもてば、紅海の通行の遮断もナイル河の水の堰止めも可能となる（ナイルを堰止めたら戦争であると、エジプトは言明して来た）。

十一月の半ばにイランはスーダンのために軍用機十八機等、三億ドル分の武器を中共に発注し、北京政府はただちにこの依頼に応じた。同じ月の末にはもう空軍の指導員が、北京からスーダンに乗込んでいた。搬入されたミサイル、シルクウォームのうちの少くとも一つは、これらの技術者たちの指導のもとに、年末までに紅海岸に据付けをおわっている。

もう一つの反米国家キューバとのあいだでも、中共は昨年十一月に科学技術協力協定という名の武器協定を結んだ。

反米反自由世界戦線の結成を進める中共

冷戦後の世界のなかで、中共は北鮮、キューバ、リビア、回教過激派等の反欧米勢力を糾合し、反自由世界戦線の結成を急いでいるのである。


ニューロマンテックスイーツ
グルメのための
新ディナーケーキ
「伯爵夫人の招待状」
18世紀の美食文化を今に甦らせたパーティサイズのディナーケーキです。
素敵なパーティやおもてなしに最適です。
●ミックスフルーツ、チョコレート、アーモンドプディング、グレープフルーツの4種類・4個入¥2,000(税別)ほか各種。
パレフリアン
ナカサキヤ
本店・京都河原町四条
☎(075)221—6661～2

日中友好二十周年を名目とする天皇御訪中への要請も、その外交的文脈のなかで見なければならない。日米韓三国の矛盾を衝けという指令を、党の中央が下に流しているという噂もきく。

中共にはアメリカの情報によれば、まだ百万人以上の政治囚がいる。陛下の御訪中はその人権蹂躙政策を、日本が容認しているとうけとられるだけではなく、反米反自由世界戦線の結成に荷担する行為と、ことにアメリカの政府や議会の目にはうつる。

天皇御訪中に反対する声が自民党の内部でもつよまっていることを知って、江沢民は尖閣諸島の領有化は棚上げするといい、全国人民代表者会議は二十四兆円の対中賠償要求決議を当面とり下げた。領有宣言や賠償要求はいつでもできるので、いまは天皇御訪中の実現が喫緊事であると判断していることを、これらの動きは示している。

先方の狙いの第一は、察するところ日米の分断にある。日米の対立は日本にとってはもちろん、アメリカにとっても決して有利には作用しない。日本が孤立に苦しみアメリカが多少とも傷を負えば、中共にとっては思う壺である。

冷戦の四十年間を通じてソ連は日本をアメリカから引き離そうと、さまざまな手を打って来た。ソ連からの工作には比較的に用心深かった日本人が、北京が相手だと甘くなるのは、同じアジア人という気持があるせいだろうか。中共はソ連と同じ共産主義国であり、その指導者たちはキッシンジャーが指摘しているように、「西がわの知識人層が想像するような、ロマンティックな人道主義者ではない」。

中共との関係がたとえ「冷却化」しようと、日本はアメリカとの友好関係の方を大切にしなければならない。「冷却化」によって困るのは、資金が欲しい先方であっても日本ではないだろう。

3

中国は周知のように地名ではなく、文化概念である。まわりは東夷西戎北狄南蛮の蛮地で、自分のところがまん中の「中華」であるという考え方を、この国は伝統的にうけ継いで来た。その「中華」の地の支配者だけが皇帝であり、周囲はすべて冊封国の国王とみなされた。極東でこの中華思想に抗し、みずから天皇もしくは皇帝と名乗ったのは、日清戦争の結果清帝国が朝鮮にたいする宗主権を放棄するまでは、日本の君主以外にはなかった（朝鮮国王は明治二十九年に大韓帝国皇帝となり、極東に三人目の皇帝が誕生する）。

したがってシナの皇帝は、国外には出ない。自分は都にいて、冊封国の王たちの朝貢をうける。この伝統は共産主義革命以後も中華人民共和国という美称とともに維持され、国家主席は毛沢東が短期間モスクワを訪問したのを例外として、国外に出ることはなかった。大統領ニクソンの訪中のときにさえ、ニクソンが招待を求めて北京がそれをうけ容れるという形をはじめはとろうとした。アメリカの大統領が朝貢外交形式を踏むことをキッシンジャーはことわり、共同声明ではニクソンの訪中の希望を知って首相周恩来が彼を招待したという折衷案に落着いた。

楊尚昆の場合は前述のようにパキスタンとイランとに行き、その後はシンガポール、マレーシャを両国の元首の来訪にたいする答礼として訪れ、四月には金日成の八十歳の誕生日を祝いに北鮮に行っている。旧冊封国である朝鮮半島の国に「中華」の元首が出向くということはすでに一つの事件であって、随員には大物が少いにせよ、これは北鮮にたいする北京の態度の変化を物語る。

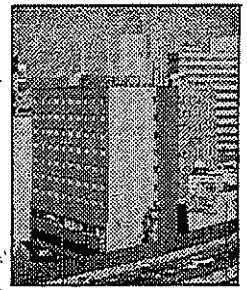
日本には中共は昭和天皇の御大葬のときに外相を、御大典には副首相を、それぞれ派遣して来ただけだった。世界の国々から元首または元首級の人びとがあつまったなかで、中共のこの人選は目を惹いた。「礼の国」の所業とは到底いいかねるこういう行動ののちに、こんどは天皇御訪中への執拗な要請である。

内外の情勢の変化に応じて、この国の日本への態度は豹変する。日米安保条約と自衛隊とを罵倒しつづけていたのが、ソ連の脅威の増大とともに日米安保条約支持、自衛隊の存在も結構という風に変り、ソ連との関係がやや安定化すると日本の「軍国主義」復活反対の古い唄にもどった。

内政への相互不干渉を日中平和友好条約では明記しておきながら、靖国神社の問題に干渉し歴史の教科書の内容——それも歴史解釈ではなく明瞭な事実の記載——にまで、喙をはさんで来る。国内の対立がはげしいときには、日本という「敵」を使って内部を引緊めようとするために、とくに居丈高になる傾向が感じられる。

いまはソ連帝国が消え国内では守旧派と改革派とが鎬を削

いい夢・いい朝
快適フットワーク



(214室)

南海電鉄・大阪地下鉄
ナンバ駅　徒歩2分

ホテル南海
なんば
〒556 大阪市浪速区難波中1丁目17番11号
TEL 06-649-1521

り、内憂外患ともに起こっている。それで日本ではもっとも利用価値の高い陛下に、彼らは目をつけたのではないか。

陛下が御訪中されて過去の日本の「罪」を詫びるようなことを口にされれば、「中華」の人びとは東夷の君主が詫びに来たと思う。韓国が天皇を「日王」とわざわざおとしめて呼んでいるように、もしも中共が「王」という表現をつかえば、完全に冊封国の君主の朝貢として見られる。東夷の「王」を朝貢と詫びとに来させたことを、政府の主流派は国民に誇ることができるのである。

皇室外交は極東では、欧米諸国を相手とする場合のようには行かない。天皇御自身がどんなに非政治的に振舞おうとされても、天皇の称号の表記やおことばづかいそれ自体が、古い歴史的背景によってたちまち高度に政治的な意味をもつ。

つまり陛下の御訪中は北京では内部争いの道具に利用され、日本にとっては国辱となる危険性がきわめて大きい。そのうえ中共が「南京虐殺」の遇難同胞記念館で毎年十二月に追悼集会を行ない、「日本中国侵略記録全集」を刊行したりている事実も、忘れてはならない。

「南京虐殺」に関しては、二十万人の人口しかいなかった都市で三十万人が殺されたというはなしは理窟にあわないから、関係者が生きているあいだに国際的な調査委員会を開いてはどうかと、北京でぼくは提案したことがある。孫平化という中日友好協会の会長は、そんな必要はありません、あれは事実ですと、言下に提言を拒否した。よけいな詮索は迷惑、という口調だった。

陛下のおことば次第では、訪大宣伝も史実として固定化しかねない。そしておことばの起草に関与するだろう外務省アジア局の役人たちを、ぼくは到底信用できない気持でいる。歴史の教科書問題の経験に徴するかぎり、アジア局は日本の立場を代表するよりは、中共の利害を代弁していた。

ことがらは、アジア局の役人たちだけではない。江沢民は日本はPKOに加わるなと、内政への大干渉の説教を垂れ、いらぬお世話だとは日本がわはだれもいわなかった。サダム・フセインに数量において〇連に次ぐ規模の武器を売込み、湾岸戦争の勃発に大いに貢献したのは中共だったし、ポルポト派を支援してカンボジャの大虐殺を起させたのもこの国だった。湾岸への日本の掃海艇の派遣やカンボジャへのPKOについて、いまさらとやかくいう資格は北京にはない。

まして中共は、安保理事会の常任理事国である。常任理事国の政府のナンバー・スリーが、国連に協力するなと日本に教えている光景は、ある滑稽感をともなう。

これだけ甘やされてだまっている独立国の政府は、世界にもたぶん珍しい。陛下のおことばとしてどんな文章がつくられるか、この調子ではわからない。日米関係をべつとしても、北京主流派の利益にしかならない御訪中はやめた方がよい。

現政権に梃子入れする理由はない

天安門事件の数箇月まえに、二人の北京からの留学生が大学の研究室をたずねて来た。

直接教えていた学生たちではなかったので何の用かときくと、日本は現北京政府への経済援助をやめてほしいと彼らはいった。日本が援助しても、一握りの政治家たちが私腹を肥やすだけであり、

――人民のためには、ならないのです。逆にわが国の人民は日本を恨みますよ。

――そんなことをいわれても私は政治家ではないし、政府を動かす力などない。

――そうかも知れませんが、何とかして下さい。

江沢民が来日したときにも何十人かの留学生が、独裁体制反対の抗議集会を講演会場の近くで開いたようである。留学生たちは本国送還を極度におそれているのが実情だから、彼らがもし中共系とすればずいぶん勇気のある行動といわねばならない。

鄧小平以後の中共がどうなるのかはわからないけれど、軍を握っている楊尚昆ももう八十四歳だから、現在の体制がそのまま維持されるとは考えにくい。指導者たちの年齢からいっても五年以上はもちそうにない現体制に、日本はなぜ陛下に御訪中までおねがいして梃子入れしようとするのだろうか。

現在の政権を援助したりすると逆に人民は恨みますよという留学生のことばをきいて、反射的にぼくは大正時代の西原借款の例を想起した。「日支友好」を善意をもって真剣に念じた大陸浪人、西原亀三の奔走による政府借款一億四千五百万円は、相手の段祺瑞（国務総理）政権が消え、しかも段はこの金を内戦の戦費などに流用したために、敵である国民党の恨みを買っただけだった。結局借款は、一銭ももどって来なかった。

にがい経験を過去に味わっていながら、それを教訓としないということは不可解である。北京政府が潰れると、夥しい難民の大群が流出する恐れはたしかにある。したがって破局的な事態をふせぐために、はじめから乗てる気である程度の経済援助を行なうことは必要かも知れない（ただし核や中距離以上のミサイルの輸出禁止という条件は、ぜひつけなければならない）。天皇陛下に訪中をおねがいしてまで現政権に心中立てしなければならない義理は、どこにもないだろう。

天皇御訪中に反対するのは、以上三つの理由による。三つがすべて杞憂にすぎないことが確実に証明されれば、もちろん賛成にまわる。しかしこの国が「和平演変」を恐れて自由世界に対立しているかぎり、独裁権をめぐる権力闘争に明け暮れているかぎり、そんな保証は求めても無理だろう。

この国が本当に自由化されるまで、天皇の御訪中は待った方がよいのである。

Foresight ('92.6) 報道

「天皇訪中」が再び動きだした

「時期尚早」との声の中、日中間で進む〝根回し〟

金子秀敏
毎日新聞北京特派員

北京　天安門事件から二年たった今年六月三日夜。北京大学周辺は戒厳令のような厳しい検問態勢が敷かれた。

警官がタクシーや乗用車を片端から止め、中をのぞきこむ。

「外国人が乗っているか？」「日本人だ」「通行禁止だ。帰れ」

普段外国人には寛大な中国人も、時に熱狂的な排外主義者になる。この日の警官も「老外（ラオワイ）（外人野郎）」狩りで高揚していた。北京大学で天安門事件犠牲者を追悼する行動があると踏んで外国人記者が取材に来るのを規制しようということだろうが、それにしても異様な警備だった。

この日の昼、「天安門広場で鄧小平に一万元の損害賠償を要求する横断幕をかかげる」という中国人の売り込みで、取材に来ていたカナダ、ドイツ、日本などの外国人記者七人が公安当局に連行された。

外国人記者の電話は当局に盗聴されている。もしも当局が中国の安定を印象づけたいなら、事前にこの男を予防拘束してしまえばよい。にもかかわらず、男はのこのこ天安門広場にやってきて事件を起こした。当局のワナの臭いがする。

さらにたまたま広場を撮影にきたTBSのカメラマンが、ハンディビデオで自分のことを撮影していた私服の公安を逆に撮影したところ、いきなり集団暴行を受け、七針も縫うケガを負った。

外国報道機関に対する公安当局の挑発的な対応が、このところ目立っていた。五月十七日には、諜報防諜機関である国家安全部の要員が米国ワシントン・ポスト紙北京支局を家宅捜索。英国BBC放送の記者も警察に「外国人記者証」を没収され、記者活動を禁止された。

〝竹下パイプ〟が機能して……

一連の事件の発生は、米国のブッシュ大統領が中国に最恵国待遇供与の議会通告をするかどうかという決断の時期に重なっている。

中国政府はこれにタイミングをあわせて、民主運動家を釈放したり、服役中の大物政治犯、魏京生の優遇された刑務所暮しを米国の民間活動家に紹介したり、柔軟姿勢を見せていた。

ところが公安当局は逆に、米国の世論を刺激するような強硬行動に出たのだ。

ワシントン・ポスト支局の捜索などは上層部の政治判断がなければできることではない。対外開放加速か、国内締め付け優先かで、中国の権力内部が大きく割れていなければ、こんな二律背反は起こらないはずだ。

公安と司法、検察、全人代立法部門をにぎる保守派長老は彭真・前全人代常務委員長である。彭真系統と鄧小平系統の対立は、全人代が領海法に尖閣諸島の中国領有権を明記させたり、対日民間賠償請求運動をとりあげようとしたたびにさやかれてきたが、一連の外国報道機関に対する不自然な対応にも、内部闘争のきなくささが漂っている。

七九年の米中国交正常化を手がけた鄧小平の外交路線は、単純化すれば〝親米〟であり、米中関係の悪化は鄧小平派の望むところではない。反鄧派にも利益は少ないであろうが、「すべて敵に不利なことは、味方に有利なことである」毛沢東はそう教えているのだ。

この中国の内部対立は、秘かに動きだした天皇訪中問題にも見られる。

天皇訪中問題は、一月の渡辺外相訪中で中国首脳から「年内訪中歓迎」の意向が表明されたものの、中国の全人代で尖閣諸島領有権を明記した領海法が制定されたり、朝鮮半島での従軍慰安婦問題に便乗した形で民間賠償請求の動きが伝えられ、日本側の気運が急速にしぼんでいた。

自民党内では三塚派を中心に時期尚早論が高く、「今年、天皇訪中はない」というのが大方の観測になっている。

だが、日本が戦後処理を終えたと世界に向かって言い切るには、天皇訪中はいつかは越えなければならない関門である。今回見送れば、二十世紀中には実現の機会を失うことも常識になっている。

消えたはずの火を燃やすのが政治だ。

竹下元首相が水面下で動きだし、情況は徐々に変わり始めた。

竹下元首相は三月、五月にそれぞれ韓国、中国を訪問し、両国の要人と会談した。

天皇が訪中する場合、「韓国への謝罪を後回しにした」という韓国の国民感情を考え、韓国に事前通告をするのが礼儀だが、まだ外交ルートでするべき段階ではない。こんなとき日韓議連会長の〝竹下パイプ〟が機能する。韓国側は、今年大統領選挙があり、天皇訪問の受け入れができる情況ではなく、したがって訪中に反対する立場にもない。竹下元首相はそのへんの感触を得たらしい。

また、中国には、戦争責任に対する天皇の謝罪に日本国憲法上の制約があることを再確認させておかなければならない。

中国側は、「天皇訪中の受け入れは、鄧小平同志自らの決裁で決まった方針であり、これに反対する者はいない」と竹下元首相側に伝えたようだ。とくに楊尚昆・国家主席は竹下元首相との会談で天皇訪中実現への強い期待をにじませた。

中国にはそれまで「天皇訪中に反対しているのは、昨年、台湾の李登輝総統を日本に呼ぼうとして失敗した竹下派の金丸副総理である」という見方があったが、竹下元首相は今後の自民党内調整の一端を金丸副総理に依頼する意向といわれる。



天安門の異常厳戒警備の裏で——

民間賠償請求運動の背景は

いずれにせよ、訪中準備の動きが事前に漏れるとつぶされる恐れがある。七月の参院選挙後までは日本国内では完全に〝死んだふり〟というのが日本政府の基本戦略である。

宮沢首相が参院選挙をしのげれば、その直後、遅くとも八月の初めころ電撃的に天皇訪中の閣議決定をする。

これにあわせて実務的な準備も着々と進められ、天皇のスケジュールから見て訪中可能な九月下旬、あるいは十月下旬のどちらのケースでも対応できる態勢が作られようとしている。

竹下元首相の登場は、これまで日中関係のパイプをつとめてきた伊東正義・日中友好議連会長の病状がすぐれないことも関係している。中国側は、第三次対中円借款を決めた実力者、竹下元首相が伊東会長の後継者として、今後日中関係のパイプになることを強く期待している。竹下元首相も意欲は十分だ。

それだけに天皇訪中というウルトラC級の根回しをぜひとも成功させたい関係者の口は極めて固い。

だが、中国側に気になる動きがある。

昨年から日本軍による戦争被害に対する民間賠償請求運動をやっている中国老齢科学研究センターの童増研究員が、最近また発言を始めた。日本に民間賠償を請求する民間団体を設立しようというのだ。

香港の中国系紙は、このニュースを日本の参議院特別委員会でPKO法案が採決されるタイミングを選んだように掲載した。中国国内の新聞も、外国の新聞のダイジェストという形で、対日民間賠償という中国人の神経にピリピリくる問題を転載している。

中国では、童氏のような三十五歳の若手研究所員個人が、政府の対外政策にかかわるこういった政治活動を自由にできるものではない。なんらかの背景を持った動きと考えるのが常識だろう。

童増研究員が今年の春の全国人民代表大会で、民間賠償請求法案の中心人物となったことから、全人代人脈との関係が推察される。その後の署名運動では地方の人代組織が協力したという情報もある。

民間賠償請求運動の関係者のなかには「天皇を南京か蘆溝橋に呼んで、謝罪を」という意見、「日本軍の被害者で生存している人を探す運動を起こせ」という意見などもあるという。

中国共産党中央宣伝部と中国外務省は、最近、日本関係の報道を減らすように関係機関に指示した。従軍慰安婦問題、PKO法案など日本への冷たい報道を抑える天皇訪中の環境整備だ。それなのになぜ、民間賠償請求運動がまた表に出てきたのか。

天皇訪中で日中関係は元首の交流という新段階に入る。

日本にとって「新段階」とは、戦後処理の負い目に片をつけ政治大国の仲間入りすることだが、中国にとっては円借款にかわる大型の対中援助が始まることだ。日本からの膨大な援助を仕切るのは誰か。中国はいま激烈な権力闘争の渦中にある。その闘争の中で、天皇訪中をめぐってどんなに複雑怪奇な動きがでても不思議ではないだろう。

台湾独報道（中国全人代黄順興常務委員発言）

5/9付「連合報」報道

P3

秘
無期限

ヤ―ヤ

※総第　052844号001公館宛　GM1764－03

※平成 4年 5月 22日 12時 5分 57秒受付

電信案

電信課長

大臣 / 秘書官	主管	※発電係 1 2
政務次官 事務次官 外務審議官 外務審議官 官房長	アジア局長 審議官 中国課長 首席事務官	起案 平成 4 年 5 月 22 日 起案者　電話番号 泉　2426

（※印欄内は電信課記入）

協議先

FAX

在　中国　大使 総領事 あて　外務大臣 発

件名
天皇訪中（台湾報道～全人代委員署名コラム）

主管・文書記号	※電番	大至急 至急 普通 (優先処理)	パターン・コード
亜中	第1396号		[redacted]

発送 在 転報	※転電番号	大使 あて	大至急 普通

（八〇字）

※

05284480　優先　TYUUGOKU　F電

GB-1　外務省　回覧番号

（注意）1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

（昭和六三・六・三十改正）

（三八〇字）

標記に関する交流協会台北事務所より9連絡（来電#767号）以下の通り。（関連報道別FAX信。）

「１９日付連合報は、中国全人代黄順興常務委員の「日本の天皇の大陸行きは変数が多い」と題する署名入りコラムを掲載しているところ要旨以下の通り。黄は約１０年前に大陸に亡命した台湾の立法委員で、最近では全人代において[redacted]三峡建設に反対して話題となった。本件コラムが何故連合報に掲載されたのか明らかでないが、中国のメディアからの転載ではないと思われる。

１．日中の国家交流のなかで異彩を放つ天皇の訪中について、実現するか否か不明確であり予測がつかない。

２．中国政府が初めて天皇訪中を招請したのは９０年４月に楊尚昆国家主席が竹川良一に述べた時が最初で、それから本年１月の渡辺外相に対する招請で６度目となる。これは前例のないことである。

３．当初、日本の世論はこれを肯定する様子だったが、全人代で尖閣列島を中国の領土と規定する領海法が通過し、また、一般人による対日戦争賠償要求の声が高まると、日本のマスコミ

には友好的でない言論が多くなった。また、自衛隊海外派兵についての中国の態度を日本政府は友好的でないと認識した。更に重要なのは何人かの有力な自民党議員が天皇訪中に反対していることで、中曽根、福田も消極的と言われている。

4．現在のところ、当初９０％以上だった日本の天皇訪中賛成世論は、３０％前後となった。訪中は遅くても７月以前に決定する必要があるが、日本政府の態度は曖昧である。５月１２日に海部が訪中した際、中国側はもはやこの問題を提起しなかった。

5．中国の民衆は過去の戦争を忘れているわけではなく、天皇訪中に熱心ではない。自分（黄）としては、最近、中国の一般人から天皇訪中を歓迎するという声を聞いたことがない。北京の人々は無関心である。

6．また、日本側が中国に対して天皇訪中時に中国国内で反日運動や発言が生じないよう保証せよと要求した噂があるが、事実だとすれば失礼なことである。日本政府も自国民に沈黙を要求する権利はないはずで、自国でできないことを他国に要求するのは無理かつ傲慢であろう。 ⊥ （了）

GM1765 - FAX信 p3

秘
無期限

Y－Y

※総第 052845号001公館宛 GM1765－03

※平成 4年 5月 22日 6時 0分 0秒受付

電信案

電信課長

大臣 秘書官
政務次官
事務次官
外務審議官
外務審議官
官房長

主管
アジア局長
審議官
中国課長
首席事務官

※発電係 1 2

起案 平成 4年 5月 22日

起案者 泉 電話番号 2426
(高田扱 2428)

協議先

(※印欄内は電信課記入)

FAX

在 中国 大使 総領事 あて 外務大臣 発

件名 天皇訪中(台湾報道～全人代署名コラム)

主管・文書記号 亜中

※電番 FAX信 FAX信

大至急 普通 至急 (優先処理)

パターン・コード

転電
転送 在
転報

※転電番号

大使・総領事あて

大至急 至急
普通 (優先処理)

(八〇字) 往電亜中券1396号別FAX信。

※

05284593 優先 TYUUGOKU F信

GB-1 外務省

回覧番号 ao1-FAX

(注意) 1枚目は、機械で処理しますので、折り曲げない様願います。

(昭和六三・六・三十改正)

GM1765 2

四大州大学

激動

92/5/19 連合報 (10面)

更為重要的是，日本衆議院今年六月將改選半數議席，由於自民黨勝算並不樂觀，上台以來在選舉中連續敗績的百濱首相，在人民心目中的地位將更形不利，屆時形勢所迫，可能要考慮內閣改組，拉攏幾個反對派的有力議員入閣，倘倘頂規位勢門老牌議員又都是不贊成日皇訪問中國大陸的。加上兩位前首相，中曾根康弘與福田紀夫，及部份財經界有力人士也對日皇訪問中國大陸持消極態度，各種因素，使地位不穩的百濱首相無法衡量此時日皇訪問大陸的利弊，日本天皇的訪問益形模糊迷離。

首在慶祝中（共）日邦交二十週年的各項活動正在進行，雙方高政要人的互訪更是頻繁，包括日本現任和前幾任首相，以及黨政領袖，中共方面即有李鵬、江澤民和外長錢其琛，還有預定五月廿五日往訪的全國人大委員長萬里等。明仁天皇的訪問中國大陸預定秋後，原本準備形成一場大喜大慶的盛舉。誰知道國際間的風雲變幻莫測，一波未平另波又起。

據推測，日本實成天皇訪問的民眾，已從當初的百分之九十，降到目前的百分之卅左右，而本案至重要在七月以前定案。然而做為主角之一的日方，對此一直未作明確的答覆。而邀請表示邀請的中共，在五月十二日接待來訪的日本前首相海部時，也不再提及此事。

中國人的感情不可侮。自從甲午戰爭以後，日本侵略者不斷給中國造成的災難，令中國人民深感痛絕，難以磨滅，對日皇訪問一事，在感情上並不熱中。我個人近月來就未曾聽到任何一個大陸百姓表示歡迎日本天皇來訪。對於一般北京人來說，日本天皇來不來，他們並不關心。

據近日傳到北京的消息，日本方面曾向北京提出，必須先證明仁天皇訪問中國大陸期間不得有反日的動作與聲音，如此消息無訛，將是國際間十分無禮的要求，日本在國內也無權要求老百姓淌嘴，自己國內都做不到，不能做的事，要求別國保證做到，豈不太過無理自大。（本文作者黃順興現任中共全國人大常委）

(3)

第 767 号	大至急・至 急・普 通	取扱注意 ・ ㊙
平成 4 年 5 月 19 日 15 時 40 分発	本文総頁数 2 頁	付属 / 頁
理事長	吉北事務所長	
転電 転報	局設 第 号	

件名

天皇訪中（報道振り）

１９日付連合報は、中国全人代黄順興常務委員の「日本の天皇の大陸行きは変数が多い」と題する署名入りコラムを掲載しているところ要旨以下の通り。黄は約１０年前に大陸に亡命した台湾の立法委員で、最近では全人代において[redacted]三峡建設に反対して話題となった。本件コラムが何故連合報に掲載されたのか明らかでないが、中国のメディアからの転載ではないと思われる。

１．日中の国家交流のなかで異彩を放つ天皇の訪中について、実現するか否か不明確であり予測がつかない。

２．中国政府が初めて天皇訪中を招請したのは９０年４月に楊尚昆国家主席が竹下登に述べた時が最初で、それから本年１月の渡辺外相に対する招請で６度目となる。これは前例のないことである。

3．当初、日本の世論はこれを肯定する様子だったが、全人代で尖閣列島を中国の領土と規定する領海法が通過し、また、一般人による対日戦争賠償要求の声が高まると、日本のマスコミには友好的でない言論が多くなった。また、自衛隊海外派兵についての中国の態度を日本政府は友好的でないと認識した。更に重要なのは何人かの有力な自民党議員が天皇訪中に反対していることで、中曽根、福田も消極的と言われている。

4．現在のところ、当初９０％以上だった日本の天皇訪中賛成世論は、３０％前後となった。訪中は遅くても７月以前に決定する必要があるが、日本政府の態度は曖昧である。５月１２日に海部が訪中した際、中国側はもはやこの問題を提起しなかった。

5．中国の民衆は過去の戦争を忘れているわけではなく、天皇訪中に熱心ではない。自分（黄）としては、最近、中国の一般人から天皇訪中を歓迎するという声を聞いたことがない。北京の人々は無関心である。

6．また、日本側が中国に対して天皇訪中時に中国国内で反日運動や発言が生じないよう保証せよと要求した噂があるが、事実だとすれば失礼なことである。日本政府も自国民に沈黙を要求する権利はないはずで、自国でできないことを他国に要求するのは無理かつ傲慢であろう。　（了）

92/5/19
連合報
10面

日天皇大陸行 變數多

吳淑玲

本報為中日邦交添異彩的日本天皇訪問中國大陸之行，傳聞迷離，前途未卜。

關於邀請日本明仁天皇訪問中國大陸，最初是九〇年四月中共國家主席楊尚昆接見日本船舶振興會笹川會長的談話中第一次提到。到今年日本渡邊外相訪問北京，中共高層證實明仁，已經是第六次表態了。

若以常態而論，（包括執政黨）邀請六次向另一個國家的元首提出邀請的動動腳趾上可以絕無僅有。然而，受邀請的日本政府，反應卻是模稜不定，數初化平方點感覺若無，興趣也傾向肯定。一時間中（共）日邦交翻得一片喜氣洋洋。

就在這個時候，北京全國人大常委會第廿五次大會卻通過了領海法，明確規定釣魚台列嶼（日本稱為尖閣列島）屬於中國版圖。中共人大會的此一舉動行動，都出乎日本政府意料之外。一時間猜測先指，即將外交關係，向中共表示強烈抗議。風雲供應也出現許多不友好的言論。明仁天皇訪問中國大陸計畫頓起波折。

九一年三月下旬，北京召開全國人大，王功和王兆生兩代表分別辦以，聯合其他代表提案，向日本政府索取侵華期間，造成民間的損害賠償。同一時期由原北京大學講師高增所發起的中國民間向日索賠民人會等運動，也在北京展開，迅即經由世界各地傳播媒介廣泛報導。此時又逢日本派遣自衛隊參加聯合國和平部隊的議案在國會中辯論，中共對此公開表示保留。終使日本當局認定，中國大陸所出現的一連串事件，無非是中共的不友好表態。

更為重要的是，日本參議院今年六月將改選半數議席，由於自民黨勢算非不樂觀，上台以來在連串中連續敗績的宮澤首相，在人民心目中的地位將更形不利，屆時形勢所迫，可能要考慮內閣改組，把頑強保守反對派的有力議員入閣，像保守派的重鎮員文部是不贊成日皇訪問中國大陸的。加上兩位前首相，中曾根康弘與福田赳夫，及部份財經界有力人士也對日皇訪問中國大陸持消極態度，各種因素，使地位不穩的宮澤首相無法衡量此時日皇訪問大陸的利弊，日本天皇的訪問益形撲朔迷離。

目前在慶祝中（共）日建交二十週年的各項活動正在進行，雙方當政要人的互訪更是頻繁，包括日本現任和前任首相，以及執政黨中共方面即有李鵬、江澤民和外長錢其琛，還有預定五月廿五日在訪的全國人大委員長萬里等。明仁天皇的訪問中國大陸須定狀後，原本撲朔形成一場大喜大慶的歡樂氣。誰知道風雨間的風雲變幻莫測，一波未平另波又起。

據報載，日本贊成天皇訪問的民眾，已從當初的百分之九十，降到目前的百分之卅左右，而本案至遲要在十月以前定案。然而做為主角之一的日方，對此一直未作明確的答覆。而通常表示態度的中共，在五月十二日接待來訪的日本前首相海部時，也不再提及此事。

中國人的感情不可侮。自從甲午戰爭以後，日本侵略者不斷給中國造成的仇恨，今中國人民深感痛絕，難以癒合，對日皇訪問一事，在感情上並不歡迎。我個人近月來就未曾聽到任何一個大陸百姓表示歡迎日本天皇來訪。對於一般北京人來說，日本天皇來不來，他們並不關心。

據近日傳到北京的消息，日本方面曾向北京提出，必須保證明仁天皇訪問中國大陸期間不得有反日的動作與聲音，如此消息無誤，將是國際間十分無禮的要求，日本在國內也無權要求老百姓做這，自己國內都做不到，不能做的事，要求別國保證做到，實不太過無理自大。（本文作者黃淑玲現任中共全國人大常委）

香港紙（大公報・明報）報道

5/25付

file 天皇訪中

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－035

大臣	政務次官
事務次官	外審議官
外審	儀典長
北大使	経大使
調審	総括審議官
外務報道官	研修長
総合外交政策局	
文化交流・在外邦人保護審議官	
警察庁	参事官
外務報道官	参事官（総括）、内閣外政審議室
文化交流・在外邦人保護審議官	審議官（一）、二
参事官	参事官（政策）、保健衛生対策室、旅券課、外国人課
領事局長	審議官（地球）、（中東）、二
	参事官（北米）、（東南アジア）、西一
北米局長	審議官（一）、二、保健衛生対策室、地球環境対策室
中南米局長	参事官（一）、二
欧州局長	審議官（西欧）、洋一
	西東二
アジア大洋州局長	参事官（一）、二、アジア太平洋地域協力室、アジア太平洋地域協力室一、二
経済局長	次長、総括参事官、経済連携室、経済連携室二
	参事官（経済）、漁業室、国際経済紛争処理室一
	経済安全保障室、エネルギー資源室、国際経済紛争処理室二
	参事官（海洋）、審議官（準備）
経済協力局長	審議官（政策）、開発政策課、無償資金協力課
	審議官（調査）、技術協力課、有償資金協力課
条約局長	審議官（条約）、法規課
国際法局長	審議官（経済）、人権人道課
	審議官（軍縮）、軍縮不拡散・科学部、軍縮不拡散・科学部参事官、国際安全保障協力室
科学審議官	科学原子力政策室
情報調査局長	参事官（情報）、（分析）、調査企画課
	分析第一課、分析第二課

総番号　R１０５８５１

月　２５日　[redacted]　香港発　亜中　主管

平成　４年　５月　２５日　本省着

外務大臣殿　　折田総領事

日中関係（てん皇訪中問題：報道）

第６２４号　至急（ゆう先処理）[redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＨＮ１８２８－０１）

２５日付当地各紙は、万里全人代常務委員長の訪日に関する報道の中で天皇訪中問題に触れているところ、要旨以下のとおり（記事別ＦＡＸ信）。

１．大公報（大陸系紙、社説に代わる署名入りコラム）

（当館注：尖閣に対する我が国の有効支配に言及している点要注目）

（１）天皇訪中について日本国内の意見が分かれている。ある者は天皇が訪中すれば日本軍国主義反対のデモ等不愉快な事件に天皇が遭遇するとか、更には、天皇が中国の国内の政争に巻き込まれるとまで言う者すらいるが、これらは全く杞憂に過ぎない。日本の報道によれば、自民党の中にもこのような考えの持ち主がいる由だが、全く理解に苦しむ。このことは日本人の中に中国のことを十分理解していない人がいることを示すものである。あるいは、別途の下心を有する者もいるのかもしれない。

（２）最近日中間には尖閣諸島（中文；釣魚島）の主権帰属問題、及び全人代で一部の地方代表が対日民間賠償要求を提起したとの問題がある。尖閣問題については、江沢民は、鄧小平がこの問題に対する中国政府の立場と主張を全面的に明らかにしていると述べている。この立場と主張には変化はない。戦争賠償については、中国政府は1972年の中日共同声明において立場を明らかにしており、この立場に変わりはない。

２０年来中国の日本に対する立場はこのように一貫している。日本は実際上釣魚島をコントロールしている。人民代表が民間戦争賠償を提起することについては、彼らは国会議員としてこのような提起を行う権利を有しており、驚くには値しない。

２．明報（中立系紙：ロイター電をキャリー）

万里委員長は、本日から訪日する。天皇訪中については日本側は婉曲に断るであろう。日本は中国人民が戦争賠償を要求することを心配している。日本の報道によれば、外務省はこれまで天皇訪中に積極的であったが、自民党の反対者の批判の下で沈黙している。外務省は宮沢総理の政治決断に頼っているが、この問題に結論が出るのにはなお時間がかかろう。

別ＦＡＸ信と共に中国に転電した。　（了）

5

ＦＡＸ信

		－

総 番 号　Ｒ１０５８５３　　主　管

月　２５日　[redacted]　香　港　発　亜　中

平成　４年　５月　２５日　[redacted]　本　省　着

外　務　大　臣　殿　　折　田　総　領　事

日中関係（てん皇訪中問題：報道）

ＦＡＸ信　至急（ゆう先処理）　[redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＨＮ１８２９－０１）

萬里啓程訪問東瀛
日將婉拒明仁訪華

擔心中國人民要求戰爭賠償

明 報
25 MAY 1992

全國人大常務委員會委員長萬里，周一啓程赴日訪問。預計日本主人將以隆重相待，但會婉言謝絕中國邀請日皇明仁訪華之議。

據透社消息，在八天訪日期間，萬里將和日本首相宮澤喜一和日皇會晤。萬里此行，係今年中日建交二十周年慶祝活動之一。

和中共總書記江澤民上月訪日一樣，萬里可能也將會在邀請日皇訪華這個具有象徵性問題上，遇到較大阻力。

宮澤曾向江澤民表示，日本政府將認眞考慮日皇訪華，但强調這要在「中國人民都歡迎，日本人民也都贊成」的情況下進行。

日本內閣官房長官和政府發言人加藤紘一說，「如果日皇訪問變爲一場政治對峙，這將很不好。」

一九八九年「六四事件」後，日本曾不顧西方國家的孤立中國政策，積極支持北京，但日本政界對北京近來的反日表現，甚感惱怒。

來自執政的自民黨議員擔心，明仁訪華，可能促使中國人大提出要日本付出一千一百八十億美元，以賠償中國民間在戰時蒙受的損失。

中國還宣布了一條新的領海法，宣稱位於沖繩以東的釣魚台列島爲中國領土，這也使自民黨員惱怒。東京認爲，該羣島屬於日本。

此外，江澤民上月批評日本媒體在聯合國名義下，派兵加入維持和平部隊。東京對此也不滿。

很多自民黨的上層領導層擔心，日皇在訪華時，會因日軍侵華，特別是南京大屠殺無辜燒殺，而受到批評。

另據日本的傳媒稱，日本外務省一向對日皇訪問大陸態度積極，但在當時期作政治決斷解決此問題，但恐還要一段時間才可能有結論。

自民黨反對者的批評下，最近也保持沉默。外務省依賴首相宮澤喜一在

縱橫談

萬里訪日與中日關係

訪日一周促進友好

全國人大常委會委員長萬里，定今天到日本進行友好訪問，為時一周。

今年四月，中共中央總書記江澤民訪問了日本，與日相宮澤舉行了會談，並會見了日本天皇。現在萬里委員長前往，作為兩國領導人相互訪問的一環，以紀念今年兩國關係正常化二十年，萬里是否邀天皇訪華受到注視。

不可否認，二十年來，中日關係在兩國政府和人民的共同努力下，確實取得了長足的發展，在許多領域方面的合作，比其他國家更見密切、深入，取得了顯著的成果。本來，發展同日本的長期穩定的睦鄰友好合作關係是中國外交政策的一項重要內容。從廣義看，兩國關係的發展也是對亞洲和世界和平、穩定和發展的積極貢獻。

天皇訪華 日本有分歧

江澤民四月訪日，曾邀請明仁天皇訪華，日本對此表示深切謝意，將認眞考慮，但日本政府和自民黨內部對明仁天皇是否應邀今年訪華一事，卻出現了分歧。一派主張應當去，一派仍主張「慎重」，現要求宮澤作出決斷。

日本有人擔心明仁天皇訪華，可能會遇到反日本軍國主義示威等不愉快事件，令天皇尷尬。這一點，江澤民在訪日時透露過，中國不會出現這樣的事情。事實上，這顯然是杞憂。至於有人擔憂天皇被捲入中國之內的政爭，更屬「天方夜譚」式的憑空想像。從日本報上看到自民黨內竟然還有人有這樣的想法，令人難以理解。然亦說明日本還有一些人不了解中國。至於是否還有其他用意，則屬於另一個問題。

至於邀請天皇訪華，江澤民在訪日期間的記者招待會上說得清楚，完全是出於希望兩國世代友好的願望，相信天皇訪華一定會促進中日關係的積極發展。

最近在中日之間出現了的問題，一是釣魚島的主權歸屬，一是上次人大大會有的地方代表提出民間對日本要求戰爭賠償。

對於釣魚島問題，江澤民說，鄧小平曾就釣魚島問題全面闡述了中國政府的立場和主張。這一立場和主張沒有變化。至於戰爭賠償，中國政府早在一九七二年的中日聯合聲明中闡明了政府立場，這一立場沒有變化。

日報促記取歷史教訓

二十年來中國對日本的立場一貫如此。日本實際在控制着釣魚島。至於人大代表提出民間的戰爭賠償，作為國會議員亦有權這樣提，不值得大驚小怪。

五月二十一日的《朝日新聞》社評值得一讀，該報主張天皇作為友好的象徵應該訪華。社論說：「一九九四年將是日清戰爭（按：即甲午戰爭）一百周年。回顧百餘年的日中關係，除了最近的二十年之外，遺憾的是，不能說是友好的歷史。從日清戰爭到日中戰爭，兩國多次激烈衝突，即使戰後遺症也在持續」。該報社論又說：「坦率地說，不可否認，我國（日本）對反省過去的歷史及學習歷史的教訓，尚欠缺謙虛的態度，必須批判肯定侵略的錯誤想法並取消妨礙友好的因素。天皇雖受韓國邀請，但韓國年底總統大選，在日中建交二十周年的大義名分之下，天皇先去中國訪問並無不自然。作為友好象徵的天皇訪中，乃是重視亞洲的象徵的第一步。」

施君玉

HN1829 1
往電字624号別FAX信

大公報
25 MAY 1992

(3)

文物返還要求（当地報道）

（5/30付「明報」）

6/1 来

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－019

大臣	政務次官	事務次官	外務審議官
外務大臣秘書官	儀典長		
北米局長	経済局長	環境審議官	査察大使
総合外交政策局長	総合安全保障戦略大使	外務報道官	
総合外交政策局総務課長	国際社会協力部長	文化交流・在外同胞支援室長	
領事局長	領事局政策課長	領事局旅券課長	領事局外国人課長
大臣官房審議官（領事担当）	大臣官房審議官（国際情報統括官組織担当）	大臣官房審議官（国際情報統括官組織担当）	大臣官房審議官（国際情報統括官組織担当）
大臣官房参事官（国際情報統括官組織担当）	大臣官房参事官（国際情報統括官組織担当）	大臣官房参事官（国際情報統括官組織担当）	大臣官房参事

fax 天皇訪中

7

FAX信

		－

総番号　R110671　　主管

月　1日 [redacted] 香港発　亜中

平成　4年　6月　1日 [redacted] 本省着

外務大臣殿　　折田総領事

てん皇訪中（文物返かん要求：報道）

FAX信　至急（ゆう先処理） [redacted]

（以下FAX送信　HN1851－01）

再送メッセージ

明 報 30 MAY 1992

童增等擬建議日皇明仁 將皇室奪來文物還中國

【本報專訊】發起中國民間向日索償運動的一批中國法學界人士，最近計劃向日本方面遞交建議，要求日皇明仁訪華時向中國提供一份清單，將日本皇室財產中屬於二次大戰時期從中國掠奪的珍貴文物歸還中國，在對華賠償問題上起帶頭作用。

積極參與該項活動的北京青年法學家童增，在接受本報記者訪問時表示，據歷史資料記載，日本歷次對外戰爭中獲勝而取得的財富，均有部分歸爲日皇所有。例如甲午戰爭後，日本向中國索取二億兩白銀，其中有百分之六撥歸皇室。雖然一九四五年日本立法將皇室財產歸爲國有，但其中文物、古董部分仍作爲皇室財產世襲保留。

童增表示，據他們了解，現時日本的皇室財庫對於皇室的財產數量及來源均有清楚記錄，其中包括日軍在二次大戰期間從中國奪得而獻給日皇的珍貴文物。

據悉，童增等一批法學界人士現正展開進一步搜集資料，以便日後向日本方面提出正式的要求。童增表示，他們希望日皇他日訪華時，不光是在口頭上對中國人民道歉，而要做出一些實際行動。

中國全國人大常委會委員長萬里現時正在日本訪問，並作爲紀念中日邦交正常化二十周年的一項重要交流。但萬里在東京期間，並沒有再提及邀請日皇訪華一事。

HN185 1

(3)

6/10付 共同電

（二重橋の動き、皇室財産の中国への還元の動き）

◎本件については橋本大使より共同本社にTEL、注意を喚起あり、共同側もよく解ったとの訂あり。

共X3T382外信64S②完①
◎皇室の〝中国財産〟返還を
北京市民グループが推進
【編注】朝刊メモ（13）の（イ）「本記」（河野共同記者）（50行）

【北京10日共同】日本の戦争責任に対する民間賠償請求運動を進めている北京市の前大学講師童増さんら市民グループは十日、日清戦争以来、日本が中国から奪った財産の中に皇室が所有する分があるとして、返還要求の準備をしていることを明らかにした。

この運動が広がりを見せれば、日中間の懸案となっている天皇訪中問題に、新たな波紋を生じることになりそうだ。

童さんらは、日清戦争で中国が日本に支払った銀二億両（当時約三億円）の六％が皇室のものとなるなど、対中戦争で得た戦利品の一部は、献上品などの形で皇室に渡ったと主張。現在でも美術品や文物、骨とうなどが皇室に受け継がれているはずとしている。

（続）㊥（24）92 6 10 16 20
6394

共X3T383外信64S②完②
◎皇室

童さんらは、中国側の生存者の証言を集めたり、図書館や資料館などに残されている文献を整理するなどして、略奪品のうち皇室に渡ったと思われるもののリストアップを進める。

しかし、決定的な資料は日本側が保存しているとして、皇室財産のうち、中国から略奪したと思われる分のリストをまず中国側に提出するよう求めていくとしている。

中国は日中共同声明で日中戦争に対する国家賠償請求権を放棄しているが、童さんらは個人の損害に対する賠償は日本に請求できると主張。先の全国人民代表大会（国会に相当）でも多くの代表がこれに賛同し、法案としてこれを採択するかどうかが継続審議扱いとなっている。

（了）㊥（23）92 6 10 16 20
6394

平成4年6月11日
京都新聞
(朝刊4面)

皇室の〝中国財産〟返還を

北京の市民団体、要求へ

【北京10日共同】日本の一市民グループは十日、日清戦争以来、日本が中国から戦争責任に対する民間賠償請求運動を進めている北京市の前大学講師童増さんら、奪った財産の中に皇室が所有する分があるとして、返還要求の準備をしていることを明らかにした。

この運動が広がりを見せれば、日中間の懸案となっている天皇訪中問題に、新たな波紋を生じることになりそうだ。

童さんらは、日清戦争で中国が日本に支払った銀二億両（当時約三億円）の六％が皇室のものとなるなど、対中戦争で得た戦利品の一部は、献上品などの形で皇室に渡ったと主張。現在でも美術品や文物、骨とうなどが皇室に受け継がれているはずとしている。

童さんらは、中国側の生存者の証言を集めたり、図書館や資料館などに残されている文献を整理するなどして、略奪品のうち皇室に渡ったと思われるもののリストアップを進める。

しかし、決定的な資料は日本側が保存しているとして、皇室財産のうち、中国から略奪したと思われる分のリストをまず中国側に提出するよう求めていくとしている。

中国は日中共同声明で日中戦争に対する国家賠償請求権を放棄しているが、童さんらは個人の損害に対する賠償は日本に請求できると主張。先の全国人民代表大会（国会に相当）でも多くの代表がこれに賛同し、法案としてこれを採択するかどうかが継続審議扱いとなっている。

6/11付 ワシントン・タイムズ 記事

15/08:44 [redacted] 9912 01/08 P01 R121148

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検関班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－034

大臣 政務次官 儀官 官房長 外務大臣秘書官 外務大臣審議官 外務大臣審議官 経済局長 北米局長 経済局審議官 総合外交政策局審議官 外務報道官 条約局長 国際法局長 総合外交政策局参事官 総合外交政策局参事官 総合外交政策局参事官

１１日付ワシントンタイムズ紙はPKO法案の引き起こしている日韓両国間の政治的緊張の結果、今年中に天皇陛下が韓国を訪問される可能性が薄くなること、訪中の予定には特に影響がなさそうなことなどを伝える記事を７面に掲載しているところ、記事を別FAX信する。

本電のみ在米公館（除ワシントン、国連代）、
別FAX後とも ~~在韓一般~~ 韓国、中国に転電乞う。

（了）

FAX信

		－

総番号　R121154　　主管

月　12日 [redacted]　米国発　報　際

平成 4年　6月　13日 [redacted]　本省着

外務大臣殿　　栗山・大使

てん皇へい下のアジア訪問

FAX信　至急（ゆう先処理） [redacted]

（以下FAX送信　WS8194－01）

WS8194 1

The Washington Times
6·11·92 A7

往電第 673 号別FAX信

Japanese peacekeeping bill may kill emperor's Korea trip

By Edward Neilan
THE WASHINGTON TIMES

TOKYO — Political tensions linked to Japan's commitment to send peacekeeping troops overseas are eroding the trend toward steadily improving ties between Japan and South Korea.

These tensions make it less likely Japanese Emperor Akihito will visit Seoul this year.

The peacekeeping bill, which would send troops overseas for the first time since World War II, has made imperial visits abroad a controversial issue, reviving wartime memories of Japanese armed forces carrying out aggressive war in the name of the emperor.

A visit to China by the Japanese emperor seems to be in less trouble, meaning plans to launch "imperial diplomacy" in Asia this year to improve Tokyo's image and project leadership — both goals endorsed by the United States — can go forward.

China and South Korea were the main victims of the Japanese army in World War II. Tokyo has long sought a way to make further amends for the excesses — beyond apologies, goodwill exchanges and high levels of outright economic aid and investment.

One high-profile event that had been on the front burner for a Seoul visit — a tennis match between the emperor and South Korean President Roh Tae-woo — came up after the emperor and Crown Prince Naruhito defeated President Bush and U.S. Ambassador Michael Armacost in a match in Tokyo in January.



Emperor Akihito

Diplomatic circles speculated whether the emperor might play a symbolic match with Mr. Roh, who had earlier played tennis with Mr. Bush in Washington.

At a Tokyo reception recently, a Japanese official in charge of such matters was asked about the prospect and he confirmed that a tennis match had been discussed "favorably" with South Korean diplomats.

In the case of South Korea, former prime minister Yasuhiro Nakasone believes that Emperor Akihito should visit Seoul before visiting China. It would be the emperor's first foray abroad since succeeding his late father, Emperor Hirohito, who symbolized Japan's past militarism.

But because this is a presidential election year in South Korea and because of heightened anti-Japanese feelings surrounding the current legislative support to dispatch Tokyo's peacekeeping troops overseas, there is agreement not to push the issue.

Another former Japanese prime minister, Noboru Takeshita, supports China as the first stop of an imperial trip abroad.

Wan Li, chairman of the standing committee of China's National People's Congress, was in Tokyo recently and urged the emperor to visit China this year.

A few weeks earlier, Jiang Zemin, general secretary of the Chinese Communist Party, also visited Japan and extended a similar invitation.

A Japanese imperial visit would spur Japanese investment interest to fill the gap left by a general American and European wariness since the Tiananmen Square massacre in 1989.

Many Japanese leaders will visit Beijing this autumn to commemorate the anniversary of the normalization.

Japan's Ministry of Foreign Affairs, which usually is less than enthusiastic regarding relations with socialist states, is said to be eager to see the emperor visit China. It believes the visit would be helpful in consolidating Japan's Asian diplomacy.

(3)

6/17付AFP（東京発）報道

GLGL
o0173 ASI/AFP-AI13------

u i Japan-Emperor 06-17 0199

Emperor's trip to China possible after cooling off period: premier

TOKYO, June 17 (AFP) - A "cooling off period" is necessary for Japan to decide on a proposed visit to China by Emperor Akihito, Prime Minister Kiichi Miyazawa said Wednesday.

China has repeatedly asked Japan to accept its invitation for the emperor to visit China this year to mark the 20th anniversary of normalisation of relations between the two countries.

"I think it is desirable for his majesty to go there," Miyazawa said. "But there are various arguments in the country so that a cooling off period is necessary."

"At the moment, we are in that cooling off period," the premier said.

There are fears within the ruling Liberal Democratic Party (LDP) that an unprecedented trip to China by a Japanese emperor might be used politically although his role has been limited to ceremonial duties under Japan's postwar pacifist constitution.

Some LDP members are also cautious due to a territorial dispute with China over a group of islets in the East China Sea and annoyed at China's demands for compensation for individuls who suffered from Japanese aggression during World War II.

ps/mb
AP 170846 GMT JUN 92

GLGL
00318 ASI/AFP-AR35------

天皇訪中に関する発言に国内保守派が反発と

u i Japan-emperor 06-18 0385

Conservatives oppose Japanese emperor going to China 米しぐれ.

TOKYO, June 17 (AFP) - Mention by the prime minister of a possible visit to China by Japan's Emperor Akihito later this year prompted objections Thursday from some conservative Japanese politicians and business leaders.

Their objections followed Kiichi Miyazawa's statement Wednesday that a trip to China by the emperor would be "desirable."

Miyazawa acknowledged "various arguments" in Japan on the subject, and said "a cooling-off period is necessary." However, his remarks were widely interpreted to mean that the emperor could go to Beijing this year if a domestic political consensus can be reached.

But former education minister Masayuki Fujio said that such a trip would draw the emperor into a political role contrary to Japan's post-war constitution, which limits him to ceremonial duties.

"If His Majesty's position is used for politicial purposes, Prime Minister Miyazawa will be held responsible for that," said Fujio.

He also claimed that China exports "nuclear arms," but provided no evidence for the allegation.

Former foreign minister Taro Nakayama, for his part, noted that the emperor visited southeast Asia in September on his first overseas tour since his enthronment in 1989 and should choose Europe for his next tour to "strike a balance."

China has repeatedly asked Japan to accept its invitation for the emperor to visit China this year to mark the 20th anniversary of the normalisation of relations between the two countries.

Diplomatic chores by Emperor Akihito and his father, the late Emperor Hirohito, have often included Japanese expression of regret for its wartime atrocities in neighboring Asian nations, irking some conservatives.

Some members of the ruling Liberal Democratic Party are also wary because of a territorial dispute with China over the Senkaku group of islets in the East China Sea, and angry over China's demands for wartime compenation for individuls who suffered from Japanese aggression.

Gaishi Hiraiwa, chairman of the Federation of Economic Organisations, said it was up to the prime minister to decide on the trip. "But I wish the premier would be cautious in making a judgment," Hiraiwa added. "Public opinion has not been formed on the issue."

sps/mig
AFP 181302 GMT JUN 92

北京放送・人民日報等報道ぶり　6/18

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写

[redacted] [redacted] 08－035

大臣	政務次官	事務次官	外審	外審	儀典長	官房長
北大使	経大使	欧大使	査察大使	総括審議官	外務報道官	研修長
総合外交政策局長	人権人道大使	領事局長	在外邦人保護審議官	儀典長	警備局長	国際テロ対策室長
外務報道官	参報道官	内閣外政審議官				
文化交流・日本語教育課長	審一	二				
旅券課長	参政	保	対	旅	外	
アジア大洋州局長	参北東	審地球規模課題審議官	一	西	二	
北米局長	審	一	二	保	地	
中南米局長	参	一	二			
欧州局長	審	西	一	洋	二	
	西	東	二			
中近東アフリカ局長	参	一	二	ア	一	ア 二
経済局長	次	総	経	途	二	
	参	経	漁	国	一	
	経	エ	国	一		
	安	ネ	二			
	参海	審準				
経済協力開発課長	審	政	国	開	無	
	審	調	技	有	理	
条約局長	審	条	協	規		
国際法局長	審	政	経	人		
	審	軍	社			
科学審議官	科	原				
情報調査局長	参	情	分	調		
	企	安				

総番号　R１２４９２３　　主管

月　１８日 [redacted]　中国発　亜中

平成　４年　６月　１８日 [redacted]　本省着

外務大臣殿　　橋本大使

てん皇へい下の訪中（当地紙報道振り）

第２３１９号　至急（ゆう先処理） [redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＰＫ０２４１－０１）

１８日付当地紙に掲載されている天皇陛下訪中関連記事は以下のとおり。（記事は別ＦＡＸ信）

「宮沢首相講演発表時に天皇訪中は可能と述べる」

共同によれば、日本の宮沢首相は、１７日、プレスセンターで講演を行った際、天皇の今年秋の訪中についてふれ“陛下の訪中は可能”と述べた。

これは日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な意思表示をしたものである。（人民日報６面）（新華社電をキャリー、北京日報３面、光明日報４面にも同じ記事）

（了）

9

ＦＡＸ信

総 番 号　Ｒ１２４９２６　　主　管

[redacted]　中　国　発　亜　中

平成　４年　６月　１８日　本　省　着

外 務 大 臣 殿　　橋 本　大 使

てん皇へい下の訪中（当地紙報道振り）

ＦＡＸ信　至急（ゆう先処理）[redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＰＫ０２４２－０１）

PK0242 1

往電第2319号別FAX信

宫泽首相发表讲演时说
天皇访华是可取的

新华社东京6月17日电　据共同社报道，日本首相宫泽喜一今天中午在东京内幸町日本新闻中心讲演，谈到天皇今年秋天访问中国问题时说："陛下前往是可取的"。

这是日本首相首次对天皇访华问题作出明确表态。

人民日報（6）

宫泽首相说
天皇访华是可取的

新华社东京6月17日电据共同社报道，日本首相宫泽喜一今天中午在东京内幸町日本新闻中心讲演，谈到天皇今年秋天访问中国问题时说："陛下前往是可取的"。

这是日本首相首次对天皇访华问题作出明确表态。

光明日報（4）

天皇访华可取
宫泽首次表态

新华社东京6月17日电　据共同社报道，日本首相宫泽喜一今天中午在东京内幸町日本新闻中心讲演，谈到天皇今年秋天访问中国问题时说："陛下前往是可取的"。

这是日本首相首次对天皇访华问题作出明确表态。

北京日報（3）

（3）

RF 4.6.19

▽日本関係

◎宮沢首相、天皇陛下訪中へ積極姿勢

北京放送報道

（北京放送十八日＝ＲＰ）宮沢日本首相は十七日正午、東京内幸町の日本プレスセンターで演説し、天皇陛下の今秋の中国訪問問題に触れて、「陛下がおいでいただくことが望ましい」と述べた。これは日本の首相が初めて天皇訪中問題について明確な態度表明を行ったものである。

ーアー

◎江沢民総書記、松下電器社長と会見

【ＲＰ＝東京】十八日の新華社通信によると、中国共産党の江沢民総書記は同日、北京で、松下電器産業の谷井昭雄社長と会見し、同社がビデオ・レコーダー技術を中国側企業に移転する契約を結んだことを祝った。

会見には何光遠中国機械電子工業部長が同席した。

契約は十七日に締結されたもの。

ーＴー

6/16付オハイル・スターブレティン紙記事

亜西2

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

電信写 [redacted] [redacted] 08－019

大臣	政務次官	事務次官
外務大臣	外務審議官	外務省参与
北大使	経大使	環審議官
米大使	経審議官	総括審議官
外務報道官	参事官	報道課長
総合外交政策局長	審議官	一等書記官
領事移住部長	参事官	政策課長
	審議官	保健医療対策室長
	参事官	旅券課長
アジア大洋州局長	審議官	東南アジア第一課長
	参事官	東南アジア第二課長
北米局長	審議官	日米安保条約課長
中南米局長	参事官	中南米第一課長
欧亜局長	審議官	西欧第一課長
	参事官	東欧第二課長
国際法局長	参事官	条約課長
	参事官	国際協力室長
経済局長	次長	総務課長
	参事官	経済連携課長
	参事官	国際経済第一課長
	参事官	国際経済第二課長
	参事官	経済安全保障室長
	参事官	海洋室長
	審議官	準備室長
経済協力局長	審議官	政策課長
	審議官	開発協力企画室長
	審議官	無償資金協力課長
	審議官	技術協力課長
	審議官	有償資金協力課長
条約局長	審議官	条約課長
	審議官	協定課長
国際法局長	審議官	経済条約課長
	審議官	人権人道課長
国際社会協力部長	審議官	軍縮不拡散・科学部参事官
	審議官	軍縮不拡散・科学部軍縮課長
科学技術参事官	審議官	科学技術政策課長
情報通信課長	参事官	情報通信政策課長
	参事官	情報通信課長
	企画官	安全保障政策室長

総番号 R125819 主管

月 18日 [redacted] ホノルル発 亜中

平成 4年 6月 19日 [redacted] 本省着

外務大臣殿 法眼総領事

てん皇へい下の訪中問題（報道）

第463号 [redacted]

18日付ホノルル・スターブレテイン紙は「MIYAZAWA BACKS EMPEROR'S CHINA TRIP」と題して、てん皇へい下の訪中に関するミヤザワ総理の発言を報じているところ、要旨次のとおり。

ミヤザワ総理は17日、新聞発行編集者協会の集まりで「てん皇へい下が中国を御訪問されることが望ましい」と述べた。

日本では、てん皇へい下の訪中について種々議論されている。一部の人々は、てん皇へい下の訪中は、第二次大戦の責任に対するてん皇へい下による謝罪、あるいは戦争のひ害に対する補償の要求に結び付きかねないと主張して反対している。中国は、公式に何回もてん皇へい下を招待したいと申し出ているが過去にてん皇へい下が中国を訪問したことはない。

同記事を別商用ファクスにて送付する。

本電のみ米に転電した。（了）

通番	1159HL-02	平成4年6月18日付
亜中	宛	在ホノルル総発
件名	天皇陛下の譴問題(報道)	

往電第463号別商用FAX

1159HL-1

Thursday, June 18, 1992 ■ Star-Bulletin A-14

Miyazawa backs emperor's China trip

TOKYO — Sending Emperor Akihito on a historic but controversial goodwill trip to China this fall was endorsed for the first time yesterday by Prime Minister Kiichi Miyazawa.

"It is desirable that his majesty make the visit," Miyazawa said at a meeting of the Japan Newspaper Publishers and Editors Association.

There is considerable debate in Japan about whether the emperor should make the trip. Some argue it may only reopen old wounds from World War II and lead to renewed calls for the emperor to apologize for Japan's wartime actions or even to demands for reparations.

Chinese officials have repeatedly extended invitations for the emperor to visit the country. No Japanese emperor has ever visited China.

1159 HL-2

11、石墨の動き（含、石墨新聞記事）

右翼「[redacted]」の抗議

5/11

中国課長
首席事務官
総務班長

取扱注意

天皇訪中に関する右翼団体よりの申入れ

平成４年５月11日

中　　国　　課

１１日、[redacted]他２名（[redacted]）が来訪し、天皇訪中中止を申入れ越したところ、先方発言中注目される点次の通り。

１．天皇は在位中は一切外遊を行なうべきではないというのが[redacted]の考え方であり、今後かかる考えに従い運動を進めて行く心算。皇太子時代の外遊は差支えないが天皇に即位した以上は国の祭祀に専念すべきである。

２．渡辺副総理外相は去る９日沼津市の講演会席上、天皇訪中につき前向きの発言（別紙切抜）を行なっているが、外務省を始め政府党関係者が慎重に検討中と述べている際に、何故かかる中国側に媚びた発言を行なうのか。外務省の上層部が何故かかる渡辺大臣の発言にクレームをつけないのか。かかる発言からテロを招くことになるのであり、かかる発言は国賊的行為である。

[redacted]について

（警察庁公安2課からの聴取）

[redacted]

社説

させられる。

事故が起きた車両のモーターは、四本のボルトで台車に固定されているはずだった。ところが、そのうちの二本が走る前からはずれていたらしい。それで二七〇キロといった高速で走り続ければ、モーターがガタついてその一部がはずれるのは不思議ではない。

今回は、落下した一部がはねて圧縮空気ホースを切断し、緊急ブレーキが作動、という経過をたどった。その結果、立ち往生しただけで、乗客の安全には被害なしですんだとも言える。

だが、脱落部品が空気ホースを切断するかわりに、ブレーキ部分そのものに被害を与えていたら。あるいは車輪部分に損傷を与えていたら。さらに、一九〇キロではなく二七〇キロ走行中の出来事だったら……。

ならなかったのではないか」として、対立している。JR東海側からは、メーカーの責任を強調する発言もなされている。

事故が起きると、いつもだれのミスか、責任はどこにあるのか、が問題になる。だが、第一になされるべきは、どこの責任かを問うことよりも、なぜこのような不測の事態が起きたか、そしてどうすれば再発を防げるか、の究明である。

どこで、なぜ二本のボルトがなくなったのかは、今後の調査を待たねばならない。だが、再発防止の工夫は今すぐでも考える余地はあるのではないか。

最大のポイントは、検査体制だろう。旧国鉄時代は、検査担当の技術職員が製造段階でチェックに当たっていた。私鉄の多くも、車両本体をかぶせると検査しにくくなる部分については、その前に技術職員が出

に困難だ。だが、どのような巨大システムも人の手で作り上げられる。そこに、常に人為的ミスの入り込む余地がある。

それをいかにゼロに近づけるか、それでもミスがあった場合に大事故につながる危

正確に、多数の人を運ぶことだが、中でも「安全」が最優先であることは言うまでもない。今回は「安全」が損なわれなかったことを幸いとして、二度と繰り返さないための努力を尽くしてもらいたい。

医療法を患者中心に変えよう

医療界の憲法と呼ばれる医療法を抜本改正するための国会審議が大詰めを迎え、与野党間で法案修正作業が始まった。

いまの医療法は敗戦から日の浅い一九四八年に作られた。病院と診療所の分類体系など、今から見れば実に幼稚だ。法律に基づいて政・省令で決められる病室の広さや看護基準も、当時の日本の貧しい現実にあわせられた。その意味では、理想や息想にそしい法律である。

今回の改正案では、「慈法」にふさわしく第一条に「理念」が書き込まれた。しかし、医療にとって最も重要な「インフォームド・コンセント」、つまり、十分に説明し患者の納得を得て治療を進める、という基本思想が欠落している。

長い間、治療の中心はけがや伝染病などの急性病だった。激しい痛みや高熱を耐えるのが精いっぱい。医師にすべてをまかせるのが当然、と多くの人は考えた。

ト・コンセントを中心にすえ宣言」を採択した。こうした法律は、米ミネソタ州では、に、そしてスウェーデンでは九〇年に成立した。

日本でも九〇年一月、日本医師は日常診療の場で『説明と化しなければならない。これへの信頼関係を築く第一歩に報告書を公表した。

今年一月の脳死臨調の答申ものに流れない実質的なインコンセントが十分得られるた。八日まとまった超党派議植法検討メモも、同答申に沿その点、野党側が、医療法中に「説明と同意」を盛り込いるのは、時代の流れに即したのだ。ぜひ実現してほしい。

改正案のもう一つの争点は、

中国側と交流正常化

労組代表団の来日合意

【北京9日＝岡崎哲也】日本労働組合総連合会（連合）の訪中団（山岸章団長）と、中国側の労働中央団体である中華全国総工会（倪志福主席）の第二回会談が九日、北京市内で開かれ、総工会の代表団が来日することが決まった。連合が問題視していた中国の人権、労働組合権の実情については認識が食い違ったものの、話し合いを続けることでは合意し、一九八九年の天安門事件以来、凍結されていた日中の労組間交流は事実上、正常化された。

会談では、連合側が、中国は結社の自由、団結権などを認めたILO条約を批准していないと指摘。中国側は「発展途上国ではまず生存権を尊重しなければならない。人権を口実に他国に干渉すべきでない」と従来の立場を主張しながらも、①中国の人権には不十分な点がある②国際労働機関（ILO）の労働基準を尊重する③欧米など各国の労組や国際自由労連（ICFTU）とも話し合いたい、などと柔軟な姿勢を示した。

天皇訪中　外相、前向きの意向示唆

渡辺副総理・外相は九日夕、自民党代議士が静岡県沼津市で開いた会合で講演し、日中関係に触れ「せっかく国交正常化二十周年を記念して、いろいろ仲良くしようとしているところなのだから、できるだけ中国の希望を聞いてあげることが大事だ」と述べ、中国政府が求めている今秋の天皇訪中をできれば実現させたいと考えていることを示唆した。

また「中国政府は尖閣諸島を実効支配しようとは考えていない。目くじらを立てて、けんかしたら、またおかしくなってしまう」「中国は五百億ドルの賠償金を払わなくていいといってくれた。払っていれば日本のこれほどの繁栄はなかっただろう。ちょっとした言葉じりでギスギスしてエスカレートすることは、しちゃいけない」などと述べた。



「UNTAC、三年間…

シアヌーク殿下　公明

【プノンペン9日＝金本一】「選挙後には…

神道政治連盟の動き（読売情報）

5/18

中国課長
首席事務官

秘
無期限

天皇陛下御訪中（神道政治連盟の動き）

92.5.18
中国課

１８日、読売新聞飯田記者が、標記に関し、樽井中国課長に語ったところ、要点以下の通り。

１．本１８日午前、「神道政治連盟」の服部氏が黛敏郎らと共に宮沢総理を往訪し、天皇陛下の御訪中問題に関し、反対である旨の申し入れを行なった。宮沢総理は、これに対し、「陛下の御訪中は皆に祝福される中で行なわれることが望ましい」といった趣旨のどっちつかずの答え方をした由。

２．綿貫幹事長はこの「神道政治連盟」の会長をしており、それが故に陛下の御訪中については、消極的態度を取っている。

３．上記の服部氏によれば、「問題は『お言葉』であって、それさえちゃんとすれば、陛下が中国に行って頂くことに何の問題もない」由であり、自分（飯田記者）はこの発言にいささか驚いた。

（了）

（コピー配布先）

[○次官　○斉藤外審　○官房長　○総括審
○儀典長　○アジア局長　○外申審議官]

六四送付の右翼「[redacted]」警告書

以下、８ページは非公開。

右翼「国民新聞」乱立振り（5/25付）

平成四年五月二十五日 月曜日

感慨深い道に苦難の道

東京で記念式典開催

来年には沖縄御訪問も

政府は沖縄の祖国復帰二十周年を記念する式典を、十五日午前十一時から東京・永田町の憲政記念館で、天皇、皇后両陛下をお迎えし、宮沢首相、クェール米副大統領のほか歴代首相、衆参両院議長、閣僚、沖縄県代表、財界首脳ら三百名が出席して開かれた。宮沢首相は式辞のなかで「沖縄返還は日米関係の二十一世紀への道標」と沖縄返還の意義と、より一層の日米友好の進展を強調した。野党代表は昭和五十七年の十周年記念式典には、社会、共産、社民連三党が返還協定反対で欠席したが、今回は共産党を除いて出席した。

憲政記念館で開かれた沖縄返還20周年式典でお言葉を述べられる天皇陛下＝5月15日

式典ではまず、宮沢首相が式辞を述べ、その後、クェール米副大統領が「地球的規模の協力のもと、二十一世紀にすべての人がまい進していくことを願う」と祝辞を述べた。桜井、長田両院議長などの挨拶の後、最後に壇上に立たれた天皇陛下は「苦難の道を歩んできた沖縄県の人々のことを思いつつ、この式典に臨むことに深い感慨を覚えます」とお言葉を述べられた。

一方地元の沖縄では、宜野湾市の沖縄コンベンションセンターで、同日午前十時半から沖縄県主催の記念式典が開かれた。首相代理の伊江北海道沖縄開発庁長官をはじめ政府、国会、海外の沖縄系移民の代表ら招待客約千八百人が参加した。

民族派は、那覇市内の沖縄グランドキャッスルホテルで「沖縄復帰二十周年記念祝賀会」が十五日午後二時から同祝賀会（松田昌雄実行委員長）主催で開かれた。記念シンポジウムは地元の尖閣諸島問題研究家、恵忠久氏が沖縄県尖閣諸島のいわれを解説した。翌十六日正午から、大東亜戦争末期の昭和二十年四月に米軍が沖縄へ上陸、その際戦死した英霊を弔魂する慰霊祭が厳粛に執り行われた。

なお、来年五月上旬、沖縄県糸満市で開催される全国植樹祭に天皇、皇后両陛下が御出席されることが内定。実現すれば天皇陛下としての初の沖縄御訪問となる。

天皇陛下のお言葉

沖縄復帰二十周年に当たり、日米両国の関係者がともに会して、本日、記念式典が行われることを誠に喜ばしく思います。

先の戦いで多くの命が失われ、苦難の道を歩んできた沖縄県の人々のことを思いつつ、この式典に臨むことに深い感慨を覚えます。

復帰より二十年を経た今日、県民をはじめとする多くの人々の努力により、沖縄県が発展し、県民の福祉が向上していることは、心強いことであります。

沖縄の復帰は、日米両国の友情と信頼に基づいて実現しましたが、両国間のきずなは、いよいよ重要なものとなっています。復帰実現に携わった両国関係者の尽力に対し、この機会に深く敬意を表するとともに、日米間の友好と信頼の関係が一層進展し、世界の平和と繁栄に寄与するものとなることを願ってやみません。

ここに、沖縄県民の経てきた過去に思いを致すとともに、豊かな未来が沖縄県に築かれることを切に望みます。

国民新聞 92.5.25 1面

天皇陛下の中国御訪問

國論

政治利用は憲法違反

弁護士 秋山昭八

日本を利用し西側に接近

先般、江沢民中国共産党総書記が来日し、両陛下の中国御訪問を正式に要請したことからその賛否両論が活発になされている。中国は、日中共同声明を調印した昭和四十七年九月以来、天皇の訪問を招請してきており、昨年八月、海部首相が訪中した際、楊尚昆国家主席との会談で検討され、同年十一月の宮沢内閣発足直後に渡辺副総理が天皇訪中に前向きの姿勢を示し、さらに今年一月の外相訪中で具体化に向けて動き出していた。

日中共同声明のなかで、日本側は過去について日本国が戦争を通じて中国国民に重大な損害を与えたことについての責任を痛感し、深く反省すると述べている。

このような日中間の過去の経緯に鑑み、中国側からの要請があるなしにかかわらず、天皇御訪中の際、「おことば」の中でこのことに触れられる可能性が極めて大である。

また、中国は、天安門事件で国際的に孤立しており、最近の李鵬首相の言によれば、米国の人権非難は生存権を無視した政治的利用である等と反論しており、日本をパイプに西側との関係改善を図ろうとしているものと思われる。

天安門事件やチベット、ウイグルへの進出、カンボジア内戦における人権侵害の実相について、一方的に非難する意見もあるが、この際その歴史的評価は後世にまつべきものとしても、国際的批判がある中で、天皇陛下の御訪問先としてふさわしいかは大いに疑問である。

中国の安定は世界平和の安定に連なるものとして、経済協力拡大の要請に応ずるのは、必要なことであり、政府のなすべきことである。

しかし天皇御訪中を憂慮するのは、前記のような状況があるからだけではなくして、わが国憲法が国民主権のもとに天皇制をとっており、天皇は、日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴である立場上、いかなる意味においても政治的利用は許されないのであって、現に国民世論が分かれている以上、一方の世論に従い、他方の世論を無視する形での御訪中はなによりもこのような象徴天皇の地位を危うくするものであると言わねばならない。

象徴天皇の支持率はきわめて安定しており、一九六六年の調査において、共産党支持者においてすら二二%の支持率を示し、社会党支持者においては積極的批判をする者の数は問題とならず、国民全体についてみると積極的支持率は六四%を示しており、さらに昭和六十一年四月の朝日新聞の意識調査において天皇制は八〇%台の支持率を得たが、今日も安定して獲得しているのである。

拡大される天皇の行政の幅

このような背景を配慮してか、宮沢首相も四月二十三日「いかなる意味でも政治的に利用してはならず、実現するとすれば中国側が歓迎一色でなければならない。両国の国民が祝福するようになることをよりどころに、象徴としての天皇の行為の幅は、一歩一歩拡大されてきている。田中内閣以降の政府解釈では、より一歩解釈の幅をひろげ、第六条(内閣総理大臣と最高裁長官の任命権)などは第七条(国事行為)に列記した以外の「公的行為」というカテゴリーを認めている。

また、憲法第七条に制限列挙されている天皇の形式的国事行為のなかに入っていないところの、国会における天皇の「おことば」問題も公的行為として承認されている。

この問題を第七条第十項の「儀式を行うこと」に含める見解もあるが、しかし、ここで儀式とは、天皇が主宰して行う国事行為としての国家的儀式であり、他の国家機関の儀式や、天皇が単に参列するのみのものは入らないであろう。もし国事行為に入らないとすれば、私的行為として従えるか、象徴行為という新しいカテゴリーをつくるかであるが、私的行為とは、天皇が人間として一般的に生活するに必要な行為類型であって、相撲、スポーツの見物などのことである。

「おことば」は公的行為

しかし、「おことば」は、天皇が公

同時に日本国憲法は天皇の権力を実質的にも(第三条、第四条)形式的にも(第七条)否定する点に重点をおいている。従って、天皇は元首の如く内に行政権を担当する首長でもなく、また外に対外代表権をもつものでもなく、明治憲法のもとにおいて天皇が元首であったのとは全く異る存在である。

しかしながら憲法第一条の象徴規定

国民新聞
92.5.25
1面

厚顔無恥の中共政府

英霊にこたえる会
事務局長　倉林　和男



今回来日した中共の江総書記は、首脳会談で「中国は過去のことは忘れて未来を見ていくが、日本は過去の歴史の教訓を真剣に見つめ、平和的発展の道を堅持すべきだ」と語った旨報道されている。

さて、この種の言辞はこれまでにも一方的に言われてきたことであるが、これに対するに我が国の反論は、一部の政治家を除いて皆無であるはかりか、お説ごもっともの姿勢が大勢である。これは帰するところ政治家、外務官僚の近代史観の不勉強を物語るものといえよう。

では果して我が国は、中国に罪深きことをしたのであろうか。昭和三十九年社会党訪中団が毛沢東主席と面談した時、同主席は「日本軍国主義のお陰で、中国人民は権力を奪取できた」旨語り、逆に謝意を表しており、一方日本軍と戦い、中共に裏切られたうえ権力を奪われた国民政府は、総書記等が強要する言は表明していないのである。

顧みれば昭和十年七月、日独打倒を目的にした反ファッショ統一戦線のコミンテルンの決議に従った中共は、翌八月に対日戦宣布ともいうべき八・一宣言に始まり、北京デモで旗揚し、西安事件で蒋総統を反日に向かせ、盧溝橋で発砲し停戦を破って上海に拡大していった過程は、毛主席の言葉を裏付けるものなのである。しかし昨年、大東亜戦争五十周年に当って侵略戦争を是認しての不戦国会決議の動きがあったことは、政界の罪悪史観の根深さを実証した一例であった、と見ることがいえよう。

陛下のご訪中は、この観点から先ず判断すべきものであろう。しかも虚構の史実をでっちあげ、反日の歴史館を建てさせはばからず、加えて教科書、靖國神社で内政干渉し、さらに今回は尖閣諸島、PKO等に関し国権を侵害する非道なまでの言及をして、平然と経済、技術の援助を求める厚顔無恥なお国柄のところに、仮にご訪中なされても、その結果がどうなるのか自ずと明らかである。親善どころか、多くの心ある国民の反発を喚起することとなろう。

陛下へのご配慮欠く

湊川神社
宮司　酒井　利行



取沙汰されている御訪中の儀、時期尚早とて何とぞ御中止願いたい。その理由は既に心ある諸賢により理をつくしてこもごものべられているのでいまさら蛇足を付するまでもなかろう。

しいて申せば、果して天皇を主体としての前提のもと、その対応が講じられているかどうか。むしろ天皇陛下は受動的立場に置かれ、日中国交正常化二十周年に際しての先方よりの御訪中要請。それこそ絶好のチャンスだ。政治的に有利などとの効用的判断が先に立ち、肝心の天皇陛下へのお伺いは二の次の様に見てとれる。たとえ国事行為上当然と言訳するとも順逆を弁えないそれこそ下剋上的発想でありi画策だ。

恐らく天皇陛下は「四方の海皆はらから」との大慈悲の思召から、要請あらばいずくの国へなりとお出ましなるべく常々無心に望んでおられよう。そのつど先ず御意を承けた上でお膳立てする。非なる場合はその理由を委細をつくして言上、またの機会をとお わびかたがたお願いする。これこそが当然の次第だ。

次は話題をそらす様だが矢張り関連するので植樹祭における幸近例をあげて見よう。当日の参加者は、天皇臨御に際し起立・脱帽もする必要なしましてや萬歳唱和も同断。かかる無礼至極の指示を誰が出したのか。開後責任のたらい廻しで結局はうやむやに葬ってしまう。これなどは「開かれた皇室」の御意向を勝手に拡大誤釈しての勇み足、いかに御威光を暗らますか、痛省するがよい。今世紀の終末を告げ、いよいよ新世紀の黎明を迎えんとする。よしや現行憲法上どの様に規制しようと天皇の御本質は盛未来変らない。その御光が四海隅なく照らされてこそ「萬世の太平」開顕は地上に応現される。御主体がどこまでもかかる天皇であらせられること、御訪中のみならず萬般にわたりこの前提のもと為政者たるの責に任じて頂きたい。

皇室の尊厳 国家の名誉を守るため、天皇陛下の御訪中反対

国民新聞
92.5.25
2面

謝罪外交に反省を

日本郷友連盟会長　堀江　正夫



日中友好条約締結二十周年を記念しての、天皇陛下のご訪中を、四月来日した江沢民総書記は、執拗な迄に強く要請し続けたが、政府は結論を先延ばしして当面を糊塗した。抑々隣邦の大国中国と真の信頼関係を築き、将来に亘り確固たる友好関係を発展させることは、両国はもとより、アジアや世界にとっても極めて重要であることはいうまでもない。しかし、時期尚早という私の考え方は今も変らない。

その理由は、今はまだこれを行える程両国の関係が熟成していないからである。天皇陛下の外国ご訪問は、当事国間に真の完熟した関係が成立し、両国民が挙って歓迎でき、最大級の敬意と礼を以て迎えられるとき行われるべきだが、未だそのような状況とは程遠い。

現に日本の異常と言える積極的な協力に対し、中国は口に友好を唱えながら、一貫して内政干渉と曲解歪制を繰返し、人権問題や兵器輸出等に対しては頑固に聞く耳を持たず、更に最近は尖閣諸島の法文化に加えて、民間賠償二十四兆円を政府が黙認している。これでは陛下ご訪中に賛成する気になれないのは当然であろう。

このご訪中は政治的に利用され、日本が困難な状況に直面することも懸念される。懸念される政治的利用とは、まず必ず生起するであろう謝罪問題である。これにより中国は日本人に謝罪意識と負い目を決定的のものとし、今後の経済援助拡大や外交政策の牽制に利用する可能性がある。また現在の厳しい米国等との関係の打開に利用することも考えられる。

天皇陛下がこのように政治的に利用されることは、憲法上も到底許されることではない。その上ご訪中が、重要な米国等との関係を一層悪化させる要因になるということである。このようなことが色々と予想される現時点でのご訪中は、陛下御自身も決して望まれるところではないのではなかろうか。

この際日本は、もしろ従来の謝罪外交姿勢を歴史の真実に照らして冷静に反省匡正することであり、これこそが、日中永遠の平和と友好を招来する道であると考えるが如何。

国民新聞
92.5.25
2面

中共の陰謀直視せよ

民族派運動家 滝澤 利量

いまさら、事新たに言挙げするまでもなく、中国は覇権放棄・易姓革命を歴史の必然性として是認し、そうした立国の理念は遂にマルクス・レーニンの政治哲学、唯物弁証法の図式による共産主義体制にまで飛躍発展を遂げているのが現実である。

その中国に対比し、わが国は畏くも万世一系の天皇陛下を国家統治の主権者と仰ぎ、民族統合の宗家として奉仕する惟神（かむながら）・真結（まことむすび）を国体の根本原理とする国柄であるから、その内包する国家意識、人生観において超えることの不可能な異質性、対立性を感じざるを得ないのである。

なるほど、国際共産党の総元締ソビエト連邦は崩壊し、赤旗は破り捨てられ、いわゆる泥塗に委する扱いを受けてはいるが、その陳腐なマルクス・レーニンの政治哲学が中国において生き延びて、例の天安門事件で象徴されるような無法素乱な社会情勢を露呈しているのである。換言すれば、口先で独立国を誇示しながら、その実態は到底法治国たり得ない無秩序な後進国性を天下に曝しているのが中国の現状である。しかも断じて看過し難い重大問題は、わが国に対する内政干渉や、尖閣諸島侵略によって証明される敵視政策である。

このような中国に対し、如何なる理由があって天皇陛下の御訪問を奏請しようというのであるか。政府は、国民の声なき声に耳を傾け聞くがよい。常日頃は政治に関心を示さない一般の庶民も、その無謀な案件に呆然自失、耳を疑い眼を瞠っている。

宮沢内閣の支持率低下、国民的不人気の無能振りを、畏くも衮龍の袖に隠れて逃避し、延命を画策するような陰謀は断じて許されるものではない、許してはならないのだ。

もし必要であれば宮沢首相が使節として行けばいい。そして、その水先案内役兼通訳には上田耕一郎、不破哲三の兄弟にお願いする。マルキスト仲間の誼みで、案外うまく成功するかも知れない。

弧立化回避狙う中共

国士舘大助教授 吉川 智



四月六日、江沢民中国共産党総書記が来日し、宮沢首相をはじめとして日本の政財界の多くの関係者と会談した。

一部マスコミによっては、日中新時代の到来との評価も見られたが、日本国民大多数の意見は、現在余りにも日中間に問題が山積し、正常な外交関係を維持しうる状態にはなっていない点で一般致している。

具体的には、尖閣諸島の領有権問題、日中戦争に絡む民間賠償問題、南京虐殺に関する根本的見解の相違、日本のPKO参加に対する中国の批判的態度、中国の軍備拡張及び武器輸出政策の実態、天安門事件及びそれ以後に見られる中国の人権抑圧政策と日本を含む国際社会の批判などである。

これらの事柄が少なくとも日中間には横たわっており、しかも一つとして解決されていないのである。このような日中間の非正常、不安定状況の中で、天皇陛下の御訪中が要請され、渡辺外相及び加藤官房長官の前向き検討が表明されたのである。国民が不安を覚えたとしても当然のことである。

一九八九年六月四日の天安門事件と共に、旧ソ連・東欧の社会主義（共産主義）の崩壊により、国際社会の潮流に乗り切れなかったのが中国である。

政治的経済的に国際社会での孤立的立場に立たされているのがその実態である。この状況から脱せんがために、利用すべき隣国への便宜的擦り寄りを行なっているだけのことである。天皇陛下御訪中の要請もそのためだけのものに過ぎない。

事実として、相変わらず武器輸出を行ない、旧ソ連より航続距離の長い軍用機を購入するなど、日本にとって不快な行動を平気で行なっている。自国の利益のためならば何でもするというのが中国の政策であり、二枚舌、三枚舌どころの騒ぎではない。これは中国の国癖である。

日中国交正常化二十周年に伴なう要請との事であるが、現時点では時期尚早というべきである。

日中国交正常化を祝うならば三十、四十年のときでも遅くはない。時間的にゆったりした国柄の中国にとって、十年、二十年待つぐらいのことは、それこそ何でもないであろう。

ユダヤの出方注目を

日本大学名誉教授 石村 暢五郎



日中関係はやはりアメリカ、ユダヤの今後の出方を注目する必要がありますし、中東戦争もユダヤの動きを知らずに「フセイン打倒」の文が出ていますが、それはアメリカマスコミの論調です。

いまアメリカが最も恐れているのは日本と中国が提携することです。江沢民が折角日本に提携を申込んできたのを、門前払いをすることは、喜ぶのはアメリカとアメリカユダヤです。陛下の訪中については私も心配をしますが、「天皇陛下へのテロ計画」があるという（國民新聞の）記事は、もし事実としても掲載すべきでなかったと思います。

かつて中国に住んだことのない人は、中国問題についての発言を十分に注意して頂きたい。日本のアジアにおける孤立化を防ぐことは、中国を悪く言うことでなく、全華僑と手を組むことです。

私は旦下、上海の大学、北京の財政金融大学と日本大学の提携をやっていますので、あまりに反中国的記事のある新聞雑誌には寄稿が出来にくくなっております。国民新聞を読む人は、いまのマスコミに載っていない真実の報道と、マスコミをどう批判するかを期待しています。そして読者会などを開いて、皆の意見を聞かれると良いと思います。一部のグループでなく広く人材を求めて下さい。

国民新聞
92.5.25
2面

国民新聞 92.5.25
2面

皇室の政治利用慎め

拓殖大学顧問 椋木 瑳磨太



「国賓に申し上げる。中国大陸の山河とそこに生活する人々、その文化と歴史にわたくしは深い親愛の情と尊敬の念をもち、中国とは深らぬ友好を保ちたいと願うものである。

しかし、いま天皇に訪中のお出まし願うことには断固反対である。その時機ではないと考えるからである。

宮沢首相はこの問題につき夏までには決論を出したいといっているようであるが、玉虫色の説明をつけ敢えて北京政府に付和するごとのないよう予め要望する。

日中国交二十周年とはいうが、二十年前日本政府が中華民国との国交を一方的に破棄した歴史の事実を忘れることはできない。政治外交は非情なものといって済まされる問題ではない。終戦時「以徳報怨」の対日政策により、日本の復興に温かい支援をいただいた将介石総統に対し、日本は恩を仇で返したのである。

総統はこのことをいたく咲かれ、このことが総統のいのちを縮めたとも聞き及んでいる。わが外交史上、道義に反したかかる精神的傷痍をもつ日中国交を手放しで喜び得ないのはわたくしばかりではあるまい。

加うるに先般の天安門事件はわれわれの心を重くする事件であった。

かつて中共のマスコミが天皇を名指しで口汚く誹謗したことを覚えているが、その後北京がこれを正式に謝罪訂正したことを聞いてはいない。

國民新聞四月号によれば、中共過激派は日中友好反対、天皇爆殺を企んでいるともいうではないか。さらに尖閣諸島問題やPKO法案批判など不明朗な問題もある。

このように緊張されていない日中関係下、巧言令色に感わされて天皇のお出ましを願うなど論外の沙汰である。

わたくしは終戦の詔書を昭和天皇のご遺言と体し、これこそ戦後日本民族の行動規範であると心得るものである。また日本唯一の保守政党たる自民党は、不立文字としての国体護持を堅持し、国民もこのことに無言の信託を寄せているものと確信するものである。

自民党執政当局はこの自覚に立ち、苟も片々たる派利閥略にとらわれ、況してや皇室を外交手段に利用するが如きことのないよう厳に慎しまれたいのである。

皇室が政府自民党の伝統紛飾装置であっては困る。この際、天皇陛下には恐れる日本国民の祭りの象徴して君臨して頂きたい。もともと菊原道真公以来、日中は没交渉の時期の方が長く、また平和であったのである。

罠だった国交回復

評論家 神谷 俊司



二十年前の日中国交回復は、周恩来が仕掛けた罠であった。賠償請求権を放棄という飴と「歴史認識」の鞭で日本人を調教し、末長く日本の国力を搾りあげようという「日中友好の仕掛け」である。日本の政治家は首班指名の裏金に、日本の国益を北京に売った。田中、中曽根、そして今度は渡辺外相の策動である。大義の察しはつくわけだ。

以来、日本は周恩来が設計した通りの一種の現金自動支払機になってしまい、「歴史認識」のカードでいくらでも引出せる。今度、民間賠償法案を背景に訪日した江沢民が、旧交に名を綴りて田中邸を訪れたのは、一種の祖型反復による自動支払機のバージョンアップの目論見であり、天皇訪中はその総仕上げである。

いづれ、そんな日本の撮勘で近代化された海軍をバックに地域覇権を唱へる北京政府によって、日本のシーレーンが脅かされ、貿砂ならぬ特区の公害で悩まされることにならう。天皇訪中は日本の国益にそはない。

中共は領海法に尖閣列島、南沙群島を勝手に明記し、日本側の抗議に謝罪すらしない。そんな外交感覚の国である。天皇の一寸した社交辞礼ですら、どのやうに摩り替へられ、政治的な味付けをして利用されるか全く予断を許さない。

再びいふが、天皇を北京に呼び何らかの言質を取ることも記憶に新しい。そんな言語感覚の国である。天皇の訪中は、日本側が何を言うが、彼らのいふ「歴史認識」の総仕上げなのである。さうなっては、日本側が何を言ってもアトの祭り、教科書、靖国、PKOに限らず、北京による対日内政干渉は天井知らずにエスカレート、日本人自身による近現代史の試みは崩壊することになるであらう。

国民新聞
92.5.25.
2面.

絶望の淵にある中共

湘南学園
理事長 岡崎 功



昨夏、大連、奉天、新京、ハルピンを主に久方振りに巡遊した。そこで日本は満洲を侵略した、と言われるとんでもない暴言を耳にした。かつて日本が膨大な資本を投入して建設した施設が六十年も過ぎた今日、未だそのままに使われていた。従って大連の大和ホテルも奉天の大和ホテル、三井ビル、満拓ビルも古びた建物として残り、そのまま使われている。

新京のかつての関東軍本部もそのまま共産党本部として使われている。奉天浪速通りも千代田通りも弥生町も霞町も繁華で上品な住宅や店舗が立ち並んでいたものである。それがどうだ。建物はそのまま武いは朽ちて人々が貧しく住んでいる。人口だけは多くなったが、人々は当時より甚だ貧と乏とを増している。

私は昭和十三年、中学四年生の夏休みを利用して満洲を旅行した。そして赫々と大きく沈みゆく太陽を仰ぎ見て、少年の胸は夢と希望に輝いたものだ。だから昭和十六・七年も続いて満洲に行った。

昭和四十年、当時北京市長だった彭真の招待状をもらって香港から汽車に乗って広東、杭州、上海、北京を旅し、北京の人民大会堂で毛沢東、周恩来の歓迎を受けた。当時の小、中、高校生は中華人民共和国の情熱がみなぎっていたものだ。

然し乍ら今度満洲を旅し、奉天鉄西の工場で工員達に「社会主義は素晴らしい」という昭和四十年に人民が歌っていた唱を私が披露すると苦笑いして「そんなもの歌わない」と小さい声で言った。ハルピンの街角で老人が私に近づいて「日本人か」と聞いて、「昔日本人が居た頃は住みよかった」と言う。人民政府への反感と恨みと絶望が渦巻いて、北京や上海だけが都会の弱さを見せている。私は、行幸されるならば毛、周時代の活々とした時代に行幸され、恨みと貧と絶望の現時点での訪中は絶対になさるべきではないと断言する。

ご訪中の必要性ない

名古屋外国語
大学教授 松本 道弘



天皇陛下のご訪中をめぐる論議は、まだ言いっ放しのスピーチの域を脱しておらず、建設的なディベート（裁きある知的対論）にまで至っていない。日中両国が対等の立場から活発な議論を交わし、知的付加価値を求めることがディベートの目的であるなら、この争点に係わる（一）なぜか（二）いかに（三）いかなるメリットか、という三つの側面を検証することから始めなければならない。

中国人は「不打不相識」という言葉を好む。思想でも衝突させなければ、お互いが理解できないという考え方だ。韓国でも原則（中国語の原則）を重んじ、衝突を避ける民族を低く見る。次に述べる三点を巡り、丁々発止とディベートすることを勧めたい。

まず第一に「なぜか」であるが、なぜ天皇陛下でなければならないのか、という基本的な哲学である。国民を納得させるだけの大義名分があるのだろうか。訪中せねばならぬ、差し迫った理由があるのだろうか。

第二に賛成側に、明確でかつ納得しうる目標やビジョンがあれば、それを満たすために、訪中という行為が具体的にどのようなプロセスを経て役立つ、というのであろうか。

第三に、その訪中計画を実行した場合、日中両国にとり本当に望ましい結果が生まれるのか。

国益という視座から、メリット（経済技術援助は中国にとりメリット）はデメリット（土下座外交により、光華寮、尖閣諸島、賠償、靖国公式参拝、などの諸問題が長引く可能性がある）よりも大きいという確証はあるのか。

この三点が不明確である限り、筋の通った立論とは言い難く、ディベート教育の必要性を標榜する筆者は断じて納得できない。

もっとも、徹底的に反対する側としても、東京裁判史観の影響を受けた戦後派日本人に対し、天皇訪中により、日本がきっと中国の権謀術数に巻き込まれるであろうという立証責任は負わねばならない。

「冬山でも散歩せんか」という師団本部の誘いで始まった八甲田山の雪中行軍計画は、多大な犠牲者を産んだ。明確な目標を持ち、情報の質を重んじ、命令系統を一本化した、エリート集団を目指した弘前三十一連隊は生き残ったが、出身地がバラバラな混成部隊であった上に、目的が不明瞭で、しかも命令系統が一本化されていなかった青森五連隊という混成チームは、ほとんど凍死してしまった。

この原稿を書きながら、ふとこの事件を思い出した。日本人は、今でも空気で動いている。いやしくも日本は独立国家である。独自のビジョンを持つことは当然のことながら、国家戦略を立てる場合、ディベートにおける立論のように（一）なぜ（二）いかに（三）いかなるメリットが生じるのか、という、一貫した論理の御柱（おんばしら）が必要である。

国民新聞
92.5.25.
3面.

中共首脳が政治利用
中国民主運動家に聞く
中訪御下陛皇天


車憲平氏


相林氏

貿興亜・中国自由民主党日本分部代表は「天安門事件で中共は世界各国から非難を受け、未だに信用の回復を得ていない。もちろん人民は中共を敵として嫌っている。中国は共産党だけのものではないはず。その共産党独裁の中共に、日本政府は日本国民の総代表ともいえる天皇を訪中させるという。そうなると天皇と日本国民に対する中国人民の感情は悪くなることは確かだ。日中両国の政治家はいくら悪くても仕方がないが、天皇が悪く見られては日本国民は困るのではないか」と厳しい指摘。

相林・全球中国学生連合会日本代表は「日中両政府は日中友好の為に天皇の訪中を実現させる」というが、実際には中共の政治的環境を助けるのみで、日本は逆に世界各国からひんしゅくを買ってしまい、本当の日中友好の為にはならない。たぶん天皇御自身も政治の道具として利用されることは分かっておられ、中共へは行きたくないと思う。それにしても日本の政治家は弱すぎる。中共の何が怖いのか理解できない。日本は世界一の経済大国になったのだから、堂々と政治大国になるべきではないのか。日本政府の外交は独立国家としておかしい。日本国民は国家の外交史に汚点を残すことを果して認めてしまうのか」と訪中反対の盛り上げに欠ける世論に疑問を投げかけている。

先月七日、NHKホールで来日中の江沢民共産党書記長の記念講演中に、天安門事件の中共政府の対応を抗議し、軽犯罪法違反で検挙された中国人三人のうちの一人、民主中国陣線、中国自由民主党両日本分部の車憲平氏は「天皇の訪中について、自民党内に推進派と反対派がいるように、中国共産党の中にも賛成、反対両派がいる。両国の第一党の中で意見が割れているのは不思議だ。肝腎の主権者である国民はどう考えているかというと、中国人民は一〇〇%反対している。日本人も私の知る限り、全て反対の意向だ。中南海（中共首脳）は、自分と共産党だけの利益を狙って日本と天皇をだまそうと企んでいることは間違いない。その上、借款供与の名目で巨額の金もだましとっている。この金の行方は人民には分からないが、我々の民主化運動グループが調べたところによると、共産党の最高幹部らはそれぞれ貿易公司を経営しており、そこへ金を注ぎ込んでいることが判明している。政変で体制が代ったら、その借金は国民に跳ってくる。そうなると日本政府も中国人民から敵視されてしまう。従って日本は中共の政治をサポートしないほうが賢明だ」と強調。

陛下訪中要請の狙いはカネ
日華協理事が見解

東京・芝の仏所護念会高輪教会で開かれた日華問題協議会（関口孝代表、森田大耕事務局長）の四月定例理事会で、今年十月二日に開催される「日華国交の集い」の申し合せがされたほか、天皇陛下御訪中問題が議題となり、列席した理事らから次のような意見が出た。

中共は今年「日中国交二十周年記念」として各種の催し事を企画しているようだが、その友好第一の証しとして天皇陛下の御訪中を要請している。中共の目当ては、明かに日本のカネと技術援助。さらに日中協力の実績を礎にして天安門事件の後遺症払拭の西側先進国への波及効果を狙ったもの。しかし欧米諸国の人権に対する中共不信は根強い。中共は内政干渉と突っぱねるが、本来、人権に国境はないはず。

二十年前の日中国交正常化いわゆる異常化のウラにおいては、昭和四十七年九月二十九日、田中角栄首相（当時）が台湾切り捨ての日華断交を行った。いまだに日華国交の回復が出来ていない。中華民国・台湾の人々の感情を考慮するならば、天皇陛下の御訪中は見送った方が良い。

右翼「皇青新聞」5/25付

天皇陛下御訪中は時期尚早、中国の作為を見抜け！

陛下の中国御訪問は断固阻止しよう

対中隷属外交に生き恥さらす宮沢・渡辺を糾弾

日中友好の虚妄と欺瞞

森田忠明記す

いま、日中国交回復二十周年記念といふ名目で天皇陛下に御訪中を奏請するか否かで論議が沸騰してゐる。宮沢内閣、とくに渡辺外相の強引とも思へるこの方策に時期尚早を唱へる側がスヂ論としてはことのほか有力である。そこにはそれなりの理由があるのは言ふを俟たぬ。

去る四月、中国共産党総書記江沢民が来日したが、謁見された天皇陛下に彼は、これまで再三再四御訪中を要請してきた中国側の総仕上げよろしくちきちきに招請の言を奉った。陛下はこれ応へて、「御招待をありがたうございます。この件については政府が真剣に検討してゐる、と承知してゐます」と御述べになってゐる。

だが、政府はこの四月に至るまでもその後も、本当に真剣に検討してきただらうか。じつは、修好二十年との触れ込みで既定方針化してゐたのを、今年に入つて賛否諤諤の論が起り始めるや、俄然大いにうろたへた結果やつといはゆる調整ないし真剣な検討の課題としたのではなかつたか。反対論や延期主張がほぼ出尽した最近になつて、御訪中の機の未だ熟さぬ情況に初めて思ひ当つたかのやうなふしが濃厚に窺へるものの、これとてまだまだ予断は許しがたい。

四月の首脳会談において、江沢民の改めての招請に宮沢が「御訪問が実現されれば日中両国の将来に極めて意義深い」と応じ、外務省も「誰もが祝福申上げうる形で実現したい」としてゐるけれど、はたして「天皇陛下が政治に巻き込まれられると、かへつて日中関係を阻害する」「中国は陛下の御訪問にふさはしくない国」など、すでに世論といつて過言でない懸念や不信を真に拭ひ去ることができるとでも考へてゐるのか。

げんに御訪中時の「御言葉」問題で楊振亜駐日大使が、過去の日本の対中行為の謝罪をされるやう希望する、と強ひて発言してゐるではないか。言ふまでもなく中国とのあひだでは、昭和四十七年の「共同声明」と、つづく五十三年調印の「平和友好条約」とによつて不幸な過去を清算し、両国の新時代を切り拓いてゐる。戦時賠償放棄で合意し、平等互恵・内政相互不干渉を謳つたことは、独立国家同士が対等かつ友好的に付き合つてゆかうとの確認であつたはずである。にもかかはらずそれ以降こんにちに至る現実は、外交慣例への中国側のことごとの背反であつた。

過去多年、わが国ではお題目「日中友好」が独り歩きし、儼然として存在する国家利害や価値観の相違に無知か故意からか眼に蓋をしてきた経緯がある。つまり、ためらひなしにする何かにつけての礼賛、それに贖罪意識からも発するであらう譲歩、すなはち正当の言辞もままならぬ土下坐的姿勢を、浅ましやあまたの人士がいささかたりとも恥ぢてこなかつた。ために、怪訝不可解なる彼の振舞にもえてして黙りこくり、対等の精神と大きく相反する成行に疑ひを容れる余地すらなかつたのである。むろん現実の世界で、それぞれ相応に何がしかの地位を占める彼我両国は相互の立場や原則を認め合つたうへで協調協力に励むべき分野を有するそれは政治が果すべき役割であつて、ならばこそ確乎たる独立精神と事の本質を分別する見識とが為政者に要求されるのである。

それゆゑに、政治を超越して国の象徴たる天皇陛下に奏請するに、友好親善関係なほ十分ならざる、むしろ成熟に到るには道険しくはなはだ遠い国家への御訪問をもつてするは、みづからの無能を曝け出し責任を放棄し転嫁し国民を侮蔑したも同然であり、かつは陛下に対する非礼の罪すこぶる重い所業といふべきである。

また、わが国は「世界の中の日本」として国際協力を進めるにはいかやうの手立てがあるか目下それなりに模索してゐるわけであるが、ことに国連平和維持活動（PKO）への参加は喫緊の必要性を孕んでゐる。ところが首脳会談で宮沢がPKO法案とカンボジアへの自衛隊派遣に理解を求めたのに対し、自国は地雷除去に解放軍を送つてゐながら、日本へは「PKOは敏感な問題である。慎重な対応を」と、江沢民はまたしても内政に口をさしはさんだ。

人権問題での諸外国からの批判には、つねに内政干渉だとして突つぱねるのが自尊自大然たる中国政府の常套手段である。その中国といふ一党独裁軍事大国の要人が、現代世界にあつて遅きに失しながらも何とか成立に向かはうとしてゐるわが国の法案のありやうに難癖を付ける発言を繰り返すでその中国領なることを執拗に主張しておいて、首脳会談の場では、昭和五十二年鄧小平が来日時に示した棚上げの立場は不変であると釈明する芸当をやつてのけた。国内法への領有明記といひ党中央総書記たる者の発言といひ、友好といふにはその真姿からあまりにも乖離しすぎてゐることは明白である。非友好といふより、まがふ方なき腹を据ゑての挑戦である。

次頁に続く

なほ続く北京政府の対日内政干渉と経済要求

軟弱に終始したこれまでの対中外交に鑑み、たいした思慮や識見があるとはつゆ考へられぬ政府要路が、何を血迷つたのか年内にも急ぎ現実化しようとしてゐる天皇陛下御訪中の非なることは、世に猛然と興つた各種の反対・延期論がはやみごと指摘してゐる通りである。

靖国神社参拝や教科書検定、光華寮その他の諸問題で露骨に迫つた度重なる内政干渉、天安門事件に見られるごとき凄惨な人権の抑圧などを振り返つてみると、およそ一国の政府としては決してまともならざる隣国共産党政権の施策また意志には、たんに憤るばかりでは済まぬものがあらうといふものだ。

現在、両国間にわだかまる具体的案件といへばまづ、先年の棚上げ約定を一方的に反故にして尖閣諸島の領有を自国の領海法に明記したことを挙げうる。これを受け江沢民は訪日直前の記者会見

皇青新聞
発行所
皇道青年連盟
皇青新聞社
場集　宮島泰傀
総本部
大阪市北区同心2丁目4−20
☎353−5186
購読料　千円也
郵便振替口座　大阪4516

綱領

皇道精神に則り祖国の歴史道統の護持に挺身せむ
先人の美俗を倍加して大アジア王道主義に邁進せむ
国家維新の大義に鑑み左右を問ず改革創新蘭清を期す
赤色革命勢力と断固対決し自由独立平和を護り抜かむ

色香をもをしまで花の散ればこそ大和ごころと人やいふらむ　廣田　誠一（野州宇都宮藩禁門の変に京天王山に割腹死）

敷しまや我が秋津島のもの、ふは死すとも朽ちじ大和だましひ　小川　幸吉

誰が身にもありとはしらでまどうめり神のかたみの大和だましひ　野村望東尼

闇夜ゆく星の光もおのれだにせめてはてらせ武士のみち

伴林六郎光平（大和天忠組に参画し京六角獄に斬らる）

戦争責任を今後も言ひ続け
日本人を呪縛する中・韓

のは、はなはだ穏当を欠かうといふものだ。

さらには、中国政府は往時大陸が戦場と化したために蒙つた被害の賠償を、民間中国人が日本政府に直接要求することを先ごろ容認してゐる。政府としてはすでに日中共同声明において賠償を放棄してゐるゆゑに、個人としてなら一向に構はないといふ論法だ。彼らの身勝手な試算によると、二十四兆円といふ莫大な額にのぼるらしい。

これは、日韓国交正常化時の協定で両国間の請求権問題が完全かつ最終的に解決してゐるにかかはらず、韓国側がいはゆる従軍慰安婦の問題をはなから強制連行をともなつた非人道的な行為と見做し、一部老女が賠償を求めて日本の裁判所に提訴したことと軌を一にしてゐよう。両者ともに法上の対日請求権が成立しないのは誰の眼にも当然であるといふのに、敢へてわが国民感情を逆撫でしてまで何ゆゑ国際礼儀をわきまへぬ愚かな挙に出てくるのか。

余談ながら、このごろ韓国・北朝鮮で対日要求がかまびすしい従軍慰安婦問題について、日本政府部内には基金を創設して対応する案が急浮上してきた。「強制連行」あるいは「人狩り」との非難を浴びると、事実関係の徹底調査もせずしてたちまち及び腰となり、カネで解決できるものならとその場かぎりの安易な糊塗策で収拾しようとする姿勢は、日本政府のいつに変らぬ浅ましい性格を物語つてゐる。

さて、中国は国家財政が大幅な赤字を記録してゐるところへいよいよ軍事予算を増額し、紛争を煽るかのやうに開発途上国への核施設や武器の輸出にも余念がない。それでゐて表面的な「改革・開放」を謳ひ文句に、内政に容喙を繰り返した当ひが展開されてゐるとは日本的感覚では捉へえないい不可解さであらう。しかもさうした指導部も、共産主義破綻の世界的潮流に当つて「和平演変」（社会主義権力の平和的転覆）の危機を一致して唱へねばならず、両派のなかで優位に立つかに見える改革派にして「ブルジョワ自由化断固反対」を呼号しなければならぬといふ矛盾を抱へてゐる。

ここで言ひうるのは、党の指導はテコでも動かすまいとする従来の原則に彼らが忠実であることだ。しかし党が国家指導するとの原則を堅持しながら、いかなる公式ポストにもない〝最高実力者〟鄧小平が「すべての重要事項の決定」を行なふとする党第十三回大会の「秘密決議」が四年来有効性を保つてゐるのである。

要するに現在の中国は、党といふ受益者集団が権力にしがみついて十数億人民の上にほしいままに君臨する、「法治」とは程遠い「人治」の国なのである。人治する側内部での終りを知らぬ闘争と、これからますます昂まるに違ひない共産党支配そのものを打倒せずんばやまずとする民主運動と。朝に権勢を誇る指導者がタには早や失脚してゐる事態が予想しえ、ソ連邦崩壊に見るごとく国家じたいがいつ消滅するのか知れたものではない流動の過程を指摘しうる——いまの中国を、よもや安定した国であるとは毛頭言へまい。

つらつら見てきたやうに、あらゆる観点からして中国は現代の世界に通用する国家の体をなしてゐず、少なくとも現時点でのわが友好国ではない。先に、この隣国が現実世界で占める何がしかの地位と表現したが、とりわけてそれは、人口や領土の大いさとは別に、資本主義国を理論上「適性国家」と捉へる共産党が指導する規模大なる軍事力の外部に与へる影響度、を指しえようか。つまりは、わが国とかの国とは根本的に相容れない国柄なのである。

ただにさやうな国柄であるのみならず、同時に共同声明・平和条約を蹂躙して如上の干渉をこととする国家の、度重なる天皇陛下の御訪問要請の意図が、たんなる敬愛の念からのものとは断じて考へにくい。つまるところ、彼らが期待するのは「御言葉」における謝罪の表明であるに相違ないのである。正常化したはずの国家間で一国の元首が改めて謝罪するのは、その政府や国民を政治的精神的に厳重に縛ること、これまた疑ひを容れない。

大統領来日のたびに天皇陛下の謝罪の「御言葉」を要求する韓国がさうであるやうに、中国も「戦争責任」を言ひつづけることによつて未来永劫に日本および日本人を呪縛しえ、優位に立つた彼は自動的に物心両面にわたる支援・援助を獲得できる。しかり、わが国人は「戦争責任」による「御言葉」で、「遺憾」ゆゑにいつまでも「劣等意識」に苛まれ、つねに頭上がらず「独立意識」は影をひそめ、「反省」反復して「カネ」を払ひつづける、といふ図式である。

「戦争責任」のカラクリ

近代におけるかずかずの試行錯誤の果て、拠るべく学び来つたはずの国際常理が、中華思想を根柢にふんだに宿す隣国共産党政府を相手にしては通用しかねるのである。しかも当惑以上のものを感じて国歩の行く末をはなはだしく懸じねばならぬとは、ハイテクの先端をゆくと自任する国家にとつて大いなる矛盾である。どこかでこの矛盾を断ち切る作業、といふより断乎たる英断を下さねばなるまい。

事に遭つて右往左往なすすべを知らぬ現今の政府にそれを期待するのは、木に縁つて魚を求めたぐひのかなしい望みといへるだらう。さやうな政府であるなら、進んで野暮な得点稼ぎの手段に訴へることなく、より消極的な態度でゐるのもときには相応しいのである。すなはち、中国の強引な天皇陛下御訪中要請を唯唯諾諾と受けるのでもなく、目尻を釣り上げて否を通告するのでもなく、検討中と称して最終的な判断を持ち越し、結局中止の止むなきに至つたとするやり方だ。迂遠こそが、わが政府の本領だからである。

とはいへ、共産主義の弔鐘高鳴る国際情勢は、また一方で民族独立の高波がうねり、新時代とはいふものの新たなる問題を抱へて激しく動いてゐる。かやうな国際場裡、日本は拱手も傍観もはた怠惰も、もつよい加減に潔くなげうち、さういつた卑屈さとは全然無縁の、精神的にまつたき独立独歩の姿勢に立ち返るべである。政府が天皇陛下御訪中案件に正当な理由を付して終止符を打つこと、ここより日本および日本人の真実のよみがへりに踏み出したいと思ふのである。



一水会旋風 関西に嵐を呼ぶか！

五月二十三日（土）、大阪市淀川勤労者センターにおいて、「一水会結成二十周年、大阪支部設立記念鈴木邦男講演会」が開催された。

本大会は、一水会大阪支部が主催し、関西地区の民族派友好諸団体をはじめ、一水会員「レコンキスタ」読者、シンパの方々、総勢百名近くが参集された。

大会は午後六時半より開始され、主催者である中川法宏（支部長）の開会の辞、来賓を代表して「元号を守る共闘会議」の中山顕雄氏のあいさつ、そして、一水会の岐阜、広島、岡山、福岡、東京の本支部の同志による連帯のアピールと続き、鈴木会長の記念講演にうつった。

話は一水会設立当初の頃から始まり、一水会結成の引き金になつたのは、昭和四十五年市ヶ谷の自衛隊駐屯地において三島由紀夫とともに切腹自決した森田必勝烈士への〈負い目〉であると最後に認し、これからの我々の運動は、〝新右翼〟運動からも脱却して、〝一水会〟運動と呼ばれるようにならなければならない、としめくくつた。

当日は、日本菊水連合会、浴風会、蒼洋社、大化会、六合社、日本交友会、青年民族同盟、皇道青年連盟の方々により厚いご協力をいただき、大阪支部の幸先よいスタートを切ることができました。

〝特報〟
参院選挙に向けて
民族派、日本国民総連合決起大会

主催　日本青年社

六月九日午後一時より東京全日空ホテルに於いて民族派右翼一千人が参集し、盛大に日本国民総連合結成が日本青年社衛藤会長より発表された。

全国区比例制の立候補者として野村秋介氏を指名、会場は立錐の余地もない熱気に包まれ、午後四時に散会した。

詳細は本紙六月号にて編集報告の予定である。　乞ふ御期待

憲法改正 官僚政治打破

御訪中反対団体リスト

6/8.

天皇陛下御訪中反対団体リスト

９２．６．８
中　国　課

【データあり】

[redacted]

【住所のみ】

[redacted]

【データなし】

[redacted]

以下、13 ページは非公開。

12. 参考

外国国家元首の訪中

御参考

(政務班)

外国国家元首の訪中（１９８６年）

２月	モーリタニア国家元首
	セーシェル大統領
６月	マリ大統領
９月	ニカラガ大統領
１０月	連合王国女王
	東徳国家幹部会議議長
１２月	メキシコ大統領
	ベニン大統領

外国国家元首の訪中（１９８７年）

２月	ガボン大統領
３月	タンザニア大統領
	カナダ総督
	カメルーン大統領
４月	ガンビア大統領
	コンゴ大統領
５月	北朝鮮主席
７月	バングラ大統領
８月	民主カンプチア主席
９月	ネパール国王
１１月	マレーシア最高元首
１２月	ヴァヌアツ大統領
	アラブ・イエーメン大統領

外国国家元首の訪中（１９８８年）

２月	オーストラリア総督
	ザンビア大統領
４月	フィリピン大統領

	ギリシャ大統領
5月	アイルランド大統領
	アルゼンチン大統領
	モザンビーク大統領
6月	ポーランド閣僚会議議長
	エチオピア大統領
7月	ブラジル大統領
	ギニア大統領
	ガンビア大統領
１０月	ザンビア大統領
	フィンランド大統領
	ルーマニア大統領
	アンゴラ大統領
１１月	バングラ大統領
	ウルグアイ大統領
	コモロ大統領

外国国家元首の訪中（１９８９年）

1月	マリ大統領
2月	ブロンデイ大統領
	米国大統領
3月	民主カンプチア主席
	ウガンダ大統領
4月	トーゴ大統領
5月	イラン大統領
	ソ連最高幹部会議長・共産党中央総書記
9月	ブルキナファッソ国家元首
１０月	パレスチナ大統領
１１月	北朝鮮主席

外国国家元首の訪中（１９９０年）

4月	赤道ギニア大統領
	中央アフリカ大統領
5月	アラブ首長国連邦大統領
	パレスチナ大統領
	エジプト大統領
6月	チャド大統領
	バングラ大統領
7月	セーシェル大統領
8月	民主カンプチア主席
	サイプラス大統領
9月	パキスタン大統領
10月	マレーシア最高元首
	ヴァヌアツ大統領
11月	ミクロネシア大統領
	インドネシア大統領
12月	クエート首長

外国国家元首の訪中（1991年）

1月	ルーマニア大統領
3月	ジブチ大統領
	マーシャル群島大統領
4月	ペルー大統領
	フィジー大統領
	チュニジア大統領
5月	ガンビア大統領
	ガボン大統領
	パプアニューギニア大統領
6月	セーシェル大統領
8月	ミャンマー国家評議会議長
9月	マレーシア最高元首

	シンガポール大統領
	ボツアナ大統領
１０月	北朝鮮主席
１１月	クエート首長
１２月	マルタ大統領
	パレスチナ大統領

外国国家元首の訪中（１９９２年）

3月	ウズベク大統領
4月	ガリ国連事務総長
	ラオス大統領
5月	インド大統領
	キルギス大統領
	ボリビア大統領
	マーシャル群島大統領
	ベニン大統領

五中国大都市（レーカン フクシンとりかえ）の谷牛越のアレンジ

注意
1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

取扱注意

電信写

[redacted] [redacted] 02－003

大使	政務次官	外務大臣	外務審議官	儀典長
北米局長	経済局長	環境審議官	査察・軍縮担当大使	総括審議官	外務省経済研究所長
総合外交政策局長	国際法局長	領事局長	文化交流・在外同胞担当大使	厚生労働審議官	情報調査局長
警察庁長官	警察庁次長	警察庁長官官房長	警察庁生活安全局長	警察庁刑事局長	警察庁交通局長	警察庁警備局長	警察庁組織犯罪対策部長	警察庁情報通信局長	警察庁長官官房審議官（国際）	警察庁長官官房審議官（総括）	警察庁長官官房審議官（会計）	警察庁長官官房審議官（人事）	警察庁長官官房審議官（国際テロ）	警察庁長官官房審議官（サイバー）	警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策）	警察庁長官官房審議官（犯罪収益移転防止）	警察庁長官官房審議官（暴力団対策）	警察庁長官官房審議官（薬物銃器対策）	警察庁長官官房審議官（情報通信）	警察庁長官官房審議官（交通）	警察庁長官官房審議官（警備）	警察庁長官官房審議官（生活安全）	警察庁長官官房審議官（刑事）	警察庁長官官房審議官（組織犯罪

9

ＦＡＸ信

		－

総 番 号　Ｒ１０４３００　　主　管

月　２２日　[redacted]　中　国　発　　亜　中

平成　４年　５月　２２日　　本　省　着

外 務 大 臣 殿　　橋 本　大 使

事務連絡

ＦＡＸ信　至急（ゆう先処理）[redacted]

（以下ＦＡＸ送信　ＰＫ９８６５－０１）

	レーガン大統領訪中 (1984.4.26～5.1)	(参考)ブッシュ大統領訪中(当時、副大統領)		エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
		(1982.5.5～5.9)	(1985.10.13～10.20)	
(第1日目)	午後　北京着 15:00 李先念主席主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 李先念主席夫妻との会見 (於　人民大会堂) 夜　李先念主席主催歓迎宴 (於　釣魚台国賓館)	夜　杭州着	午後　北京着 万里副総理主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 万里副総理との会見 (於　人民大会堂) 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴 (於　人民大会堂)	午後　北京着 天安門広場経由釣魚台国賓館へ
(第2日目)	午前　趙紫陽総理との第1回会談 (於　人民大会堂) 午後　趙紫陽総理との第2回会談 (於　人民大会堂) 講演会 (於　人民大会堂3階小講堂) 胡耀邦党総書記との会見 (於　人民大会堂) 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴 (於　人民大会堂)	杭州滞在	午前　趙紫陽総理との会談 (於　人民大会堂) 昼　兵学課外交部長主催昼食会 (於　前門北京ダック店) 午後　胡耀邦総書記との会見 (於　中南海) 李鵬副総理との会談 夜　答礼宴 (於　長城飯店)	午前　李先念主席主宰歓迎式典 (於　人民大会堂東門外広場) 儀礼的会見 (於　人民大会堂河北の間) カクテルパーティ (随行記者招待) (於　釣魚台国賓館) 午後　故宮参観 夜　李先念国家主席主催歓迎宴(於　人民大会堂) 文化部主催歌舞戯曲公演鑑賞(於　人民大会堂3階小講堂)

	レーガン大統領訪中 （1984.4.26～5.1）	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） （1982.5.5～5.9）	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） （1985.10.13～10.20）	エリザベス女王訪中 （1986.10.12～10.18）
（第3日目）	午前　鄧小平党顧問委主任との会見・会談（於　人民大会堂） 昼　鄧小平主任主催昼食会 午後　中央テレビ局のインタビュー 万里の長城を参観 夜　答礼宴（於　長城飯店）	午前　北京着 午後　万里副総理主宰歓迎式典（於　人民大会堂東門外広場）、万里副総理との会見（於　人民大会堂）、黄華国務委員兼外交部長との会談（於　人民大会堂） 夜　趙紫陽総理主催歓迎宴（於　人民大会堂）	午前　李鵬副総理とのテニス試合（於　北京国際クラブ）、鄧小平中共中央顧問委主任との会見（於　人民大会堂）、彭真全人代委員長との会見（於　人民大会堂） 午後　北京ジープ社参観、記者会見 夜　李先念主席夫妻主催招宴（於　釣魚台国賓館）	午前　胡耀邦総書記との会見（於　中南海）、中南海迎薫亭で休憩、美景を鑑賞。鄧小平中共中央顧問委主任との会見（於　釣魚台国賓館養源斎） 昼　鄧小平主任主催歓迎午餐会（同上） 午後　頤和園、国家経済委の幹部訓練センター、「六一」幼稚園参観。万里長城、長陵・定陵を参観。 夜　趙紫陽総理との会見（於　釣魚台国賓館）
（第4日目）	午前　？ 午後　西安へ 秦始皇兵馬俑博物館、西安東郊臨潼県の市場を参観。 北京へ	午前　鄧小平副主席との会見（於　人民大会堂） 昼　鄧小平副主席主催昼食会 午後　趙紫陽総理との会見（於　中南海紫光閣） 夜　答礼宴（於　人民大会堂）	午前　万里副総理によるお別れの挨拶 成都へ 昼　顧金池四川省副省長主催昼食会 午後　成都駐在米国総領事館開館式出席（於　錦江賓館） 講演会（於　四川大学） 桂林着	午前　北京発上海へ 昼　江沢民市長主催午餐会（於　西郊賓館） 午後　豫園遊覧、中英合弁上海耀華ビルキャンガラス成昌倉庫完成式典出席 夜　答礼宴及びレセプション（於　上海に停泊中の英王室ヨット「ブリタニア号」）

PK9865JA-02/04

	レーガン大統領訪中 (1884.4.26～5.1)	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） (1982.5.5～5.9)	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） (1985.10.13～10.20)	エリザベス女王訪中 (1986.10.12～10.18)
（第5日目）	午前　趙紫陽総理との間で「中国政府と米国政府の所得に対する二重課税回避及び脱税防止に関する協定」、「中国政府と米国政府の文化協定1984年・1985年執行計画」、「工業科学技術管理協力議定書」、「科学技術情報協力議定書」に調印するとともに、利用「中米原子力平和協力協定」に仮調印。 李先念主席、趙紫陽総理、呉学謙国務委員兼外交部長、王丙乾国務委員兼財政部長が送別（於　人民大会堂） 午後　上海着 中米合弁の上海＝フォクスボロ有限公司を参観、講演会（於 復旦大学） 夜　汪道涵上海市長主催招宴	午前　黄華外交部長が送別 正午　内外記者会見（於　空港内） 北京発帰国	午後　漓江を遊覧。 広州着 夜　葉選平広東省長主催招宴	午前　上海発西安へ 正午　西安着 午後　秦兵馬俑博物館を参観、 昆明着

	レーガン大統領訪中 （1884.4.26～5.1）	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） （1982.5.5～5.9）	ブッシュ大統領訪中（当時、副大統領） （1985.10.13～10.20）	エリザベス女王訪中 （1986.10.12～10.18）
（第６日目）	午前　趙紫陽総理より長距離電話 虹橋郷を参観、農家を訪問 上海発帰国へ		午前　広州交易会を参観 深圳で記者会見 午後　列車で深圳経由 香港へ	午前　西山風致区を遊覧 午後　昆明雲南民族学院を参観 夜　和志強雲南省長主催歓迎宴
（第７日目）				正午　広州着 葉選平広東省長主催歓迎宴 （於　白天鵝賓館） 午後　西苑、少年宮を参観 呉学謙外交部長、葉省長主催歓送式典 （於　黄埔新港埠頭） 夜　「ブリタニア号」で広州黄埔新港を離れる。

PK9865 4

(3)

中嶋嶺雄への中国査証発給

（天皇訪中問題への影響など中国側と交渉）

4/28

中国課長

秘
無期限

中嶋嶺雄東京外国語大学教授に対する中国の査証発給

平成４年４月２８日
アジア局中国課

中嶋嶺雄東京外国語大学教授は、大連にて「李香蘭」観劇のため中国側に査証申請していたが、間際になっても査証が発給されないため、中国課に中国側への働き掛け方依頼越した。結局、中国側は査証を発給したが、中国側の考え方が看取できた事例であり、記録を次の通り残しておくこととしたい。

１．４月２７日、中嶋教授より中国課（木寺）に次の依頼があった。

（１）アジア局長も中国課長もおられないので貴官にお願いする。自分（中嶋）は５月３日より３日間の予定で夫婦で訪中したいと考えており、旅行代理店を通じて査証申請をしているが、本２７日に至るも未だ発給がない。妻の査証については発給された。自分（中嶋）は、旧知の仲である北京の大使館の斉藤公使に外交部に当たって頂いたが、難しい様子であった。自分（中嶋）の印象では外交部の問題ではなく国家安全部の問題かもしれない。

（２）自分（中嶋）は「李香蘭」の脚本の修正、翻訳について浅利氏より、依頼を受けて協力した。今次訪中の目的は、浅利氏の依頼により「李香蘭」をみることである。今年は日中国交正常化二十周年であり、訪中できないなどということがあっては好ましくないと考える。（３）本２７日、自分（中嶋）は在京中国大の領事部を往訪し、チン・シヘイ領事が応対したが、政府間で話してもらわなければ動かない、中国在京大使館限りではどうしようもないとの印象を受けた。外務省から呉従勇参事官に話をするよう示唆するところがあったので中国課より働き掛けて頂けないか。

２．２７日午後、木寺より呉従勇参事官に次のとおり申し入れた。

（１）谷野アジア局長からのお願いである。中嶋教授とは必ずしも考えを同じくしているわけではないが、同教授の訪中が実現するよう配慮をお願いする。小異を残して大同につくとの考え方やより高いところからみて判断するとの考え方に立って頂きたい。

（２）中嶋教授は陛下の御訪中にも賛成しており、仮に同教授が訪中できなくなれば、日中関係にとってマイナスの影響を与えることになるので、同教授の意見には中国側としての考えもあろうが是非配慮をお願いしたい。

３．２７日夕刻、王毅参事官より木寺に次の通り連絡越した。中嶋教授にも連絡。

（１）中嶋教授は、最近、中国に入国できない人物とされている。外務省の御希望については、大使を交えて大使館内部で十分検討したが、結論は例外を認めることはできないということになったので了承して欲しい。

（２）同教授は普通の学者ではなく学会の中でも政治的な人物である。これまで長い間、偏見で中国を見ており、中国に行っても歪んだ報告や非友好的な態度の文章を書いてい

る。特に、最近は、中国が１０の共和国に分かれ、連邦制をとるとの論文を発表している。在京中国大は教授個人の考えと理解しているが、北京では極めて重視している。

（３）折角の谷野局長からの依頼であるが残念ながら同教授に査証を発給することはできない。

４．２８日朝、谷野局長より楊大使に連絡を試みるも、同大使は出張中（北海道）で連絡が取れず。木寺より斉藤公使に連絡。再度中国側への働き掛けを依頼。

２８日昼、斎藤公使より次の連絡があった。中嶋教授にも連絡。

（１）武大偉と再度やったが、どのレベルでやっても駄目だとの反応であった。

（２）理由は次の２点。

①中嶋教授は中国に来る度に事実をねじ曲げて、中傷する文書を書いている。

②中国の分裂を進める方向の文書を書いている。

５．３０日朝、谷野局長より楊大使に連絡（谷野局長局長より、本件中嶋教授の訪中に浅利氏が深く係わっているが、仮に中嶋教授が訪中できなくなれば、中国にとり浅利氏との関係、浅利氏と極めて近い中曽根元総理との関係で好ましくない影響が生じる、中国との重要案件に影響力を有する中曽根元総理との関係を考慮するのがよいのではないか云々と説明）。また、谷野局長より、北京の斉藤公使に再度中国側に働き掛けるよう指示した。

同日夕刻、在京中国大より、谷野局長に対し、明５月１日午前１１時に在京中国大領事部で発給するので中嶋教授に来訪してほしい旨連絡があった。

６．５月１日、中嶋教授は無事査証を取得。同教授より、中国課に対し感謝の電話があった。また、訪中後の５月８日、中国課に対し改めて謝意を電話にて連絡越した。

（了）

何八々伝中山大学助教授内話

5/21

来

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は檢閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

秘

電信写

[redacted] [redacted] 08－018

大臣	政務次官	事務次官
外務大臣秘書官	外務審議官	儀典長
北大使	経済局審議官	環境庁審議官	総合外交政策局長	外務報道官
総合外交政策局	国際社会協力部長	人権人道課題担当大使	在外邦人保護政策調査官	領事局長
外務報道官	参事官	国際情報統括官	内閣情報調査室
文化交流部長	審議官	一	二
杉山軍縮大使	参事官	政策立案総括官	保秘室長	対外関係室長
北米局長	審議官	日米安保条約課長	東南アジア第一課長	東南アジア第二課長	北東アジア課長
中南米局長	参事官	一	二
欧州局長	審議官	西欧第一課長	西欧第二課長	中東アフリカ課長
近東アフリカ局長	参事官	一	二	アフリカ第二課長
経済局長	次長	総務参事官	経済協力課長	国際経済課長	国際エネルギー課長	国際資源室長
	参事官	海洋室長	審議官
経済協力局長	審議官	政策課長	開発計画課長	無償資金協力課長	技術協力課長	有償資金協力課長
条約局長	審議官	条約課長	国際協定課長
国際法局長	審議官	経済条約課長	人権人道課長
軍縮課長	審議官	軍縮科学審議官	軍縮政策課長
情報調査局長	参事官	総務課長	分析第一課長	分析第二課長	調査企画課長	安全保障政策課長

総番号 R103285 主管

月 20日 [redacted] 広州発 亜中

平成 4年 5月 21日 [redacted] 本省着

外務大臣殿 古森総領事

中国内政（中山大学助教授の内話）

第222号 秘 至急 [redacted]

１９日、何ハク伝中山大学助教授がトウ小平の南方視察等につき当館セノに述べたところ次の通り。御参考まで。

１．トウ小平の南方視察

トウ小平が南方を視察した際、トウリキグンとハクイッパを名指しで批判し、この２名を党中央に提出する文けんの起草小組のメンバーからはずすよう指示した。トウ小平は特に党の宣伝部に強い不満を持つており、今回の南方視察の直接のきつかけも昨年８月のソ連ほうかい後、次は中国かもしれないというのに危機感にとぼしく「せいは社会主義か資本主義か」とか「和平演変」に反対するとかの空談義を続けていることに業をにやしたためである。改革開放を加速し生活レベルを向上させることこそが中国がソ連の二のまいにならないゆい一の道であると信じているトウとしては１４回党大会に向けて、路線を誤らないこととそのための党代表選挙でいかなる人物が選出されるかに大きな関心を有している。

２．批判勢力

（１）現在行われているトウのキャンペーンに表面だつて反対はしないとしても批判的な見方をしている人々がいることは事実であり、特に中けんどころの幹部の中にいん然たる勢力を有している。彼らは、改革開放の加速に伴うインフレの再来と、一線を退き一党員に過ぎない人物の一声で世の中が変わるシステムそのものに対して懸念をいだいている。

（２）他方、広東省では謝非書記、シュシンリン省長のコンビで８８年以降の経済調整期もシンセン－広州間の高速道路の建設や南サ開発区の建設などだまつて多くのことをしていたのが、ここに来てどうどうとやれるようになつたとよろこんでおり、従来と基本的な変化はなくインフレの兆こうも見られない。

秘

電信写

3．（当方より、最近広州のまち中で「わすれ難い国じよく、あい国主義教育そう書の２」と題する南京ぎやくさつや従軍い安ふ、イシイ細きん部隊等の模様をし激的な写真入りで特集した印さつ物（９５ページ）が出回つているが、右は本年２月に中国鉄道出ばん社が印さつし、北京の新華書てんが発行しているところ、国交正常化２０しゆう年という時期になぜかかる印さつ物が出ばんされたと考えるかとの質問に対して）

（１）そうした図書はこれまでも内部発行として出ばんされてきたものでであるが、どうしてこの時期に、しかもまちのスタンドで売られているのかはわからない。ただ中央の指示に基づくものではなく、今年が国交回復２０しゆう年に当たつているからこそ、また日本のてん皇の訪中を要請していることもあり、てん皇の訪中によつて過去の歴史が水に流されることのないようにとの危ぐから自然発生的に出てきたものと思う。

（２）毛タク東やシュウオンライのようなカリスマがすがたを消し、党のいこうも影がうすくなつているため、気持ちはわかるがこの時期にそのようなことをするのは差しひかえろと言えるような人物がいなくなつている証左でもあろう。

（３）昨年１２月、コウタクミンがリホウに電話で「国情研究会」の設置を指示し、右を受けて本年２月にリホウが名よ理事長、リ鉄英が理事長、チョウサイ国家統計局長が会長にそれぞれ就任して同研究会が発足しているところ、こうした動きと本件印さつ物発行の時期とが一致しているが、直接の関係の有無は不明である。（本件印さつ物は別途空送）

中国、上海、シンヨウ、ホンコンに転電した。（了）

南京市民の対日感情（江苏省電視芸術家協会主席内話）

5/22 来

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
3. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

秘

電信写

[redacted] [redacted] 08－018

大臣	政務次官	事務次官	外交審議官
外報官	参報	際内外	
文長	審一二		
官長	参政	保対	旅外
長	審	東二	
	参	東西一	
北米長	審	二保地	
中南長	参一二		
欧亜長	審	西一	洋
		西東二	
	参一二	ア一二	
経長	次総	経一	途
	参経	漁一	国
		経一	国
		安ネ二	
	参海	審準	
経協長	審政	国開	無
	審調	技有	理
条長	審条	協規	
国長	審政	経人	
	審軍	社	
科審	科原		
情調長	参	調	
	企安		

総番号 R１０４３９０ 主管

月 ２２日 [redacted] 上海発 亜中

平成 ４年 ５月 ２２日 [redacted] 本省着

外務大臣殿 蓮見総領事

中国内政（南京市民の対日感情：内話）

第１９５号 秘 至急（ゆう先処理） [redacted]

２０日・コウソ電視台主催テレビ芸術さい開まく式に出席した当館イノウエに対し、チョウグンコウソ省電視芸術家協会主席（前コウソ電視台台長）が最近の南京市民の対日感情の変化等につき述べたところ以下の通り、何ら御参考まで。

１．南京においても、南京事件以来半世きも経つと世代交代が進み、市民も大部分はかつての日本軍の行為をもう過去のものとして認識するようになつてきている。日本軍より直接残ぎやくな目にあわされ、また、そうした現場を見たことのある６０歳代以上の年代の人々には、今日でも日本に対するおん念の気持が強いが、こうした世代は今ちようど退職を迎えるか、既に退職してしまつており、社会的影響力は弱くなつている。現在は親や親せき、その他まわりの者から過去の「日本軍侵略」の事件を間接的にしか聞いたことしかない世代が中心で、更にその下のまごにあたる若い世代が出てきており、彼らに至つては実体験ではなく、マスコミ等を通じての知識として知つているのみである。

２．当地には南京ぎやくさつ記念館もあり、またテレビにおいてもときおり抗日戦争を題材とした番組を流しているが、一方では近年多くの日本人が観こう、ビジネスの目的で当地を訪れたり、また、テレビ番組等で現在の日本の様子がしようかいされており、南京市民もこうした直接、間接の交流を通じて多少とも現在の日本の実情というものを理解している。従つて、過去に「日本の侵略」を直接体験した世代とは大きく異なり、こうした若い世代に至つてはぎやくさつ記念館や当時の状況をマスコミ報道を見ても、もはやそれだけですぐに日本にくしという感情には結びつかず、むしろ大多数の市民は日本との交流を更に進めて行きたいと考えている。

３．南京市民も現在若い世代を中心に他の中国の地域の人民と同様、日本の経済発展をしよう賛し、先進国

秘

電信写

としてうらやましく思うと同時に、あこがれの気持ちも持つており、テレビで日本のテレビドラマ、日本しようかい番組等が放えいされることにより、日本に対して親近感さえ持つに至つている。こうした一般市民レベルで対日観を形成するに当り、テレビがはたしてきた役割は大きいが、最近は「おじん」のような大きな反響をよんだ番組はなく、また、欧米特に米国のげきえい画の放えいに比べ、日本の番組が放えいされる回数はこの2－3年大きく減少傾向にある。しかし、日本に対する市民の関心は高いので、特に現代日本人の生活をえがいたテレビドラマもしくはドキュメンタリー番組はかん迎されるであろう。

4．なお、先方より本年秋、てん皇の訪中が実現されればわれわれ南京市民としてもよろこばしいことであり、かん迎したいが、実現の見込み如何との質問があつたところ、本件については現在検討中であると聞いている旨回答しおいた。

中国、広州、シンヨウ、ホンコンに転電した。　（了）

我が国対中政策に対する中国の見方（5/8付産経朝電）

注意 1. 本電の取扱いは慎重を期せられたい。
2. 本電の内容に関する照会は検閲班（内線２１７１、２１７４）。
5. その他本電の取扱い等に関する照会は調整班（内線３１６９）に連絡ありたい。

file 天皇訪中

電信写

極秘

[redacted] [redacted] 04－037

総番号 R116462 主管

月 8日 [redacted] 香港発 亜中

平成 4年 6月 8日 本省着

外務大臣殿 折田総領事

わが国の対中政策に対する中国の見方（内部文書）

第685号 極秘 至急（ゆう先処理） [redacted]

△△◎A日本，中国◎B220◎C380，480，580◎Dオオシマ◎EO情報◎S 一般、「日本政府は対中政策を調整」（つ者ヨウウンチュウ）と題する4月30日付「参考資料」（当館注：高級幹部向けの内部刊行物）を入手したところ、てん皇訪中・センカク問題への対応、経済協力4原則等を日本の政治大国化戦略による対中政策の調整の結果であるとし、日本が政治大国となつた時のことを十分予測しておかないと取り返しのつかないことになると警しようをならす等中国が日本の対中政策をどのように見ているかを知る上で一つの参考になると思われるので以下のとおりしよう訳の上報告する（原文写し別途送付）。

（要旨）

1．91年8月の海部総理（当時）訪中で日本は「世界の中の日中関係」という概念を打ち出したが、これは日本の対中政策が調整されたことを示す。

2．日本は日中関係の発展を、第一に新国際ちつ序構らくという大きなはい景に協調させ、第二に政治大国になるという日本の世界戦略に協調させようとしている。

3．今後の日本の対中政策で予想される2つのトレンド

（1）政治の比重のたかまりと日本による日中関係のイニシアテイブ確保の努力

具体的には中国の民主化・人権問題に関する日本政府の一連の対応とセンカク、戦争賠償、てん皇訪中問題に対する日本政府のかつてない強こうし勢

てん皇訪中問題についてはワクナベ外相訪中の時点で日本政府の基本方針は決まつていたにもかかわらず、センカク問題及び賠償問題が発生した後立場を変更し、この問題を政治的な取り引きに使い中国から譲歩を引き出そうとしている。

外務省

大臣 次官 官房長 総務審議官 経済局長 環境審議官 北米大使 アジア大使 総合外交政策局長 国際法局長 条約局長 国際社会科学人権担当大使 在外公館警備対策官 情報調査局長 参事官 報道官 参事官 内閣外政審議室 文化交流部長 審議官 地球規模課題総括 東南アジア 北東アジア 領事移住部長 審議官 参事官 北米局長 審議官 中南米 中南米 中南米 欧州局長 審議官 西欧 西欧 西欧 参事官 アジア大洋州 アジア大洋州 アジア大洋州 北米 北米 北米 次官 総合経済 総合経済 総合経済 参事官 経済連携 国際経済 国際経済 経済安全保障 経済安全保障 経済安全保障 参事官 海洋 審議官 軍縮 軍縮 軍縮 国際 国際 国際 国際協力局長 審議官 調査企画 調査企画 調査企画 科学技術 科学技術 科学技術 条約局長 審議官 条約 条約 条約 国際法 国際法 国際法 領事局長 審議官 政策 政策 政策 邦人 邦人 邦人 参事官 情報 情報 情報 調査 調査 調査 国際情報統括官 企画 企画 企画 分析 分析 分析

極秘

電信写

今後暫くは、第一に人権、民主、軍備等の問題で中国に圧力をかけ譲歩を迫り、第二に日本のＰＫＯ参加、更には海外派兵について中国の理解を獲得するとの２点が日本の対中政策の重点となろう。

（２）対中経済援助に政治しよくが増す

日本がハイテク分野の対中借かんにしん重、対中直接投資に消極的、対中技術移転に消極的という問題は日本政府が主として政治的考慮から行つているもの。

経済協力４原則を武器にして日本政府は民主、人権、武器の分野で中国に譲歩を迫つている。

４．結論

日中の友好第一という時代は過ぎ去つた。９０年代は日本の政治大国化はまだ実現しないから日本は関係の悪化を望まないだろうが、日本の政治的地位の上しように伴い日中間のむじゆん・まさつは避けがたい。日本が政治大国となつた後の影響を予測する要あり。△△

（小見出しは当館で付したもの）

１．象徴的だつた海部訪中

日本の対中政策の調整を明確に示したのは９１年８月の海部訪中である。海部総理（当時）は、「６・４」後初めて訪中した西側先進国の首のうである。海部は北京で「新しい世界と日中関係」と題する講演を行い、その中で「世界の中の日中関係」との概念を提起した。

日本政府は更にコウタクミン総書記来日をれい戦後の新国際ちつ序構ちくにこうけんする「世界の中の日中関係」の第一歩と位置づけた。このように国交正常化２０年を経て日本政府は日中両国関係のかく度からのみ対中政策を考える時代を終え、「世界の中の日中関係」をジクとする新たな対中政策を行おうとしている。

２．「世界の中の日中関係」の基本的内容

日本政府の言行から判断するに「世界の中の日中関係」という概念には少なくとも次の「２つの協調」と「３つの転換」が含まれる。

（１）「２つの協調」とは第一は日中関係の発展は新国際ちつ序構ちくという大きなはい景と協調すべきこと、第二に日中関係の発展は政治大国になるという日本の世界戦略と協調すべきことである。

新国際ちつ序建設の過程で西側主要先進国は国際政治において少しでも有利な地位を占めようとしており、

極秘

電信写

最大の国家利益を引き出そうとしのぎを削つている。そのために自この力と外部勢力の力を総動員している。日本にとり中国は疑いなく重要な外部勢力であり、れい戦後の国際社会の中で中国の国際的地位に対する認識を新たにした結果、日中関係の発展を西側諸国が画策している新国際ちつ序建設というはい景に合致させようとしているのである。

また、日本が政治大国になる過程においては中国の同意と支持が必要である。中国は常任理事国であり、長期にわたり独立自主の平和外交と「強権政治」に反対する主張を行つて来ているが、これらは日本が政治大国となるにあたり重大な障害になつているからである。従つて日中関係を発展させ中国の力を借りて日本の政治戦略こ実現するということが対中政策のゴールとなるのである。

（2）「3つの転換」

（イ）立きやく点の転換

日中関係を従来の両国だけの限定された関係から、アジア・太平洋更には全世界に立きやくするよう転換させる。日本政府は中国が乱れたりこ立することを防ぐとの観点から中国を国際協調の道へ導こうとしている。海部の行つた「一歩先に行く」対中政策はまさにこれを具体化したもの。

（ロ）交流内容の転換

従来の経済関係中心から経済・政治両方の関係へ。以前の「戦争に対する反省と経済協力のみを強調する」状況を改めようとしている。海部訪中時に人権、民主、軍縮・軍備管理等の問題で中国に善処を求めたのはこの具体的表れ。

（ハ）（対中政策の）効果の転換

対中政策を以前の侵略戦争に対するざんげから日本の政治大国化戦略へ組み込むよう転換。

3．今後の対中政策の2大トレンド

以上の「2つの協調」と「3つの転換」により今後の日本の対中政策には以下の2つのトレンドが予想される。

（1）政治の比重のたかまりと日本による日中関係の主導権はあくの努力

（イ）過去20年間の日中関係の力点は経済面の協力にあつた。日本側の原因により教科書問題、コウカりよう問題のような政治問題も発生した。しかし、これらの問題はまず第一に日本の侵略戦争の残した問題で

極秘

電信写

あり、両国間に新たに生じた政治原則の問題ではなく、当時の両国間経済関係と比べても二次的問題であつたし、第二に中国はこれら問題の解決にあたつてイニシャテイブをとつてきた。

（ロ）しかし９０年代に入つて日本の対中政策に占める政治の比重は不断にたかまつている。９１年８月２７日に外務省は「民主化」を日本の対中政策のしよう点とするという基本方針を打ち出した。９２年２月のジュネーブ人権委員会でチベット問題に関する決議を出さないことに日本は反対票を投じた。国交正常化２０しゆう年記念にあたり、日本政府は「中国における人権問題に強い関心を有し中国に一層の譲歩を要求する」ことをコウタクミンとの首のう会談の基本方針の１つとした。４月６日ミヤザワはコウタクミンに向かつて、中国の人権に対する関心を正式に表明した。日本は中国に対しても「ＮＯ」と言えるようになつたのである。

（ハ）本年上半期、センカク、戦争賠償及びてん皇訪中という３つの問題で日本は以前と異なる態度をとつた。

（ａ）センカク問題

２月２５日全人代を通過した領海法でセンカク諸島が立法の形式で初めて中国の主権下に入つたことに対し日本政府の反応はじん速かつ強れつなものであつた。２６日に日本政府は正式抗議を行い同法の撤回を求めた。２７日及び３月３日にはミヤザワ首相が「センカクは日本の領土」と発言。コウタクミンとの会談においてもミヤザワはせ正を求めた。日本政府のかかる態度はそれ以前の２年間日本が同諸島の問題で中国に対し採つた妥協的な立場と明らかに異なるものである。

（ｂ）戦争賠償

全人代の一部の代表が戦争賠償議案を提出するや否や、日本政府は日中間の賠償問題は解決済みと公に言明。在中国大使は、もし全人代がこの議案を通したなら日中関係は平和条約以前の戦争状態にもどると述べた。日本政府がこのように公開の場で強こうな態度を採つたことは正常化後２０年間かつてないことである。

（ｃ）てん皇訪中問題

てん皇訪中問題について本年初頭にワタナベ外務大臣が訪中した際には日本政府は既に基本的に決定していた。２月１９日、日本政府はてん皇の今秋訪中を決定した。しかし、センカク問題及び賠償問題が発生した後、日本政府は立場を変えた。３月末ミヤザワはコウタクミンとの会談ではてん皇訪中に前向きの応答をせ

極秘

電信写

ず検討を継続するということに決めた。これは日本がてん皇訪中問題を政治的な取り引きに使い中国に圧力をかけ政治的な譲歩を引き出そうとしていることを示す。

（ニ）今後暫くは政治的には日本の対中政策は次の２点が重点となろう。

（ａ）人権、民主、軍備等の問題で引き続き中国に圧力をかけ譲歩を迫る。

（ｂ）日本のＰＫＯ参加、更には海外派兵について中国の理解を求める。

「６・４」後の特殊なかん境の下で日本は対中関係において一定のイニシャテイブをにぎつた。上述の問題に関し日本が中国に全く譲る気配を見せていないことはその表れ。

（２）第二のトレンド：政治しよくが増す対中援助

（イ）日中経済関係には次の３つの問題がある。

（ａ）第一に日本の対中借かんは社会インフラ整備中心でハイテク・プロジエクトには極めてしん重であること及び手続きがいちじるしく複雑であること。

（ｂ）日本の対中直接借かんは日本の経済的能力からいつて極めて少ないこと（８９年末までの外国の対中投資の内日本はわずか４．８％、８９年の日本の対外投資の内わずか１％が中国向け）。

（ｃ）日本の対中技術輸出の制限は恐ろしく厳格なこと。８７年以降昨年まで日本の中国への技術移転は下降。昨年は若干回復したものの技術レベルの低いものが多い。

日中経済関係に存在する上述の問題は日本政府が主として政治的考慮から行つていることである。

（ロ）政治大国になるという戦略目標のために日本政府はかつての「エコノミック・アニマル」的なやり方を改め、経済協力に新たな政治的しきさいを加え出した。９１年４月には政府開発援助に関する４原則が発表された。これはまさに日本政府がそのばく大な開発援助をひ援助地域の民主化及び人権改善推進の手段とすることを示している。

（ハ）まさにこのようなはい景の下で日本政府はるい次にわたり中国に圧力をかけてきている。経済援助をたてとし民主、人権、武器の問題で中国に譲歩を迫つている。

（ニ）日本政府は一方で中国が改革開放をけん持することを希望しているが、他方でその結果中国があまりに早く強大になるのを心配している。一方で中国の政治的安定を希望しながら、他方で民主化、人権面で影響を与えしんとうを図つている。一方で経済援助を通じて中国の政治的な支持を取りつけようと試み、他方

極秘

電信写

で政治原則を援助の前提条件にしている。一方で中国と共にアジア及び世界の問題に参加しようとし、他方でアジア・太平洋地域での経済的進出により中国の活動空間をせばめている。かかる対中政策の2面性があればこそ日本政府が中国との間で形成された経済政治協力関係を保ちつつも、対中援助において大きくふみ出すことはあり得ないことになるのである。

4．結論

90年代を通じ政治大国という目標が実現される前においては、日本は日中関係の極たんな悪化を望まないだろう。従つて日本政府が日中関係の発展を基本政策としている。しかし、日中の友好第一という時代は既に過ぎ去つたのである。日本の政治的地位の上しように伴い日中間のむじゆん・まさつは避け難い。日本が政治大国となつた後の影響というものをわれわれは十分に予測する必要がある。そうしなければ取り返しのつかないことになろう。

中国に転電した。（了）